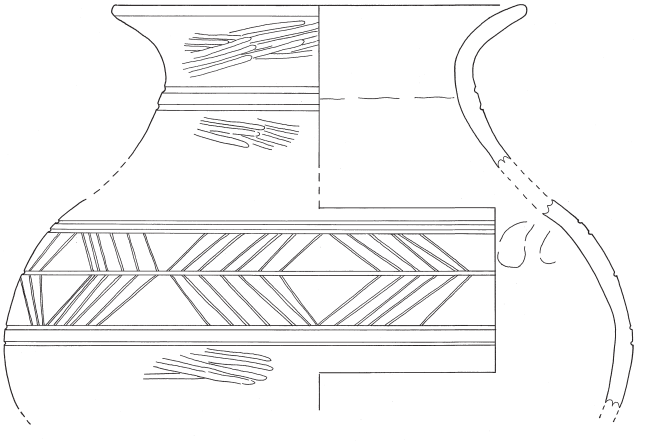
四條畷市文化財調査報告　第 56 集

都市計画道路雁屋畑線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

雁　屋　遺　跡

発 掘 調 査 報 告 書



平成３１（２０１９）年３月

四條畷市教育委員会

巻 頭 写 真 図 版 1

1．雁屋遺跡　遠景（2001年・北から）

2．雁屋遺跡　遠景（2001年・南から）

巻 頭 写 真 図 版 2

1．雁屋遺跡　遠景（2001年・東から）

2．雁屋遺跡　遠景（2001年・西から）

巻 頭 写 真 図 版 3

1．四條畷市内および雁屋遺跡　遠景（2011年・北西から）

2．雁屋遺跡　遠景（2011年・南から）

巻 頭 写 真 図 版 4

1．ＫＹ2001－１　調査地区　遠景（北西から）

2．ＫＹ2001－１　調査地区　全景（垂直写真）

巻 頭 写 真 図 版 5

1．ＫＹ2001－２　東側地区　全景（西から）

2．ＫＹ2001－２　西側地区　全景（東から）

巻 頭 写 真 図 版 6

1．ＫＹ2001－２　溝16・17　全景（西から）

2．ＫＹ2001－２　溝18　全景（東から）

巻 頭 写 真 図 版 7

1．ＫＹ2003－１　第１遺構面　全景（西から）

2．ＫＹ2003－１　第２遺構面　溝１　全景（南西から）

巻 頭 写 真 図 版 8

1．ＫＹ2003－１　第３遺構面　河川１　全景（南から）

2．ＫＹ2003－１　第３遺構面　河川１　全景（北西から）

巻 頭 写 真 図 版 9

1．ＫＹ2004－１　調査地区　全景（西から）

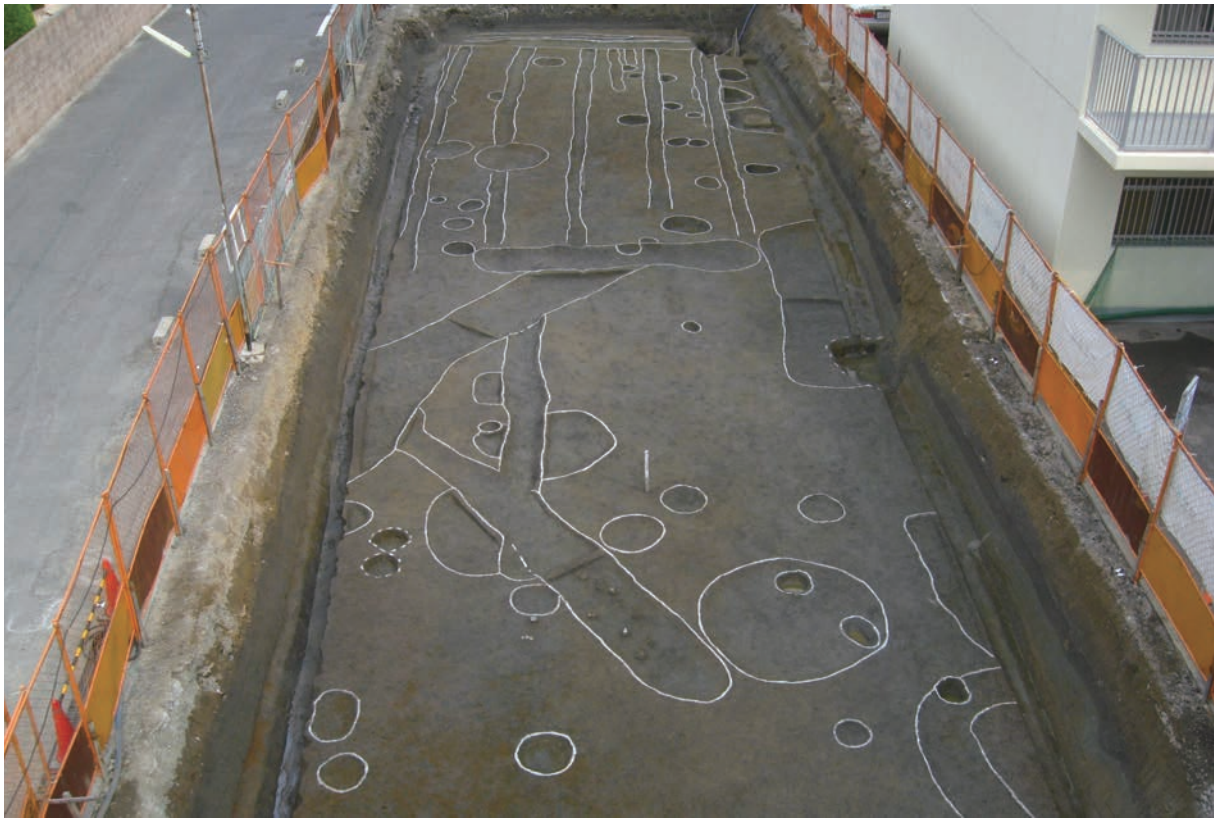
2．ＫＹ2004－１　５区　井戸１　全景（南から）

巻 頭 写 真 図 版 10

1．ＫＹ2011－４　東側地区　全景（北から）

2．ＫＹ2011－４　西側地区　全景（北から）

巻 頭 写 真 図 版 11



１．ＫＹ2011－４　東側地区　第２遺構面　全景（西から）

２．ＫＹ2011－４　第２遺構面　土器群Ａ　遺物出土状況（東から）

巻 頭 写 真 図 版 12

1．ＫＹ2011－５　東側地区　全景（西から）

2．ＫＹ2011－５　溝24　遺物出土状況（南から）

巻 頭 写 真 図 版 13

1．ＫＹ2012－１　調査地区　東側全景（北西から）

2．ＫＹ2012－１　調査地区　西側全景（北東から）

巻 頭 写 真 図 版 14

1．ＫＹ2015－１　東側地区　第１遺構面　全景（西から）

2．ＫＹ2015－１　東側地区　第２遺構面　全景（東から）

巻 頭 写 真 図 版 15

1．ＫＹ2001－１　出土飛鳥・奈良時代遺物集合

2．ＫＹ2001－２　土坑11　出土土器

巻 頭 写 真 図 版 16

1．ＫＹ2001－２　溝17　出土土器

2．ＫＹ2001－２　溝18　出土遺物集合

巻 頭 写 真 図 版 17

1．ＫＹ2001－２　溝19　出土遺物集合

2．ＫＹ2001－２　溝20　出土遺物集合

巻 頭 写 真 図 版 18

1．ＫＹ2002－１　出土遺物集合

2．ＫＹ2002－１　赤彩土器

巻 頭 写 真 図 版 19

1．ＫＹ2003－１　出土縄文土器集合

2．ＫＹ2003－２　井戸１　出土遺物集合

巻 頭 写 真 図 版 20

1．ＫＹ2004－１　井戸１　出土遺物集合

2．ＫＹ2011－４　土器群Ａ　出土遺物集合

巻 頭 写 真 図 版 21

1．ＫＹ2011－４　出土弥生時代遺物集合

2．ＫＹ2011－５　出土遺物集合

巻 頭 写 真 図 版 22

1．ＫＹ2012－１　出土遺物集合

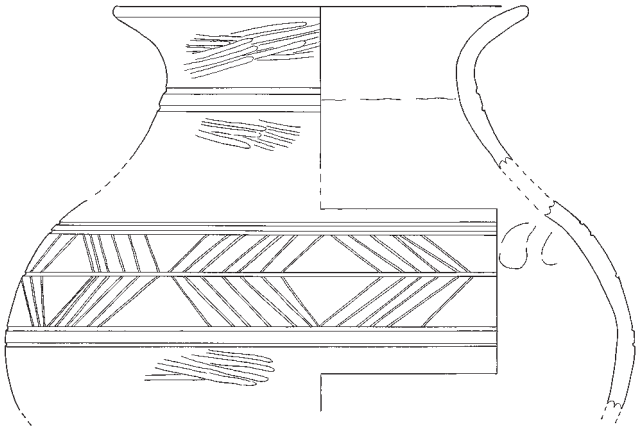
2．ＫＹ2015－１　出土遺物集合

四條畷市文化財調査報告　第 56 集

都市計画道路雁屋畑線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

雁　屋　遺　跡

発 掘 調 査 報 告 書



平成３１（２０１９）年３月

四條畷市教育委員会

例　　言

1．　本書は平成 13（2001）年度から平成 27（2015）年度に実施した都市計画道路雁屋畑線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、四條畷市文化財調査報告の第 56 集である。

2．　発掘調査および整理作業は、四條畷市教育委員会（担当課：平成 13 ～ 15 年度…生涯学習課、平成 16～25 年度…社会教育課、平成 26 ～29 年度…地域教育課、平成 30 年度…生涯学習推進課）が実施した。調査期間等は本文中に記載している。

3．　発掘調査は、2003-2 次調査地区を、四條畷市教育委員会　主任　野島稔が、平成 16 年度までのその他の調査地区を野島の指導のもと、技術職員　村上始が、平成 22～23 年度調査地区を野島の指導のもと、主査　村上、・事務職員　實盛良彦が、平成 24 年度以降を主任　村上（平成 27 年度課長代理兼主任）・事務職員　實盛が担当者として実施した（肩書はいずれも当時）。

4．　発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。（順不同）

　大阪府教育庁文化財保護課、地元自治会、櫻井敬夫氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国語大学教授）、森岡秀人氏（関西大学非常勤講師）、南健太郎氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教）、濱田延充氏（寝屋川市教育委員会）、西村公助氏（(公財）八尾市文化財調査研究会）、藤井　整氏（京都府教育委員会）、清水邦彦氏（茨木市教育委員会）、荒田敬介氏（神戸市教育委員会）、相馬勇介氏（堺市文化財課）、村瀬　陸氏（奈良市埋蔵文化財調査センター）、野島　稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館長）。

5．　本書作成用の出土遺物の整理（遺物の洗浄・注記・分類・接合・復元・彩色・収納等）・写真整理（写真の分類・注記・収納等）・図面作成（遺構図のトレース・版組、遺物の実測・トレース・版組等）などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会　生涯学習推進課上席主幹兼主任　村上始、主査　實盛良彦、臨時職員　酒井圭二、田伏美智代、藤井信之、山田章央が行った。

6．　本書は、村上・實盛が分担して執筆・編集を行った。文責者は各文末に記載している。

7．　発掘調査の出土遺物および記録写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．　本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。

2．　土色の色調は、1998 年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

3．　座標表示のない平面図の方位は磁北である。平面図内に座標表示があるものは国土座標（第Ⅵ座標系）に基づく座標北である。ただし、事業期間中に国土座標の測地系が変更されたため、（旧）日本測地系の座標のみ（）を付して表示し、現行の世界測地系と弁別できるようにした。

4．　弥生土器の編年は主に『弥生土器の様式と編年』を参照した（寺沢・森岡編 1989）。須恵器の編年は、田辺昭三のもの（田辺 1981）と中村浩のもの（中村 2001）を併記した。古代土器の編年は主に古代の土器研究会のもの（同 1992、1993）に依拠した。中世土器の編年は、中世土器研究会のもの（同編 1995）に準拠した。

本　文　目　次

巻頭写真図版
例　言・凡　例
目　　次
第１章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　　第１節　遺跡の位置
　　第２節　周辺の歴史的環境
第２章　調査の経過・・・15
　　第１節　既往の調査
　　第２節　周辺の 2010－２次調査成果
　　第３節　周辺の 2011－１次調査成果
　　第４節　周辺の 2011－３次調査成果
　　第５節　周辺の 2013－１次調査成果
　　第６節　調査の経過
第３章　雁屋遺跡 2001－１次（ＫＹ2001－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
　　第１節　基本層序
　　第２節　検出遺構
　　第３節　出土遺物
第４章　雁屋遺跡 2001－２次（ＫＹ2001－２）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　　第１節　基本層序
　　第２節　検出遺構
　　第３節　出土遺物
第５章　雁屋遺跡 2002－１次（ＫＹ2002－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
　　第１節　基本層序
　　第２節　検出遺構
　　第３節　出土遺物
第６章　雁屋遺跡 2003－１次（ＫＹ2003－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
　　第１節　基本層序
　　第２節　検出遺構
　　第３節　出土遺物
第７章　雁屋遺跡 2003－２次（ＫＹ2003－２）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
　　第１節　基本層序
　　第２節　検出遺構
　　第３節　出土遺物
第８章　雁屋遺跡 2004－１次（ＫＹ2004－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
　　第１節　基本層序
　　第２節　検出遺構
　　第３節　出土遺物

第９章　雁屋遺跡 2011－４次（ＫＹ2011－４）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第１節　基本層序
第２節　検出遺構
第３節　出土遺物
第10章　雁屋遺跡 2011－５次（ＫＹ2011－５）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第１節　基本層序
第２節　検出遺構
第３節　出土遺物
第11章　雁屋遺跡 2012－１次（ＫＹ2012－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第１節　基本層序
第２節　検出遺構
第３節　出土遺物
第12章　雁屋遺跡 2015－１次（ＫＹ2015－１）調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
第１節　基本層序
第２節　検出遺構
第３節　出土遺物
第13章　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
第１節　調査のまとめ
第２節　雁屋遺跡における弥生時代拠点集落の変遷
参　考　文　献・・・170
写　真　図　版
報 告 書 抄 録

挿　図　目　次

第 1 図　周辺遺跡分布図・・・

第 36 図　第２遺構面平面図（ＫＹ2002-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第 37 図　調査地区断面図（ＫＹ2002-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第 38 図　出土遺物（ＫＹ2002-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第 39 図　調査地区平面図・断面図（ＫＹ2003-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90～91
第 40 図　第２遺構面　溝１平面図・断面図（ＫＹ2003-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
第 41 図　出土遺物（ＫＹ2003-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第 42 図　第１遺構面平面図（ＫＹ2003-2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第 43 図　第２遺構面平面図（ＫＹ2003-2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第 44 図　調査地区断面抜粋図・第１遺構面井戸１平面図（ＫＹ2003-2）・・・・・・・・・・・・101
第 45 図　出土遺物（包含層・第１遺構面溝・井戸・ＫＹ2003-2）・・・・・・・・・・・・・・・・103
第 46 図　出土遺物（第１遺構面土器溜まり・ＫＹ2003-2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
第 47 図　出土遺物（第２遺構面・ＫＹ2003-2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第 48 図　調査地区平面図・断面図（ＫＹ2004-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110～111
第 49 図　５区　井戸１平面図（ＫＹ2004-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第 50 図　出土遺物（ＫＹ2004-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第 51 図　調査地区平面図（ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118～119
第 52 図　調査地区断面図（１）（ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
第 53 図　調査地区断面図（２）（ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
第 54 図　第２遺構面　溝 68 遺物出土状況図（ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第 55 図　第２遺構面　土器群Ａ遺物出土状況図（ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・124
第 56 図　出土遺物（第１遺構面・第２遺構面包含層土器・ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・126
第 57 図　出土遺物（第２遺構面包含層石器・ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第 58 図　出土遺物（土器群Ａ壺・ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第 59 図　出土遺物（土器群Ａ甕・ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
第 60 図　出土遺物（土器群Ａその他器種・遺構土器・ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・132
第 61 図　出土遺物（遺構石器・ＫＹ2011-4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
第 62 図　調査地区平面図・断面図（ＫＹ2011-5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136～137
第 63 図　溝 24 遺物出土状況図（ＫＹ2011-5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
第 64 図　出土遺物（ＫＹ2011-5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
第 65 図　調査地区平面図・断面図（ＫＹ2012-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144～145
第 66 図　井戸 47・59 平面図・断面図・包含層内遺物出土状況図（ＫＹ2012-1）・・・・・・・・・146
第 67 図　出土遺物（ＫＹ2012-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
第 68 図　調査地区平面図・包含層内遺物出土状況図（ＫＹ2015-1）・・・・・・・・・・・・・・154
第 69 図　調査地区断面図（ＫＹ2015-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
第 70 図　出土遺物（ＫＹ2015-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・158
第 71 図　弥生時代前期（Ⅰ様式期）の雁屋遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第 72 図　弥生時代中期前葉（Ⅱ様式期）の雁屋遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164

第 73 図　弥生時代中期中葉（Ⅲ様式期）の雁屋遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
第 74 図　弥生時代中期後葉（Ⅳ様式期）の雁屋遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
第 75 図　弥生時代後期（Ⅴ様式期）の雁屋遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168

巻　頭　写　真　図　版　目　次

巻頭写真図版１　１．雁屋遺跡　遠景（2001 年・北から）
　　２．雁屋遺跡　遠景（2001 年・南から）
巻頭写真図版２　１．雁屋遺跡　遠景（2001 年・東から）
　　２．雁屋遺跡　遠景（2001 年・西から）
巻頭写真図版３　１．四條畷市内および雁屋遺跡　遠景（2011 年・北西から）
　　２．雁屋遺跡　遠景（2011 年・南から）
巻頭写真図版４　１．ＫＹ2001-1　調査地区　遠景（北西から）
　　２．ＫＹ2001-1　調査地区　全景（垂直写真）
巻頭写真図版５　１．ＫＹ2001-2　東側地区　全景（西から）
　　２．ＫＹ2001-2　西側地区　全景（東から）
巻頭写真図版６　１．ＫＹ2001-2　溝 16・17　全景（西から）
　　２．ＫＹ2001-2　溝 18　全景（東から）
巻頭写真図版７　１．ＫＹ2003-1　第１遺構面　全景（西から）
　　２．ＫＹ2003-1　第２遺構面　溝１　全景（南西から）
巻頭写真図版８　１．ＫＹ2003-1　第３遺構面　河川１　全景（南から）
　　２．ＫＹ2003-1　第３遺構面　河川１　全景（北西から）
巻頭写真図版９　１．ＫＹ2004-1　調査地区　全景（西から）
　　２．ＫＹ2004-1　５区　井戸１　全景（南から）
巻頭写真図版10　１．ＫＹ2011-4　東側地区　全景（北から）
　　２．ＫＹ2011-4　西側地区　全景（北から）
巻頭写真図版11　１．ＫＹ2011-4　東側地区　第２遺構面　全景（西から）
　　２．ＫＹ2011-4　第２遺構面　土器群Ａ　遺物出土状況（東から）
巻頭写真図版12　１．ＫＹ2011-5　東側地区　全景（西から）
　　２．ＫＹ2011-5　溝 24　遺物出土状況（南から）
巻頭写真図版13　１．ＫＹ2012-1　調査地区　東側全景（北西から）
　　２．ＫＹ2012-1　調査地区　西側全景（北東から）
巻頭写真図版14　１．ＫＹ2015-1　東側地区　第１遺構面　全景（西から）
　　２．ＫＹ2015-1　東側地区　第２遺構面　全景（東から）

巻頭写真図版15　１．ＫＹ2001-1　出土飛鳥・奈良時代遺物集合
　２．ＫＹ2001-2　土坑 11　出土土器
巻頭写真図版16　１．ＫＹ2001-2　溝 17　出土土器
　２．ＫＹ2001-2　溝 18　出土遺物集合
巻頭写真図版17　１．ＫＹ2001-2　溝 19　出土遺物集合
　２．ＫＹ2001-2　溝 20　出土遺物集合
巻頭写真図版18　１．ＫＹ2002-1　出土遺物集合
　２．ＫＹ2002-1　赤彩土器
巻頭写真図版19　１．ＫＹ2003-1　出土縄文土器集合
　２．ＫＹ2003-2　井戸１　出土遺物集合
巻頭写真図版20　１．ＫＹ2004-1　井戸１　出土遺物集合
　２．ＫＹ2011-4　土器群Ａ　出土遺物集合
巻頭写真図版21　１．ＫＹ2011-4　出土弥生時代遺物集合
　２．ＫＹ2011-5　出土遺物集合
巻頭写真図版22　１．ＫＹ2012-1　出土遺物集合
　２．ＫＹ2015-1　出土遺物集合

写　真　図　版　目　次

写真図版１　１．ＫＹ2010-2　第１遺構面　全景（北から）
　２．ＫＹ2010-2　井戸 37　調査状況（東から）
写真図版２　１．ＫＹ2011-1　第１遺構面　全景（南から）
　２．ＫＹ2011-1　第２遺構面　全景（南から）
写真図版３　１．ＫＹ2011-3　調査地区　全景（南から）
　２．ＫＹ2011-3　掘立柱建物Ａ　全景（北から）
写真図版４　１．ＫＹ2013-1　溝２（方形周溝墓）　近景（北西から）
　２．ＫＹ2013-1　溝２（方形周溝墓）　近景（南東から）
写真図版５　１．ＫＹ2001-1　調査前　全景（西から）
　２．ＫＹ2001-1　調査地区　遺構検出状況（西から）
写真図版６　１．ＫＹ2001-1　調査地区　遺構完掘状況（西から）
　２．ＫＹ2001-1　調査地区　遺構完掘状況（北東から）
写真図版７　１．ＫＹ2001-2　東側地区　全景（西から）
　２．ＫＹ2001-2　東側地区　全景（東から）
写真図版８　１．ＫＹ2001-2　西側地区　全景（東から）
　２．ＫＹ2001-2　西側地区　全景（西から）
写真図版９　１．ＫＹ2001-2　土坑 11　遺物出土状況（北から）
　２．ＫＹ2001-2　土坑 10　遺物出土状況（北から）
写真図版10　１．ＫＹ2001-2　溝 16　全景（北東から）
　２．ＫＹ2001-2　溝 17　遺物出土状況（北東から）
写真図版11　１．ＫＹ2001-2　溝 18　遺物出土状況（南西から）
　２．ＫＹ2001-2　溝 18　遺物出土状況（北東から）
写真図版12　１．ＫＹ2001-2　溝 18　遺物出土状況（北東から）
　２．ＫＹ2001-2　溝 18　Ｂ－Ｂ’断面（東から）
写真図版13　１．ＫＹ2001-2　溝 19　遺物出土状況（南西から）
　２．ＫＹ2001-2　溝 20　遺物出土状況（北西から）
写真図版14　１．ＫＹ2002-1　第１遺構面　全景（西から）
　２．ＫＹ2002-1　第２遺構面　土坑２　近景（西から）
写真図版15　１．ＫＹ2003-1　第１遺構面　全景（南東から）
　２．ＫＹ2003-1　第１遺構面　全景（西から）
写真図版16　１．ＫＹ2003-1　第２遺構面　溝１　全景（北西から）
　２．ＫＹ2003-1　第３遺構面　河川１　全景（南東から）
写真図版17　１．ＫＹ2003-2　東側地区　第１遺構面　遠景（垂直写真）
　２．ＫＹ2003-2　東側地区　第１遺構面　近景（北から）

写真図版18　１．ＫＹ2003-2　井戸１・土器溜まり　全景（垂直写真）
　２．ＫＹ2003-2　第２遺構面　全景（垂直写真）
写真図版19　１．ＫＹ2004-1　調査前　全景（北東から）
　２．ＫＹ2004-1　５区　全景（西から）
写真図版20　１．ＫＹ2004-1　井戸１　井戸枠内完掘状況（南から）
　２．ＫＹ2004-1　井戸１　裏込め土半截状況（南から）
写真図版21　１．ＫＹ2011-4　西側地区　第１遺構面　全景（北東から）
　２．ＫＹ2011-4　西側地区　第２遺構面　全景（西から）
写真図版22　１．ＫＹ2011-4　東側地区　第２遺構面　全景（西から）
　２．ＫＹ2011-4　溝 68　遺物出土状況（南から）
写真図版23　１．ＫＹ2011-4　溝 14　石鏃出土状況近景（南から）
　２．ＫＹ2011-4　土器群Ａ　遺物出土状況（北東から）
写真図版24　１．ＫＹ2011-5　東側地区　全景（南西から）
　２．ＫＹ2011-5　西側地区　全景（東から）
写真図版25　１．ＫＹ2011-5　西側地区　南壁断面（北西から）
　２．ＫＹ2011-5　溝 24　遺物出土状況（北から）
写真図版26　１．ＫＹ2012-1　調査地区　近景（北から）
　２．ＫＹ2012-1　溝 96～102　完掘状況（東から）
写真図版27　１．ＫＹ2012-1　井戸 47　完掘状況（東から）
　２．ＫＹ2012-1　井戸 59　中層　礫出土状況（西から）
写真図版28　１．ＫＹ2015-1　西側地区　全景（東から）
　２．ＫＹ2015-1　井戸１　堆積状況（南から）
写真図版29　１．ＫＹ2015-1　東側地区　第２遺構面　全景（西から）
　２．ＫＹ2015-1　包含層内　石鏃出土状況（東から）
写真図版30　１．ＫＹ2010-2　出土遺物
　２．ＫＹ2011-1　出土遺物
写真図版31　１．ＫＹ2011-3　出土遺物
　２．ＫＹ2013-1　出土遺物
写真図版32　１．ＫＹ2001-1　出土遺物（包含層）
　２．ＫＹ2001-1　出土遺物（遺構土器）
写真図版33　１．ＫＹ2001-1　土器内面付着有機物
　２．ＫＹ2001-1　出土遺物（石製品・土製品）
写真図版34　１．ＫＹ2001-1　出土馬歯（包含層）
　２．ＫＹ2001-2　出土遺物（包含層）
写真図版35　１．ＫＹ2001-2　出土遺物（土坑 10・11）
　２．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 16・17）

写真図版36　１．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 18・大型品）
２．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 18・蓋・ミニチュア壺・土製品）
写真図版37　１．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 18・施文壺）
２．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 18・壺）
写真図版38　１．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 18・甕）
２．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 18・底部）
写真図版39　１．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 19）
２．ＫＹ2001-2　出土遺物（溝 20）
写真図版40　１．ＫＹ2001-2　出土石器
２．ＫＹ2001-2　出土サヌカイト剝片・石核（二上山産）
写真図版41　１．ＫＹ2001-2　出土サヌカイト剝片・石核（金山産系）
２．ＫＹ2002-1　出土遺物（包含層）
写真図版42　１．ＫＹ2002-1　出土遺物（遺構）
２．ＫＹ2002-1　出土馬歯（包含層）
写真図版43　１．ＫＹ2003-1　出土遺物（包含層）
２．ＫＹ2003-1　出土遺物（遺構）
写真図版44　１．ＫＹ2003-2　出土遺物（包含層）
２．ＫＹ2003-2　出土遺物（第１遺構面遺構）
写真図版45　１．ＫＹ2003-2　出土遺物（土器溜まり）
２．ＫＹ2003-2　出土遺物（第２遺構面）
写真図版46　１．ＫＹ2004-1　出土遺物（包含層）
２．ＫＹ2004-1　出土遺物（井戸１）
写真図版47　１．ＫＹ2011-4　出土遺物（第１遺構面）
２．ＫＹ2011-4　出土遺物（第２遺構面包含層・遺構）
写真図版48　１．ＫＹ2011-4　出土遺物（土器群Ａ）
２．ＫＹ2011-4　出土遺物（土器群Ａ大型品）
写真図版49　１．ＫＹ2011-4　出土石器
２．ＫＹ2011-4　出土サヌカイト剝片・石核
写真図版50　１．ＫＹ2011-5　出土遺物
２．ＫＹ2012-1　出土遺物（包含層）
写真図版51　１．ＫＹ2012-1　出土遺物（Pit・溝）
２．ＫＹ2012-1　出土遺物（土坑・井戸）
写真図版52　１．ＫＹ2015-1　出土弥生時代遺物
２．ＫＹ2015-1　出土遺物

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。雁屋遺跡は、飯盛山系の西側の平野部に位置する遺跡である。

第２節　周辺の歴史的環境

雁屋遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつかっている（第１図）。

旧石器時代　讃良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している（櫻井 1972）。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている（片山 1967a）。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している（野島・藤原・花田 1976）。

縄文時代　縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡（野島 1978b）、四條畷小学校内遺跡（野島 1994c）、木間池北方遺跡（村上 1997a）などでみつかっている。讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている（井上ほか編 2003、佐伯ほか編 2007、井上編 2008 等）。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている（野島 1978b、1988）。

砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつかっている（宮野1992、四條畷市教育委員会編2008）。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讃良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている（片山 1967b、桜井 1972、宮野 1992、野島編 2000）。

弥生時代　弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡の 2005 年の調査でみつかっている（中尾ほか編 2009）。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている（後川・實盛・井上編 2015）。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点的集落である。前期では板付Ⅱ式併行期に属する大型壺の出土や（野島1984a）、集落の検出がある（村上2001f、本書）。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している（辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999）。焼失竪穴住居や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品や卜骨、銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している（野島1994a、村上・實盛2011）。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴住居群や方形周溝墓などが検出され（野島1987a、阿部1999）、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している（三好ほか 2007）。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸２口が出土したと伝えられ（梅原1985）、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が５基みつかっている（野島 1994b）。１号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が１基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。２号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。

第１図　周辺遺跡分布図

１．雁屋遺跡	２．讃良川床遺跡	３．讃良寺跡	４．更良岡山古墳群
５．更良岡山遺跡	６．忍岡古墳	７．北口遺跡	８．讃良郡条里遺跡
９．砂遺跡	10．奈良田遺跡	11．岡山南遺跡	12．忍ヶ丘駅前遺跡
13．南山下遺跡	14．奈良井遺跡	15．蔀屋北遺跡	16．蔀屋遺跡
17．鎌田遺跡	18．中野遺跡	19．墓ノ堂古墳	20．四條畷小学校内遺跡
21．木間池北方遺跡	22．南野米崎遺跡	23．伝和田賢秀墓	24．南野遺跡
25．楠公遺跡	26．伝楠木正行墓		

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島 1994c）、蔀屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編 2012）、中野遺跡で中期の方形周溝墓が検出されている（野島 1986b）。

古墳時代　讃良川流域で古墳時代前期中頃に全長約 87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている（梅原 1937）。主体部は竪穴式石室（石槨）で、碧玉製の石釧・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讃良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている（井上編 2008、近藤ほか編 2006、佐伯ほか編 2007、後川・實盛・井上編 2015）。また岡山南遺跡でも集落を検出している（村上・實盛 2016）。

中期の古墳としては、全長約62mの前方後円墳である墓ノ堂古墳があり、立会調査で円筒埴輪片が出土している（野島1997c、櫻井・佐野・野島2006）。忍ヶ丘駅前１号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している（野島1993a、1997a）。清滝古墳群（野島1980a）や大上古墳群（村上・實盛編2017）、更良岡山古墳群（野島1981）などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。中でも城遺跡内の大上３号墳は周溝を含めた全長が約45mある後期の帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した（村上2006）。清滝古墳群２号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島1980a）。大上５号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が１点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。

ＪＲ忍ケ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島 2006、2010 等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島 1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土しており（野島 1982）、一緒に左足用の木製下駄も出土している（野島 1979a、1982、瀬川 1992）。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われており、奈良田遺跡（野島 1980c、野島・村上 2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上 2000 等）、城遺跡・大上遺跡（村上 2006）、南野米崎遺跡（野島 1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編 2004）などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讃良郡条里遺跡で５世紀初頭の馬骨の出土がみられ（中尾ほか編 2009）、蔀屋北遺跡では馬具の鐙・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる（岩瀬ほか編 2010、岩瀬編 2012）。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鏃、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し（村上 2001c、d、e）、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している（野島 1980b、野島・村上 2000、野島・村上・實盛 2012）。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡がみつかっている（野島 1993b、中尾ほか編 2009 等）。讃良郡条里遺跡の 2011 年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた（後川・實盛・井上編 2015）。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる（村上・實盛 2014）。

古代以降　正法寺跡は、７世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である（大阪府教育委員会編 1970）。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった（村上 2001a）。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田 1977）、塔は石積みの遺構を伴っていた（大阪府教育委員会編 1970）。また回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の鴟尾片が出土している（野島・村上 2002）。

讃良寺跡は 1969 年に部分的に調査され、暗渠の可能性がある瓦敷きなどを検出し、７世紀の創建であることが分かった（桜井 1972、櫻井・佐野・野島 2006、2010）。1997 年の調査では正法寺跡のものと同笵の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており（野島編 2000）、文様に型起因の摩耗がみられることから、讃良寺のものが後に作られたと考えられている（野島 1997b）。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれており、木間池北方遺跡で円面硯や土器と共に土馬が７体出土した（村上2006）。木間池北方遺跡で「□万呂」（村上2006）、南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出

土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獣葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる（後川・實盛・井上編2015）。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡（村上 2000)、木間池北方遺跡（村上 2006)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編 2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書された土師器坏や（村上 2006)、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物井戸枠が出土している(村上 2003)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されており（野島・藤原・花田 1976、野島 1987b)、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が出土している(野島 1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している（後川・實盛・井上編 2015）。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡（村上 2003a)、南山下遺跡（野島・村上 2001、村上 2001b)、岡山南遺跡（野島・藤原・花田 1976、野島 1982、野島・前田 1984、野島 1987b、村上 2004、村上・實盛 2013a)、中野遺跡(野島 1977、1986b、西尾 1987)、忍ケ丘駅前遺跡(野島 1983、村上 1997b)、四條畷小学校内遺跡（村上 2000)、大上遺跡（村上 2006）木間池北方遺跡（村上 1997a)、南野遺跡(野島 1995)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編 2010)、讃良郡条里遺跡（後川・實盛・井上編 2015）、南野米崎遺跡、楠公遺跡、蔀屋遺跡等で集落跡等がみつかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壙墓がみつかっており(野島 1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡はこれまでに大東市教育委員会によって調査が行われ、土塁や柵の跡が検出されている(黒田 1989)。平成 23 年度には城跡の詳細な縄張図が測量・作成されている(村上・實盛編 2013、黒田 2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013)。

室町時代後期の 16 世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大将軍社が創建され、明治 44 年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正躰あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている（後川・實盛・井上編 2015)。

（實盛良彦）

第２章　調査の経過

第１節　既往の調査

雁屋遺跡は、四條畷市雁屋北町から江瀬美町・美田町にかけて所在し、府立四條畷高等学校を中心にして東西約 800m、南北約 500mの広さが、弥生時代、古墳時代、中世の集落遺跡などとして周知されている。その地勢は生駒山系の西側へ広がる沖積地で、旧大和川水系や寝屋川水系の大小河川による土砂によって形成されたものである。

雁屋遺跡はこれまでに数次の発掘調査が行われており（第２図）、弥生時代の遺跡は前期から後期まで続き、この地域の拠点的な集落と考えられる。

《四條畷市教育委員会による発掘調査》

遺跡は 1983 年２月に旧日本道路公団の職員住宅建設工事に伴う試掘調査によって発見した。1983 年度（昭和 58 年度）に同工事に伴う発掘調査を行い、地表下約 2.5mから弥生時代前期の大型壺・壺・甕、磨製の石庖丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・土製紡錘車などが出土した（野島 1984）。

1985 年度（昭和 60 年度、ＫＹ-Ⅲ）には、病院建設工事に伴う発掘調査で、弥生時代後期の旧河川・周溝墓・竪穴住居・土壙、中期の方形周溝墓４基を検出した（野島 1987a）。後期の周溝墓は大きく削平を受けており、主体部に関しては痕跡を残すのみであったが、周溝内からは在地の土器とともに丹後系の台付鉢や甕、近江系の鉢、出雲・山陰系の低脚坏や土玉が出土した。また竪穴住居からは丹後系の把手付鉢が出土した（三好ほか 2007）。これらのことから、弥生後期の雁屋遺跡は日本海側地域との交流があったものと考えられる。中期の方形周溝墓については、第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓内から子ども用のものを含めて合計 20 基の組合式木棺を検出した（野島 1987a）。棺材の樹種鑑定から高野槇・ヒノキ・カヤ材が使用されていたことが判明し、特に高野槇の木棺は遺存状態が良好なものが多くみられた。また第１号方形周溝墓２号主体部では、高野槇の底板上の腹部から腰部にあたるところからサヌカイト製の打製石鏃が 11 点出土した。第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓の共有する周溝内から出土した壺３点・把手付鉢・水差形土器の５点には水銀朱が塗られていた。塗布された部分が土器の一部の面であることから、土器の正面を意識した可能性がある。また同じ周溝からは蓋付木製四脚容器が出土した。容器は、ヤマグワ材を４本の脚が付く隅丸方形に刳りぬいて作成しており、口縁部の左右にはそれぞれ２個の孔を開けた突出した耳が付いていた。蓋の上面には双頭渦文が浮き彫りされており、同じく左右にはそれぞれ２個の孔を開けた突出した耳が付いていた。つまり容器と蓋を紐で固定できる状態であった。この蓋にも水銀朱が塗られていた。朱塗りの一括土器は平成 22 年度に、木製四脚容器は平成 21 年度に市の指定有形文化財に指定された。

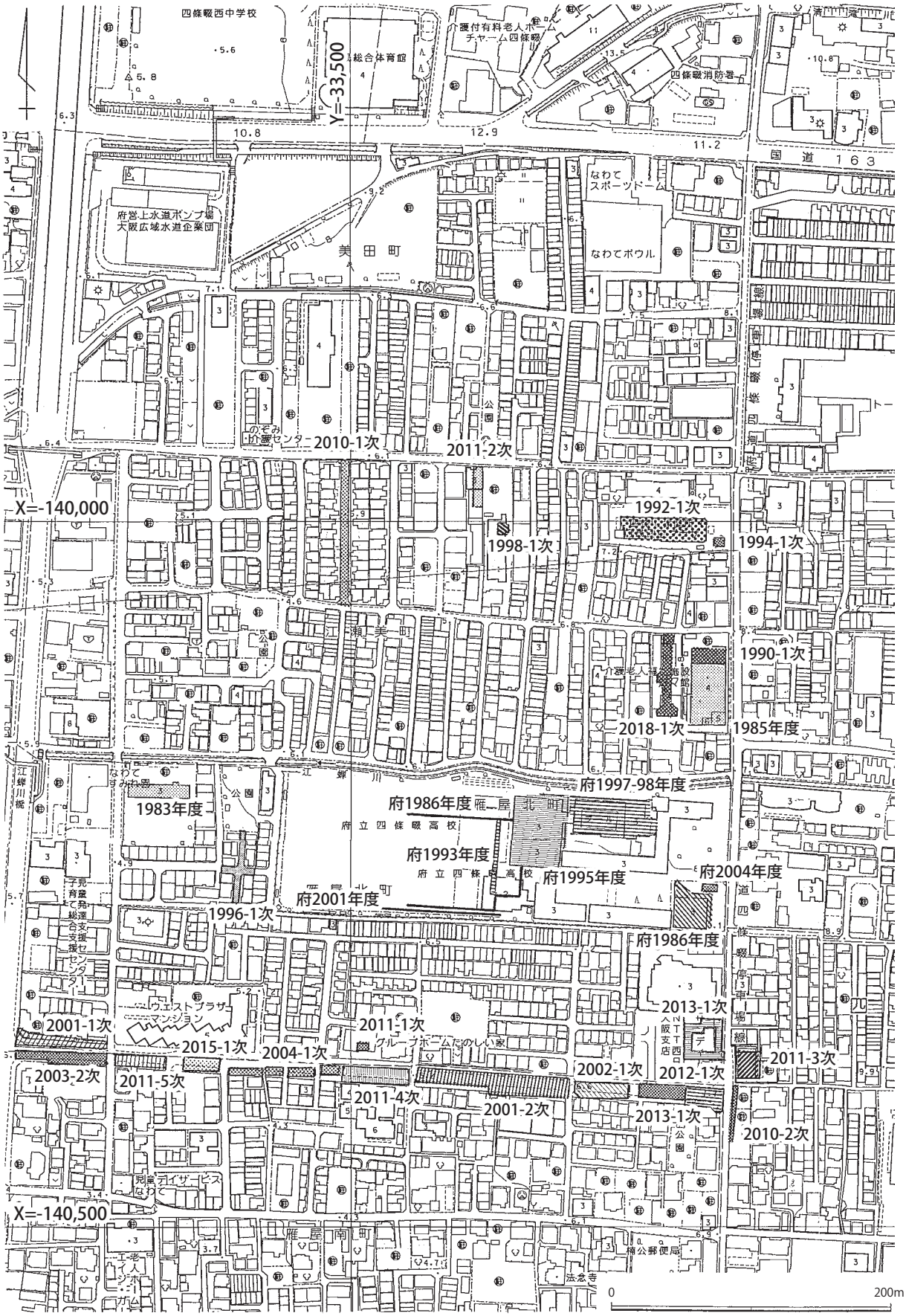
1990 年度には病院増築に伴い 1985 年度調査地の北隣を調査し（ＫＹ1990-1）、弥生時代後期の溝、中期の溝等を検出した。方形周溝墓群が続いているものとみられるが、主体部を検出しなかったため、更なる検討が必要である。

1992 年度（平成３年度、ＫＹ1992-1）と 1994 年（平成５年、ＫＹ1994-1）に、府立四條畷保健所の建替え工事に伴い発掘調査を行った（野島 1994）。調査の結果、中期の竪穴住居や方形周溝墓、後期の竪穴住居などを検出した。第１号方形周溝墓の西側周溝内からは、長さ約 1.4mで断面Ｕ字状の隅丸長方形をしたモミ材の板状木製品とともに、ノグルミ製の鳥形木製品が出土した。火災を受けた中期の竪穴住居からは分銅形土製品や炉跡から卜骨とみられる肩甲骨が出土した。また土坑からは木製盤・杓子など未成品のものが多く出土しており、未成品の貯蔵施設と考える。石製品としては特筆すべきものとして、銅鐸の舌が２本出土した。

1996 年度には 1983 年度調査地の 50m東で公的住宅建設に伴い調査を行い（ＫＹ1996-1）、弥生時代中期の方形周溝墓を４基検出した。また、縄文時代晩期末の深鉢が出土した。

1998 年度にはマンション建設に伴い調査を行い（ＫＹ1998-1）、弥生時代の集落を検出した。

2010 年度第１次の宅地造成に伴う調査（ＫＹ2010-1）では、弥生時代中期から後期にかけての４面の遺構面を検出し、掘立柱建物を構成すると考えられる中期の柱が２基出土したほか、同時期の木製


四條畷西中学校
総合体育館
介護付有料老人ホーム
チャーム四條畷
四條畷消防署
Y=-33,500
国道163
なわて
スポーツドーム
なわてボウル
府営上水道ポンプ場
大阪広域水道企業団
美田町
公園
のぞみ
介護センター
2010-1次
2011-2次
X=-140,000
1992-1次
1998-1次
1994-1次
江瀬美町
1990-1次
2018-1次
1985年度
江蝉川
府1997-98年度
なわて
すみれ園
1983年度
府1986年度
雁屋北町
府立四條畷高校
府1993年度
府立四條畷高校
府1995年度
府2004年度
府2001年度
1996-1次
府1986年度
ウエストプラザ
マンション
2001-1次
2011-1次
グループホームたのしい家
2013-1次
2015-1次
2004-1次
2011-3次
2003-2次
2011-5次
2002-1次
2012-1次
2011-4次
2001-2次
2013-1次
2010-2次
児童デイサービス
なわて
X=-140,500
雁屋南町
楠公郵便局
法念寺
0
200m

第２図　調査地区位置図

品の貯蔵施設と、それを囲むように区画する杭列を検出した（村上・實盛 2011）。遺物としては播磨地域の特徴を示す土器が出土しており、中期から他地域との交流があったことを示している。同年第２次の歩道建設に伴う調査（ＫＹ2010-2・後述）では、中世の集落跡を検出した。

2011 年度のグループホーム建設に伴う第１次調査（ＫＹ2011-1・後述）では古墳時代の集落と弥生時代の耕作地遺構を検出した。宅地造成に伴う第２次調査（ＫＹ2011-2）では中期の集落においてサヌカイト埋納土坑を検出した。民間事務所建設に伴う第３次調査（ＫＹ2011-3・後述）では中世の集落を検出した。

2013 年度には民間店舗建設に伴い調査を行い（ＫＹ2013-1・後述）、中世の遺構と弥生後期～古墳初頭の方形周溝墓の可能性がある溝を検出した。

2018 年度には宅地造成に伴い 1985 年度調査地の西隣で調査を行い、弥生時代中期と後期の２面の遺構面を検出した。後期の遺構からは革袋形土器などが出土した。中期の遺構面では方形周溝墓群と集落跡を検出し、墓域と居住域との境が盛土により構築された堤防を伴う溝で区画されているのを確認した。

《大阪府教育委員会による発掘調査》

1986 年度（昭和 61 年度）に府立四條畷高等学校東館建設工事及び汚水排水管敷設工事に伴い発掘調査が行われた（辻本 1987）。調査の結果、後期の河川・大溝や中期の方形周溝墓３基・土壙２基・溝・大溝などが検出された。第１号方形周溝墓の周溝内からは第Ⅲ様式新～第Ⅳ様式の遺物がまとまって出土しており、土器焼成後に穿孔されているものが多くあった。

1993 年度（平成６年度）に府立四條畷高等学校内排水管切替工事に伴う発掘調査が行われた。調査の結果、後期の溝などが検出された（酒井 1994）。

1995 年度（平成８年度）に府立四條畷高等学校体育館建替えに伴う発掘調査が行われた（佐久間 1995、大阪府教育庁文化財保護課保存管理グループ 2017）。調査の結果、後期の竪穴住居 10 棟、溝、土坑などの遺構とシャーマンを線刻した土器などが出土した。

1997 年度（平成９年度）～1998 年度（平成 10 年度）には府立四條畷高等学校校舎建替えに伴う発掘調査が行われた（阿部 1999）。調査の結果、中期の方形周溝墓２基と後期の竪穴住居１棟などが検出され、中期の鳥形木製品などが出土した。

2001 年度（平成 13 年度）には 1986 年度（昭和 61 年度）の汚水排水管敷設地の南側で調査が行われ、弥生時代の自然河川が検出された（井西 2003）。

2004 年度（平成 16 年度）には防火水槽設置に伴い、1986 年度（昭和 61 年度）調査の東館建設地の北側で調査が行われ、弥生後期の溝が検出された（岡田 2006）。

以上が雁屋遺跡のこれまでの発掘調査概要であるが、雁屋遺跡では、これまで主に遺跡の北側が多く調査されており、遺跡の南側に関しては詳細が不明であった。今回報告する、都市計画道路雁屋畑線建設に伴う一連の調査地区（2001-1、2 次、2002-1 次、2003-1、2 次、2004-1 次、2011-4、5 次、2012-1 次、2015-1 次、第２図）は、雁屋遺跡の南端に位置することから、重要な調査となった。

ここで、都市計画道路雁屋畑線建設に伴う雁屋遺跡発掘調査に関連し、上記で概要を述べた調査のうち周辺で行った 2010 年度２次、2011 年度１次、３次、2013 年度１次調査の成果に触れておきたい。

（村上　始・實盛）

【雁屋遺跡関係既往報告書一覧】

—四條畷市発行—
野島　稔 1984『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1986『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要—1985 年度—』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1994『雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－』四條畷市教育委員会。
—大阪府発行—
辻本　武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
酒井泰子 1994『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
阿部幸一 1999『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪府教育委員会。
井西貴子 2003『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅴ、大阪府教育委員会。
岡田　賢 2006『雁屋遺跡』大阪府教育委員会。

第２節　周辺の 2010－２次調査成果

１．調査の経過

2010 年度２次調査（ＫＹ2010-2）は、四條畷市楠公一丁目 672-13、-14、-15 において一般府道四条畷停車場線交差点改良事業に伴い道路拡幅、歩道設置工事が計画された。当時弥生時代の周知遺跡であった雁屋遺跡の範囲に隣接しており、遺跡の存在が想定されたため、大阪府枚方土木事務所と協議を行い、平成 22（2010）年３月 15 日に、計画用地内に２箇所のトレンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、中世の遺物包含層および遺構、遺構面を確認したため、平成 22 年３月 18 日付畷教社第 1454 号で大阪府教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書を提出し、同年３月 31 日付教委文第 9-29 号で雁屋遺跡の範囲拡大および時代の変更（追加）についての通知があった。

平成22年６月16日付枚土第3184号で大阪府枚方土木事務所長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第 94 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。大阪府教育委員会からは同年７月 13 日付け教委文第 1-1319 号で発掘調査が必要との通知があった。

平成 23 年１月 21 日付枚土第 8732 号で、大阪府枚方土木事務所長から四條畷市教育委員会教育長に文化財調査に係る職員の派遣依頼があり、平成 23 年２月 21 日付畷教社第 1402 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約 112 ㎡で、調査期間は平成 23 年１月 31 日から３月２日までであった。調査は試掘調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成 23 年３月７日付畷教社第 1440 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年３月 11 日に第 4967 号で受理された。大阪府教育委員会には同年３月７日付畷教社第 1441 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年３月 31 日付教委文第 3-324 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計２箱であった。

２．基本層序

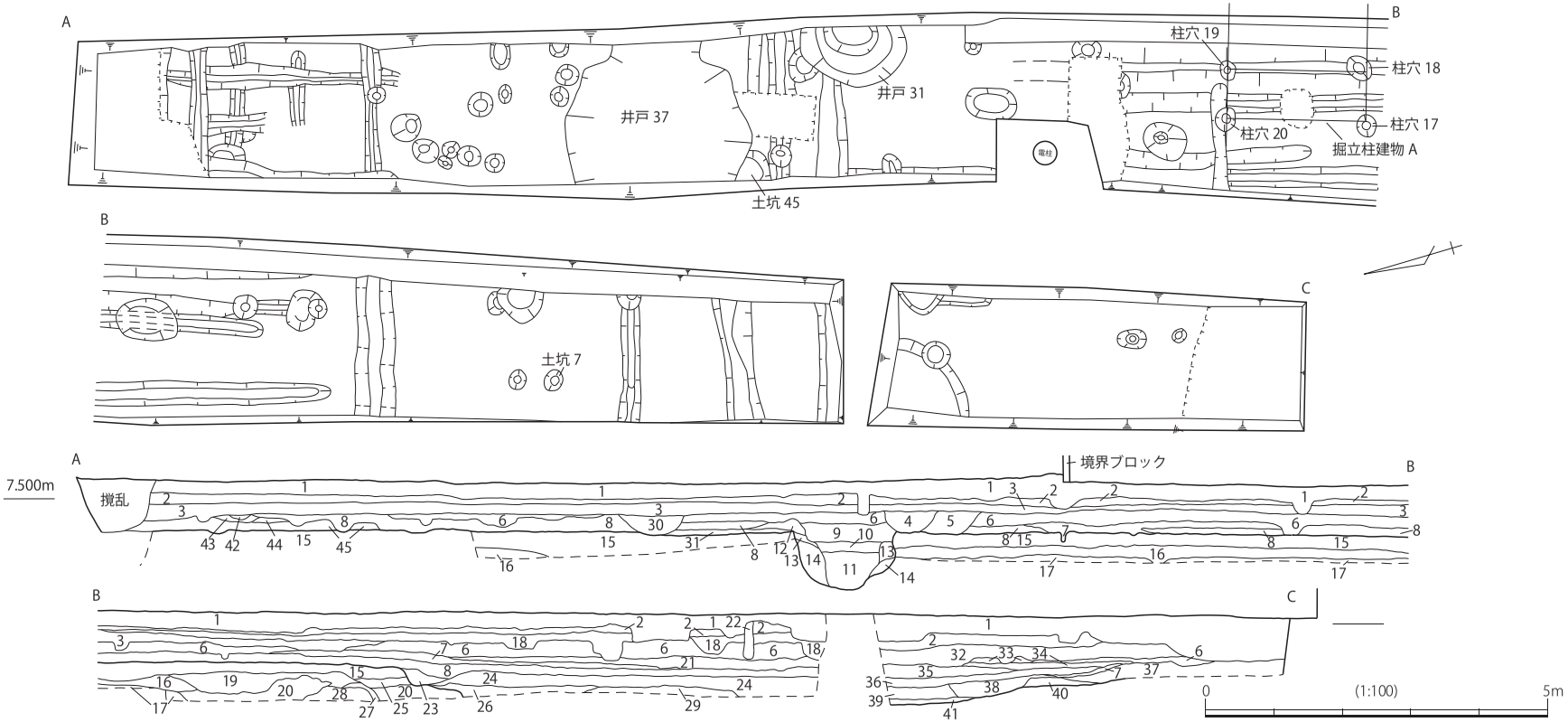
発掘調査地区の調査前現況は一部が民間の駐車場、一部が民間の事務所敷地内駐車場であった。駐車場造成のために 0.3mほど盛土されていた。その際に旧耕土はほとんどが除去されており、盛土内に一部含まれるのみであったが、その下層の 0.1mほどの床土は除去されず残存しており、駐車場造成以前は水田もしくは畑地であったと思われる。床土の下層に 0.2～0.3mほど中世から近世の遺物包含層が堆積し、その下面が第１遺構面であった。その下層にも厚さ 0.2mほど包含層が堆積し、その下面が第２遺構面であった。その下層は暗褐色系の粘土で、地山であった（第３図）。

３．検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに中世に属するもので、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、柱穴があった（第３図）。遺構面は２面検出したが、第２遺構面は遺構の存在が希薄で、流路と土坑少数を検出した程度であった。遺構面の標高は第１遺構面北端で T.P. ＋7.478m、南端で T.P. ＋7.452m、第２遺構面北端で T.P. ＋7.454m、南端で T.P. ＋7.426mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、第１遺構面を中心に主な遺構について詳述する。

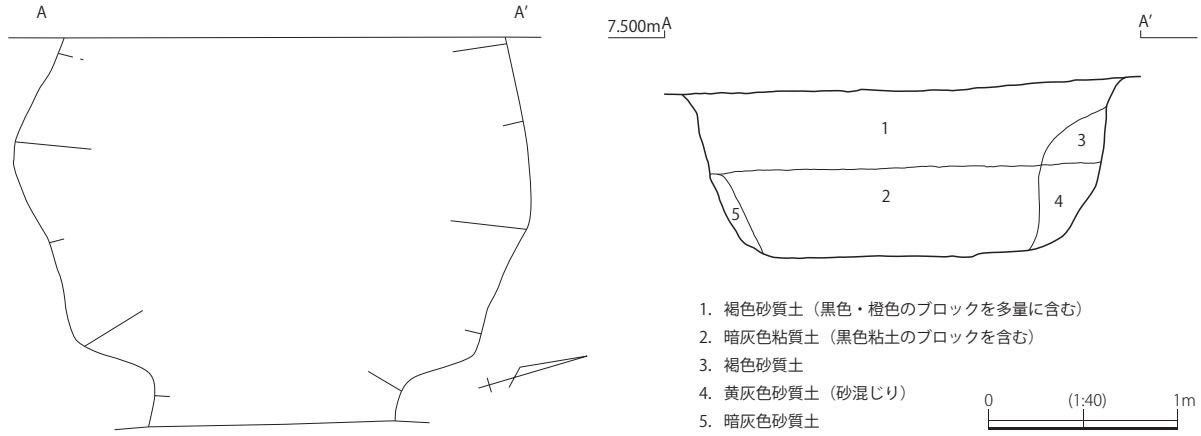
掘立柱建物Ａ　調査地区中央で検出した（第３図）。柱穴 17～20 の４基により構成される。検出できた規模は１間以上×１間以上で、2.0m×0.7m以上である。西辺にあたる柱穴 17 と 20 の間が後世に撹乱されており、他の柱穴間隔から想定するとその間にも柱穴が存在した可能性がある。柱間は約 0.75mである。柱穴の掘形は直径 0.2～0.4mのほぼ円形で、柱穴の底部は T.P. ＋7.098～7.177mであった。柱穴 17 から瓦器碗（第５図－１）が出土し、鎌倉時代の遺構と考える。

井戸 31　調査地区中央北寄り東端で検出した（第３図）。遺構の西半部のみ検出し、東半部は調査地区外であった。規模は直径約 1.5mの円形とみられ、段掘り状になっており、深さは約 1.0mであった。上端の標高は T.P. ＋7.185m、段掘り部は T.P. ＋6.508m、底部は T.P. ＋6.191mであった。東壁断面図 12～14 層は井戸構築時の井戸枠裏込め土で、井戸掘形底部が段掘り状であることから直径 60cm ほどの曲物が設置されていたとみられるが、曲物痕跡は確認できなかったため廃絶時に取り出さ

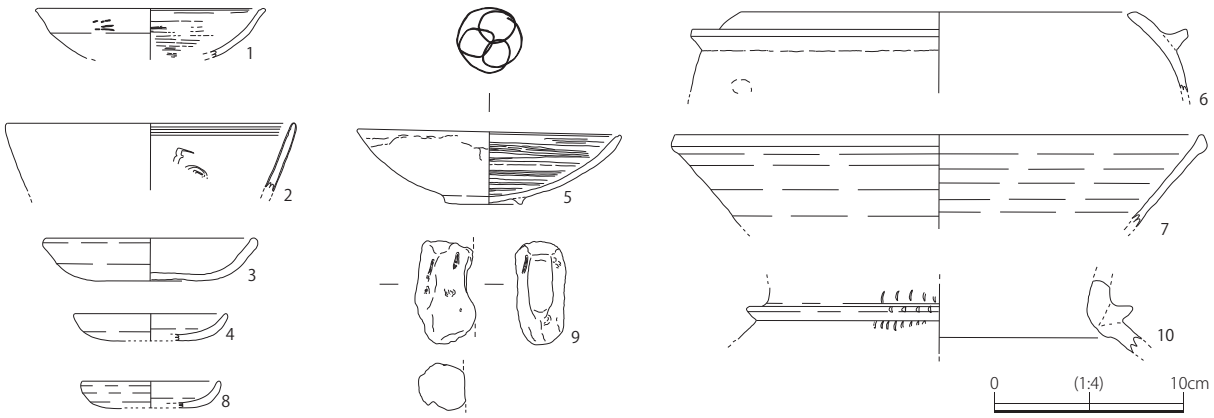


1　褐灰色砂質土　10YR4/1 砕石、明黄褐色 10YR 7/6 のブロック混じり
所々に耕土が混じる　盛土
2　にぶい黄褐色粘質土　10YR 7/3 粘性強い、締りは弱い　床土
3　灰褐色砂質土　7.5YR 6/2　粘性強め、2 層よりは弱い。締り中程度　遺物包含層
4　明褐灰色砂質土　7.5YR 7/1　橙色、赤色のブロックが混じる　締り中程度　遺構埋土
5　褐色砂質土　7.5YR 4/4　黒色、赤色のブロックが混じるが 4 層より少ない。締りが強い。
2 ～ 3 ㎜の石英が混じる　遺構埋土
6　にぶい褐色砂質土　7.5YR 5/3　時折明褐色が不規則に混じる。5 層より締り強い。
炭化物が混じる　包含層
7　褐灰色細砂　10YR 6/1　南に行くに従い粗砂となる。粘性はなく締りは中程度　包含層
8　灰黄褐色砂質土　10YR 5/2　粘性は弱く締りは中程度　包含層
9　褐灰色砂質土　10YR 6/1　15 層の土と同じ粘土のブロックが所々に混じる
10　褐灰色粘質土　10YR 5/1　締り中程度　井戸 31 埋土
11　灰色粘土　5Y 4/1　井戸 31 埋土
12　褐灰色砂質土　7.5YR 6/1　締り強め　井戸 31 裏込め土
13　褐灰色砂質土　7.5YR 5/1　締り中程度　井戸 31 裏込め土
14　褐灰色粘質土　7.5YR 4/1　締り弱め　井戸 31 裏込め土
15　暗褐色粘土　10YR 3/3　締り中程度　地山
16　黒褐色砂質土　7.5YR 3/1　締り中程度　自然堆積土
17　灰黄褐色粗砂　10YR 6/2　締り弱め　自然堆積土
18　灰色砂質土　5Y 6/1　締り中程度　包含層
19　暗灰色粘質土　7.5YR 3/3　粘性強め締り中程度　自然体積土
20　褐灰色粗砂　10YR 4/1　締り中の弱　一部細砂が混じる　自然体積土
21　暗褐色砂質土　7.5YR 3/3　粘性やや強い　締り中の弱　遺物包含層
22　灰オリーブ色砂質土　5Y 5/2　粘性やや強め　締り中程度
灰色砂質土が混じる　攪乱土
23　褐灰色砂質土　10YR 5/1　粘性強い　締り中程度　炭化物が混じる　遺構埋土
24　灰色粘土　5Y4/1　締り強い　強粘性　炭化物が混じる
粘性は全土層中最強
25　黒色粘質土　10YR 2/1　締り強い　粘性強め　地山
26　オリーブ黒色粘土　5Y 3/1　24 層よりは粒子粗め
27　褐灰色粘質土　10YR 5/1　締りが弱い　19 ～ 29 の中で最も弱い　粘性中の弱
自然堆積土
28　褐灰色粘質土　10Y 4/1　締り中程度　自然堆積土
29　灰色粗砂　5Y 5/1　締り中程度　一部細砂が混じる
30　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2　炭化物、焼土が多量に混じる　粘性中程度
締りは 3 層と同程度　井戸 37 埋土
31　褐灰色砂質土　10YR 4/1　粘性は 30 層よりは強い
締りは 3・6・8 層より弱い（中の弱）　遺物包含層
32　にぶい褐色細砂土　7.5YR 5/3　所々粗砂混じり　締り弱め
粘性ほとんどなし　包含層
33　褐色細砂土　7.5YR 4/4　粘性中程度　締り中程度　包含層
34　褐色粘質土　7.5YR 4/3　粘性強い締り中の上程度　包含層
35　灰褐色粘土　7.5YR 4/2　粘性は 34 層より強い　締りは 34 層より強い
所々炭化物混じる　包含層
36　黄灰色粘土　2.5Y 4/1　粘性、締りとも 35 層と同様
3 ㎝大の炭化物混入　包含層
37　褐色砂質土　7.5YR 4/3　粘性中の強　締り中程度
所々に褐灰色　7.5YR6/1　粗砂混入　包含層
38　灰黄褐色粗砂　10YR 6/2　所々に 59 層混入　締りは中の弱
粘性は弱め　溝埋土
39　黒褐色粘土　2.5Y 3/1　所々に細砂が混じる　溝埋土
40　灰色粘質土　5Y 4/1　締り中の上　粘性強い　溝埋土
41　灰白色細砂土　10YR 7/1　締り、粘性とも全土層中最弱　溝埋土
42　黒褐色砂質土　7.5YR 3/2　締り中程度　粘性中程度　遺構埋土
43　灰褐色砂質土　7.5YR 4/2　締りやや弱い　42 層より弱い
粘性中程度だが 42 層より若干強い　遺構埋土
44　8 層と 45 層の混ざった土　にぶい褐色　7.5YR 5/4
締り中程～やや強い　包含層
45　褐灰色粘質土　10YR 4/1　砂質土混じり　締り強め
15 層より強い　包含層

第３図　第１遺構面平面図・東壁断面図　(KY2010-2)



第４図　井戸 37 平・断面図　(KY2010-2)



第５図　出土遺物　(KY2010-2)

れたと考える。11 層が廃絶時に埋め戻した土層、10 層はその後の自然堆積層で、９層が最終的に埋め戻した土層であろう。瓦器碗などの小片が出土しており、鎌倉時代の遺構と考える。

井戸 37　調査地区北寄りで検出した（第３・４図）。規模は直径 2.7mの円形で、東側が窄まり溝状にのびるような状況である。調査中の遺構完掘直後に現道に接する壁面崩落の危険性が判明したため、現道通行の安全確保のため簡易記録のみで埋め戻さざるをえなかった。断面図は略測記録から復元的に作成した。井戸枠等を検出しなかったため、廃絶時に抜かれた可能性と、東側の溝状の箇所の存在から水溜用の施設の可能性を考える。堆積状況から遺構廃絶後短期間で埋め戻されたとみられる。深さは 0.9mで、上端の標高は T.P.＋7.188mであった。青磁碗、土師器皿、瓦器碗、瓦質羽釜、須恵質練鉢（第５図－２～７）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

土坑７　調査地区南寄りで検出した。直径 0.3m、深さ 0.15mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋7.209m、底部は T.P.＋7.057mであった（第３図）。土師器皿（第５図－８）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

土坑 45　調査地区北寄りで検出した。南北 0.5m、深さ約 0.1mで遺構の 1/4 を検出した。上端の標高は T.P.＋7.097m、底部は T.P.＋7.019mであった（第３図）。焼壁土（第５図－９）などが出土した。井戸 37 に切られており、鎌倉時代の遺構と考える。

４．出土遺物

【遺構出土遺物】

掘立柱建物Ａ　柱穴 17

瓦器

１碗　口径：12.0 ㎝（復元）。器高：2.6 ㎝（残存）。厚さ：0.3 ㎝。色調：内・外面はオリーブ黒

色（7.5Y 3/1）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：やや密。直径１㎜の灰色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：小片。大和型Ⅲ－Ｃ・Ｄ段階。13 世紀後半と思われる。（第５図－１、写真図版 30－１－１）

井戸 37

貿易陶磁器

２青磁碗　口径：15.2 ㎝（復元）。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.5 ㎝。色調：内・外面はオリーブ灰色（2.5GY 6/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁内面に沈線を２条施す。内面は片切り彫りの蓮花文とみられる。内外面全面に施釉する。12 世紀後半の龍泉窯系のものと思われる。（第５図－２、写真図版 30－１－２）

土師器

３皿　口径：11.0 ㎝。器高：2.3 ㎝。厚さ：0.5 ㎝。色調：内面は灰黄褐色（10YR 5/2）、外面はにぶい黄褐色（10YR 7/3）、断面は褐灰色（10YR 6/1）。胎土：密。直径 0.5㎜未満の雲母細粒を多く含む。焼成：良い。残存度：3/5。13 世紀の Ja タイプと思われる。（第５図－３、写真図版 30－１－３）

４皿　口径：8.0 ㎝（復元）。器高：1.45 ㎝。厚さ：0.4 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜ 未満の赤色鉱、物雲母を含む。焼成：良好。残存度：1/3。煤が薄く付着し灯明皿である。13 世紀の Jb タイプと思われる。（第５図－４、写真図版 30－１－４）

瓦器

５碗　口径：14.0 ㎝。器高：4.0 ㎝。厚さ：0.4 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：やや密。直径１㎜以下の白色・黒色鉱物をやや多く含む。焼成：良い。残存度：3/5。見込部には連結輪状の暗文を施している。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13 世紀中頃のものと思われる。（第５図－５、写真図版 30－１－５）

瓦質土器

６羽釜　口径：21.0 ㎝（復元）。器高：4.3 ㎝（残存）。厚さ：0.6 ㎝。色調：内面は灰色（5Y 4/1）、外面は黒色（5Y 2/1）、断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色・黒色鉱物、雲母を多く含む。焼成：良い。残存度：小片。体部外面の鍔下に指頭痕がみられる。体部内面はヨコナデ調整を施している。器形から三足羽釜の可能性がある。13 世紀のものと思われる。（第５図－６、写真図版 30－１－６）

須恵質土器

７練鉢　口径：28.0 ㎝（復元）。器高：4.8 ㎝（残存）。厚さ：0.5 ㎝。色調：内・外面は赤灰色（2.5YR 6/1）、断面は灰白色（10YR 7/1）。胎土：密。直径１㎜以下の白色・黒色鉱物を少量含む。焼成：良い。残存度：小片。東播系の製品。12 世紀末～13 世紀初頭のものと思われる。（第５図－７、写真図版 30－１－７）

土坑 7

土師器

８皿　口径：7.2 ㎝（復元）。器高：1.4 ㎝。厚さ：0.3 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径１㎜未満の雲母、赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：1/5。13 世紀後半の Jb タイプと思われる。（第５図－８、写真図版 30－１－８）

土坑 45

土製品

９焼壁土　長さ：5.5 ㎝・幅：3.2 ㎝。厚さ：2.5 ㎝。色調：にぶい橙色（5YR 6/4）。木舞痕およびスサ痕がある。直径３㎜以下の赤色・白色鉱物を多く含む。（第５図－９、写真図版 30－１－９）

【遺物包含層内出土遺物】

弥生土器

10 加飾壺　頸部突帯頂の径：20.4 ㎝（復元）。器高：3.9 ㎝（残存）。厚さ：1.0 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄褐色（10YR 7/4）、外面は黄褐色（10YR 5/6）。胎土：やや密。直径５㎜以下の赤色・白色鉱物を著しく多量に含む。焼成：良い。残存度：小片。頸部に刻目突帯を施し、その上下に爪形の刻目を施す。弥生時代後期後半～庄内式期のものと思われる。（第５図－10、写真図版 30－１－10）

（實盛）

第３節　周辺の 2011－１次調査成果

１．調査の経過

2011 年度１次調査（ＫＹ2011-1）は、四條畷市雁屋北町 427-1 においてグループホーム建設工事が計画され、平成 23（2011）年３月 23 日付で林昇から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第 93 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年４月 20 日付け教委文第 1-6 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成 23 年４月 28 日に、計画用地内に２箇所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、弥生時代前期の遺物包含層および遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊されるエレベーターピット予定地の発掘調査を実施することとなった。同年５月９日付で届出者から発掘調査承諾書が提出され、同年５月 12 日付畷教社第 151 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約 21 ㎡で、調査期間は平成 23 年５月 10 日から 18 日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成 23 年５月 24 日付畷教社第 208 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年５月 27 日に第 925 号で受理された。大阪府教育委員会には同年５月 24 日付畷教社第 209 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年８月 22 日付教委文第 3-85 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

２．基本層序

発掘調査地区の調査前現況は宅地であった。宅地造成のために 0.3mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.4mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。床土の下層に 0.2mほど古墳時代から中世の遺物包含層が堆積し、その下面が第１遺構面であった。その下層にも厚さ 0.2～0.3mほど包含層が堆積し、その下面で水田畦畔とみられる遺構上面を検出した。これが第２遺構面である。その水田耕土を除去すると下層は暗オリーブ灰色の粗砂が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第６図）。

３．検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに弥生時代から古墳時代に属するもので、合計９基あり、土坑、溝、畔状遺構、耕作地状遺構があった（第６図）。遺構面は２面検出し、第１遺構面は古墳時代の集落、第２遺構面は弥生時代前期の耕作地であった。遺構面の標高は第１遺構面北端で T.P.＋8.782m、南端で T.P.＋8.924m、第２遺構面北端で T.P.＋8.782m、南端で T.P.＋8.924mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

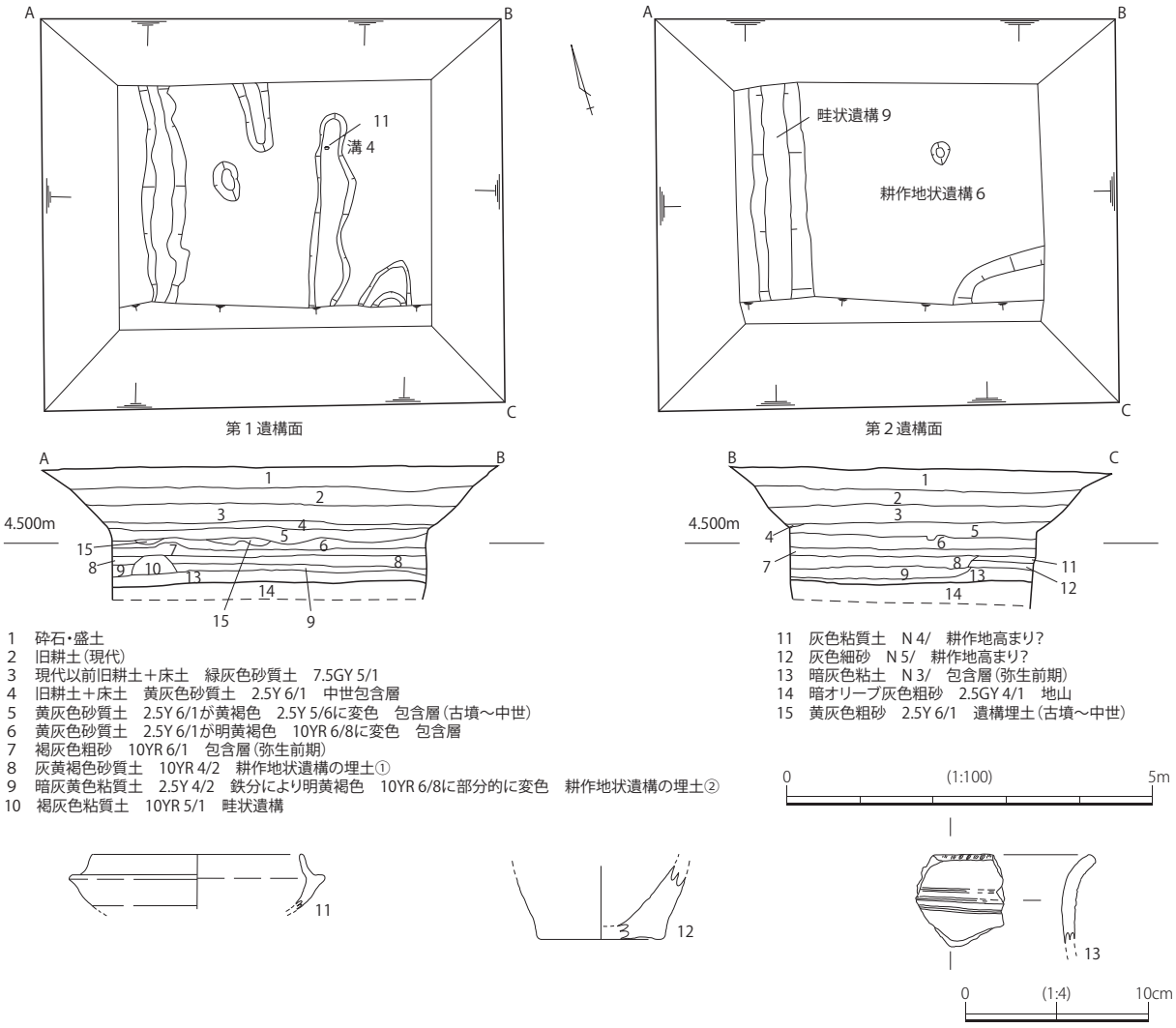
【第１遺構面】

溝４　調査地区中央東寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、南端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ 2.7m、最大幅 0.6m、深さは約 0.5mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋4.540m、底部が T.P.＋4.535mで、南端部分の上端は T.P.＋4.545m、底部は T.P.＋4.505mであった（第６図）。須恵器坏身（第６図－11）などが出土し、古墳時代の遺構であろう。

【第２遺構面】

耕作地状遺構６　後述する畔状遺構９によって区切られた耕作地である。南東端に高まりがあり、耕作地の端の可能性がある。遺構内に土坑状の遺構を１基検出したが、耕作地埋没後の面から掘り込まれており、耕作地には伴わない。検出できた規模は東西 3.4m以上、南北３m以上であり、面積は 9.7 ㎡以上である。標高は北東端が T.P.＋4.131m、北西端が T.P.＋4.153m、南東端が T.P.＋4.107m、南西端が T.P.＋4.108mであった（第６図）。埋土から弥生土器（第６図－12）が出土した。

畔状遺構９　耕作地状遺構を南北に縦断する直線状の畦畔で、規模から大畦畔の可能性がある。検出規模は長さ 2.9m以上、上端の幅 0.3m、下端の幅 0.7m。標高は北端上端が T.P.＋4.305m、下端が T.P.＋4.187m、南端上端は T.P.＋4.283m、下端は T.P.＋4.108mであった（第６図）。



第６図　調査地区平面図・断面図・出土遺物　（KY2011-1）

４．出土遺物

【遺構出土遺物】

溝４

須恵器

11 坏身　口径：11.4 ㎝（復元）。器高：3.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：やや密。直径１㎜ 以下の長石、雲母を含む。焼成：良好。残存度：1/8。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）６世紀後半のものと思われる。（第６図－11、写真図版 30－２－11）

耕作地状遺構６

弥生土器

12 甕　底径:6.6 ㎝(復元)。器高：4.0 ㎝(残存)。厚さ：1.0 ㎝。色調：外・断面は明赤褐色(2.5YR 5/8)、内面は褐灰色（5YR 5/1）。胎土：やや粗。直径３㎜ 以下の長石・石英・雲母、赤色鉱物を多量に含む。焼成：良い。残存度：小片。弥生前期（Ⅰ様式）か。（第６図－12、写真図版 30－２－12）

【遺物包含層内出土遺物】

弥生土器

13 甕　器高：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.7 ㎝。色調：内・外面はにぶい橙色（7.5YR 7/3)、断面は灰白色（7.5YR 8/2）。胎土：やや密。直径２㎜ 以下の長石・石英・雲母・赤色・黒色鉱物を多量に含む。焼成：良い。残存度：小片。口縁端部に刻目を、肩部に沈線を３条施す。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第６図－13、写真図版 30－２－13）　（實盛）

第４節　周辺の 2011－３次調査成果

１．調査の経過

2011 年度３次調査（ＫＹ2011-3）は、四條畷市楠公一丁目 654-2、655-2 において事務所建設工事が計画され、平成 23（2011）年５月 12 日付で川本産業株式会社代表取締役川本安夫から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第 93 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年６月 22 日付け教委文第 1-679 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成 23 年６月 17 日に、計画用地内に３箇所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、中世の遺物包含層および遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される建物予定地の発掘調査を実施することとなった。同年６月 23 日付で届出者から発掘調査承諾書が提出され、同年６月 28 日付畷教社第 411 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約 167 ㎡で、調査期間は平成 23 年６月 29 日から７月 11 日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成 23 年７月 14 日付畷教社第 483 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年７月 21 日に第 1714 号で受理された。大阪府教育委員会には同年７月 14 日付畷教社第 484 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年９月 26 日付教委文第 3-142 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

２．基本層序

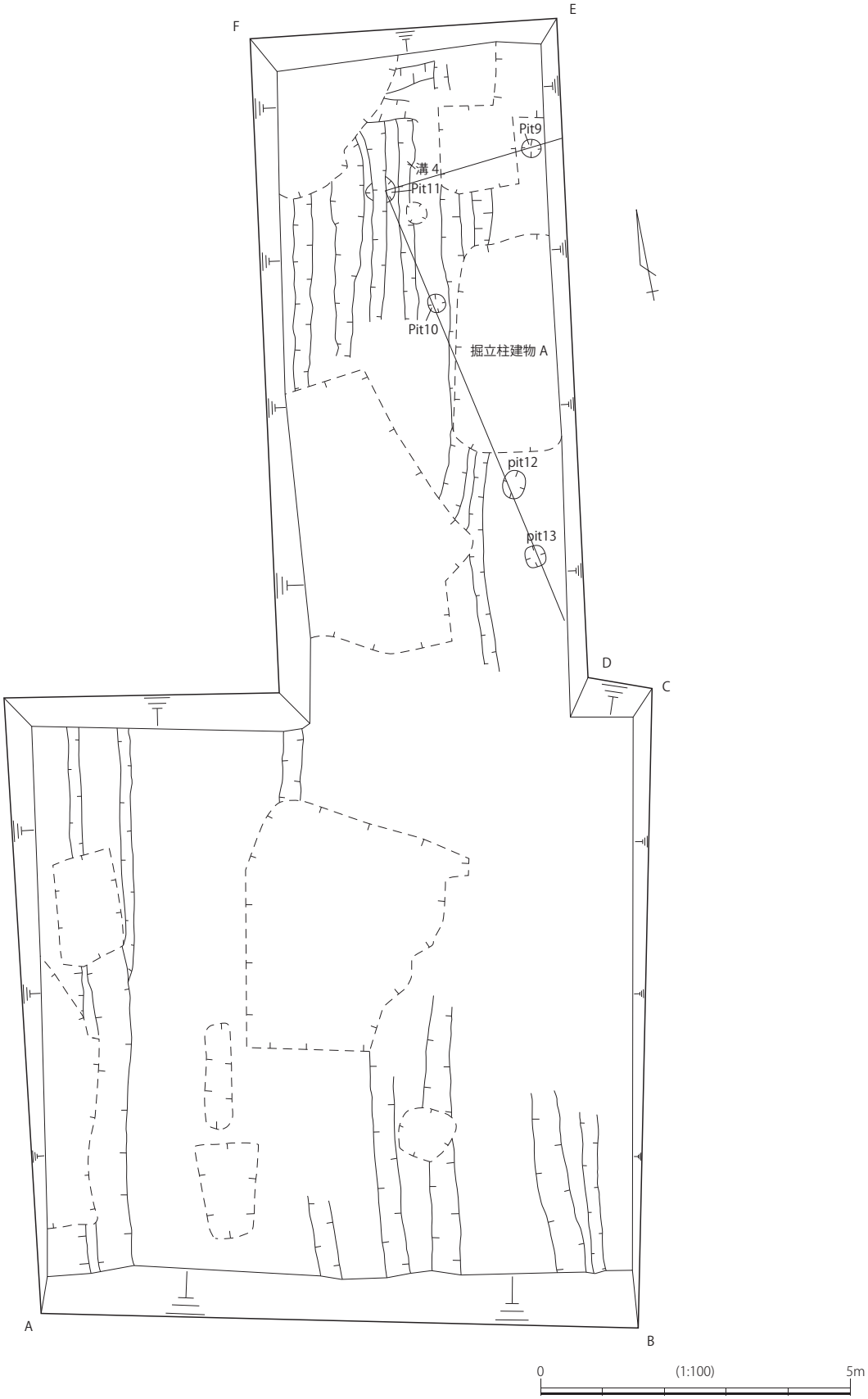
発掘調査地区の調査前現況はガソリンスタンド跡地であった。スタンド建設のために 0.7mほど盛土されていた。その下層には耕土・床土は残存せず、0.2～0.3mほど平安時代から中世の遺物包含層が堆積し、その下面が遺構面であった。その下層は明黄褐色の粘土が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第８図）。

３．検出遺構

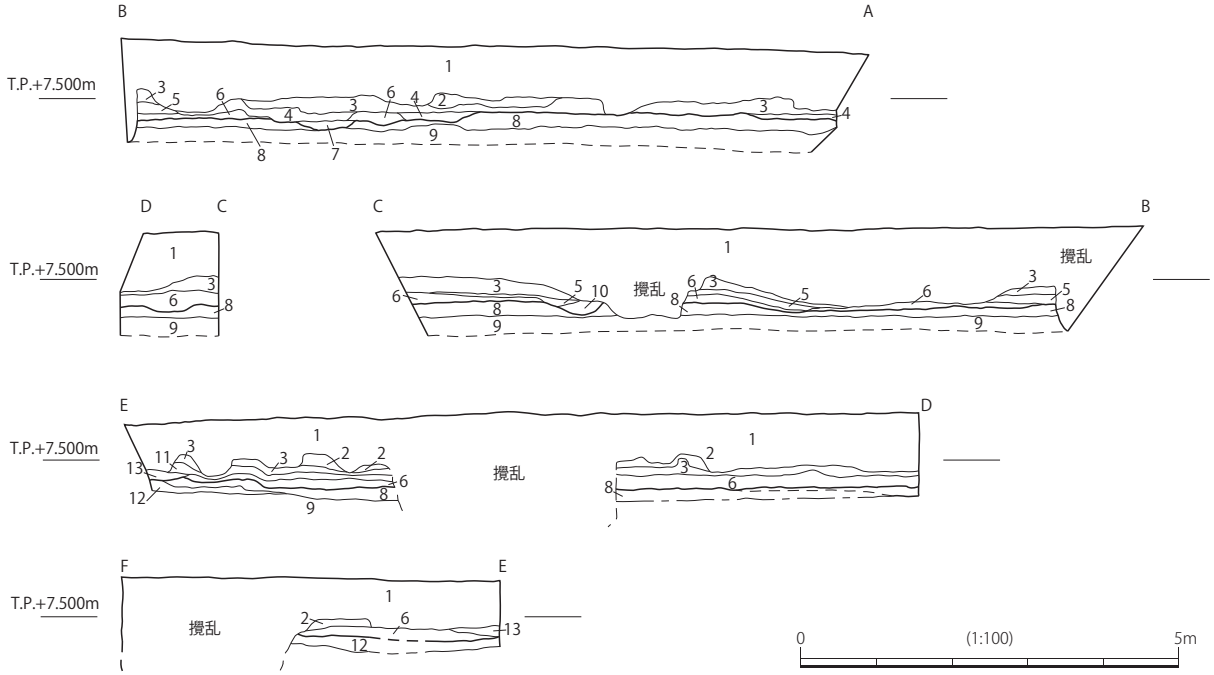
この調査で確認した遺構はおもに中世に属するもので、掘立柱建物、溝、Pit があった（第７図）。遺構面の標高は北端で T.P.＋7.379m、南端で T.P.＋7.310mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

掘立柱建物Ａ　調査地区北東側で検出した（第７図）。Pit９～13 の５基により構成される。検出できた規模は１間以上×３間以上で、2.5m以上×6.5m以上である。西辺の Pit10 と 12 の間が後世に撹乱されており、他の柱穴間隔から想定するとその間にも柱穴が存在した可能性がある。柱間は北辺が 2.5m、西辺が 1.5～2.0mである。柱穴の掘形は直径 0.3～0.5mのほぼ円形で、柱穴の底部は T.P.＋7.134～7.250mであった。遺物はほとんど出土しなかったが、Pit10 のみ瓦器碗小片が出土しており、中世の遺構とみられる。

溝４　調査地区北側で検出した。北から南へと向いた溝で、北端は東西方向の溝に切られ、南端は削平のため途切れる。検出できた規模は長さ 3.2m、最大幅 0.25m、検出できた深さは約 0.1mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋7.299m、底部が T.P.＋7.266mで、南端部分の上端は T.P.＋7.220m、底部は T.P.＋7.217mであった（第７図）。土師器皿（第９図－14・15）などが出土した。中世の鋤溝遺構と考えられる。

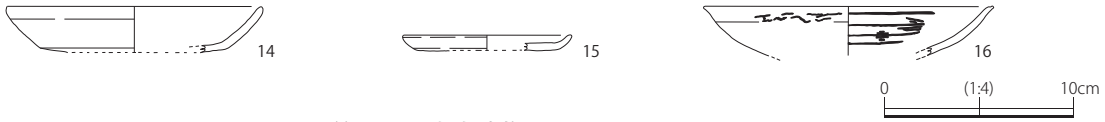


第７図　調査地区平面図　(KY2011-3)



1　盛土
2　灰黄色砂質土　2.5Y 6/2　平安末～中世包含層
3　灰黄色粘質土　2.5Y 7/2　平安末～中世包含層
4　黄灰色粗砂混じり砂質土　2.5Y 4/1
5　灰白色粗砂 2.5Y 7/1　しまり有り
6　浅黄色粘質土　5Y 7/3　粗砂混じり
7　３層と５層の混合層
8　明黄褐色粘土　10YR 6/6
9　黒褐色粘土　10YR 3/2
10　灰白色シルト　5Y 8/1
11　灰色砂質土　5Y 6/1
12　暗褐色粘土　10YR 3/3
13　灰白色砂質土　5Y 7/2

第８図　調査地区断面図　(KY2011-3)



第９図　出土遺物　(KY2011-3)

４．出土遺物

【遺構出土遺物】

溝４

土師器

14 皿　口径：13.4 ㎝（復元）。器高：2.4 ㎝。厚さ：0.4 ㎝。色調：内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、外・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：密。直径１㎜以下の雲母、赤色鉱物を少量含む。焼成：良い。残存度：1/9。13 世紀末～14 世紀初頭の Ja タイプと思われる。（第９図－14、写真図版 31－１－14）

15 皿　口径:9.0 ㎝(復元)。器高：0.8 ㎝。厚さ：0.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色(2.5Y 8/2)。内・外面の一部は橙色（2.5YR 6/6）。胎土：密。直径１㎜以下の雲母を多く含む。焼成：良い。残存度：1/4。13 世紀後半の Jb タイプと思われる。（第９図－15、写真図版 31－１－15）

【遺物包含層内出土遺物】

瓦器

16 碗　口径：15.4 ㎝（復元）。器高：2.6 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ㎝。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、外面の一部は明褐灰色（7.5YR 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜以下の雲母、赤色、白色鉱物を含む。焼成：やや不良。残存度：1/9。大和型Ⅲ－Ｄ段階。13 世紀後半のものと思われる。（第９図－16、写真図版 31－１－16）

（實盛）

第５節　周辺の 2013－１次調査成果

１．調査の経過

2013 年度１次調査（ＫＹ2013-1）は、四條畷市雁屋北町 574-1 において店舗建設工事が計画され、平成 25（2013）年５月 17 日付で大和情報サービス株式会社代表取締役藤田勝幸から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第 93 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年６月 10 日付け教委文第 1-898 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成 25 年６月 25 日に、計画用地内に３箇所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、中世の遺物包含層および遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される建物基礎予定地の発掘調査を実施することとなった。同年７月５日付で土地所有者木村周から発掘調査承諾書が提出され、同年７月 19 日付畷教社第 464 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約 359 ㎡で、調査期間は平成 25 年７月 10 日から 30 日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成 25 年８月２日付畷教社第 585 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年８月７日に第 2069 号で受理された。大阪府教育委員会には同年８月２日付畷教社第 586 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年９月 24 日付教委文第 3-142 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

２．基本層序

発掘調査地区の調査前現況は製材所跡地であった。製材所建設のために 0.4mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.1～0.3mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。製材所建設以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.1～0.2mほど中世の遺物包含層が堆積し、その下面が遺構面であった。その下層は黄褐色の粘土が、さらに下層には黒褐色の砂質土が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 11 図）。

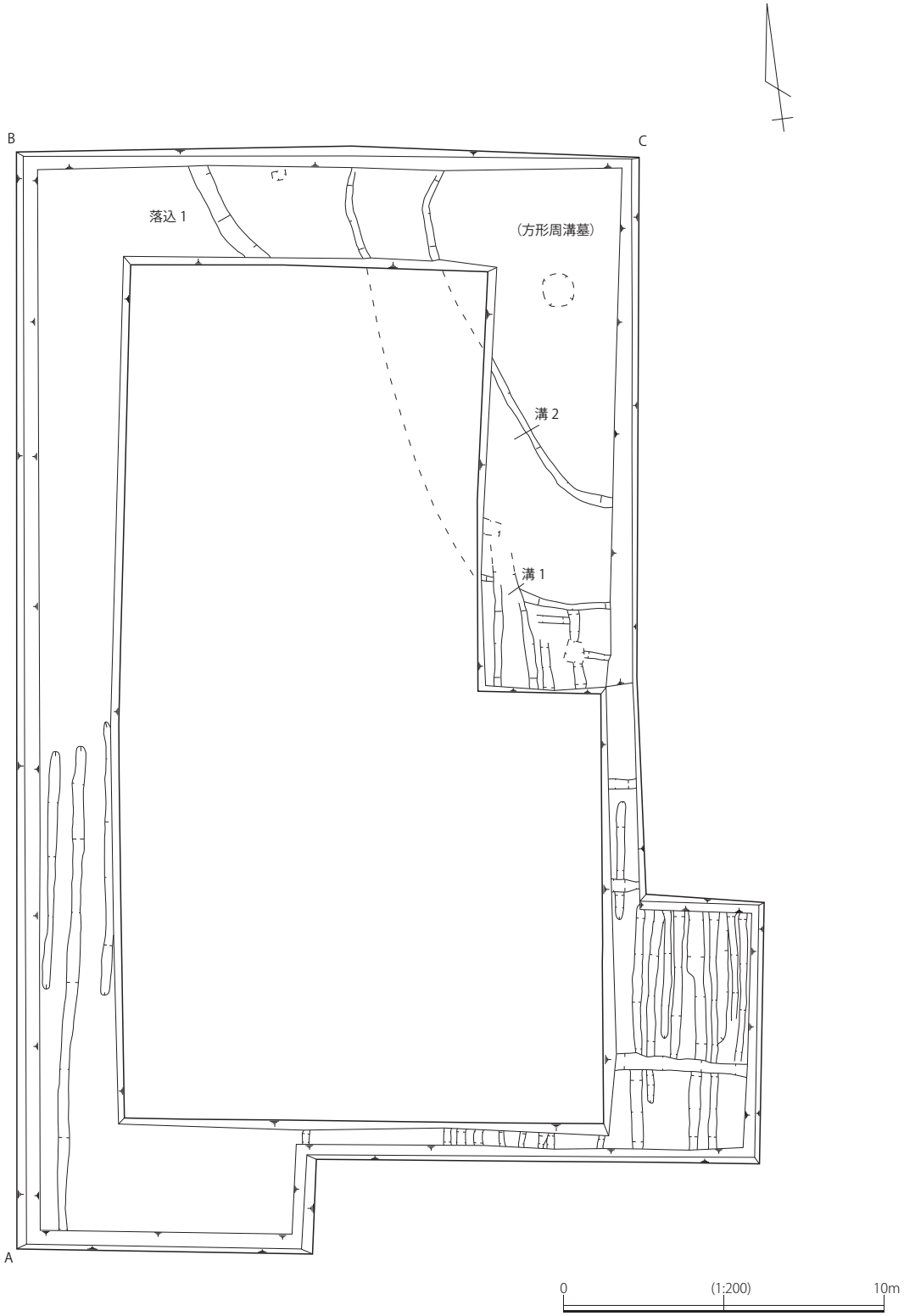
３．検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに弥生時代と中世に属するもので、溝、落込があった（第 10 図）。両時代の遺構を同一遺構面で検出した。これは、中世に土地の削平が行われたためと考えられる。遺構面の標高は北端で T.P.＋7.017m、南端で T.P.＋6.827mであった。遺構の番号は、遺構の種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

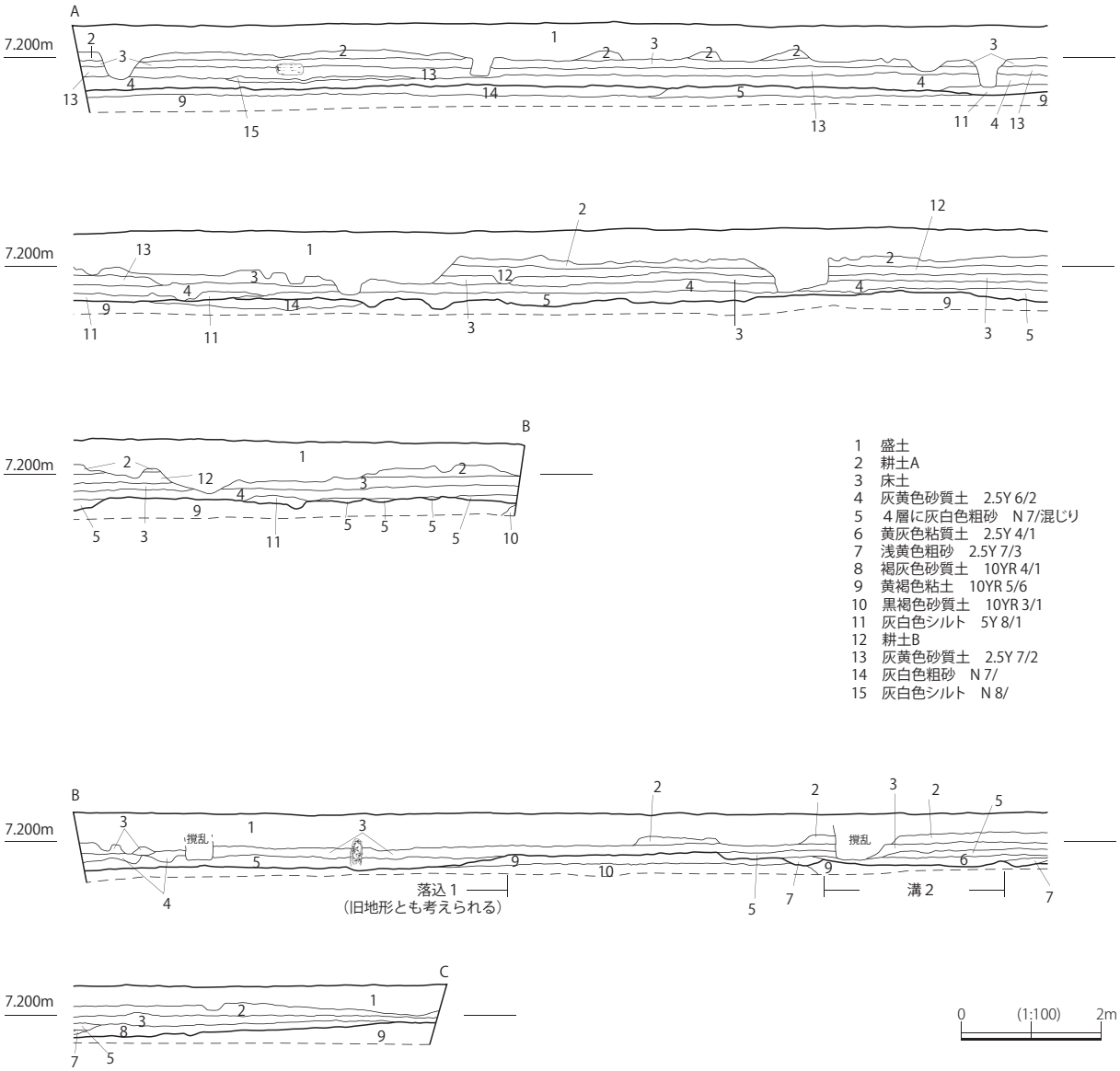
溝１　調査地区東側中央で検出した。北から南へと向いた溝で、南端は調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ 4.1m、最大幅 1.4m、深さは約 0.2mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋6.956m、底部が T.P.＋6.818mで、南端部分の東側上端は T.P.＋6.998m、西側上端は T.P.＋6.954m、底部は T.P.＋6.811mであった（第 10 図）。瓦器碗（第 12 図－17）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考えられる。

溝２　調査地区北東側で検出した。南から北へと向いた溝で、北端と南端で逆コ字状に屈曲し、両端とも調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ 14.5m、最大幅 3.9m、深さは削平が著しく約 0.1mである。標高は北端部分の東側上端は T.P.＋6.861m、西側上端は T.P.＋6.854m、底部が T.P.＋6.779mで、南端部分の東側上端は T.P.＋7.018m、西側上端は T.P.＋7.031m、底部は T.P.＋6.901mであった（第 10 図）。出土土器は少量であるが弥生土器のみであり、手焙形土器（第 12 図－18）を図化した。弥生時代後期もしくは庄内式期の遺構と考えられる。後世の削平が著しかったが、この帰属時期と形状からは方形周溝墓の可能性が想定される。その場合、断面図８層は墳丘盛土の名残である可能性が考えられる。方形周溝墓と想定した場合の墳丘規模は南北約 11mである。

落込１　調査地区北西側で検出した。調査地区中央から西へと緩やかに傾斜する落込である。検出

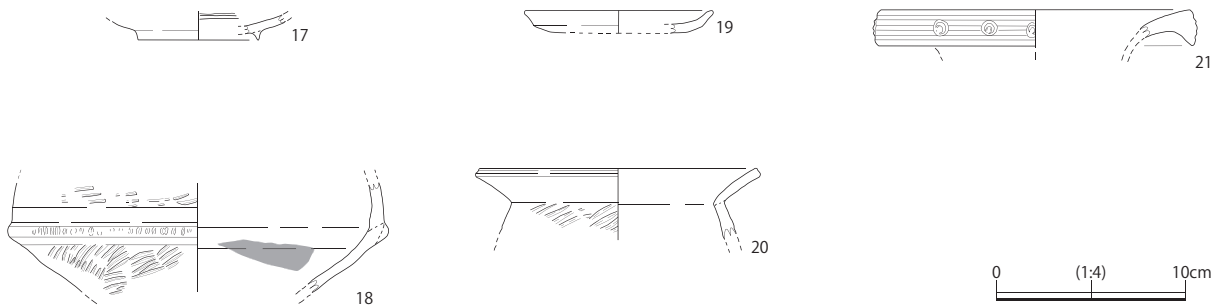


第10図　調査地区平面図　（KY2013-1）



1　盛土
2　耕土A
3　床土
4　灰黄色砂質土　2.5Y 6/2
5　４層に灰白色粗砂　N 7/混じり
6　黄灰色粘質土　2.5Y 4/1
7　浅黄色粗砂　2.5Y 7/3
8　褐灰色砂質土　10YR 4/1
9　黄褐色粘土　10YR 5/6
10　黒褐色砂質土　10YR 3/1
11　灰白色シルト　5Y 8/1
12　耕土B
13　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2
14　灰白色粗砂　N 7/
15　灰白色シルト　N 8/

第11図　調査地区断面図　（KY2013-1）



第12図　出土遺物　(KY2013-1)

できた規模は東西 2.7m、深さは約 0.1mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋6.944m、底部が T.P. ＋6.823mで、南端部分の上端は T.P. ＋6.937m、底部は T.P. ＋6.816mであった（第 10 図）。中世の土師器皿（第 12 図－19）、弥生土器甕（第 12 図－20）などが出土した。出土遺物から完全に埋没したのは鎌倉時代であるが、弥生時代後期の旧地形を反映している可能性があり、その場合東側の方形周溝墓が存在する微高地と低地部の境界であろう。

４．出土遺物

【遺構出土遺物】

溝１

瓦器

17 碗　底径：6.4 ㎝（復元）。器高：1.3 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ㎝。色調：内・外面はオリーブ黒色（7.5Y 3/1）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：密。直径 0.5㎜ 以下の雲母、白色鉱物を少量含む。焼成：良い。残存度：小片。13 世紀後半のものと思われる。全体的に表面が磨滅している。（第 12 図－17、写真図版 31－２－17）

溝２

弥生土器

18 手焙形土器　胴部最大径：20.2 ㎝（復元）。器高：5.8 ㎝（残存）。厚さ：0.6 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）、外面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：やや粗。直径３㎜ 以下の石英・長石・雲母を含む。焼成：良い。底部外面の一部に黒色（10YR 1.7/1）の黒斑あり。残存度：小片。胴部に刻目突帯を施す。体部外面はタタキ調整、内面はヨコナデ調整、底部外面はタタキ調整、内面はナデ調整を施している。内面の一部（トーン部）に煤コゲがあり、内部で火を焚いたとみられる。弥生時代後期（Ｖ様式）～庄内式期のものと思われる。（第 12 図－18、写真図版 31－２－18）

落込１

土師器

19 皿　口径：10.0 ㎝（復元）。器高：1.2 ㎝。厚さ：0.5 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや密。直径１㎜ 以下の石英、長石、雲母、赤色鉱物をやや多く含む。焼成：良い。残存度：小片。13 世紀後半の Jb タイプと思われる。（第 12 図－19、写真図版 31－２－19）

弥生土器

20 甕　口径：14.7 ㎝（復元）。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.6 ㎝。色調：内面は橙色（5YR 6/6）、外面は明赤褐色（5YR 5/6）、断面は灰黄褐色（10YR 5/2）。胎土：やや粗。直径２㎜ 以下の白色、赤色、黒色鉱物を多く含む。焼成：良い。残存度：小片。口縁端部が不完全な沈線状に窪む。体部外面はタタキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代後期（Ｖ様式）のものと思われる。（第 12 図－20、写真図版 31－２－20）

【遺物包含層内出土遺物】

弥生土器

21 壺　口径：16.4 ㎝（復元）。器高：1.9 ㎝（残存）。厚さ：0.6 ㎝。色調：内面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）、外・断面は明褐色（7.5YR 5/6）。胎土：やや粗。直径３㎜ 以下の角閃石、白色・赤色鉱物を多く含む。いわゆる生駒西麓産の胎土である。焼成：良い。残存度：小片。口縁端部には３条の凹線文を施し、円形浮文をほぼ等間隔に加える。後円部内面はナデ調整、外面はヨコナデ調整を施す。弥生時代後期（Ｖ様式）のものと思われる。（第 12 図－21、写真図版 31－２－21）

（實盛）

第６節　調査の経過

四條畷市により、雁屋北町、雁屋南町地内において、都市計画道路雁屋畑線の建設が計画された。周辺地域での発掘調査の状況や立地条件から、遺跡が存在することが十分に考えられた。各地区の調査前には、試掘調査および確認調査を平成 12（2000）年 11 月６日にトレンチ８箇所を設定し実施した結果、弥生時代～古墳時代を中心とした遺物包含層、遺構面を確認した。また、平成 14（2002）年 11 月 12 日にも２箇所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、中世を中心とした遺物包含層、遺構面を確認した。加えて、平成 23（2011）年９月 26 日には本体工事の埋設管確認調査に立ち会い、中世、古墳時代の包含層、遺構面を確認した。このため発掘調査を開始するにあたっては、関係各課と協議を行い、工事に伴って埋蔵文化財が破壊されることが考えられることから、その記録保存のために事前に発掘調査を実施することとなった。各調査は試掘調査、確認調査および周辺での調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

平成 13 年度１次調査地区（ＫＹ2001-1）については、雁屋北町８番地内であり、平成 13（2001）年４月９日付畷建事第 13 号で文化財保護法第 57 条の３第１項（当時）の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年５月１日付け教委文第 1-368 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年６月７日付第３号で、文化財保護法第 58 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 458 ㎡で、調査期間は平成 13（2001）年６月 18 日から７月 19 日までであった。出土遺物については、平成 13 年７月 26 日付畷社生第 78 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年７月 27 日に第 1089 号で受理された。大阪府教育委員会には同年７月 26 日付畷社生第 79 号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計 10 箱であった。

平成 13 年度２次調査地区（ＫＹ2001-2）については、雁屋南町４番地内であり、平成 13 年４月 23 日付畷建事第 42 号で文化財保護法第 57 条の３第１項（当時）の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年５月 18 日付け教委文第 1-808 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年７月６日付第４号で、文化財保護法第 58 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 1219 ㎡で、調査期間は平成 13（2001）年７月 23 日から９月 21 日までであった。出土遺物については、平成 13 年９月 26 日付畷社生第 102 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年９月 27 日に第 1601 号で受理された。大阪府教育委員会には同年９月 26 日付畷社生第 103 号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計 30 箱であった。

平成 14 年度調査地区（ＫＹ2002-1）については、雁屋南町３番地内であり、平成 14（2002）年６月５日付畷建事第 138 号で文化財保護法第 57 条の３第１項（当時）の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年６月 28 日付け教委文第 1-1559 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年７月 17 日付第２号で、文化財保護法第 58 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 400 ㎡で、調査期間は平成 14（2002）年８月 21 日から 10 月 28 日までであった。出土遺物については、平成 14 年 11 月 11 日付畷社生第 184 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年 11 月 13 日に第 2013 号で受理された。大阪府教育委員会には同年 11 月 11 日付畷社生第 185 号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

平成 15 年度１次および２次調査地区（ＫＹ2003-1・2）については、雁屋南町１番および 14 番地内であり、平成 15（2003）年４月１日付畷建事第１号で文化財保護法第 57 条の３第１項（当時）の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年５月１日付け教委文第 1-174 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。１次調査地区について、同年５月 15 日付畷社生第 49 号で、文化財保護法第 58 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 300 ㎡で、調査期間は平成

15（2003）年６月３日から７月９日までであった。出土遺物については、平成 15 年７月 15 日付畷社生第 76 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年７月 18 日に第 1102 号で受理された。大阪府教育委員会には同年７月 15 日付畷社生第 76 号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。２次調査地区については、平成 16 年２月４日付畷社生第 226 号で、文化財保護法第 58 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 450 ㎡で、調査期間は平成 16（2004）年３月３日から４月７日までであった。出土遺物については、平成 16 年３月 31 日付畷社生第 255 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年４月９日に第 103 号で受理された。大阪府教育委員会には同年３月 31 日付畷社生第 254 号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計４箱であった。

平成 16 年度調査地区（ＫＹ2004-1）については、雁屋南町７、８、９番地内であり、平成 16（2004）年４月 20 日付畷建事第 14 号で文化財保護法第 57 条の３第１項（当時）の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年５月 10 日付け教委文第 1-606 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年 10 月 26 日付畷教社第 145 号で、文化財保護法第 58 条の２第１項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 308 ㎡で、調査期間は平成 16（2004）年 11 月１日から 12 月 15 日までであった。出土遺物については、平成 16 年 12 月 13 日付畷教社第 174 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年 12 月 15 日に第 2507 号で受理された。大阪府教育委員会には同年 12 月 13 日付畷教社第 173 号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土土器の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

平成 23 年度４次調査地区（ＫＹ2011-4）については、雁屋南町 426-1 であり、平成 23（2011）年５月 23 日付畷建建第 199 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年６月 21 日付け教委文第 1-849 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年７月 25 日付畷教社第 518 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 440 ㎡で、調査期間は平成 23（2011）年７月 28 日から 10 月 21 日までであった。出土遺物については、平成 23 年 10 月 26 日付畷教社第 996 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年 10 月 31 日に第 3030 号で受理された。大阪府教育委員会には同年 10 月 26 日付畷教社第 995 号で埋蔵文化財保管証を提出し、平成 24 年１月 11 日付教委文第 3-223 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計５箱であった。

平成 23 年度５次調査地区（ＫＹ2011-5）については、雁屋南町 388-1 であり、平成 23 年 10 月３日付畷建建第 754 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年 10 月 24 日付け教委文第 1-3189 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年 10 月 26 日付畷教社第 994 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 125 ㎡で、調査期間は平成 23（2011）年 11 月 14 日から 12 月 20 日までであった。出土遺物については、平成 23 年 12 月 28 日付畷教社第 1287 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、平成 24 年１月４日に第 3946 号で受理された。大阪府教育委員会には平成 23 年 12 月 28 日付畷教社第 1288 号で埋蔵文化財保管証を提出し、平成 24 年２月 22 日付教委文第 3-289 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計２箱であった。

平成 24 年度調査地区（ＫＹ2012-1）については、雁屋南町 572-5、573-2 であり、平成 24（2012）年４月 19 日付畷ま建第 76 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは同年５月 25 日付け教委文第 1-327 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年７月２日付畷教社第 358 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 256 ㎡で、調査期間は平成 24（2012）年７月 18 日から９月６日までであった。出土遺物については、平成 24 年９月 10 日付畷教社第 665 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年９月

14 日に第 2526 号で受理された。大阪府教育委員会には同年９月 10 日付畷教社第 666 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年 11 月 26 日付教委文第 3-156 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計１箱であった。

平成 27 年度調査地区（ＫＹ2015-1）については、雁屋南町 385-1、393-23、-24 であり、平成 27（2015）年 12 月 14 日付畷都建第 2115 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定により四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ発掘の通知があった。大阪府教育委員会からは平成 28 年１月６日付け教委文第 1-4935 号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年１月７日付畷教地第 1650 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は 175 ㎡で、調査期間は平成 28（2016）年１月 18 日から３月 11 日までであった。出土遺物については、平成 28 年３月 16 日付畷教地第 2023 号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年３月 23 日に第 6464 号で受理された。大阪府教育委員会には同年３月 16 日付畷教地第 2024 号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年６月 28 日付教委文第 3-74 号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計４箱であった。

これらの調査で弥生時代から中世にわたる遺跡を確認したが、道路建設事業地区東端および西端の一部は周知遺跡である雁屋遺跡の範囲外であったため、平成 15（2005）年３月 31 日付畷文財第 149 号で大阪府教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書を提出し、同年５月 13 日付教委文第 9-1 号で雁屋遺跡の範囲拡大についての通知があった。また、古墳時代の遺構・遺物を確認したため、平成 24（2012）年１月 11 日付畷教社第 1317 号で大阪府教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書を提出し、同年１月 16 日付教委文第 9-16 号で雁屋遺跡の時代の変更（追加）についての通知があった。

発掘調査報告書の作成については、協議により道路建設事業がすべて完了したのちに２ヶ年かけて行うこととしていた。その事業が平成 27 年度に完了したことから、平成 29（2017）年度と 30（2018）年度の２ヶ年かけて発掘調査報告書作成に向けて出土遺物の整理（遺物の洗浄・注記・分類・接合・復元・彩色・収納等）・写真整理（写真の分類・注記・収納等）・図面作成（遺構図のトレース・版組、遺物の実測・トレース・版組）を含む整理作業および報告書作成を行った。本書がその成果である。

（實盛）

第３章　雁屋遺跡 2001－１次（ＫＹ2001－１）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、現国道 170 号との接続部北側にあたり、南には 2003-2 次調査地区がある。調査前現況は民間自動車用品店舗跡地であった。店舗建設のために 0.6～0.8mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.2mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。店舗建設以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.5～0.7mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が遺構面であった。その下層は一部黄褐色系の砂質土が、さらに下層には青灰色の粗砂が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 13 図）。

（村上・實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに飛鳥時代～奈良時代に属するもので、掘立柱建物、溝、土坑、Pit があった（第 13 図）。遺構面の標高は東端で T.P. ＋3.140m、西端で T.P. ＋2.690mであった。遺構の番号は、遺物が出土した遺構のみ、種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

掘立柱建物Ａ　調査地区東寄りで検出した（第 13 図）。Pit６基により構成される。検出できた規模は１間以上×３間で、1.5m以上×4.4mである。柱間は北辺が 1.2～1.5m、西辺が 1.3m、東辺が 1.4mである。柱穴の掘形は直径 0.3～0.4mの円形もしくは楕円形で、柱穴の底部は T.P. ＋2.690～2.960mであった。遺物はほとんど出土しなかったが、Pit24 のみ土師器小片が出土しており、古代の遺構とみられる。

Pit11　調査地区中央で他の溝の底部において検出した。長径 0.7m、短径 0.45m、深さ 0.2mで惰円形を呈する。上端の標高は T.P. ＋2.890m、底部は T.P. ＋2.690mであった（第 13 図）。土師器甕（第 15 図－26・27）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

Pit13　調査地区中央北端で検出した。直径 0.35m、深さ 0.19mで円形を呈する。北端の一部は調査区外である。上端の標高は T.P. ＋2.960m、底部は T.P. ＋2.770mであった（第 13 図）。須恵器坏身（第 15 図－28）などが出土した。出土遺物から古墳時代末～飛鳥時代の遺構と考えられる。

Pit28　調査地区東寄りで検出した。直径 0.4m、深さ 0.18mで円形を呈する。上端の標高は T.P. ＋2.910m、底部は T.P. ＋2.730mであった（第 13 図）。須恵器高坏（第 15 図－29）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

土坑３　調査地区西寄りで検出した。検出できた長径 1.8m、短径 1.1m、深さ 0.29mでいびつな惰円形を呈する。北側を他の溝により切られる。底部から土坑 10 が掘り込まれる。上端の標高は T.P. ＋2.940m、底部は T.P. ＋2.650mであった（第 13 図）。土師器坏（第 15 図－30）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

土坑６　調査地区西側で検出した。長径 1.4m、短径 1.1m、深さ 0.24mで不整円形を呈する。上端の標高は T.P. ＋2.880m、底部は T.P. ＋2.640mであった（第 13 図）。遺構埋没後に東西方向の溝が掘削されており、その溝により上端の一部が切られるが、調査では土坑６を重視し完掘のうえ、記録した。遺構規模、形態から井戸として利用された可能性がある。土玉（第 16 図－45）、滑石製臼玉（第 16 図－44）のほか、馬歯などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考える。

土坑７　調査地区西側で検出した。長径 1.3m、短径 0.8mで惰円形を呈する。南東側が段掘り状になっており、深さは 0.23mであった。上端の標高は T.P. ＋2.870m、段掘り部は T.P. ＋2.750m、底部は T.P. ＋2.640mであった。遺構埋没後に東西方向の溝が掘削されており、その溝により上端の一

部が切られるが、調査では土坑７を重視し完掘のうえ、記録した。遺構規模、形態から井戸として利用された可能性がある。土師器甑（第 15 図－31）、鞴羽口（第 16 図－41）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構の可能性がある。

土坑 10　調査地区西寄りで土坑３の底部において検出した。直径 0.7m、深さ 0.32mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋2.780m、底部は T.P.＋2.460mであった（第 13 図）。遺構規模、形態から井戸として利用された可能性がある。土師器高坏（第 15 図－32）のほか、馬歯、炭などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

溝 13　調査地区西側で検出した。北から南へと向いた溝で、東西方向の溝に切られ、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 3.8m、最大幅 0.5m、深さは 0.17mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋2.930m、底部がT.P.＋2.880mで、南端部分の上端はT.P.＋2.880m、底部はT.P.＋2.710mであった（第 13 図）。須恵器台付壺（第 15 図－33）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考えられる。

溝 18　調査地区西寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、北端は東西方向の溝に切られ、南端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 3.3m、最大幅 0.6m、深さは 0.14mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋2.920m、底部が T.P.＋2.810mで、南端部分の上端は T.P.＋2.910m、底部は T.P.＋2.770mであった（第 13 図）。須恵器坏身（第 15 図－34）などが出土した。出土遺物や他の遺構との関係から飛鳥時代の遺構と考える。

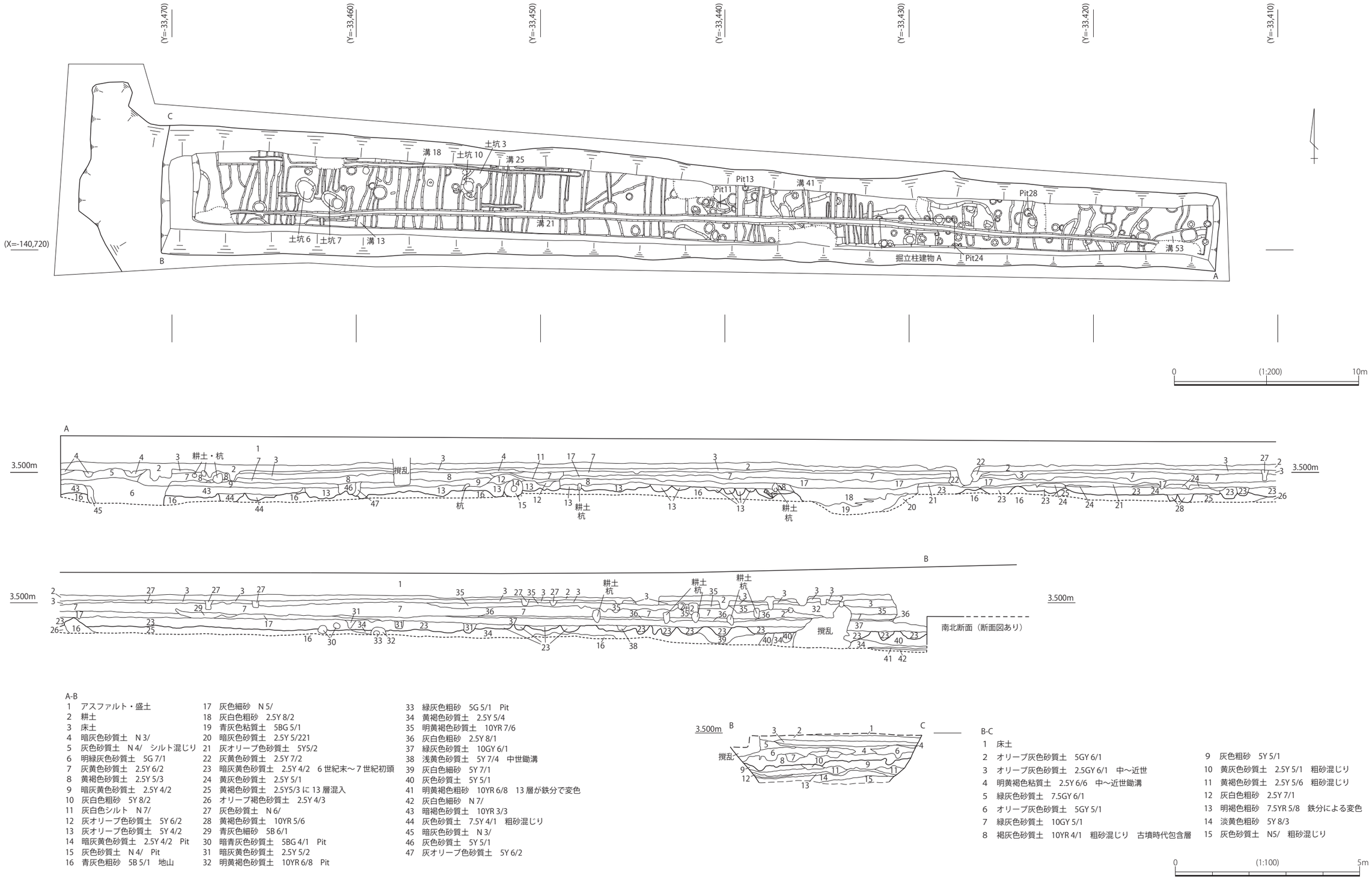
溝 21　調査地区南半で検出した。東から西へと向いた溝で、東端は他の土坑に、西端は撹乱に切られる。切り合いから南北方向の溝群より新しく掘削されている。検出できた規模は長さ 50.6m、最大幅 0.5m、深さは 0.19mである。標高は東端部分の上端が T.P.＋2.880m、底部が T.P.＋2.770mで、西端部分の上端は T.P.＋2.780m、底部は T.P.＋2.690mであった（第 13 図）。円筒埴輪（第 15 図－35）のほか、馬歯などが出土した。他の遺構との切り合いから奈良時代以降の遺構と考えられる。

溝 25　調査地区西寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、東西方向の溝に切られ、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 3.5m、最大幅 0.4m、深さは 0.14mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋2.970m、底部が T.P.＋2.830mで、南端部分の上端は T.P.＋2.930m、底部は T.P.＋2.810mであった（第 13 図）。須恵器高坏（第 15 図－36）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考えられる。

溝 41　調査地区中央東寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、東西方向の溝に切られ、北端は調査地区外である。南端は新しい時期の土坑により撹乱される。検出できた規模は長さ 2.0m、最大幅 0.4m、深さは 0.11mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋2.970m、底部が T.P.＋2.860mで、南端部分の上端は T.P.＋2.960m、底部は T.P.＋2.790mであった（第 13 図）。土師器の坏もしくは皿（第 15 図－37）、須恵器坏身（第 15 図－38）などが出土した。出土遺物から奈良時代後期の遺構と考えられる。

溝 53　調査地区東端で検出した。南西から北東へと向いた溝で、南西端は後代の撹乱に切られ、東端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 3.0m、幅 0.6m、深さは 0.16mである。標高は北東端部分の上端が T.P.＋3.110m、底部が T.P.＋2.940mで、南西端部分の上端は T.P.＋3.040m、底部は T.P.＋3.010mであった（第 13 図）。土師器坏（第 15 図－39）、砥石（第 16 図－40）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

（村上・實盛）



A-B

1 アスファルト・盛土
2 耕土
3 床土
4 暗灰色砂質土 N 3/
5 灰色砂質土 N 4/ シルト混じり
6 明緑灰色砂質土 5G 7/1
7 灰黄色砂質土 2.5Y 6/2
8 黄褐色砂質土 2.5Y 5/3
9 暗灰黄色砂質土 2.5Y 4/2
10 灰白色粗砂 5Y 8/2
11 灰白色シルト N 7/
12 灰オリーブ色砂質土 5Y 6/2
13 灰オリーブ色砂質土 5Y 4/2
14 暗灰黄色砂質土 2.5Y 4/2 Pit
15 灰色砂質土 N 4/ Pit
16 青灰色粗砂 5B 5/1 地山
17 灰色細砂 N 5/
18 灰白色粗砂 2.5Y 8/2
19 青灰色粘質土 5BG 5/1
20 暗灰色砂質土 2.5Y 5/221
21 灰オリーブ色砂質土 5Y5/2
22 灰黄色砂質土 2.5Y 7/2
23 暗灰黄色砂質土 2.5Y 4/2 6 世紀末～7 世紀初頭
24 黄灰色砂質土 2.5Y 5/1
25 黄褐色砂質土 2.5Y5/3 に 13 層混入
26 オリーブ褐色砂質土 2.5Y 4/3
27 灰色砂質土 N 6/
28 黄褐色砂質土 10YR 5/6
29 青灰色細砂 5B 6/1
30 暗青灰色砂質土 5BG 4/1 Pit
31 暗灰黄色砂質土 2.5Y 5/2
32 明黄褐色砂質土 10YR 6/8 Pit
33 緑灰色粗砂 5G 5/1 Pit
34 黄褐色砂質土 2.5Y 5/4
35 明黄褐色砂質土 10YR 7/6
36 灰白色粗砂 2.5Y 8/1
37 緑灰色砂質土 10GY 6/1
38 浅黄色砂質土 5Y 7/4 中世鋤溝
39 灰白色細砂 5Y 7/1
40 灰色砂質土 5Y 5/1
41 明黄褐色粗砂 10YR 6/8 13 層が鉄分で変色
42 灰白色細砂 N 7/
43 暗褐色砂質土 10YR 3/3
44 灰色砂質土 7.5Y 4/1 粗砂混じり
45 暗灰色砂質土 N 3/
46 灰色砂質土 5Y 5/1
47 灰オリーブ色砂質土 5Y 6/2

B-C

1 床土
2 オリーブ灰色砂質土 5GY 6/1
3 オリーブ灰色砂質土 2.5GY 6/1 中～近世
4 明黄褐色粘質土 2.5Y 6/6 中～近世鋤溝
5 緑灰色砂質土 7.5GY 6/1
6 オリーブ灰色砂質土 5GY 5/1
7 緑灰色砂質土 10GY 5/1
8 褐灰色砂質土 10YR 4/1 粗砂混じり 古墳時代包含層
9 灰色粗砂 5Y 5/1
10 黄灰色砂質土 2.5Y 5/1 粗砂混じり
11 黄褐色砂質土 2.5Y 5/6 粗砂混じり
12 灰白色粗砂 2.5Y 7/1
13 明褐色粗砂 7.5YR 5/8 鉄分による変色
14 淡黄色粗砂 5Y 8/3
15 灰色砂質土 N5/ 粗砂混じり

第 13 図 調査地区平面図・断面図 (KY2001-1)

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

土師器

22 羽釜　口径：21.0 ㎝（復元）。器高：27.5 ㎝（残存）。鍔径：25.2 ㎝。厚さ：0.5～1.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒・角閃石・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/5。体部は長胴で口縁部下に鍔を巡らす。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整し、端部内面はヨコナデ調整により若干くぼんでいる。器壁は磨耗が著しいが、体部外面はタテハケ調整、体部内面の上部はタテ方向のユビナデ調整、下部はユビオサエ調整を施している。５世紀後半のものと思われる。（第 14 図－22、写真図版 32－１－22）

須恵器

23 坏身　口径：11.8 ㎝。器高：3.0 ㎝。厚さ：0.2～0.8 ㎝。色調：内面は灰白色（N 8/）、外面は灰白色（2.5Y 7/1）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部は内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/2 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。底部外面は回転ヘラ切り未調整。体部外面にはオリーブ灰色（2.5GY 5/1）の自然釉が掛かっている。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）６世紀後半のものと思われる。（第 14 図－23、写真図版 32－１－23）

24 摺鉢形　底径：8.6 ㎝（復元）。器高：6.2 ㎝（残存）。厚さ：0.6～1.5 ㎝。色調：内・断面は灰白色（N 7/）、外面は自然釉のオリーブ灰色（5GY 5/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。厚さ 1.3 ㎝の底部から体部は外反する。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）若しくはⅡ型式５段階（TK209 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 14 図－24、写真図版 32－１－24）

貿易陶磁器

25 白磁碗　口径：13.6 ㎝（復元）。器高：2.8 ㎝（残存）。厚さ：0.7 ～0.9 ㎝。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 8/1）、断面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は玉縁状を呈している。12 世紀前半のものと思われる。（第 14 図－25、写真図版 32－１－25）

土製品

41 土錘　長さ：6.8 ㎝。最大幅：2.9 ㎝。厚さ：0.8～1.3 ㎝。孔の直径：0.7 ㎝。色調：橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや密。直径１～２㎜の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。表面はナデ調整を施している。古代のものと思われる。（第 16 図－41、写真図版 33－２－41）

42 土錘　長さ：4.8 ㎝。最大幅：1.4 ㎝。厚さ：0.4～0.5 ㎝。孔の直径：0.3 ㎝。色調：淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の長石・黒色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：完形。表面はナデ調整を施している。古代のものと思われる。（第 16 図－42、写真図版 33－２－42）

これ以外に、包含層内からは馬歯が出土した（写真図版 34－１）。

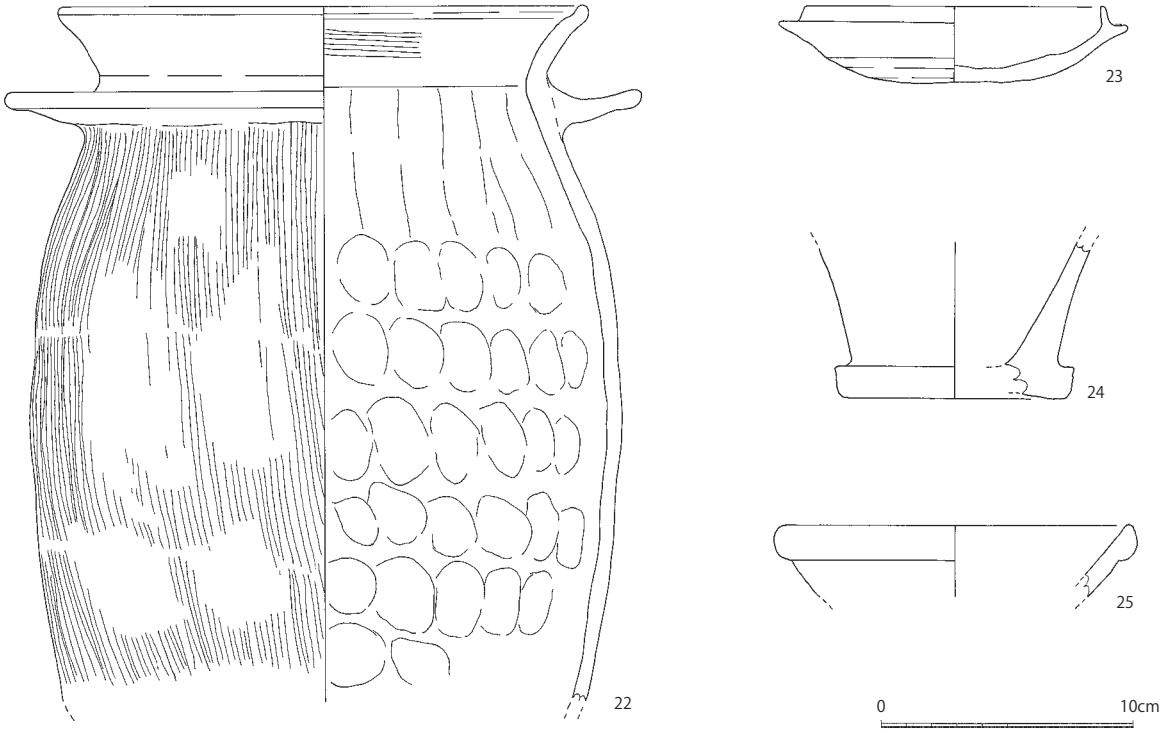
２．遺構出土遺物

Pit11

土師器

26 甕　口径：11.4 ㎝（復元）。器高：7.4 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.5 ㎝。色調：外面は橙色（5YR 7/6）。胎土：やや密。直径１～３㎜ の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整・体部外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコハケ調整・体部内面はナデ調整を施している。飛鳥時代中期。7 世紀中頃のものと思われる。（第 15 図－26、写真図版 32－２－26）

27 甕　口径：16.4 ㎝（復元）。器高：10.8 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：外面は橙色（5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の石英・長石・黒色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整・体部外面はタテハケ調整と一部にナデ調整、口縁部内面はヨコハケ



第 14 図　出土遺物（包含層・KY2001-1）

調整・体部内面は板ナデ調整を施している。古墳時代後期から飛鳥時代。6 世紀後半のものと思われる。（第 15 図－27、写真図版 32－２－27）

Pit13

須恵器

28 坏身　口径：11.6 ㎝（復元）。器高：3.4 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：外面は灰白色（2.5Y 7/1）。胎土：密。直径１～２㎜ の白色・黒色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部は内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 以下に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式６段階（TK209 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 15 図－28、写真図版 32－２－28）

Pit28

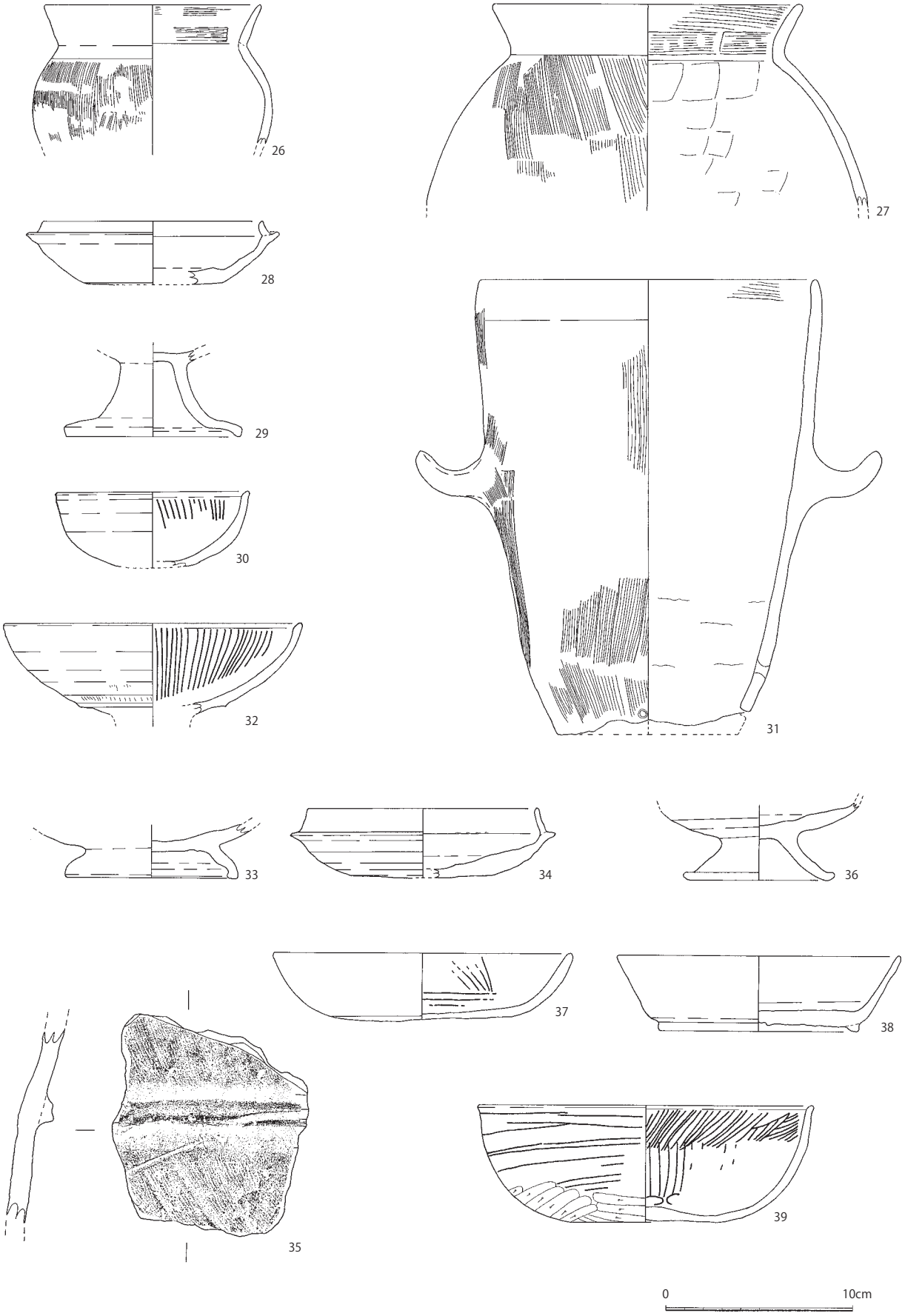
須恵器

29 高坏　底径：9.3 ㎝（復元）。器高：4.6 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：外面は青灰色（5B 6/1）。胎土：密。直径１～２㎜ の石英・白色鉱物・赤色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：2/5。Ⅱ型式６段階～Ⅲ型式１段階（TK217 型式）。７世紀中頃のものと思われる。（第 15 図－29、写真図版 32－２－29）

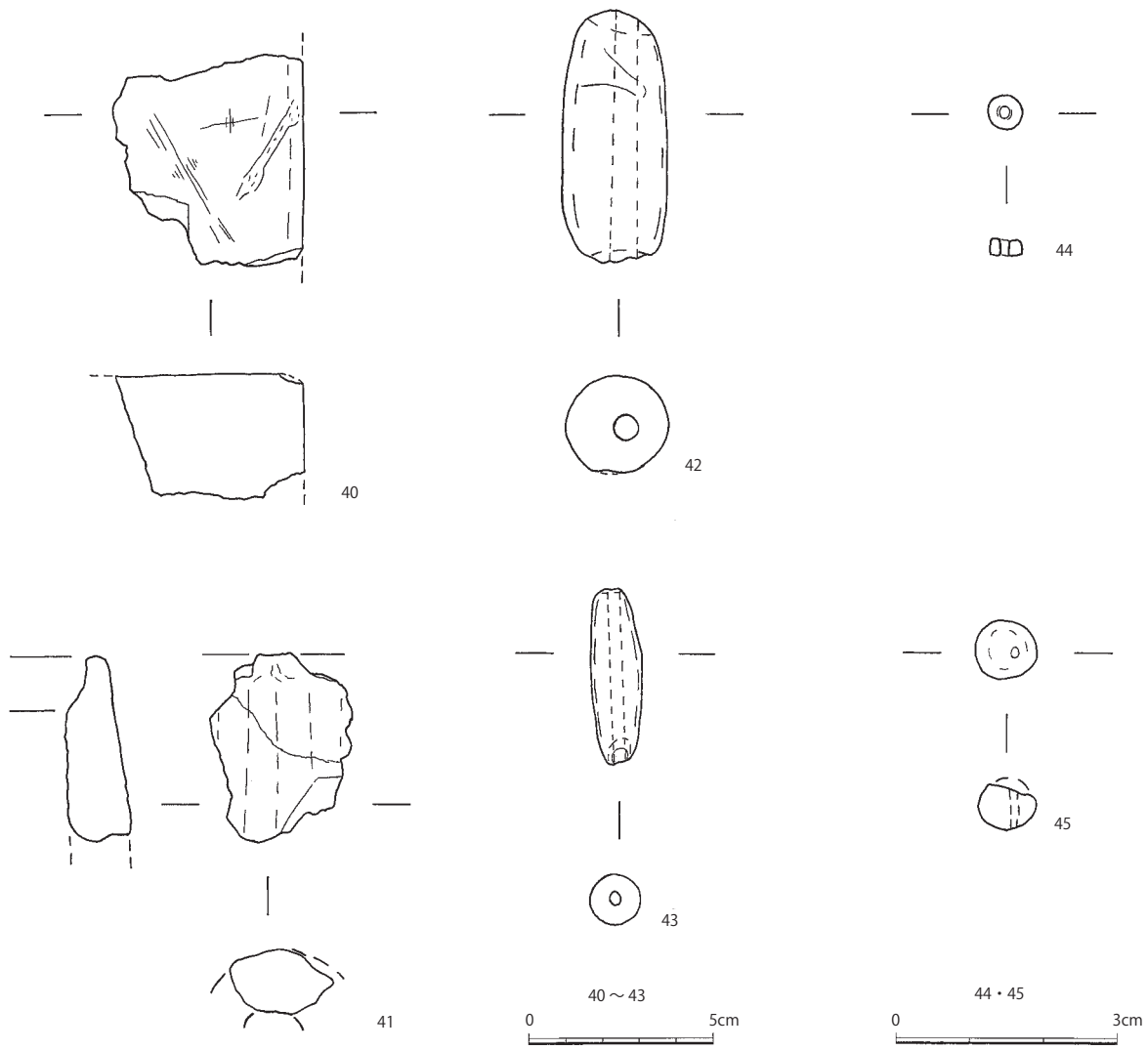
土坑３

土師器

30 坏　口径：10.4 ㎝（復元）。器高：4.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内面は橙色（2.5YR 7/8）、外・断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：やや密。直径１～２㎜ の石英・長石・黒色鉱物をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/5。口縁部内外面は二度のヨコナデ調整、体部外面はユビナデ調整、体部内面はナデ調整後タテ方向のミガキ調整を施している。内面の一部に有機物が付着している。坏Ｃの形態で飛鳥Ⅱ期。7 世紀中頃のものと思われる。（第 15 図－30、写真図版 32－２－30）



第 15 図　出土遺物（遺構・KY2001-1）



第 16 図　出土遺物（石製品・土製品、KY2001-1）

土坑６

石製品

44 滑石製臼玉　直径：0.5 ㎝。孔の直径：0.1 ㎝。色調：灰オリーブ色（7.5Y 5/3）。残存度：完形。古墳時代のものと思われる。（第 16 図－43、写真図版 33－２－44）

土製品

45 土玉　直径：0.8 ㎝のほぼ球形。孔の直径：0.1 ㎝。色調：黒色（2.5Y 2/1）。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。古墳時代のものと思われる。（第 16 図－44、写真図版 33－２－45）

土坑７

土師器

31 甑　口径：17.8 ㎝（復元）。器高：24.2 ㎝（残存）。厚さ：0.7～2.5 ㎝。色調：内面は浅黄橙色（10YR 8/4）、外面は橙色（5YR 7/8）。胎土：やや密。直径１～３㎜の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/5。口縁部外面はヨコナデ調整･体部外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコハケ調整後ナデ調整・内面はナデ調整を施している。内面の下半部には粘土紐痕が残る。底部は蒸気孔として開いているとともに底部から 3.5 ㎝上位に直径 0.6 ㎝の孔が開けられている。また底部には直径４㎜の孔が開けられているが、これは底部が欠損した後に再び甑として

再利用するために再穿孔したものと思われる。古墳時代後期のものと思われる。（第 15 図－31 、写真図版 32－２－31）

土製品

41 鞴羽口　長さ：5.1 ㎝（残存）。幅：3.3 ㎝（残存）。厚さ：1.6 ㎝。孔の直径：1.6 ㎝（復元）。色調：内面は橙色（5YR 6/6）、外面は黄褐色（10YR 7/6）。外面の被熱部は灰色（N 6/）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の石英・白色鉱物を多く含む。残存度：小片。（第 16 図－40、写真図版 33－２－41）

土坑 10

土師器

32 高坏　口径:16.0 ㎝（復元）。器高：4.9 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：外面は橙色（5YR 7/6）。胎土：密。直径１㎜以下の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は回転ナデ調整、底部付近には細かな刻み目状の調整を施した後ナデ消している。体部内面は粗いヨコナデ調整後タテ方向のミガキ調整を施している。飛鳥Ⅰ期。７世紀前半のものと思われる。（第 15 図－32、写真図版 32－２－32）

溝 13

須恵器

33 台付壺　底径：9.1 ㎝。器高：2.9 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外面は明青灰色（5PB 7/1）、断面は赤灰色（5R 5/1）。胎土：密。直径１～２㎜の長石を少量含む。焼成：良好。残存度：1/10。Ⅱ型式６段階～Ⅲ型式１段階（TK217 型式）。７世紀中頃のものと思われる。（第 15 図－33、写真図版 32－２－33）

溝 18

須恵器

34 坏身　口径：12.2 ㎝（復元）。器高：3.7 ㎝（残存）。厚さ：0.3～1.0 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 7/1）。胎土：やや密。直径１～２㎜の白色・黒色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：2/5。口縁部は内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 15 図－34、写真図版 32－２－34）

溝 21

埴輪

35 円筒埴輪　長さ：11.8 ㎝（残存）。幅：10.5 ㎝（残存）。厚さ：1.1 ㎝。タガ高さ：0.7 ㎝。色調：内・外面は橙色（5YR 7/6）、断面は浅黄色（7.5YR 8/4）。胎土：粗。直径１～３㎜ の石英・長石・赤色鉱物を著しく多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はタテハケ調整を施している。６世紀代のものと思われる。（第 15 図－35、写真図版 32－２－35）

溝 25

須恵器

36 高坏　底径:8.1 ㎝。器高：4.1 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１～２㎜ の白色・黒色鉱物を少量含む。焼成：良好。残存度：2/5。Ⅱ型式６段階～Ⅲ型式１段階（TK209～TK217 型式）。７世紀中頃のものと思われる。（第 15 図－36、写真図版 32－２－36）

溝 41

土師器

37 坏または皿　口径:16.1 ㎝。器高：3.7 ㎝。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）、外面は橙色（2.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物

を多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。体部外面はナデ調整、底部外面はヘラケズリ調整、体部内面は風化が著しいがミガキ調整を施している。口縁部の一部に黒斑状のものがみられ、灯明皿に使用している可能性がある。奈良時代後期の平城宮Ⅲ期～平安京Ⅰ中期。８世紀後半のものと思われる。（第15図－37、写真図版32－２－37）

須恵器

38 坏身　口径：15.0 ㎝。高台径：10.6 ㎝。器高：4.0 ㎝。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内・断面は灰白色（N 7/）。外面は暗灰色（N 3/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の白色・黒色鉱物を少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。体部内外面は回転ナデ調整を施している。平城宮Ⅴ期。８世紀後半のものと思われる。（第15図－38、写真図版32－２－38）

溝 53

土師器

39 坏　口径：17.8 ㎝。器高：6.2 ㎝。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外面は橙色（5YR 6/8）。胎土：密。直径１㎜ 以下の長石・赤色鉱物を少量含む。焼成：良好。口縁端部は緩やかに外反する。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はミガキ調整、底部外面はヘラケズリ調整、体部内面はナデ調整後タテ方向の２段のミガキ調整を施している。見込部に暗文が施されているが、器壁の風化のため不明瞭である。坏Ａの形態で飛鳥Ⅲ期。７世紀中頃のものと思われる。（第15図－39、写真図版32－２－39）

石製品

40 砥石　長さ：5.2 ㎝（残存）。幅：5.7 ㎝（残存）。厚さ：3.4 ㎝（残存）。色調：外面は灰白色（10YR 8/1）。残存度：小片。石材はきめの細かい砂岩質。砥面は２面残存する。（第16図－40、写真図版33－２－40）

（村上・實盛）

第４章　雁屋遺跡 2001－２次（ＫＹ2001－２）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業予定地のほぼ中央で、東には 2002-1 次調査地区が、西には 2011-4 次調査地区がある。調査前現況は宅地であった。宅地造成のために東端で 1.0m、西端で 0.2mほど盛土されていた。その下層は 0.1～0.2mほどの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

Y=-33,140 付近より東と西では層序が異なり、東半では床土の下層に 0.1～0.2mほど中世の遺物包含層が堆積していた。遺物包含層を除去したその下面が遺構面であった。西半では床土の下層は 0.1mほど中世の遺物包含層が堆積していた。さらに下層には 0.1～0.2mほど弥生時代前期の遺物包含層が堆積していた。これらの遺物包含層を除去すると、その下面が遺構面であった。遺構面の下層は東半では暗灰黄色の砂質土が堆積していた。一方西半では黄灰色粗砂が堆積していた。これらの土層の下層は調査地区全体を通じて暗灰黄色の粘土が堆積していた。いずれの土層も遺物を包含せず地山であった（第 17 図）。

（村上・實盛）

第２節　検出遺構

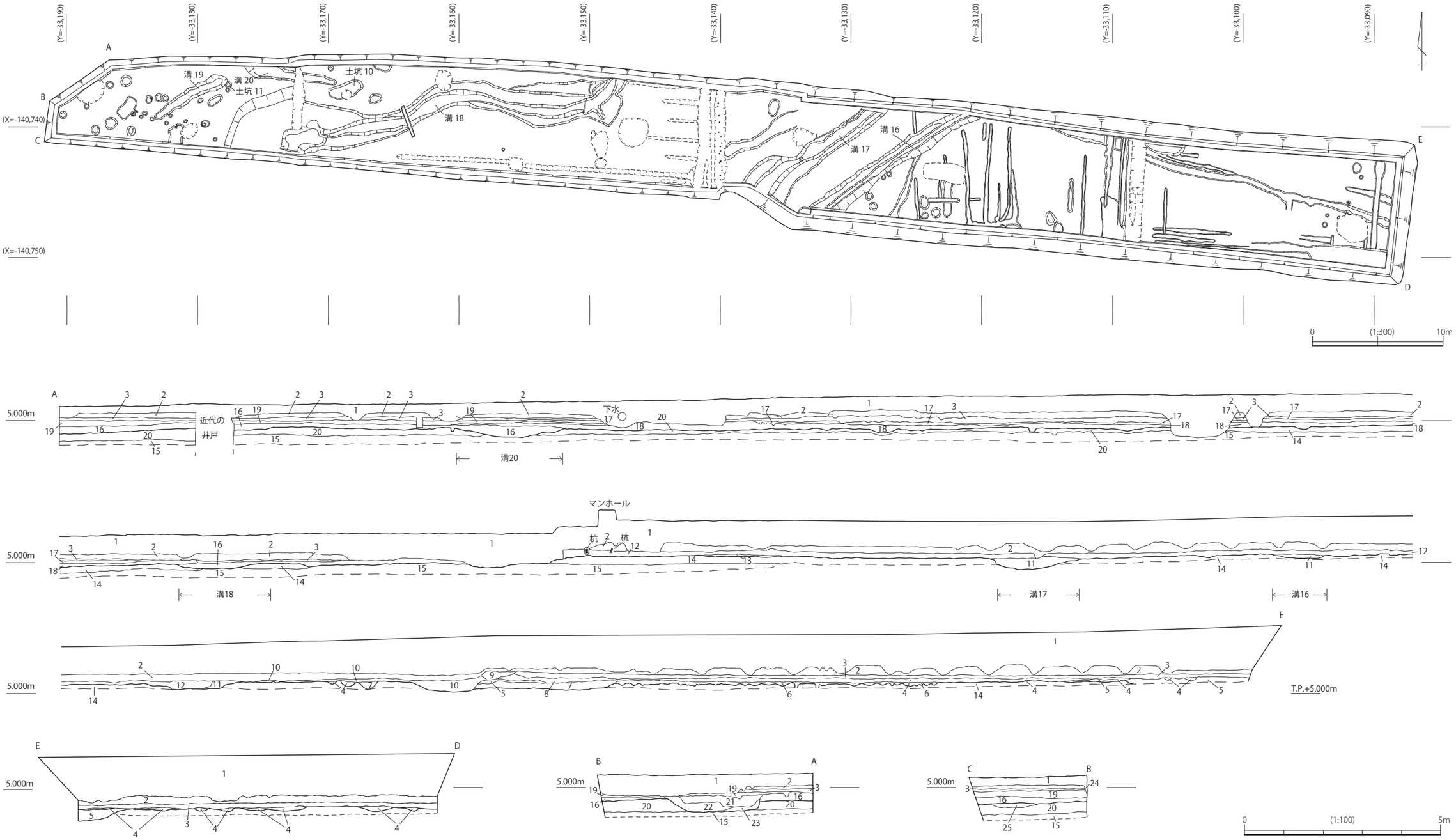
この調査で確認した遺構はおもに弥生時代と古墳時代に属するもので、溝、土坑があった（第 17 図）。また、東半では同じ遺構面で中世の鋤溝群を検出した。各時代の遺構を同一遺構面で検出した。これは、中世に土地の削平が行われたためと考える。遺構面の標高は東端で T.P.＋5.420m、西端で T.P.＋4.560mであった。遺構の番号は、遺物が出土した遺構のみ、種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

土坑 10　調査地区西寄りで検出した。長径 2.7m、短径 1.2m、深さ 0.09mで形状はいびつな隅丸方形～惰円形である。南辺の一部は撹乱により失われている。東端部分から弥生土器がまとまって出土した。上端の標高は T.P.＋4.710m、底部は T.P.＋4.620mであった（第 17・18 図）。弥生土器壺（第 25 図－61）、弥生土器甕（第 25 図－62）、石鏃（第 34 図－162）などが出土した。これらの出土遺物から、弥生時代前期の遺構と考えられる。出土遺物からみると、二条沈線の甕が存在しており、土坑 11 と並んで弥生時代前期の遺構群のなかで最も古段階に位置づけられる可能性がある。

土坑 11　調査地区西寄りで検出した。直径 0.5m、深さ 0.21mで円形を呈する。北西の肩の一部を溝 19 により切られる。上端の標高は T.P.＋4.730m、底部は T.P.＋4.520mであった（第 17・18 図）。口縁部を横位に寝かせた状態で弥生土器甕（第 25 図－63）が出土した。出土状況から、弥生時代前期の甕埋納遺構と考える。出土した甕は二条沈線のもので、土坑 10 と並んで弥生時代前期の遺構群のなかで最も古段階に位置づけられる可能性がある。

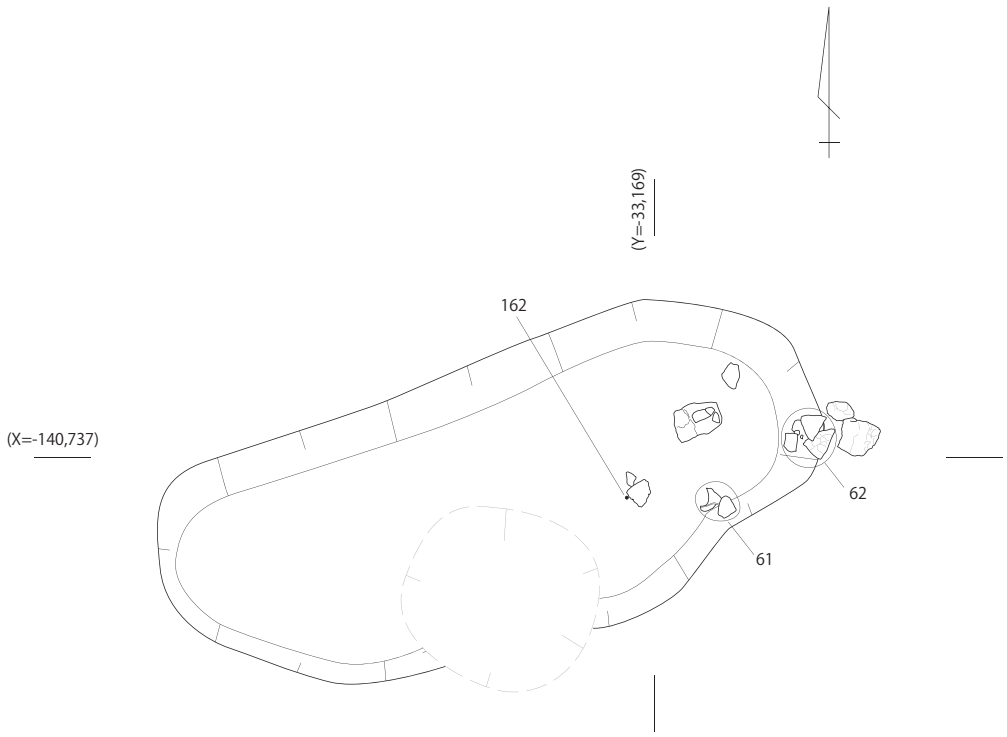
溝 16　調査地区中央東寄りで検出した。北東から南西へと向いた溝で、両端ともに調査地区外へ延びる。検出できた規模は長さ 13.3m、最大幅 2.0m、深さは 0.21mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋5.150m、底部が T.P.＋5.000mで、南端部分の上端は T.P.＋5.090m、底部は T.P.＋4.940mであった（第 17 図）。須恵器蓋坏（第 25 図－64～66）、甕（第 25 図－67）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

溝 17　調査地区中央で検出した。北東から南西へと向いた溝で、南端へ向けてやや広がる。両端ともに調査地区外へ延びる。検出できた規模は長さ 11.0m、北端部分の幅 1.6m、南端部分の最大幅 3.6m、深さは 0.39mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋5.110m、底部が T.P.＋4.820mで、南端部分の上端は T.P.＋5.060m、底部は T.P.＋4.760mであった（第 17・19 図）。庄内式期に属する甕（第 25 図－68・69）などが出土した。出土遺物から弥生時代末～古墳時代初頭（庄内式期）の遺構と考え

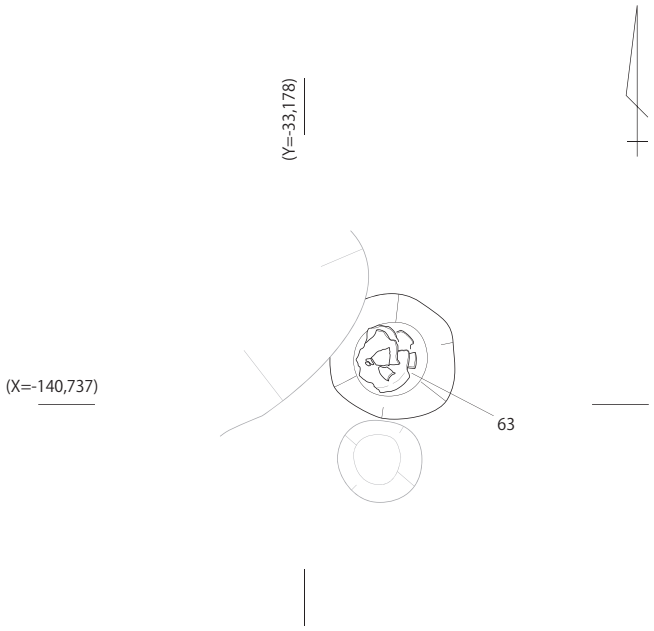


1　アスファルト・砕石・盛土
2　耕土
3　床土
4　緑灰色砂質土　10G 6/1
5　灰白色粗砂　10G 6/1
6　灰黄色細砂　2.5Y 7/2
7　暗青灰色砂質土　5GB 4/1
8　暗灰色砂質土　N 3/
9　にぶい黄色砂質土　2.5Y 6/3t
10　青灰色砂質土　10BG 5/1
11　灰色砂質土　N 4/
12　緑灰色砂質土　10GY 5/1
13　オリーブ灰色　2.5GY 5/1
14　暗灰黄色砂質土　2.5GY 5/1
15　暗灰色粘土　N 3/
16　褐灰色砂質土　10YR 4/1　弥生前期包含層
17　黄灰色砂質土　2.5Y 5/1
18　オリーブ褐色砂質土　2.5Y 4/3　弥生前期包含層
19　明黄褐色粘質土　2.5Y 6/6
20　黄灰色粗砂　2.5Y 5/1
21　灰オリーブ色砂質土　5Y 5/2
22　灰白色シルト　N 7/
23　灰色シルト　N 5/
24　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2
25　灰色粗砂　5Y 6/1

第 17 図　調査地区平面図・断面図　(KY2001-2)



土坑 10



土坑 11

0 (1:30) 1m

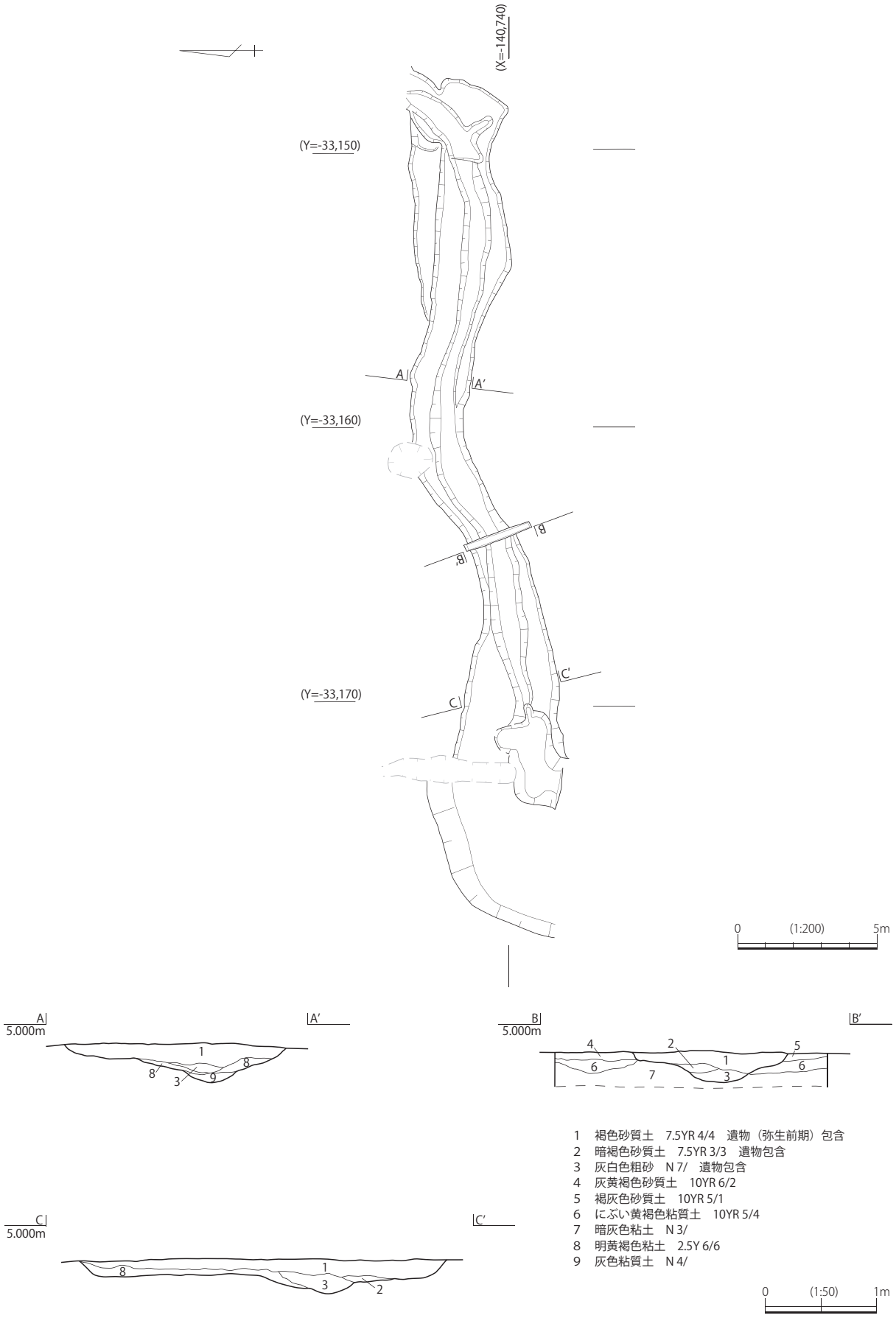
第 18 図　土坑 10・11 遺物出土状況図　(KY2001-2)

第 19 図　溝 17 遺物出土状況図　(KY2001-2)

られる。

溝 18　調査地区西半で検出した。北東から南西へと向いた緩やかに蛇行して流れる溝であり、南端へ向けてやや広がり、両端ともに調査地区外へ延びる。検出できた規模は長さ約 25.0m、北端部分の幅 2.8m、中央付近の幅 1.5m、南端部分の最大幅 6.1m、深さは北端で 0.3m、南端で約 0.7mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋4.950m、底部が T.P. ＋4.650mで、南端部分の上端は T.P. ＋4.950m、底部は T.P. ＋4.650mであった（第 17・20・21 図）。断面観察の結果、溝の上面は後世に削平されているとみられ、元々はこれよりも深さのある溝であったと考えられる。弥生土器蓋（第 26 図－70～74）、壺（第 26 図－75～85、第 27 図－86～99、第 28 図－100）、甕（第 29 図－101～108）、台付鉢（第 29 図－109）、底部（第 30 図－110～125）、土製紡錘車（第 30 図－126～130）円盤状土製品（第 30 図－131）石鏃（第 34 図－166～171）、削器（第 34 図－172）、石錘（第 34 図－173）、円盤状石製品（第 34 図－174）、用途不明石製品（第 34 図－175）などが出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。三条沈線の甕が含まれており、溝 19 よりは新しく、溝 20 よりは古く位置づけられる。

溝 19　調査地区西端で検出した。ほとんど傾斜がないが、南西から北東へと向いた溝である。規模は長さ 6.2m、最大幅 1.2m、深さは 0.32mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋4.710m、底部が T.P. ＋4.370mで、南端部分の上端は T.P. ＋4.630m、底部は T.P. ＋4.380mであった（第 17・22 図）。弥生土器蓋（第 31 図－132～135）、壺（第 31 図－136～140）、甕（第 32 図－141～144）、鉢（第 32 図－145・146）、底部（第 32 図－147・148）、石鏃（第 34 図－163）などが出土した。出土遺物から弥



第 20 図　溝 18 平面図・断面図 (KY2001-2)

生時代前期の遺構と考える。出土した甕は二条沈線が基本で、壺のみ三条沈線のものが含まれており、土坑 10・11 より新しい可能性があり、溝 18 より埋没が古いとみられる。

溝 20　調査地区西寄り北端で検出した。東から西へ向いた後、北へと屈曲する溝で、北端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 6.8m、最大幅 0.8m、深さは 0.33mである。標高は東端部分の上端がT.P.＋4.690m、底部がT.P.＋4.650mで、北端部分の上端はT.P.＋4.760m、底部はT.P.＋4.530mであった（第 17・22 図）。弥生土器壺（第 33 図－149～151）、甕（第 33 図－152～157）、高坏（第 33 図－158）、底部（第 33 図－159～161）、石鏃（第 34 図－164）、石錐（第 34 図－165）などが出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。出土遺物からみると、四条沈線の甕が含まれており、弥生時代前期の遺構群の中で、もっとも新しい段階まで機能したものとして位置づけることができる。

これらの遺構群の中で、詳細報告対象とした遺構以外も、調査地区西半のものについては基本的に弥生時代前期のものであり、調査地区西半は弥生時代前期の集落として位置づけられる。東半では前期以降の遺構も検出しているが、溝 16 の南東側で検出した土坑群には、弥生時代前期のものが含まれていた。ただしごく少数であり、調査地区全体でみると、弥生時代前期の遺構は西半に集中して検出した。

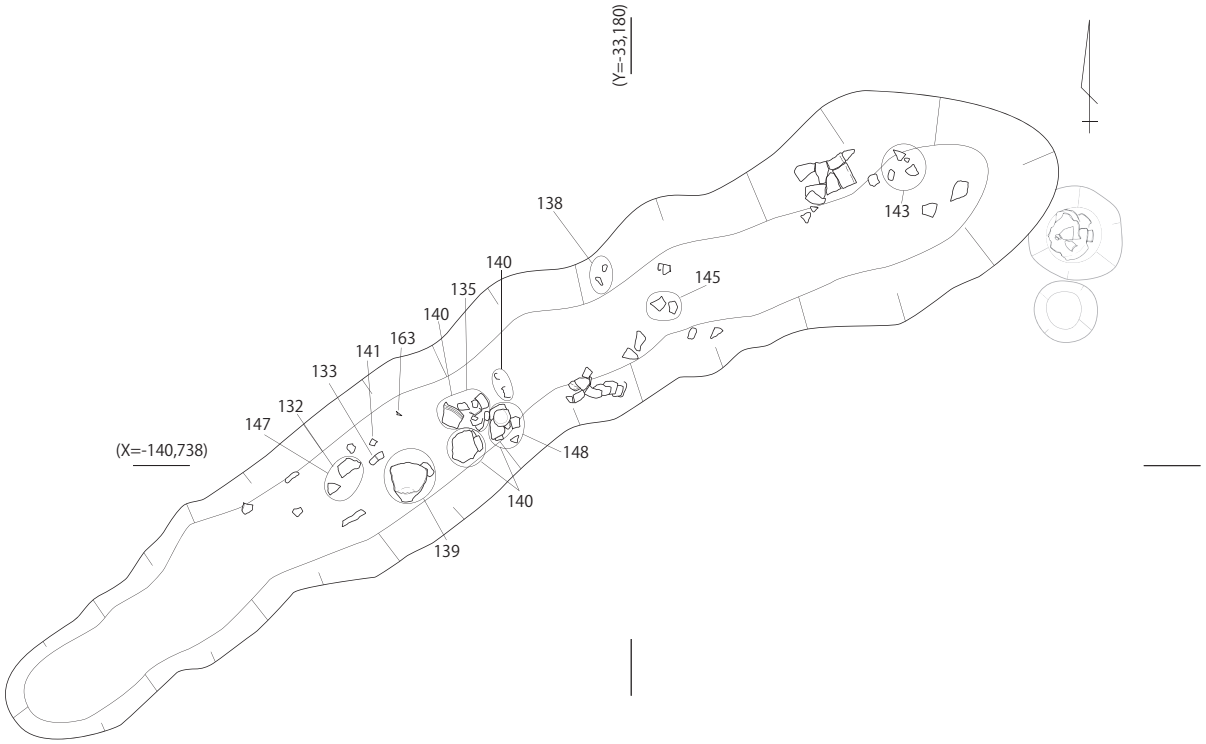
これらの遺構群出土の土器はいずれも次節で報告するとおり多条沈線化していない段階のものである。壺の器形は横張のものが主流であった。また、幅の狭い削り出し突帯が主流で、貼り付け突帯をもつ資料は報告していない小片も含め存在しなかった。これらのことから、今回報告した弥生時代前期の遺構群は、弥生時代前期中頃のもの、近年の広域土器編年（田畑 2018）に照らせば 4-1 期を主体とし一部 4-2 期にかかる段階であり、北部九州における板付Ⅱb式期併行のものとして位置づけることができよう[1]。

（村上・實盛）

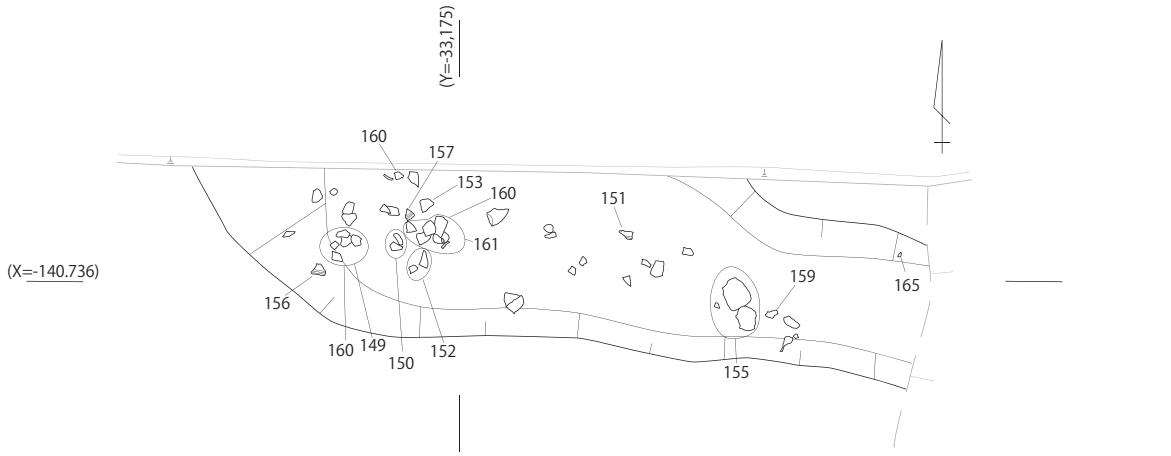
註

1）本調査出土資料群の弥生土器編年における位置づけの詳細については、森岡秀人氏の教示を得た。

第 21 図　溝 18 遺物出土状況図　(KY2001-2)



溝 19



溝 20

0 (1:40) 1m

第 22 図　溝 19・20 遺物出土状況図　(KY2001-2)

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

弥生土器

46 蓋　つまみ直径：2.3 ㎝。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.2 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。((第 23 図－46、写真図版 34－２－46)

47 蓋　口径：15.0 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.7 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/4)、外面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整を施している。体部外面に指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。((第 23 図－47、写真図版 34－２－47)

48 壺　長さ：5.3 ㎝（残存）。最大幅：6.7 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.8 ㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/2)、外・断面は浅黄色（2.5Y 7/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部付近の破片と思われる。体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。胴部上位の文様帯に２条のヘラ描き沈線を巡らし、その間に円形の刺突文を施している。その下位に２条のヘラ描き沈線を約 3.3 ㎝の幅をもって横方向に巡らし、その間に１条のヘラ描き沈線を縦方向に引くことにより方形の区画を描いている。その区画の中に木葉状文を描いている。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。(第 23 図－48、写真図版 34－２－48)

49 壺　長さ：5.4 ㎝（残存）。最大幅：7.0 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部付近の破片と思われる。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。胴部上位の文様帯に３条のヘラ描き沈線を巡らし、その下位に４条のヘラ描き沈線を１単位とした斜行文を描いている。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。(第 23 図－49、写真図版 34－２－49)

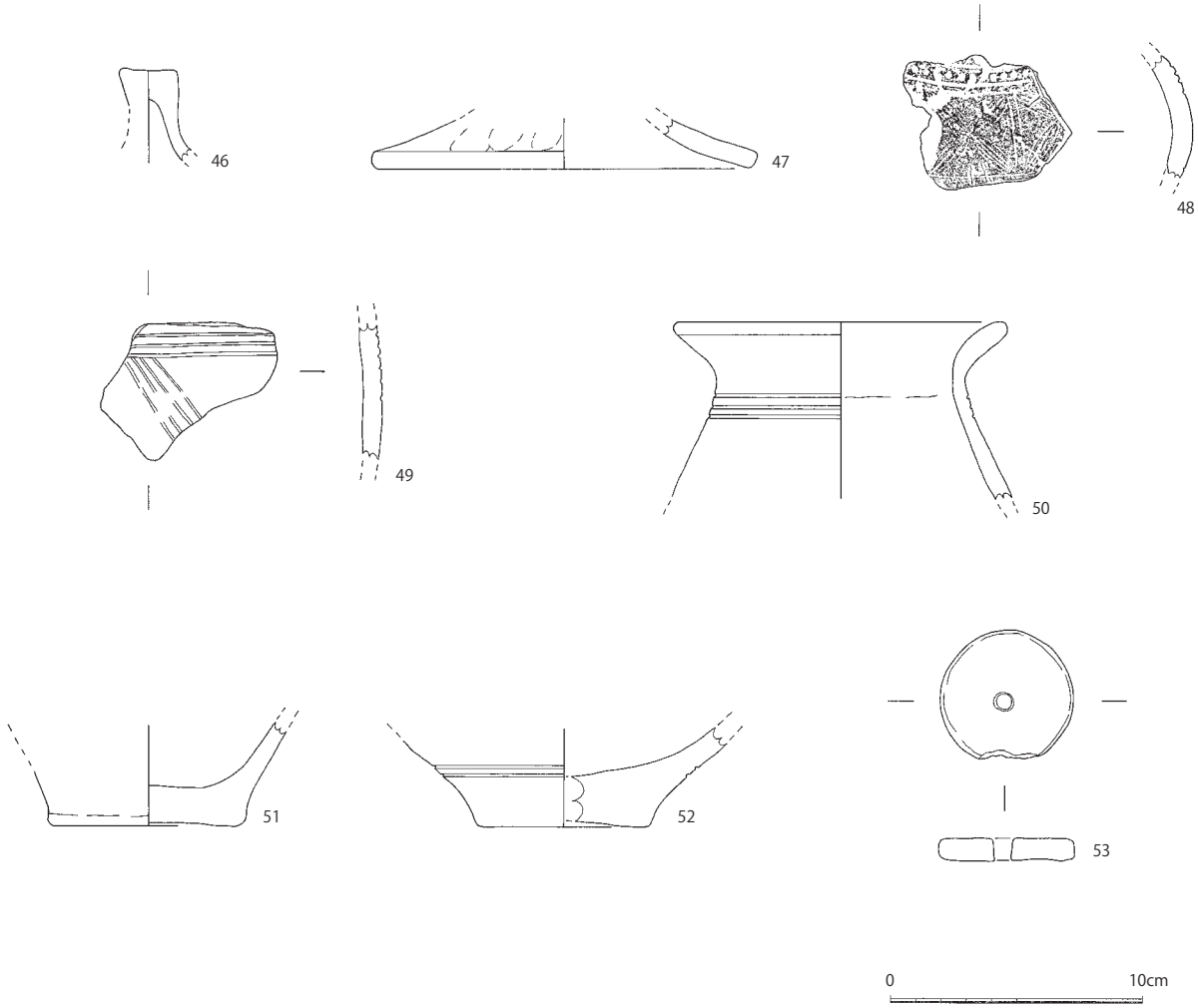
50 壺　口径：13.0 ㎝（復元）。器高：7.0 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8 ㎝。色調：口縁部内・外面と体部外面はにぶい褐色（7.5YR 5/4)、体部内・断面は黒色（2.5Y 2/1）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。肩部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。(第 23 図－50、写真図版 34－２－50)

51 底部片　底径：7.6 ㎝。器高：4.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～1.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部外面はナデ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。甕の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。((第 23 図－51、写真図版 34－２－51)

52 底部片　底径：6.6 ㎝（復元）。器高：3.9 ㎝（残存）。厚さ：0.9～2.5 ㎝。色調：内面は黒褐色（10YR 3/1)、外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 1/2。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施している。底部裾外面に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。大型壺の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。((第 23 図－52、写真図版 34－２－52)

土製品

53 紡錘車　直径：5.3 ㎝。厚さ：0.6～0.9 ㎝。色調：表・裏・断面は黒色（10YR 2/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：不良。残存度：ほぼ完形。（(第 23 図－53、写真図版 34－２－53)



第 23 図　出土遺物（包含層土器・KY2001-2）

石製品

54 石鏃　全長：2.1 cm（残存）。最大幅：1.5 cm。厚さ：0.1～0.3 cm。重量：0.8g。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：先端が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製凹基無茎式石鏃と思われる。（第 24 図－54、写真図版 40－１－54）

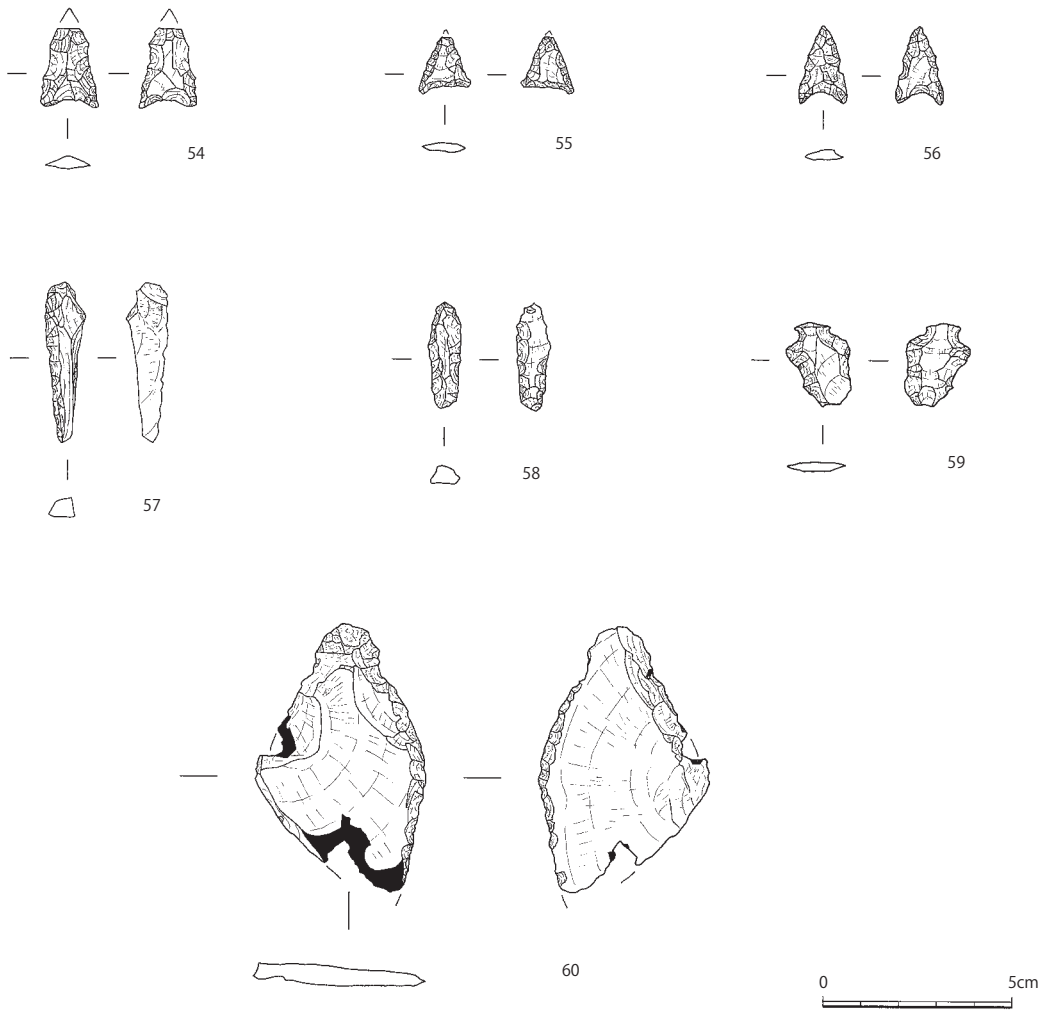
55 石鏃　全長：1.5 cm（残存）。最大幅：1.4 cm。厚さ：0.1～0.25 cm。重量：0.3g。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：先端が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第 24 図－55、写真図版 40－１－55）

56 石鏃　全長：2.0 cm。最大幅：1.25 cm。厚さ：0.1～0.25 cm。重量：0.7g。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：完形。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。両側面に抉りが各１ケ所ある。弥生時代の打製凹基無茎式石鏃と思われる。（第 24 図－56、写真図版 40－１－56）

57 石錐　全長：4.2 cm（残存）。最大幅：1.1 cm。厚さ：0.1～0.5 cm。重量：2.5g。色調：灰色（5Y 7/1）。残存度：基部が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の石錐と思われる。（第 24 図－57、写真図版 40－１－57）

58 石錐　全長：2.8 cm（残存）。最大幅：0.9 cm。厚さ：0.1～0.5 cm。重量：1.2g。色調：灰色（5Y 5/1）。残存度：基部が欠損。サヌカイト製（二上山産）。弥生時代の石錐と思われる。（第 24 図－58、写真図版 40－１－58）

59 石匙　全長：2.2 cm。最大幅：1.7 cm。厚さ：0.1～0.2 cm。重量：1.1g。色調：灰色（5Y 5/1）。



第 24 図　出土遺物（包含層石器・KY2001-2）

残存度：完形。サヌカイト製（二上山産）。弥生時代の石匙と思われる。（第 24 図－59、写真図版 40－１－59）

60 石匙　全長：7.0 ㎝（残存）。最大幅：4.5 ㎝。厚さ：0.1～0.5 ㎝。重量：18.6g。色調：灰色（5Y 5/1）。残存度：ほぼ完形。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の石匙と思われる。（第 24 図－60、写真図版 40－１－60）

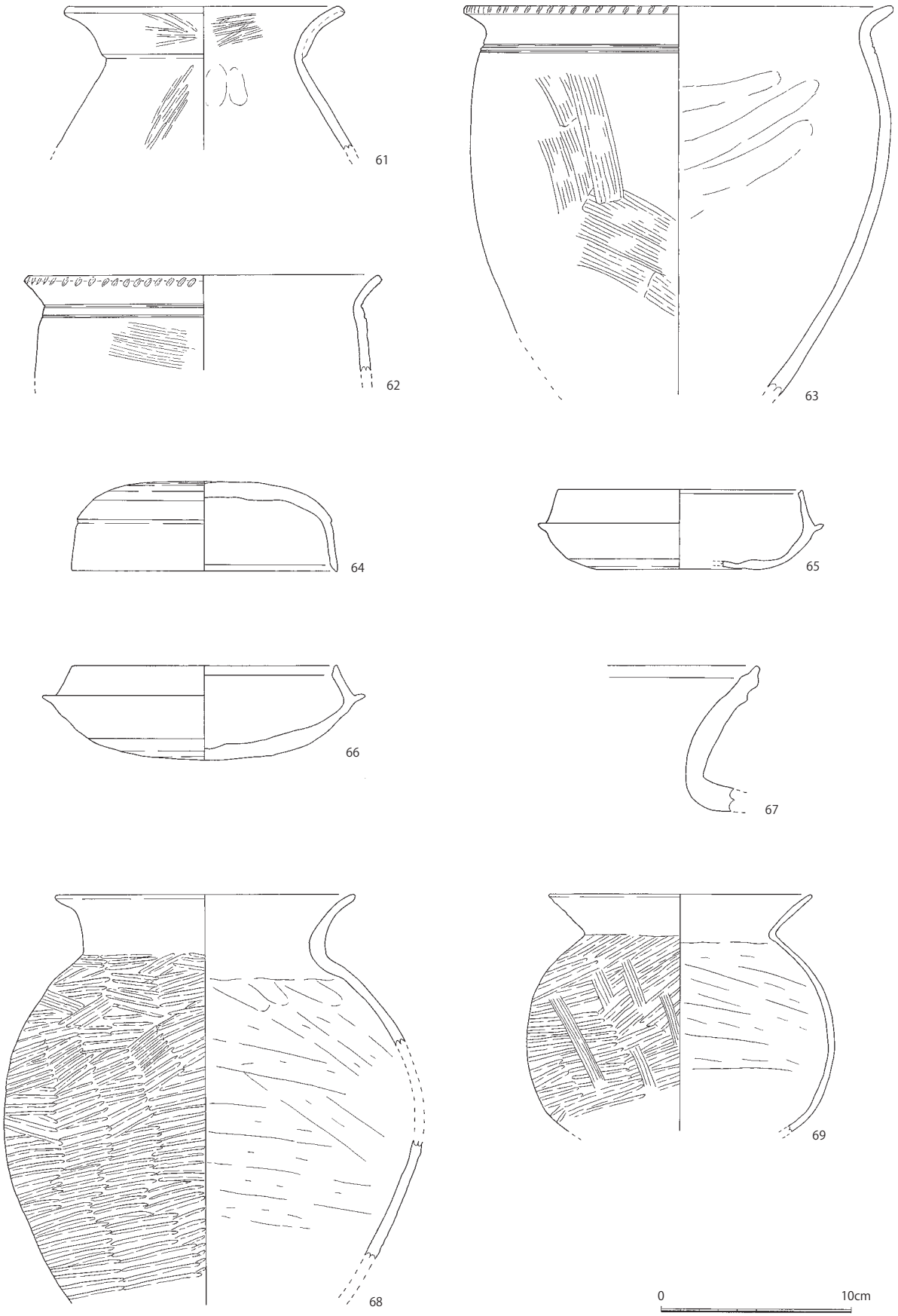
これら以外に、遺物包含層からは合計 93.7g の二上山産と思われる剥片、石核（写真図版 40－２）、合計 168.9g の金山産の可能性がある剥片、石核が出土した（写真図版 41－１）。製品との合計重量は、二上山産と思われるもの 96.0g、金山産の可能性があるもの 191.8g であった。

２．遺構出土遺物

土坑 10

弥生土器

61 壺　口径：14.2 ㎝（復元）。器高：7.5 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の白色砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、端部に至る。頸部と肩部の境に段を有する。体部外面と口縁部内面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。頸部内面に指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 18・25 図－



第 25 図　出土遺物（土坑 10・11・溝 16・17・KY2001-2）

61、写真図版 35－１－61）

62 甕　口径：18.4 ㎝（復元）。器高：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.5 ㎝。色調：内・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/3）、外面は黒褐色（10YR 3/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。肩部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面はハケ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 18・25 図－62、写真図版 35－１－62）

石製品

162 石鏃　全長：1.4 ㎝。最大幅：1.5 ㎝。厚さ：0.1～0.3 ㎝。重量：0.4g。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：完形。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第 18・34 図－162、写真図版 40－１－162）

これ以外に、土坑 10 からは合計 4.5g の二上山産と思われる剥片（写真図版 40－２）、合計 17.2g の金山産の可能性がある剥片、石核が出土した（写真図版 41－１）。

土坑 11

弥生土器

63 甕　口径：22.4 ㎝。器高：20.4 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の白色砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/5。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。肩部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面はハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 18・25 図－63、写真図版 35－１－63）

溝 16

須恵器

64 坏蓋　口径：14.0 ㎝（復元）。器高：4.7 ㎝（復元）。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。天井部の稜線は短く、口縁部内面には内傾する段をもつ。天井部外面の 1/2 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。天井部内面の中央に同心円状の叩き痕がみられる。Ⅱ型式１段階（MT15 型式）。６世紀前半のものと思われる。（第 25 図－64、写真図版 35－２－64）

65 坏身　口径：12.8 ㎝（復元）。器高：4.1 ㎝（復元）。厚さ：0.2～0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は若干内傾し、端部は内傾する段をもつ。受部内面に沈線が認められることから、オリコミ手法によって作製されたものと思われる。体部外面の下部 1/2 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式）６世紀前半のものと思われる。（第 25 図－65、写真図版 35－２－65）

66 坏身　口径：14.0 ㎝（復元）。器高：4.9 ㎝（復元）。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（N 8/）、断面は明褐灰色（5YR 7/1）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部は若干内傾し、端部は内傾する段をもつ。体部外面の下部 1/2 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式）６世紀前半のものと思われる。（第 25 図－66、写真図版 35－２－66）

67 甕　器高：7.6 ㎝（残存）。厚さ：0.3～1.2 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面は灰褐色（5YR 6/2）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。（第 25 図－67、写真図版 35－２－67）

溝 17

土師器

68 甕　口径：15.8 ㎝。器高：21.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄色

（2.5Y 7/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は太い筋の叩き調整・体部内面はヘラケズリ調整を施している。弥生Ｖ様式系の甕。庄内式期の３世紀前半のものと思われる。（第 19・25 図－68、写真図版 35－２－68）

69 甕　口径：13.8 ㎝（復元）。器高：12.4 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は太い筋の叩き調整後に一部に粗いタテハケ調整・体部内面はヘラケズリ調整を施している。庄内型甕。庄内式期の３世紀前半のものと思われる。（第 19・25 図－69、写真図版 35－２－69）

これら以外に、溝 17 からは 30.8g の二上山産と思われる石核が出土した（写真図版 40－２）。

溝 18

弥生土器

70 蓋　つまみ直径：3.0 ㎝。器高：1.7 ㎝（残存）。厚さ：0.5～1.2 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整を施している。蓋のつまみ部分と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－70、写真図版 36－２－70）

71 蓋　つまみ直径:4.0 ㎝。器高：2.0 ㎝(残存)。厚さ：2.0 ㎝。色調：内･外･断面は黒褐色(10YR 2/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。変形しているが、蓋のつまみ部分と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 26 図－71、写真図版 36－２－71）

72 蓋　口径：11.2 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.8 ㎝。色調：内面は明黄褐色(10YR 6/6)、外・断面は淡黄色（2.5Y 8/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。笠形の壺の蓋と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 26 図－72、写真図版 36－２－72）

73 蓋　口径：15.4 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（残存）。厚さ：0.7～1.0 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整を施している。天井部に１個の孔を開けている。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 26 図－73、写真図版 36－２－73）

74 蓋　口径：21.2 ㎝（復元）。器高：6.6 ㎝（復元）。厚さ：0.4～2.1 ㎝。色調：内面は橙色(7.5YR6/6)、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面の調整については､器壁が摩耗して不明瞭ではあるがハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。口縁部内面の外周には約２～３㎝の幅に炭化物が付着している。甕の蓋と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－74、写真図版 36－１－74）

75 ミニチュア壺　口径：6.4 ㎝（復元）。器高：6.7 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内面は橙色（5YR 6/6)、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は直立する頸部から若干開き、丸い端部に至る。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。体部内面には指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－75、写真図版 36－２－75）

76 ミニチュア壺　底径：3.6 ㎝(復元)。胴径：10.2 ㎝（復元）。器高：5.6 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.0 ㎝。色調：内面は灰白色（2.5Y 8/2)、外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：小片。体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部内面には粘土紐痕と指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－76、写真図版 36－２－76）

77 壺　長さ：7.0 ㎝（残存）。最大幅：6.7 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は明褐色（7.5YR 5/6）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残

存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部の上位にヘラ描きによる３条の沈線を巡らし、その下部に３条のヘラ描き沈線により３重弧文を描いている。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 26 図－77、写真図版 37－１－77）

78 壺　長さ：4.2 ㎝（残存）。最大幅：5.6 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.7 ㎝。色調：内面は明赤褐色（5YR 5/6）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部の上位にヘラ描きによる３条の沈線を巡らし、その上部には縦方向の２条のヘラ描きによる沈線、下部に３条のヘラ描き沈線により３重弧文を描いている。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－78、写真図版 37－１－78）

79 壺　長さ：4.0 ㎝（残存）。最大幅：8.9 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・断面は褐灰色（10YR 6/1）、外面はにぶい橙色（7.5YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部付近にヘラ描きによる木葉状文を描いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－79、写真図版 37－１－79）

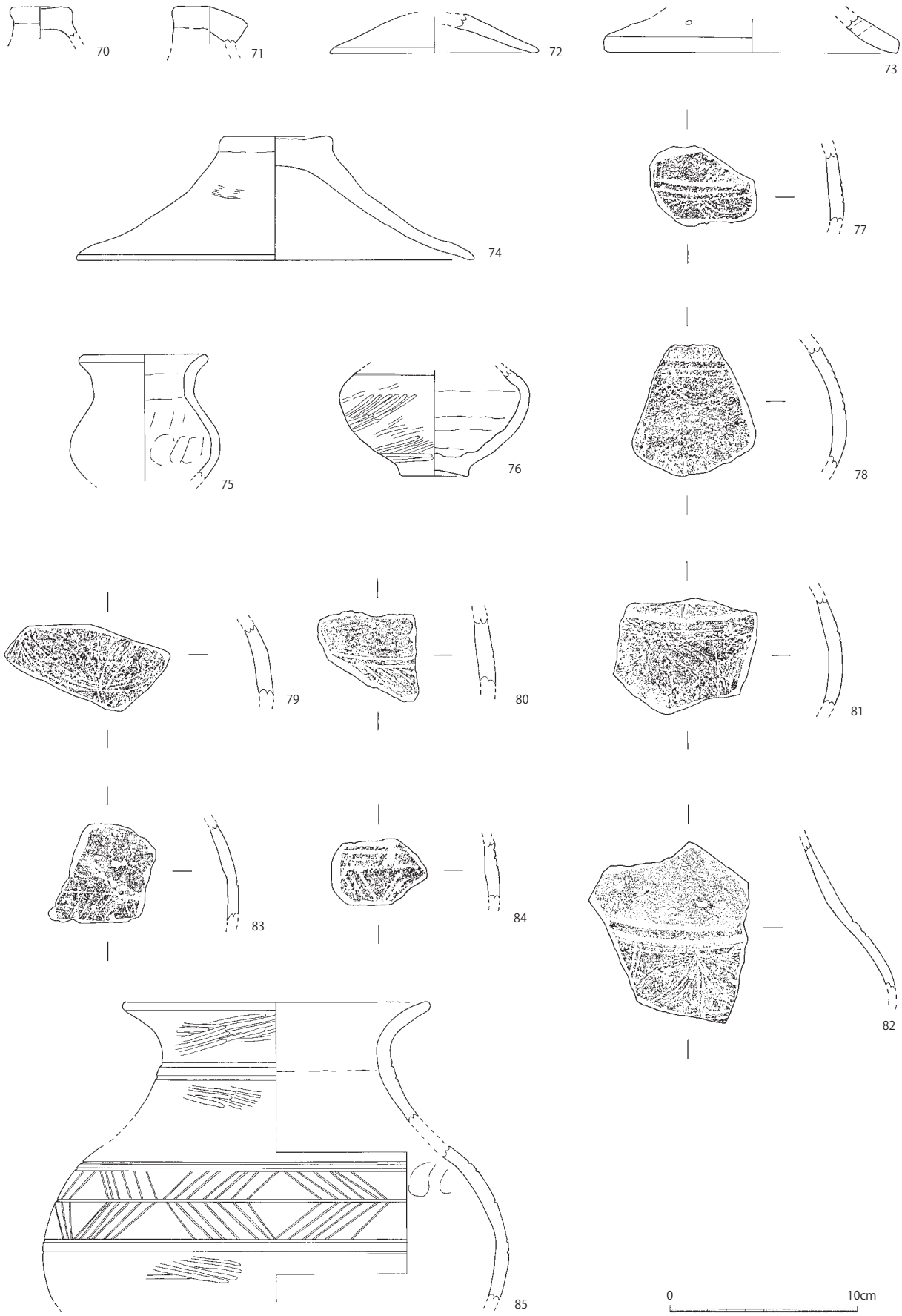
80 壺　長さ：4.7 ㎝（残存）。最大幅：5.3 ㎝（残存）。厚さ：0.8～0.9 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部の上位にヘラ描きによる２条の沈線を巡らし、その下部にヘラ描きによる木葉状文を描いている。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－80、写真図版 37－１－80）

81 壺　長さ：7.2 ㎝（残存）。最大幅：5.8 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.7 ㎝。色調：内・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）、外面はにぶい黄色（2.5Y 6/3）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部の上位に段を有し、その下部にヘラ描きによる２条の沈線を巡らし、その下部にヘラ描きによる木葉状文を描いている。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－81、写真図版 37－１－81）

82 壺　長さ：9.3 ㎝（残存）。最大幅：8.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内面は黒色（2.5Y 5/2）、外・断面は灰黄褐色（10YR 5/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部に削り出し突帯を有し、その下位に２条を１単位とするヘラ描き沈線を上下幅３㎝の間隔で巡らしている。それらの沈線の間に下方向に１条のヘラ描き沈線を引いて長方形の区画を設けている。その区画の中に木葉状文をヘラ描き沈線で描いている。体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。肩部の上位に籾の痕跡がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 26 図－82、写真図版 37－１－82）

83 壺　長さ：5.2 ㎝（残存）。最大幅：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内面は黒褐色（10YR 3/1）、外面は灰黄褐色（10YR 6/2）、断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部の上位にヘラ描きによる１条の沈線を巡らし、その下部に５条を１単位とする斜行文を描いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－83、写真図版 37－１－83）

84 壺　長さ：3.5 ㎝（残存）。最大幅：5.1 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。肩部の上位にヘラ描きによる３条の沈線を巡らし、その下部に３条を１単位とした斜行文を「Ｖ」字状に描いている。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面には指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－84、写真図版 37－１－84）



第 26 図　出土遺物（溝 18　蓋・壺・KY2001-2）

85 壺　口径：16.4 ㎝（復元）。器高：16.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/4)。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。肩部と胴部に２条のヘラ描き沈線を巡らし、その間のほぼ中央に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。中央の沈線の上下部に６～７条のヘラ描き沈線１単位とした矢羽状の斜行文を描いている。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明であるが、指頭痕がみられる。頸部内面には粘土紐痕がみられる。口縁部と胴部に接合点はないが、胎土などの状況から同一個体と考える。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・26 図－85、写真図版 36－１－85）

86 壺　口径：15.2 ㎝（復元）。器高：3.1 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の白色砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に２個の孔を開けている。体部内外面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－86、写真図版 37－２－86）

87 壺　口径：13.2 ㎝（復元）。器高：4.9 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。体部内外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 27 図－87、写真図版 37－２－87）

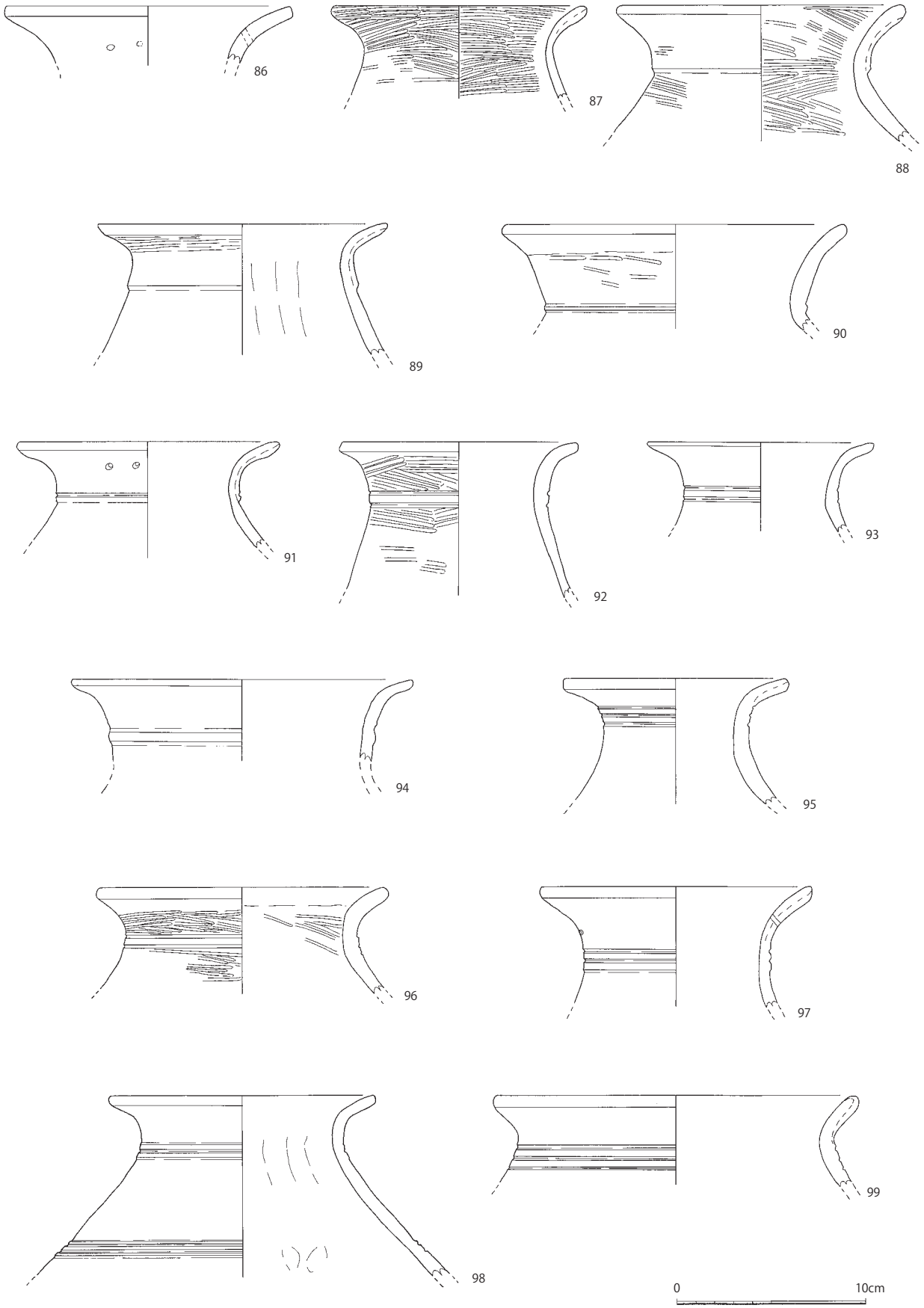
88 壺　口径：15.0 ㎝（復元）。器高：7.2 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.9 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に段を有する。体部外面の調整については、器壁が摩耗して不明瞭ではあるがヘラミガキ調整、体部内面はヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－88、写真図版 37－２－88）

89 壺　口径:15.4 ㎝(復元)。器高：6.9 ㎝(残存)。厚さ：0.4～0.8 ㎝。色調：内面は灰白色(2.5Y 8/2)、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に段を有する。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 27 図－89、写真図版 37－２－89）

90 壺　口径：17.8 ㎝（復元）。器高：5.5 ㎝（残存）。厚さ：0.7～1.0 ㎝。色調：内・断面は淡黄色（2.5Y8/3)、外面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：粗。直径１～５㎜ の白色砂粒と小石を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は外上方に開き、丸い端部に至る。頸部に幅２㎜の削り出し突帯を有する。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－90、写真図版 37－２－90）

91 壺　口径:13.8 ㎝(復元)。器高：6.1 ㎝(残存)。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内面は灰白色(2.5Y 8/2)、外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に段を有し、段上に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。頸部に２個の孔を開けている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－91、写真図版 37－２－91）

92 壺　口径:12.4 ㎝(復元)。器高：8.1 ㎝(残存)。厚さ：0.4～0.8 ㎝。色調：内面は褐灰色(10YR 4/1)、外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－92、写真図版 37－２－92）



第 27 図　出土遺物（溝 18 壺・KY2001-2）

93 壺　口径：12.0 cm（復元）。器高：4.6 cm（残存）。厚さ：0.4～0.7 cm。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－93、写真図版 37－２－93）

94 壺　口径：18.0 cm（復元）。器高：4.3 cm（残存）。厚さ：0.4～0.7 cm。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）、外・断面は橙色（5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１～３mm の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に削り出し突帯を有している。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－94、写真図版 37－２－94）

95 壺　口径：11.8 cm（復元）。器高：6.6 cm（残存）。厚さ：0.7～0.9 cm。色調：内・断面は灰黄褐色（10YR 6/2）、外面は灰黄褐色（10YR 4/2）。胎土：やや粗。直径１～３mm の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－95、写真図版 37－２－95）

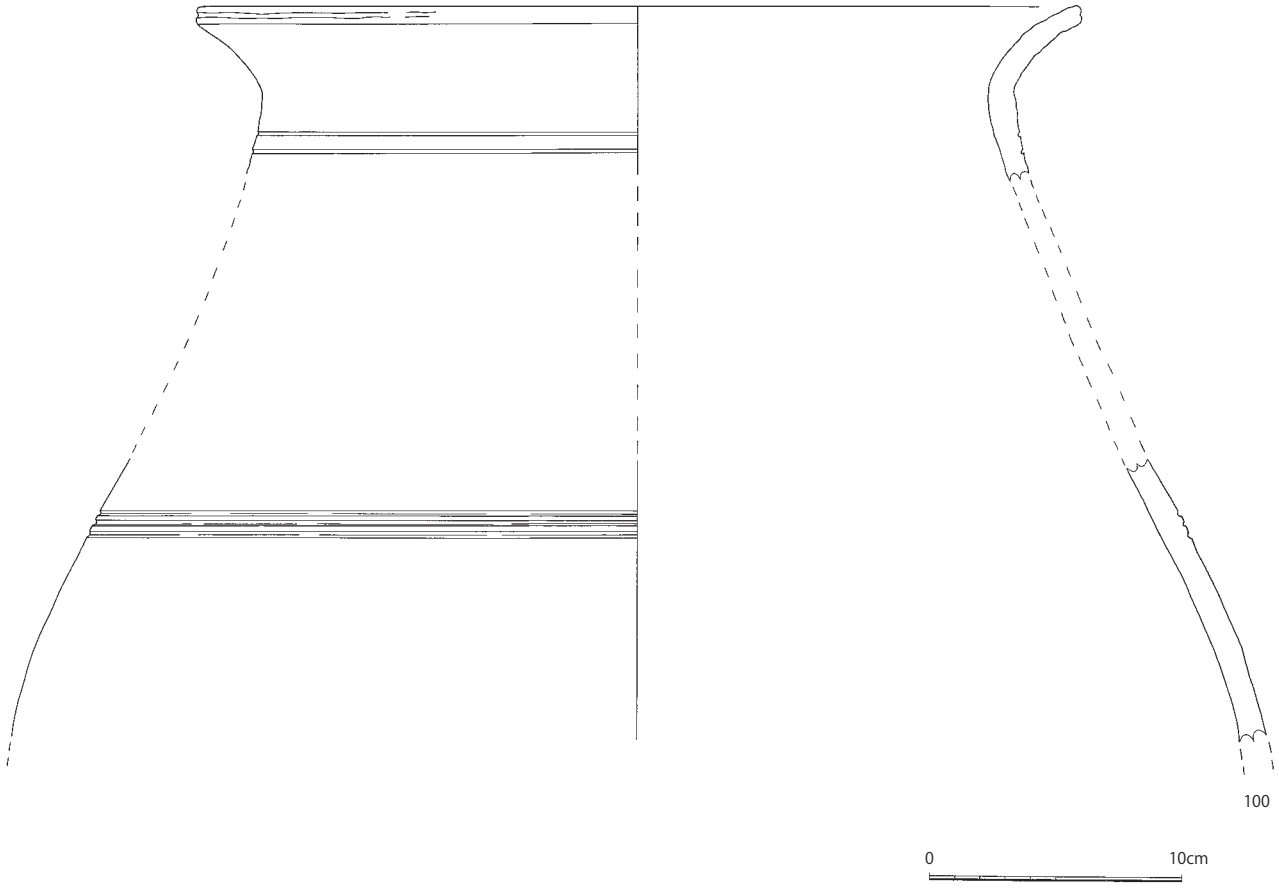
96 壺　口径：15.2 cm（復元）。器高：5.6 cm（残存）。厚さ：0.6～0.9 cm。色調：内面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）、外・断面はにぶい黄色（2.5Y 6/3）。胎土：やや粗。直径１～３mm の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に３条のヘラ描き沈線を巡らしているが、１本は斜め方向に引かれている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－96、写真図版 37－２－96）

97 壺　口径：14.4 cm（復元）。器高：6.3 cm（残存）。厚さ：0.5～0.7 cm。色調：内面はにぶい褐色（7.5YR 6/3）、外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に段を有し、段上に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。頸部に１個の孔を開けている。体部内外面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－97、写真図版 37－２－97）

98 壺　口径：14.0 cm（復元）。器高：9.6 cm（残存）。厚さ：0.6～0.7 cm。色調：内・断面は灰白色（2.5Y 8/2）、外面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１～３mm の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に削り出し突帯を有し、突帯上に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。肩部に高さの低い削り出し突帯を有し、突帯上に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内面はヨコナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施し、指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－98、写真図版 37－２－98）

99 壺　口径：19.0 cm（復元）。器高：4.7 cm（残存）。厚さ：0.7～0.8 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１～３mm の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面はナデ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・27 図－99、写真図版 37－２－99）

100 大型壺　口径：34.8 cm（復元）。器高：29.0 cm（復元）。厚さ：0.8～1.1 cm。色調：口縁部内・・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）、口縁部外面は橙色（2.5YR 6/8）、体部内面は淡黄色（2.5Y 7/6）、体部外・断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：粗。直径１～３mm の白色砂粒と赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、１条のヘラ描き沈線を巡らす端部に至る。頸部に２条、胴部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面と口縁部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施している。口縁部と胴部に接合点はないが、胎土などの状況から同一個体と考える。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・28 図－100、写真図版 37－２－100）



第 28 図　出土遺物（溝 18 壺・KY2001-2）

101 甕　長さ：7.4 ㎝（残存）。最大幅：5.9 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.7 ㎝。色調：内面は黒褐色（7.5YR 3/1）、外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は外上方に延び、刻み目を施した外反する端部に至る。肩部に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。口縁部外面に指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 29 図－101、写真図版 38－１－101）

102 甕　長さ：4.6 ㎝（残存）。最大幅：6.3 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は黄橙色(10YR 8/6)。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は外上方に開き、刻み目を施した端部に至る。肩部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部外面はヨコナデ調整を施している。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・29 図－102、写真図版 38－１－102）

103 甕　長さ：3.3 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。甕の口縁部の破片。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。前期の甕としては特異な形態で、無文土器等の影響がある甕の可能性がある。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 29 図－103、写真図版 38－１－103）

104 甕　口径：19.0 ㎝（復元）。器高：15.0 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）、外・断面は褐灰色（10YR 4/1）。胎土：やや粗。直径１～２㎜ の砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。肩部に

１条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・29図－104、写真図版36－１－104）

105 甕　口径：20.0㎝（復元）。器高：6.5㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7㎝。色調：内面は黒褐色（7.5YR 3/1）、外・断面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。肩部に残存状況は不良であるが、１条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面の全面に炭化物が付着している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第29図－105、写真図版38－１－105）

106 甕　口径：20.6㎝（復元）。器高：9.2㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7㎝。色調：内・断面は灰黄色（2.5Y 6/2）、外面は明褐色（7.5YR 5/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。肩部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・29図－106、写真図版38－１－106）

107 甕　口径：22.0㎝（復元）。器高：6.5㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7㎝。色調：内・外・断面は灰黄褐色（10YR 6/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。肩部には半截竹管による２条の沈線を２本巡らし、その間に竹管状の工具によると思われる楕円形の刺突文を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。播磨系の弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第29図－107、写真図版38－１－107）

108 甕　口径：31.4㎝（復元）。器高：10.7㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8㎝。色調：内・断面は黒色（N 2/）、外面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。肩部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。体部内面には指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・29図－108、写真図版38－１－108）

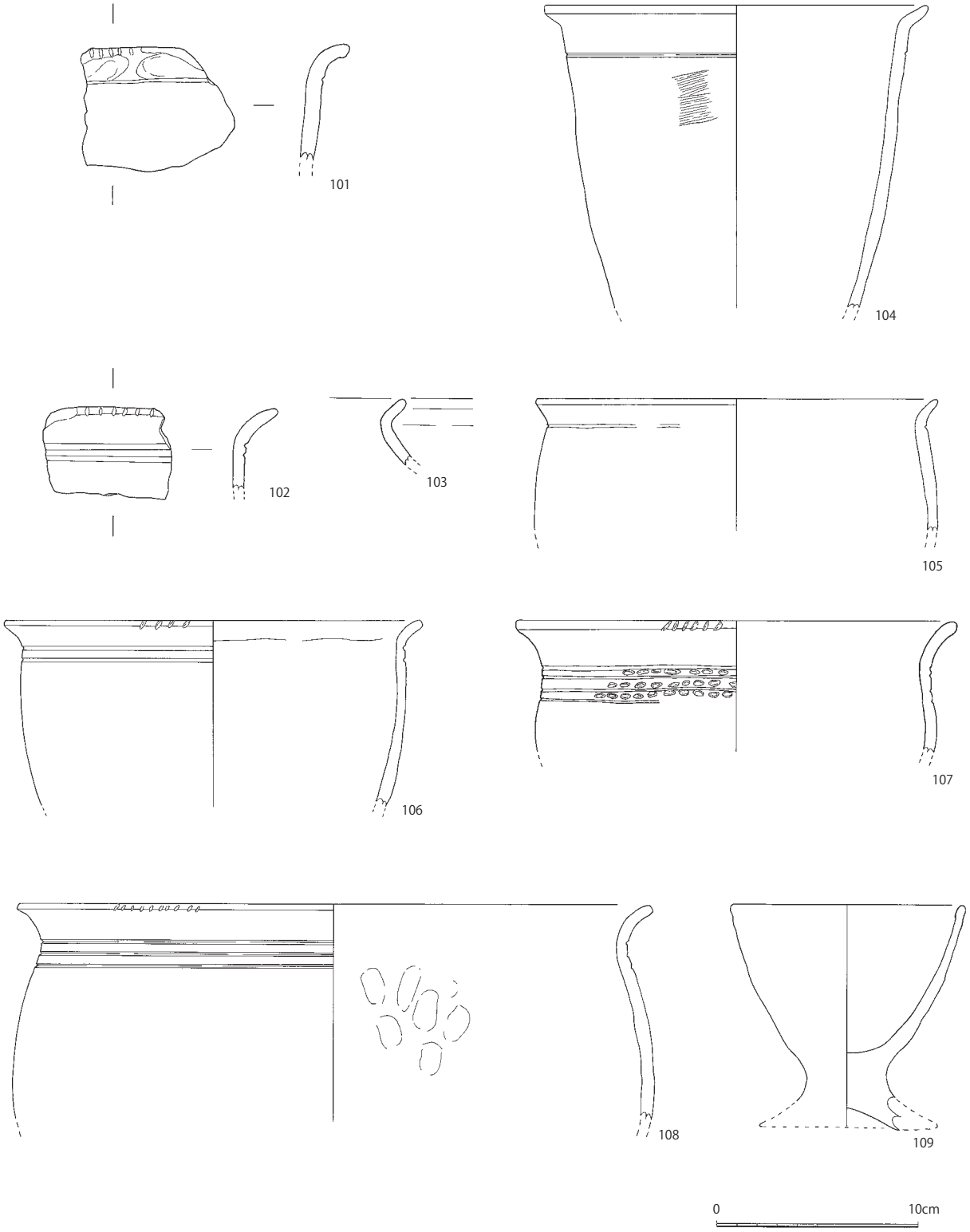
109 高坏　口径：11.4㎝（復元）。器高：11.0㎝（復元）。色調：内・外面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒と黒色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：2/5。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・29図－109、写真図版36－１－109）

110 底部片　底径:7.8㎝。器高：2.7㎝(残存)。厚さ：1.1～1.8㎝。色調：内･外面は浅黄色(2.5Y 7/4)、断面は黒褐色（2.5Y 3/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が剥離しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21･30図－110、写真図版38－２－110）

111 底部片　底径:9.0㎝。器高：2.4㎝(残存)。厚さ：1.1～2.0㎝。色調：内面は黒色(2.5Y 2/1)、外・断面はにぶい橙色（5YR 6/4）。胎土：粗。直径１～５㎜ の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・30図－111、写真図版38－２－111）

112 底部片　底径：10.2㎝（復元）。器高：2.9㎝（残存）。厚さ：1.2～2.0㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）、外・断面は明赤橙色（2.5YR 5/6）。胎土：やや粗。直径１～５㎜の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。底部裾外面はヨコナデ調整､体部内面はナデ調整を施している。大型壺の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30図－112、写真図版38－２－112）

113 底部片　底径：9.4（復元）㎝。器高：4.2㎝（残存）。厚さ：0.8～1.5㎝。色調：内・断面は褐灰色（10YR 4/1）、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒を



第 29 図　出土遺物（溝 18 甕・高杯・KY2001-2）

やや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。底部裾外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがナデ調整を施している。壺の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－113、写真図版 38－２－113）

114 底部片　底径：7.4 ㎝。器高：3.8 ㎝（残存）。厚さ：1.2～2.0 ㎝。色調：内・外・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部内外面はナデ調整、底部裾外面はヨコナデ調整を施している。甕の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－114、写真図版 38－２－114）

115 底部片　底径：8.0（復元）㎝。器高：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.7～2.5 ㎝。色調：内面は黒色（10YR 2/1）、外面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）、断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－115、写真図版 38－２－115）

116 底部片　底径：10.0 ㎝（復元）。器高：6.8 ㎝（残存）。厚さ：1.1～2.0 ㎝。色調：内面は灰白色（10YR 7/1）、外面は橙色（7.5YR 7/6）、断面は黒褐色（10YR 3/1）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。底部裾外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。大型壺の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 30 図－116、写真図版 38－２－116）

117 底部片　底径：7.6 ㎝（復元）。器高：7.8 ㎝（残存）。厚さ：0.7～2.0 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施している。甕の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－117、写真図版 38－２－117）

118 底部片　底径：16.0 ㎝（復元）。器高：4.8 ㎝（残存）。厚さ：1.3～3.0 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。体部外面はナデ調整、底部裾外面はヨコナデ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがヘラミガキ調整を施している。大型壺の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－118、写真図版 38－２－118）

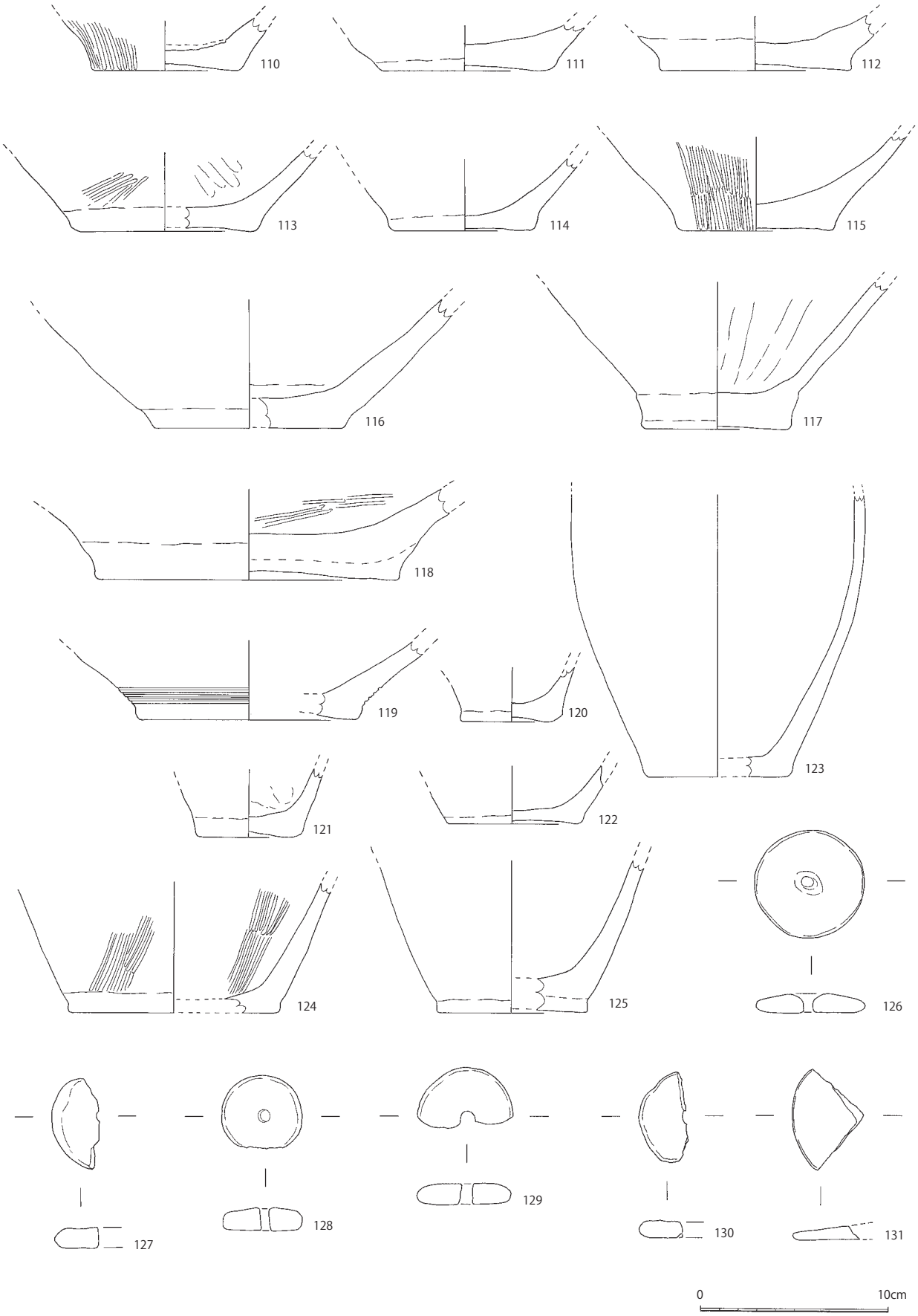
119 底部片　底径：11.4 ㎝（復元）。器高：4.2 ㎝（残存）。厚さ：0.8～1.9 ㎝。色調：内・断面は黒色（2.5Y 2/1）、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）で、一部は黒斑により黒色（2.5Y 2/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。底部裾外面に４条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。大型壺の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－119、写真図版 38－２－119）

120 底部片　底径：4.8 ㎝。器高：2.9 ㎝（残存）。厚さ：0.6～1.5 ㎝。色調：内・外面は橙色（5YR 6/8）、断面は黄灰色（2.5Y 5/1）。胎土：粗。直径１～５㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。甕の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－120、写真図版 38－２－120）

121 底部片　底径：5.4 ㎝。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.6～1.5 ㎝。色調：内・外・断面は淡黄色（2.5Y 8/4）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。底部裾外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。体部内面には指頭痕がみられる。甕の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 30 図－121、写真図版 38－２－121）

122 底部片　底径：7.6 ㎝（復元）。器高：3.1 ㎝（残存）。厚さ：0.5～1.5 ㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）、外・断面は灰黄褐色（10YR 5/2）。胎土：粗。直径１～３㎜ の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。底部裾外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。甕の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 21・30 図－122、写真図版 38－２－122）

123 底部片　底径：7.4 ㎝（復元）。器高：15.0 ㎝（残存）。厚さ：0.5～1.5 ㎝。色調：内・断面は灰黄色（2.5Y 6/2）、外面は明褐色（7.5YR 5/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の調整については、器壁が摩耗してい



第 30 図　出土遺物（溝 18 底部・土製品・KY2001-2）

るため不明である。体部内面はナデ調整を施している。甕の底部から胴部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・30図－123、写真図版38－２－123）

124 底部片　底径：11.0（復元）㎝。器高：7.0㎝（残存）。厚さ：0.7～1.9㎝。色調：内・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）、外面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。底部裾外面はヨコナデ調整、体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがヘラミガキ調整を施している。甕の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・30図－124、写真図版38－２－124）

125 底部片　底径：7.8（復元）㎝。器高：8.1㎝（残存）。厚さ：0.7～2.2㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。底部裾外面はヨコナデ調整、体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがナデ調整を施している。甕の底部である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第21・30図－125、写真図版38－２－125）

土製品

126 紡錘車　直径：5.8㎝。厚さ：0.4～1.0㎝。色調：表・裏面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。（第30図－126、写真図版36－２－126）

127 紡錘車　直径：4.8㎝。厚さ：0.6～1.1㎝。色調：表・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）、裏面は灰黄褐色（10YR 6/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第30図－127、写真図版36－２－127）

128 紡錘車　直径：4.3㎝。厚さ：0.8～1.2㎝。色調：表面は橙色（5YR 7/6）、裏・断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。（第21・30図－128、写真図版36－２－128）

129 紡錘車　直径：5.1㎝。厚さ：0.7～1.1㎝。色調：表面は褐色（7.5YR 4/4）、裏・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第30図－129、写真図版36－２－129）

130 紡錘車　直径：4.8㎝。厚さ：0.5～1.0㎝。色調：表・裏・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第30図－130、写真図版36－２－130）

131 円盤状土製品　直径：8.7㎝（復元）。厚さ：0.3～0.7㎝。色調：表面は浅黄色（2.5Y 7/4）、裏・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。蓋の可能性が考えられる。（第30図－131、写真図版36－２－131）

石製品

166 石鏃　全長：2.15㎝。最大幅：1.35㎝。厚さ：0.2～0.4㎝。重量：0.9g。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：完形。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第21・34図－166、写真図版40－１－166）

167 石鏃　全長：1.9㎝（残存）。最大幅：1.4㎝。厚さ：0.1～0.3㎝。重量：0.5g。色調：灰色（7.5Y 4/1）。残存度：先端が欠損。サヌカイト製（二上山産）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第21・34図－167、写真図版40－１－167）

168 石鏃　全長：2.1㎝（残存）。最大幅：1.6㎝。厚さ：0.1～0.5㎝。重量：1.0g。色調：黄灰色（2.5Y 6/1）。残存度：先端が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第34図－168、写真図版40－１－168）

169 石鏃　全長：2.7㎝。最大幅：2.0㎝（残存）。厚さ：0.1～0.35㎝。重量：1.6g。色調：黄灰色（2.5Y 5/1）。残存度：3/4。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第21・34図－169、写真図版40－１－169）

170 石鏃　全長：4.3㎝（残存）。最大幅：2.5㎝。厚さ：0.2～0.5㎝。重量：4.9g。色調：灰色（N

5/)。残存度：先端が欠損。サヌカイト製（二上山産）。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第21・34図－170、写真図版40－１－170）

171 石鏃　全長：1.9㎝。最大幅：2.3㎝。厚さ：0.1～0.6㎝。重量：2.1g。色調：灰色（5Y 5/1）。残存度：完形。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。先端部分には自然面や加工途中の面がみられる。弥生時代の打製凹基無茎式石鏃の未成品と思われる。（第21・34図－171、写真図版40－１－171）

172 打製石器　長さ：1.8㎝。最大幅：1.3㎝。厚さ：0.1～0.3㎝。重量：0.5g。色調：灰色（N 5/）。サヌカイト製（二上山産）。片側だけを刃部とする削器（サイドスクレイパー）などの破片の可能性があると思われる。（第21・34図－172、写真図版40－１－172）

173 石錘　長さ:3.1㎝。最大幅:3.9㎝。厚さ：0.3～1.4㎝。重量:18.5g。色調：灰白色(2.5Y 7/1)。紐かけ部は部分的に敲打により整形している。（第34図－173、写真図版40－１－173）

174 円盤状石製品　長さ:3.9㎝。幅:4.3㎝。厚さ：0.6～1.3㎝。重量:32.0g。色調：灰色(5Y 6/1)。表裏面ともに全面に細かな擦痕がみられ、全面的に磨いている用途不明の石製品である。（第 21・34図－174、写真図版40－１－174）

175 磨製石製品　長さ：8.0㎝。最大幅：7.3㎝。厚さ：2.5～6.1㎝。色調：灰白色（2.5Y 7/1）。全面に細かな擦痕がみられ、全面的に磨いている用途不明の石製品である。（第21・34図－175、写真図版40－１－175）

これら以外に、溝18からは合計14.9gの二上山産と思われる剥片、石核（写真図版40－２）、合計77.5gの金山産の可能性がある剥片、石核が出土した（写真図版41－１）。製品との合計重量は、二上山産と思われるもの20.8g、金山産の可能性があるもの83.1gであった。

溝19

弥生土器

132 蓋　口径：18.0㎝（復元）。器高：2.6㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。口縁部内面の外周は約2.5㎝の幅で灰黄褐色（10YR 5/2）に変色している。円盤状のつまみが付く形態と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・31図－132、写真図版39－１－132）

133 蓋　口径：19.0㎝（復元）。器高：1.9㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。口縁部内面の外周は約2.5㎝の幅で灰黄褐色（10YR 5/2）に変色している。円盤状のつまみが付く形態と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・31図－133、写真図版39－１－133）

134 蓋　口径：22.0㎝（復元）。器高：2.5㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。口縁部内面の外周には約3.5㎝の幅でススが付着している。笠形の蓋と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第30図－134、写真図版39－１－134）

135 蓋　口径：23.0㎝（復元）。器高：2.6㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。口縁部内面の外周には約3.5㎝の幅でススが付着している。笠形の蓋と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・31図－135、写真図版39－１－135）

136 壺　長さ：4.0㎝（残存）。最大幅：7.4㎝（残存）。厚さ：0.7～0.9㎝。色調：内・断面はにぶい橙色（5YR 6/4）、外面は赤褐色（5YR 4/6）。胎土：やや粗。直径１～２㎜ の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部付近の破片と思われる。胴部にヘラ描きによる１条の沈線を巡らし、その上部に３条を１単位とする斜行文を描いている。体部内外面の調

整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第31図－136、写真図版39－１－136）

137壺　長さ：6.9㎝（残存）。最大幅：3.7㎝（残存）。厚さ：0.6～0.9㎝。色調：内・外・断面は明黄褐色（10YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部付近の破片と思われる。胴部にヘラ描きによる１条の沈線を巡らし、その上部に３条が１単位と思われる斜行文を描いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第31図－137、写真図版39－１－137）

138壺　長さ：5.2㎝（残存）。最大幅：4.2㎝（残存）。厚さ：1.0～1.2㎝。色調：内・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）、外面は黄灰色（2.5Y 4/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部付近の破片と思われる。胴部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがナデ調整を施している。大型壺と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・31図－138、写真図版39－１－138）

139壺　底径：8.0㎝。器高：16.0㎝（残存）。厚さ：0.4～1.6㎝。色調：内・外・断面は明赤褐色（2.5YR 5/6）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒と金雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがヘラミガキ調整、体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・31図－139、写真図版39－１－139）

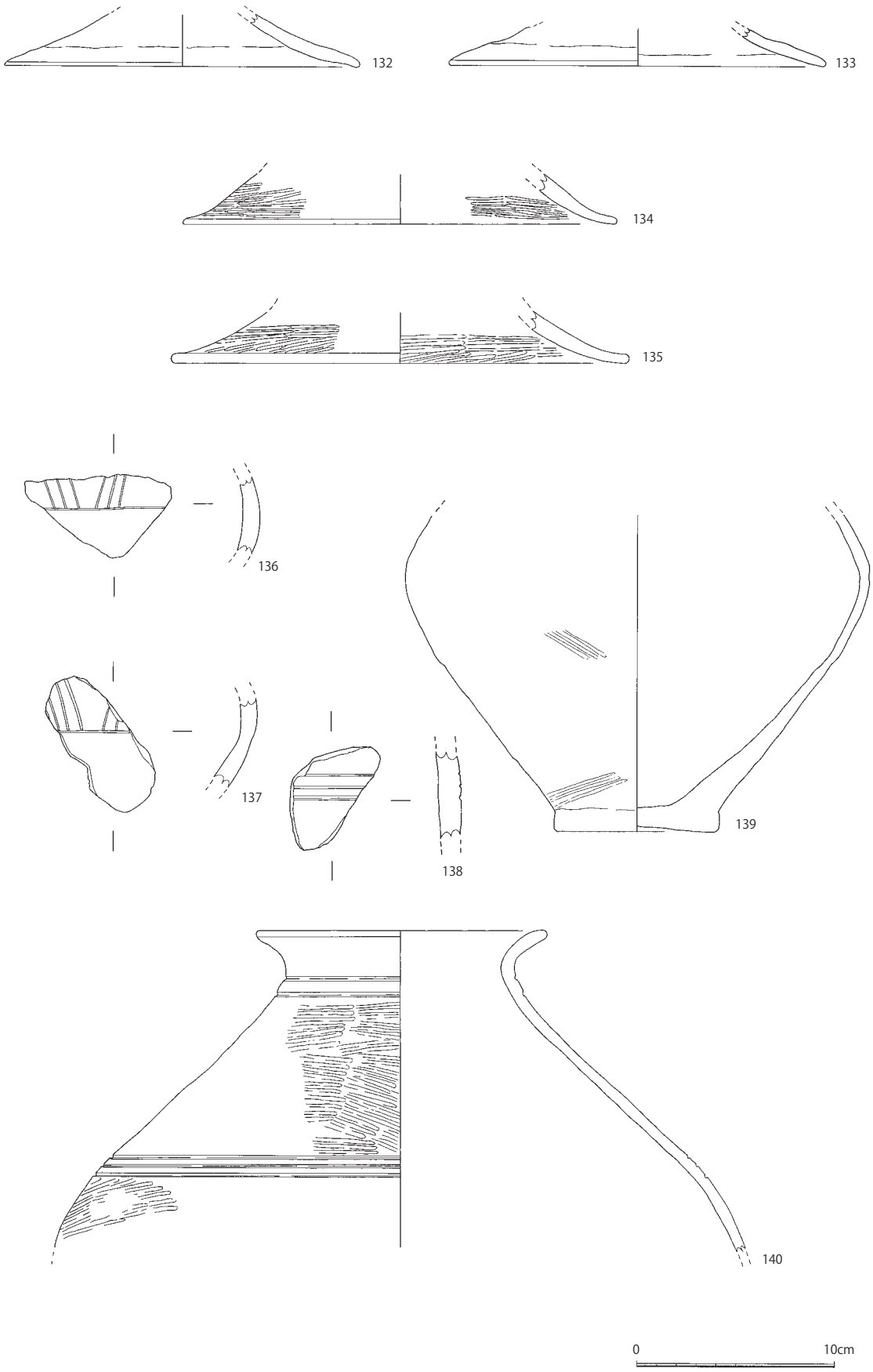
140壺　口径：14.4㎝（復元）。器高：16.0㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7㎝。色調：内・外・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）。胎土：密。直径１㎜以下の白色砂粒を少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に太い２条のヘラ描き沈線、胴部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるが丁寧なヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・31図－140、写真図版39－１－140）

141甕　長さ：6.5㎝（残存）。最大幅：5.1㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）、外面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：やや粗。直径１㎜の以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。甕の口縁部の破片。口縁端部には刻み目が施されている。肩部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は板状工具によるナデ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・32図－141、写真図版39－１－141）

142甕　長さ：5.4㎝（残存）。最大幅：3.4㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7㎝。色調：内・断面は橙色（7.5YR 8/2）、外面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。甕の肩部付近の破片と思われる。肩部に３条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第32図－142、写真図版39－１－142）

143甕　口径：22.0㎝（復元）。器高：8.9㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8㎝。色調：内・外・断面は褐色（7.5Y 4/3）。胎土：粗。直径１～５㎜の白色砂粒と小石を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。体部外面の調整については、器壁が著しく摩耗しているため不明である。口縁部内面はヨコナデ調整を施している。体部内面の口縁部下全面に炭化物が付着している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・32図－143、写真図版39－１－143）

144甕　口径：25.0㎝（復元）。器高：3.7㎝（残存）。厚さ：0.3～0.7㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5Y 7/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開いて端部は上方に延び、刻み目を施している。肩部に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部外面はヨコナデ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第32図－144、写真図版



第 31 図　出土遺物（溝 19 蓋・壺・KY2001-2）

39－１－144）

145 鉢　口径：26.0 ㎝（復元）。器高：5.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色(7.5Y 7/4)。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は外上方に開き、丸い端部に至る。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・32 図－145、写真図版 39－１－145）

146 大型鉢　口径：39.0 ㎝（復元）。器高：22.0 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.9 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部は底部から外傾しながら段を有する頸部近くでまっすぐ立ち上がり、口縁部は若干外上方に開き、丸い端部に至る。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがヘラミガキ調整が施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 32 図－146、写真図版 39－１－146）

147 底部片　底径：9.8 ㎝（復元）。器高：4.7 ㎝（残存）。厚さ：1.1～2.0 ㎝。色調：内・断面は灰黄色（2.5Y 7/2)、外面は浅黄色（2.5Y 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 1/2。体部外面は板状工具によるナデ調整、底部外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。壺の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・32 図－147、写真図版 39－１－147）

148 底部片　底径：7.4 ㎝。器高：3.9 ㎝（残存）。厚さ：0.9～2.2 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒と黒色粒子をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。甕の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・32 図－148、写真図版 39－１－148）

石製品

163 石鏃　全長：2.15 ㎝。最大幅：1.6 ㎝。厚さ：0.1～0.2 ㎝。重量：0.6g。色調：灰色（5Y 6/1)。残存度：先端が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある)。弥生時代の打製平基無茎式石鏃と思われる。（第 22・34 図－163、写真図版 40－１－163）

これ以外に、溝 19 からは合計 10.9g の金山産の可能性がある剥片が出土した（写真図版 41－１）。

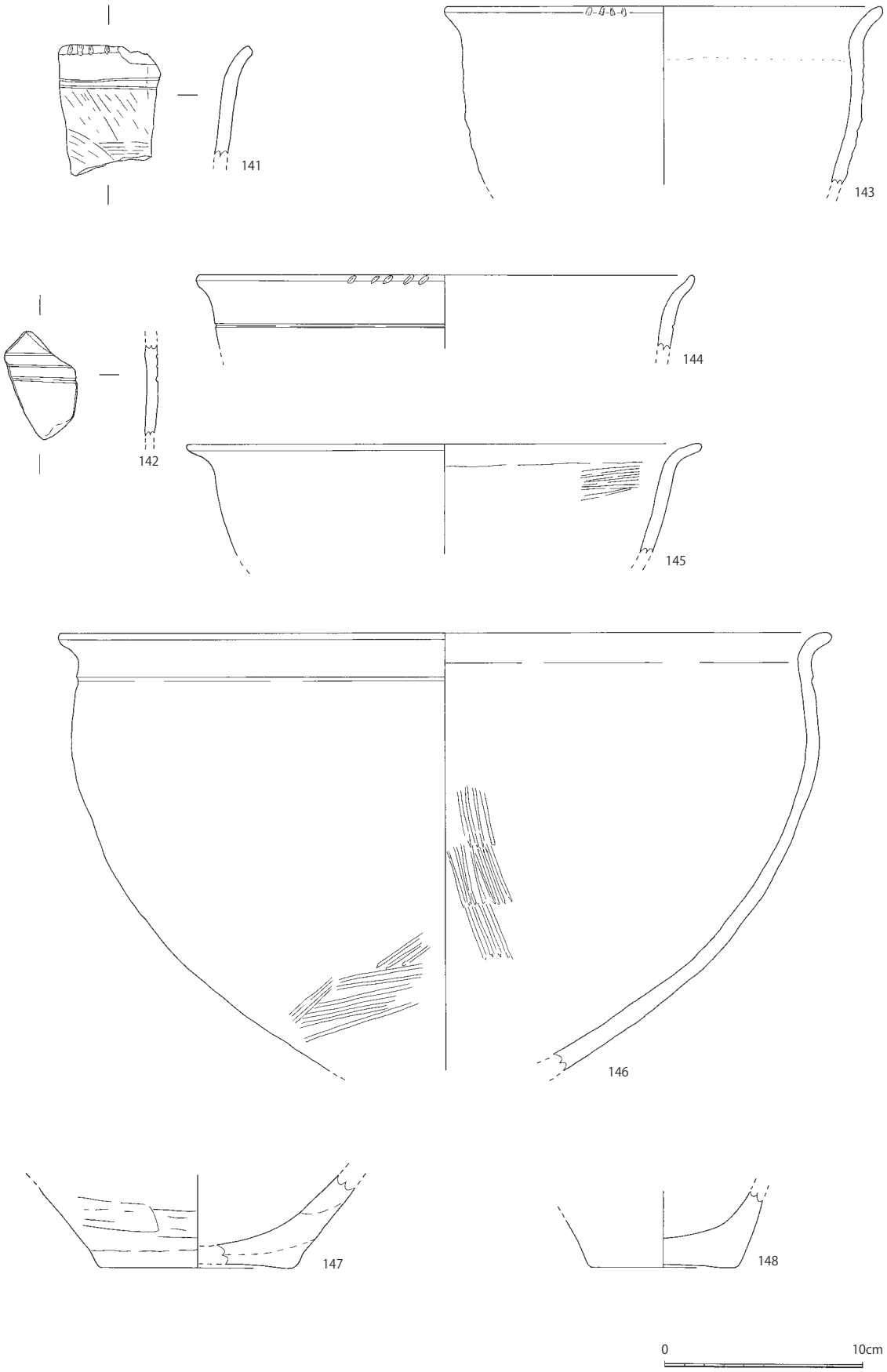
溝 20

弥生土器

149 壺　長さ：5.5 ㎝（残存）。最大幅：6.9 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.8 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3)、外面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：密。直径１～２㎜ の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部の破片と思われる。胴部に削り出しの段を形成し、その下位に４条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面には指頭痕がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－149、写真図版 39－２－149）

150 壺　長さ：6.4 ㎝（残存）。最大幅：7.3 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 4/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の胴部の破片と思われる。胴部に削り出しの段を形成し、その下位に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがヘラミガキ調整を施している。体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－150、写真図版 39－２－150）

151 壺　口径：14.0 ㎝（復元）。器高：3.7 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/2)、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒と赤色粒子を少量、黒色粒子と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は短い頸部から若干開き、丸い端部に至る。頸部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部外面はヨコナデ調整、



第 32 図　出土遺物（溝 19 甕・鉢・底部・KY2001-2）

体部外面の調整については、小片のため不明である。体部内面はヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－151、写真図版 39－２－151）

152 甕　口径:18.0 ㎝(復元)。器高：4.0 ㎝(残存)。厚さ：0.6～1.0 ㎝。色調：内面は橙色(7.5YR 6/6)、外・断面は明黄褐色（10YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。体部内外面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－152、写真図版 39－２－152）

153 甕　口径:18.6 ㎝(復元)。器高：6.0 ㎝(残存)。厚さ：0.4～0.6 ㎝。色調：内面は橙色(7.5YR 7/6)、外・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。口縁部外面は細かいハケ調整、口縁部内面はやや粗いハケ調整を施している。体部内外面の調整については、器壁が著しく摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－153、写真図版 39－２－153）

154 甕　口径：22.0 ㎝（復元）。器高：5.7 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。肩部に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は板状工具によるナデ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 33 図－154、写真図版 39－２－154）

155 甕　口径：11.4 ㎝（復元）。器高：11.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・断面は橙色（5YR 6/8)、外面は黒色（7.5YR 2/1）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。肩部に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面は器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるが、ナデ調整を施した指の痕跡がみられる。体部外面は全面にススが付着している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－155、写真図版 39－２－155）

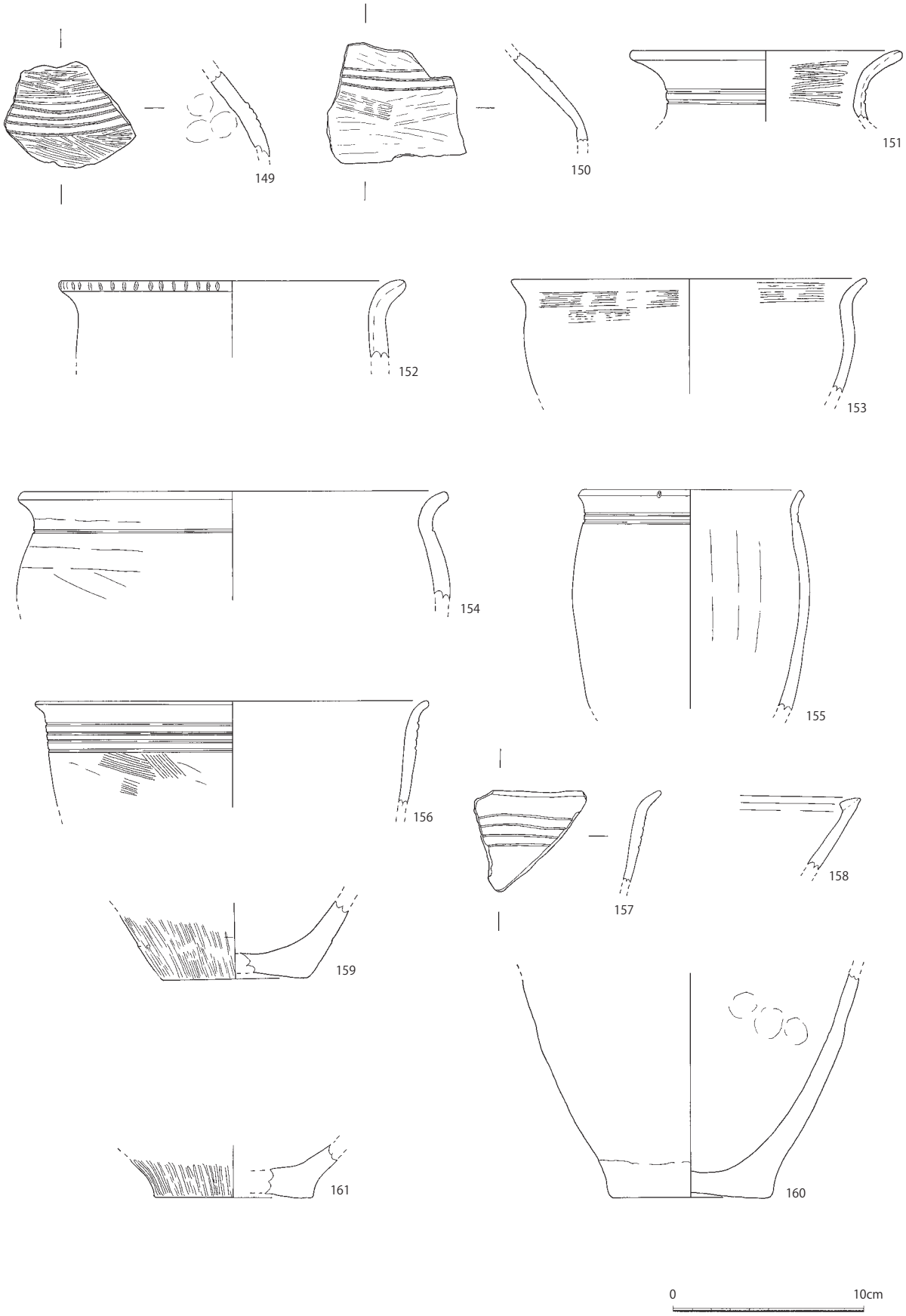
156 甕　口径：20.6 ㎝（復元）。器高：5.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は褐色（7.5YR 4/3）。胎土：やや粗。直径１～２㎜ の白色砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。肩部に４条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部外面はハケ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－156、写真図版 39－２－156）

157 甕　長さ：5.3 ㎝（残存）。最大幅：5.9 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。甕の口縁部の破片。肩部に４条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明瞭ではあるがナデ調整を施していると思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－157、写真図版 39－２－157）

158 高坏　長さ：3.9 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。高坏の口縁部の破片と思われる。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼っている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 33 図－158、写真図版 39－２－158）

159 底部片　底径：7.6 ㎝（復元）。器高：4.0 ㎝（残存）。厚さ：1.0～2.0 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。甕の底部と思われる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 22・33 図－159、写真図版 39－２－159）

160 底部片　底径：8.2 ㎝。器高：11.7 ㎝（残存）。厚さ：0.6～2.0 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：粗。直径１～５㎜の白色砂粒と小石を多く含む。焼成：良好。残存



第 33 図　出土遺物（溝 20・KY2001-2）

度：底部のみ完形。体部外面はナデ調整を施している。甕の底部である。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・33図－160、写真図版39－２－160）

161 底部片　底径：8.2㎝（復元）。器高：2.8㎝（残存）。厚さ：0.9～2.0㎝。色調：内・外・断面はにぶい赤褐色（5YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第22・33図－161、写真図版39－２－161）

石製品

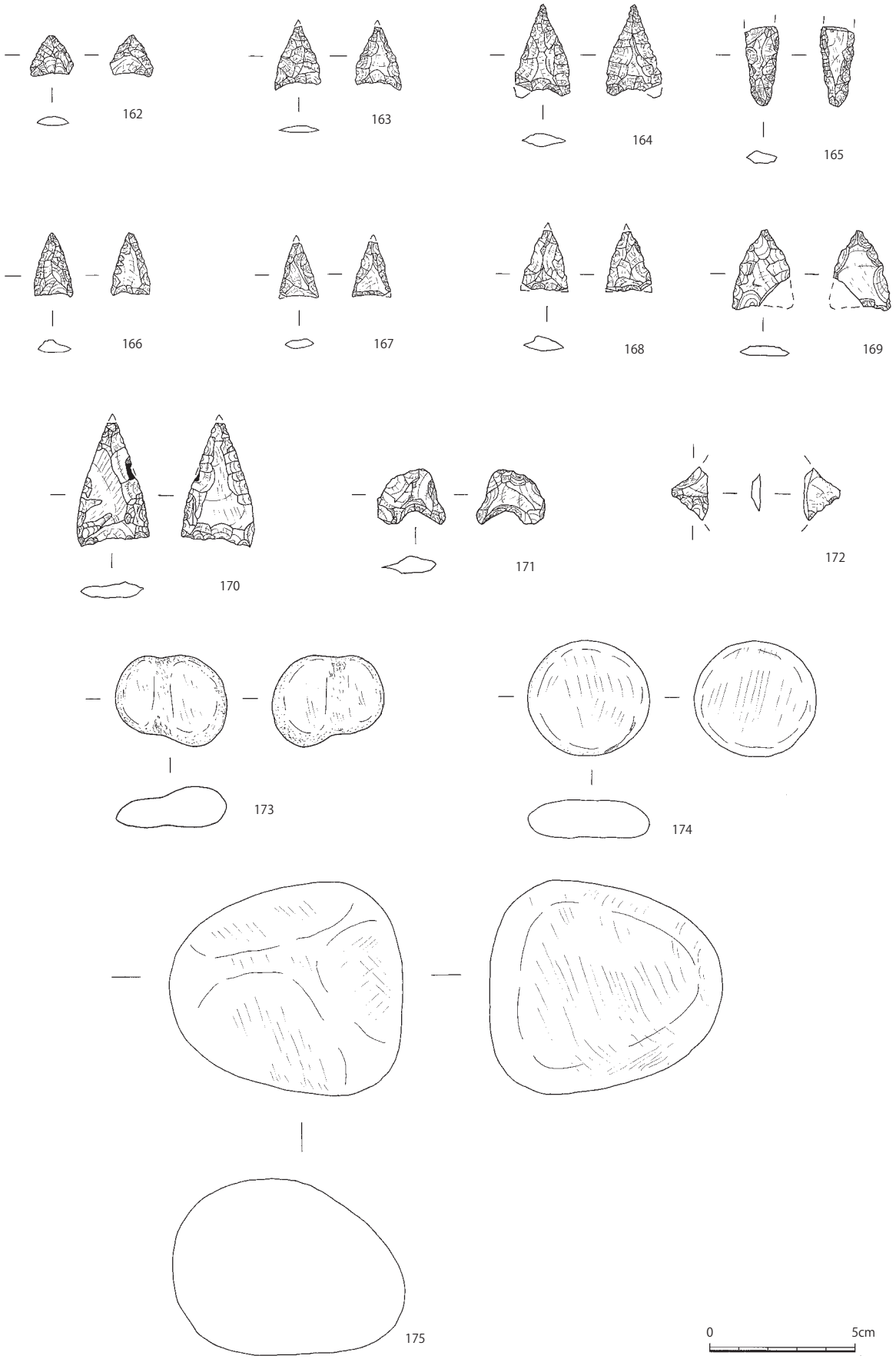
164 石鏃　全長：3.1㎝。最大幅：1.85㎝。厚さ：0.1～0.4㎝。重量：1.8g。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：基部の一部が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製凹基無茎式石鏃と思われる。（第34図－164、写真図版40－１－164）

165 石錐　全長：2.7㎝（残存）。最大幅：1.2㎝。厚さ：0.1～0.4㎝。重量：1.4g。色調：灰色（5Y 7/1）。残存度：基部が欠損。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製凹基無茎式石鏃と思われる。（第22・34図－165、写真図版40－１－165）

これら以外に、溝 20 からは合計 30.3g の金山産の可能性がある剥片、石核が出土した（写真図版41－１）。

このように、遺構出土のサヌカイト製石器・剥片・石核の合計重量は二上山産と思われるもの 56.1g、金山産の可能性があるもの 145.7g であった。遺物包含層出土のものとの総計重量は、二上山産と思われるもの 152.1g、金山産の可能性があるもの 337.5g であった。なお、これらの弁別はすべて目視にて行ったため、異同の可能性があることを断っておく。

（村上・實盛）



第 34 図　出土遺物（遺構石器・KY2001-2）

第５章　雁屋遺跡 2002－１次（ＫＹ2002－１）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内東寄りにあたり、東には 2003-1 次調査地区が、西には 2001-2 次調査地区がある。調査前現況は宅地および駐車場であった。宅地等造成のために 0.3～0.5mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.2mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.4～0.6mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が古墳時代後期の水田面である第１遺構面であった。その水田耕作土は暗灰色系の粘質土であった。第１遺構面の下層に 0.2～0.4mほど古墳時代の遺物包含層が堆積し、その下面が第２遺構面であった。その下層は黒色系の粘土や青色系のシルトが堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 37 図）。

（村上・實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに古墳時代に属するもので、溝、土坑、水田、旧河川があった（第 35・36 図）。遺構面は２面検出し、第１遺構面は古墳時代後期の水田面、第２遺構面は古墳時代中期末ごろの集落であった。遺構面の標高は第１遺構面東端で T.P. ＋5.990m、西端で T.P. ＋5.387m、第２遺構面東端で T.P. ＋5.352m、西端で T.P. ＋5.115mであった。遺構の番号は、遺物が出土した遺構のみ、種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

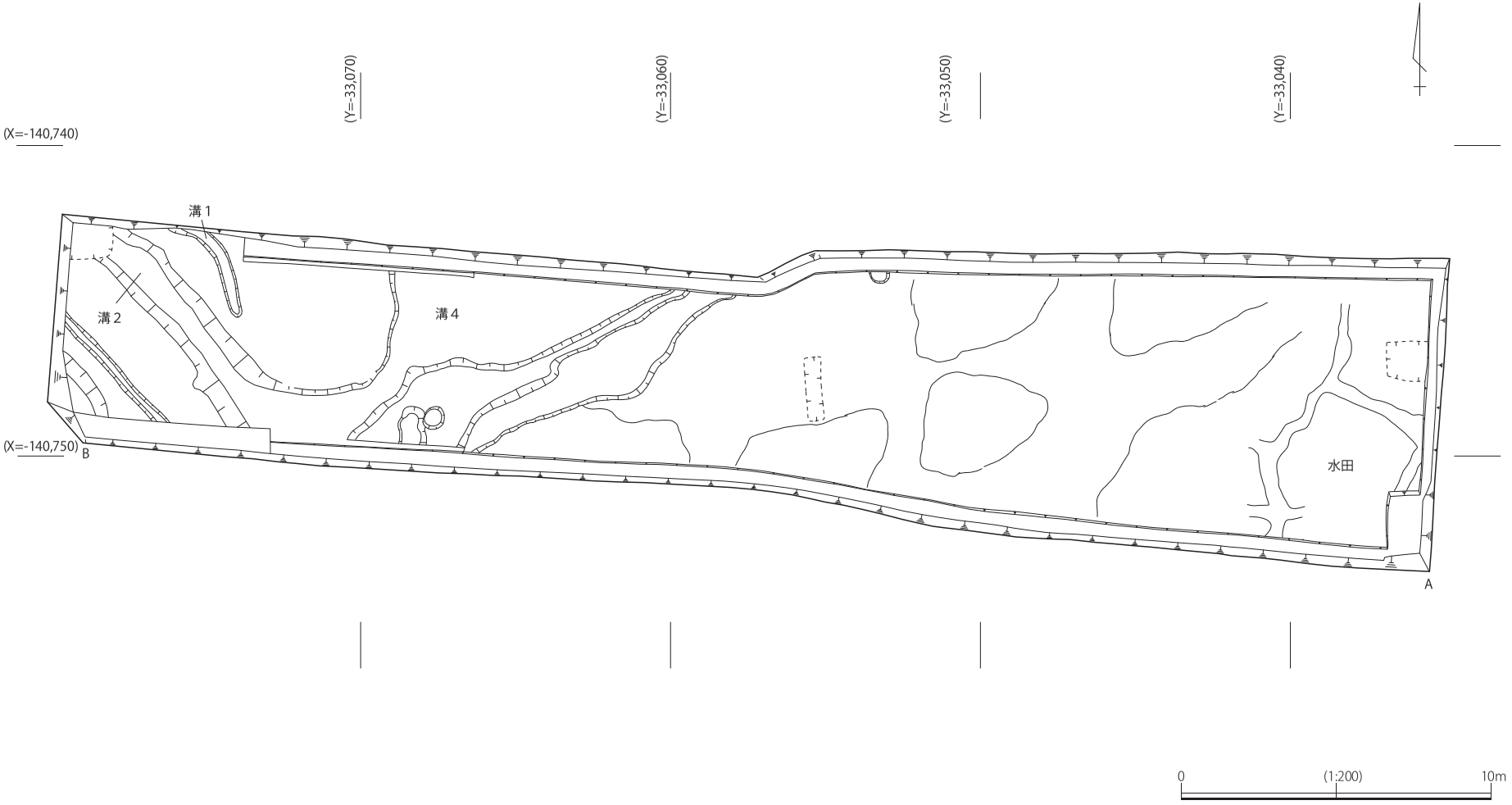
【第１遺構面】

溝１　調査地区北西側で検出した。南から北へと向いた溝で、北端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ 3.9m、最大幅 0.5m、深さは 0.42mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋5.442m、底部が T.P. ＋5.362mで、南端部分の上端は T.P. ＋5.444m、底部は T.P. ＋5.402mであった（第 35 図）。須恵器坏身（第 38 図－182）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

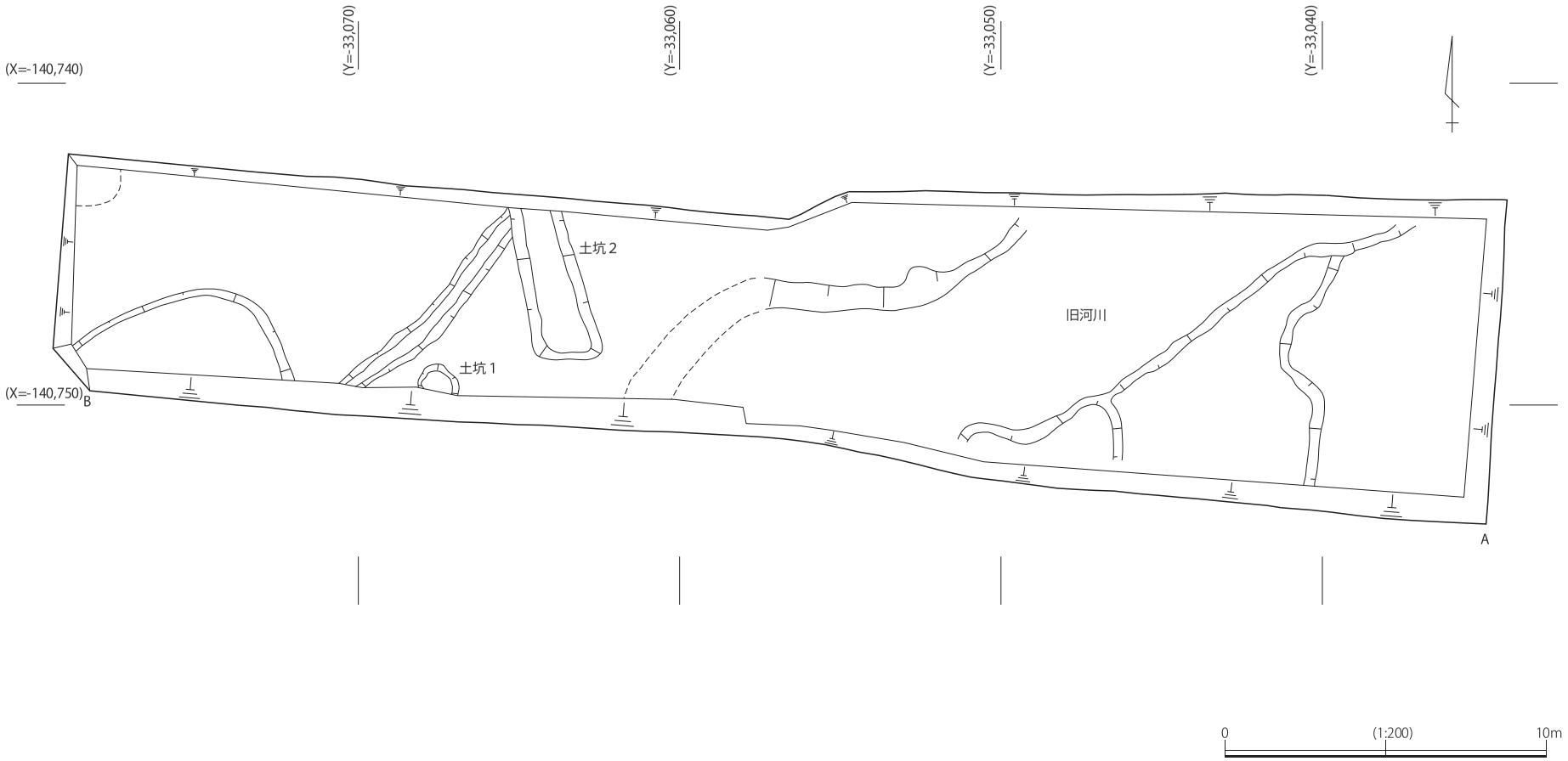
溝２　調査地区西側で検出した。北西から南東へと向いた溝で、北西端は調査地区外であり、南東端は溝４へと合流する。検出できた規模は長さ 7.0m、最大幅 1.7m、深さは約 0.6mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋5.391m、底部が T.P. ＋5.163mで、南端部分の上端は T.P. ＋5.406m、底部は T.P. ＋4.789mであった（第 35 図）。須恵器坏身（第 38 図－183）などが出土した。出土遺物と堆積状況から溝４と同じ古墳時代後期の遺構と考えられる。

溝４　調査地区中央やや西寄りで検出した。北東から南西へと向いた溝で、遺構中央部分がさらに一段深くなり、両端は調査区外である。南東端付近で溝２が分流する。検出できた規模は長さ 11m、幅 4.3～8.8m、深さは 0.45mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋5.790m、底部が T.P. ＋5.450mで、南端部分の上端は T.P. ＋5.640m、底部は T.P. ＋5.380mであった（第 35 図）。須恵器坏蓋（第 38 図－184）、坏身（第 38 図－185）、広口壷（第 38 図－186）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

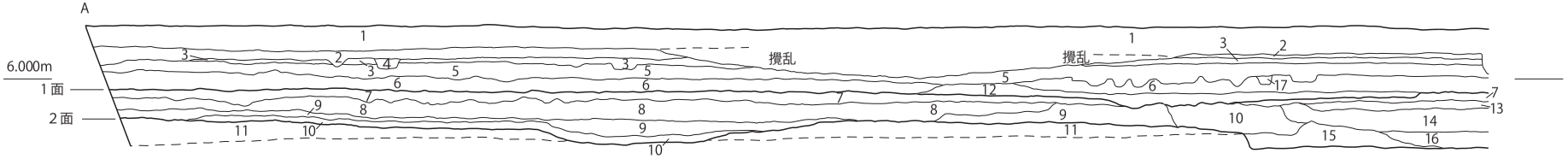
水田　調査地区東半で検出した水田面である。溝４より東側はその状況からすべて水田面であるとみられるが、顕著な畦畔を検出できず、畦畔を明確に検出できたのは調査地区東隅のみであった。地形に即した区画の水田とみられる。もっとも残りの良かった区画の規模は東西 4.5m、南北 3.5mのいびつな五角形であり、面積は 15.75 ㎡であった。水田面全体の標高は北東端が T.P. ＋5.880m、北西端が T.P. ＋5.910m、南東端が T.P. ＋5.870m、南西端が T.P. ＋5.860mであった（第 35 図）。検出状況から溝４と同時期に存在したとみられる。

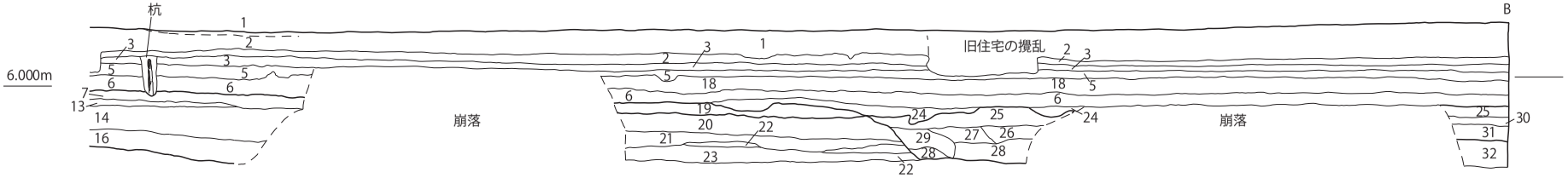


第35図　第1遺構面平面図　(KY2002-1)



第 36 図　第 2 遺構面平面図　(KY2002-1)





0 (1:100) 5m

1 盛土・アスファルト
2 耕土
3 床土
4 灰色砂質土 N 5/
5 黄灰色粘質土 2.5Y 6/6 中世包含層
6 黄橙色粘質土 10YR 8/8
7 暗灰色粘質土 N 3/
8 灰白色粗砂 5Y 8/2
9 明青灰色粗砂 5B 7/1
10 青灰色シルト 5B 6/1
11 黒色粘土 N 2/
12 暗灰色粘土 N 3/
13 暗灰色粗砂 N 3/
14 灰白色粗砂 5Y 8/1 古墳時代包含層
15 明青灰色細砂 5B 7/1
16 灰白色粗砂 N 7/ 弥生土器出土
17 淡黄色シルト 5Y 8/3
18 橙色粘質土 7.5YR 7/6
19 暗灰色砂質土 N 3/
20 明青灰色シルト 5BG 7/1
21 青灰色シルト 5BG 6/1
22 灰白色粗砂 N 7/
23 灰色粘土 N 4/
24 灰白色細砂 7.5Y 8/2
25 灰色シルト N 5/
26 灰色粘質土 N 4/ 粗砂混じり
27 灰色シルト N 4/
28 灰白色細砂 7.5Y 8/1
29 暗灰色粘土 N 3/
30 灰白色細砂 7.5Y 8/2
31 灰色粘質土 N 5/
32 明緑灰色粗砂 10GY 7/1

第 37 図 調査地区断面図 (KY2002-1)

【第２遺構面】

土坑１　調査地区中央西寄りで検出した。直径 1.3m、深さ約 0.3mで円形を呈する。南端の一部は調査地区外である。上端の標高は T.P.＋5.249m、底部は T.P.＋4.920mであった（第 36 図）。須恵器坏蓋（第 38 図－187）などが出土した。出土遺物から古墳時代中期末の遺構と考える。

土坑２　調査地区中央西寄りで検出した。幅 2.1m、検出できた長さ 4.7m、深さ約 0.5mで隅丸長方形を呈する。北端は調査地区外にのびる。上端の標高は T.P.＋5.285m、底部は T.P.＋4.796mであった（第 36 図）。土師器高坏（第 38 図－188）などが出土した。古墳時代中期末～後期初頭の遺構と考える。

旧河川　調査地区東側で検出した。北東から南西へと向いた溝で、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 15.5m、幅 6.0m、深さは約 0.5mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋5.259m、底部が T.P.＋4.805mで、南端部分の上端は T.P.＋5.257m、底部は T.P.＋4.945mであった（第 36 図）。縄文土器片（第 38 図－189）などが出土した。また、この旧河川の肩部東側黒色粘質土からはサヌカイト製の削器（第 38 図－181）が出土した。

（村上・實盛）

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

韓式系土器

176 平底甕　最大長：4.0 ㎝（残存）。最大幅：4.5 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。土師質。体部外面は格子叩き調整、体部内面はナデ調整を施している。（第 38 図－176、写真図版 41－２－176）

貿易陶磁器

177 白磁碗　口径：15.4 ㎝（復元）。器高：4.1 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ～0.7 ㎝。色調：内・外面は灰白色（5Y 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は玉縁状を呈している。12 世紀前半のものと思われる。（第 38 図－177、写真図版 41－２－177）

178 青磁鎬蓮弁文碗　口径：16.0 ㎝（復元）。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外面はオリーブ灰色（10Y 6/2）、断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。13 世紀初頭～13 世紀前半のものと思われる。（第 38 図－178、写真図版 41－２－178）

179 青磁鎬蓮弁文碗　底径：5.0 ㎝（復元）。器高：2.7 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.9 ㎝。色調：内・外面はオリーブ灰色（10Y 6/2）、断面は灰白色（10Y 7/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。13 世紀初頭～13 世紀前半のものと思われる。（第 38 図－179、写真図版 41－２－179）

須恵質土器

180 片口鉢　口径：26.2 ㎝（復元）。器高：4.2 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は灰色(N 5/)。胎土：密。直径１～３㎜の砂粒と小石を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。東播系の製品。第Ⅱ期第２段階。12 世紀末～13 世紀初頭のものと思われる。（第 38 図－180、写真図版 41－２－180）

石器

181 削器　長さ：8.4 ㎝。最大幅：5.3 ㎝。厚さ：1.1 ㎝。重量：68.0g。色調：灰色（N 5/）。サヌカイト製（二上山産）。片側だけを刃部とする削器（サイドスクレイパー）である。第２遺構面旧河川の肩部東側黒色粘質土から出土した。出土層位より縄文時代のものと思われる。（第 38 図－181、写真図版 41－２－181）

これ以外に、包含層内からは馬歯が出土した（写真図版 42－２）。

２．第１遺構面遺構出土遺物

溝１

須恵器

182 坏身　口径：11.8 ㎝（復元）。器高：3.5 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外面は灰白色（10YR 7/1）、断面は褐灰色（7.5YR 6/1）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は内傾し、端部には段を有する。体部外面の下部 1/2 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式）。６世紀前半のものと思われる。（第 38 図－182、写真図版 42－１－182）

溝２

須恵器

183 坏身　口径：12.6 ㎝（復元）。器高：3.7 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部には段を有する。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式１段階（MT15 型式）。６世紀前半のものと思われる。（第 38 図－183、写真図版 42－１－183）

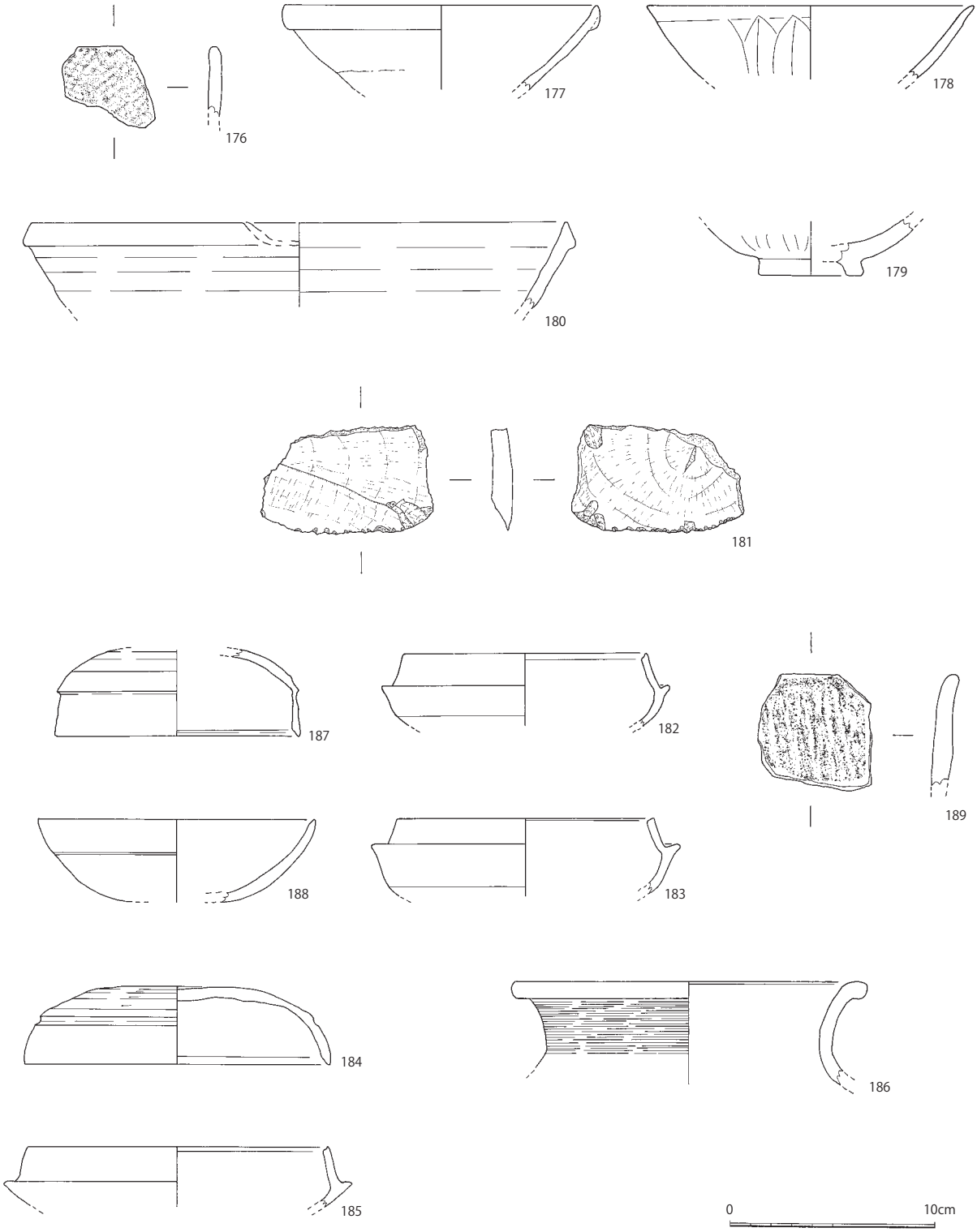
溝４
須恵器
184 坏蓋　口径：14.8 ㎝（復元）。器高：3.8 ㎝（復元）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。天井部の稜線は明瞭で浅い沈線状で、口縁部内面には若干内傾している。天井部外面の 3/4 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。天井部外面中央の一部に赤彩がみられる。Ⅱ型式２段階（TK10 号窯段階）。６世紀中頃のものと思われる。（第 38 図－184、写真図版 42－１－184）
185 坏身　口径：14.6 ㎝（復元）。器高：2.9 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部には段を有する。Ⅱ型式２段階（TK10 号窯段階）。６世紀中頃のものと思われる。（第 38 図－185、写真図版 42－１－185）
186 広口壺　口径：17.0 ㎝（復元）。器高：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。公園端部は肥厚し、断面方形を呈する。頸部外面にはカキメ調整を施している。Ⅱ型式３段階（MT85 号窯段階）。６世紀後半のものと思われる。（第 38 図－186、写真図版 42－１－186）

３．第２遺構面遺構出土遺物
土坑１
須恵器
187 坏蓋　口径：12.0 ㎝（復元）。器高：4.2 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。天井部の稜線は明瞭で、口縁部内面には内傾する段をもつ。天井部外面の 2/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅰ型式５段階（TK47 型式）。５世紀後半のものと思われる。（第 38 図－187、写真図版 42－１－187）

土坑２
土師器
188 高坏　口径：13.6 ㎝（復元）。器高：4.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の口縁部下に浅い１条の沈線を巡らしている。５世紀後半（TK47 型式）～６世紀前半のものと思われる。（第 38 図－188、写真図版 42－１－188）

旧河川
縄文土器
189 深鉢　最大長：5.7 ㎝（残存）。最大幅：5.6 ㎝（残存）。厚さ：0.7～1.0 ㎝。色調：内・外・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：粗。直径１～３㎜程度の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は貝殻条痕による調整を施している。著しい摩滅はみられない。滋賀里Ⅲｂ式。縄文晩期前半のものと思われる。（第 38 図－189、写真図版 42－１－189）

（村上・實盛）



第 38 図　出土遺物（KY2002-1）

第６章　雁屋遺跡 2003－１次（ＫＹ2003－１）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内東寄りにあたり、東には 2012-1 次調査地区が、西には 2002-1 次調査地区がある。調査前現況は宅地であった。宅地造成のために 0.2～0.5mほど盛土されていた。その下層は 0.1～0.2mほどの耕土であり、その下層はおよそ 0.1mの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.1～0.2mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が第１遺構面であった。その下層には 0.1～0.3mほど中世～古墳時代の遺物包含層が堆積し、その下面が第２遺構面であった。その下層は 0.4～0.6mほど古墳時代以前の遺物包含層や洪水砂等が堆積し、その下面が第３遺構面であった。その下層は暗灰色系の粘土が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 39 図）。

（村上・實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに古墳時代以前から中世に属するもので、溝、土坑、旧河川があった（第 39 図）。遺構面は３面検出し、第１遺構面は中世の耕作面、第２遺構面は古墳時代と思われる溝を検出した。第２遺構面の基盤層は黒褐色系の粘土で、隣接する 2002-1 次調査の成果をあわせると、この面の溝１より西側は、顕著な畦畔を検出できなかったが古墳時代後期の水田面とみられる。第３遺構面では縄文時代の遺物を含む自然河川を検出した。遺構面の標高は第１遺構面東端で T.P.＋6.610m、西端で T.P.＋6.140m、第２遺構面東端で T.P.＋6.460m、西端で T.P.＋6.090m、第３遺構面東端で T.P.＋5.757m、西端で T.P.＋5.380mであった。遺構の番号は、遺物が出土した遺構のみ、遺構面ごとおよび種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

【第１遺構面】

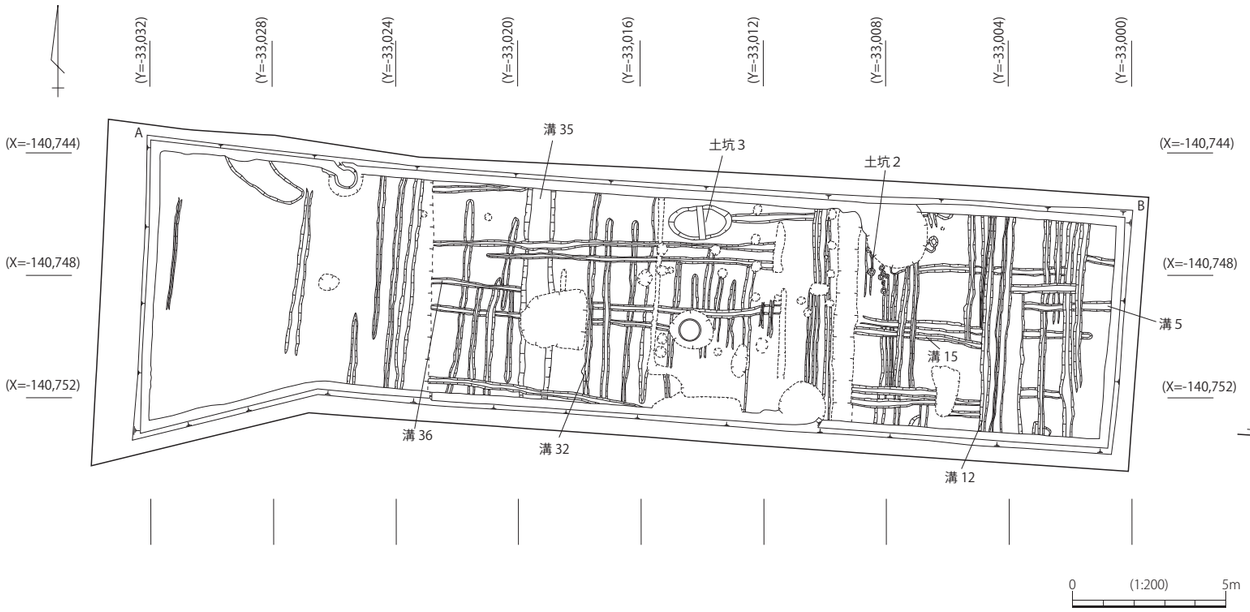
土坑２　調査地区東寄りで検出した。直径 0.25m、深さ 0.11mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.550m、底部は T.P.＋6.440mであった（第 39 図）。瓦器碗（第 41 図－196）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

土坑３　調査地区中央北寄りで検出した。長径 2.1m、短径 1.1m、深さ 0.09mで惰円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.440m、底部は T.P.＋6.350mであった（第 39 図）。瓦器碗小片などが出土した。出土遺物から中世の遺構とみられる。

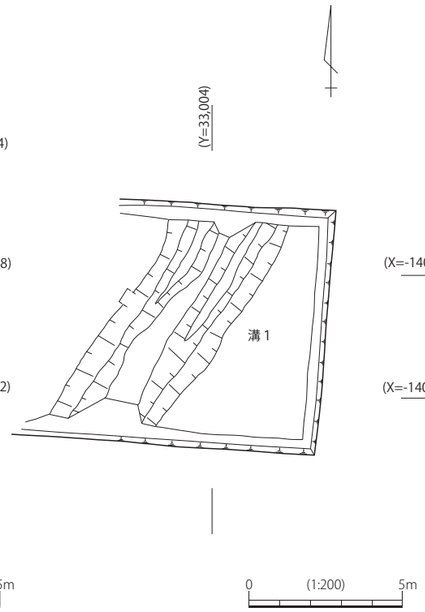
溝５　調査地区東端で検出した。西から東へと向いた溝で、東端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ 2.8m、最大幅 0.3m、深さは 0.09mである。標高は東端部分の上端が T.P.＋6.540m、底部が T.P.＋6.470mで、西端部分の上端は T.P.＋6.550m、底部は T.P.＋6.490mであった（第 39 図）。土師器皿（第 41 図－197）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

溝 12　調査地区東寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、両端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ 7.0m、最大幅 0.4m、深さは 0.07mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋6.560m、底部が T.P.＋6.520mで、南端部分の上端は T.P.＋6.590m、底部は T.P.＋6.520mであった（第 39 図）。須恵器片口鉢（第 41 図－198）などが出土した。出土遺物および他の遺構との切り合いから中世の鋤溝遺構と考えられる。

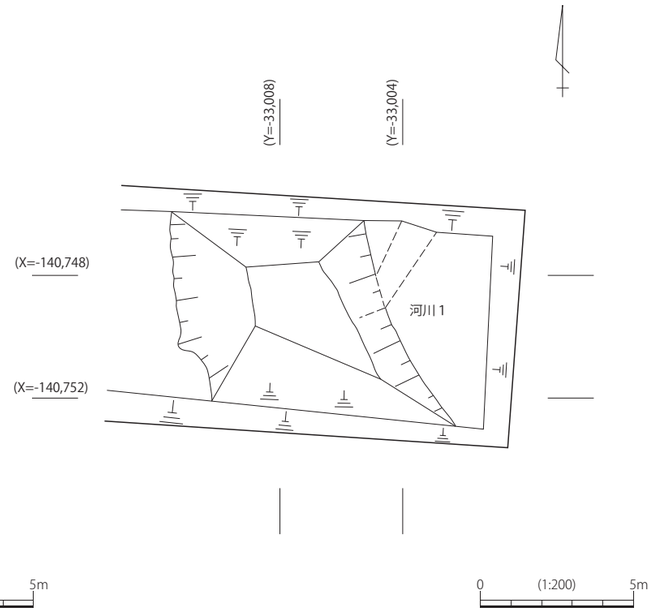
溝 15　調査地区東寄りで検出した。東から西へと向いた溝で、東端は南北方向の溝に切られ、西端は撹乱により切られる。検出できた規模は長さ 4.2m、最大幅 0.3m、深さは 0.08mである。標高は東端部分の上端が T.P.＋6.580m、底部が T.P.＋6.500mで、西端部分の上端は T.P.＋6.560m、底部は T.P.＋6.510mであった（第 39 図）。白磁碗（第 41 図－199）などが出土した。出土遺物および他の遺構との切り合いから中世の鋤溝遺構と考えられる。



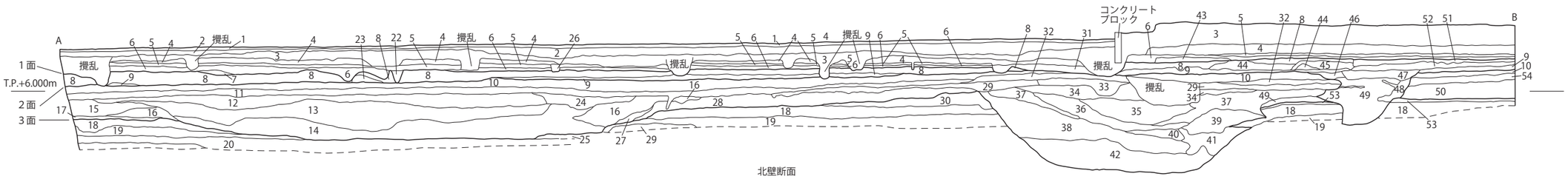
第 1 遺構面



第 2 遺構面



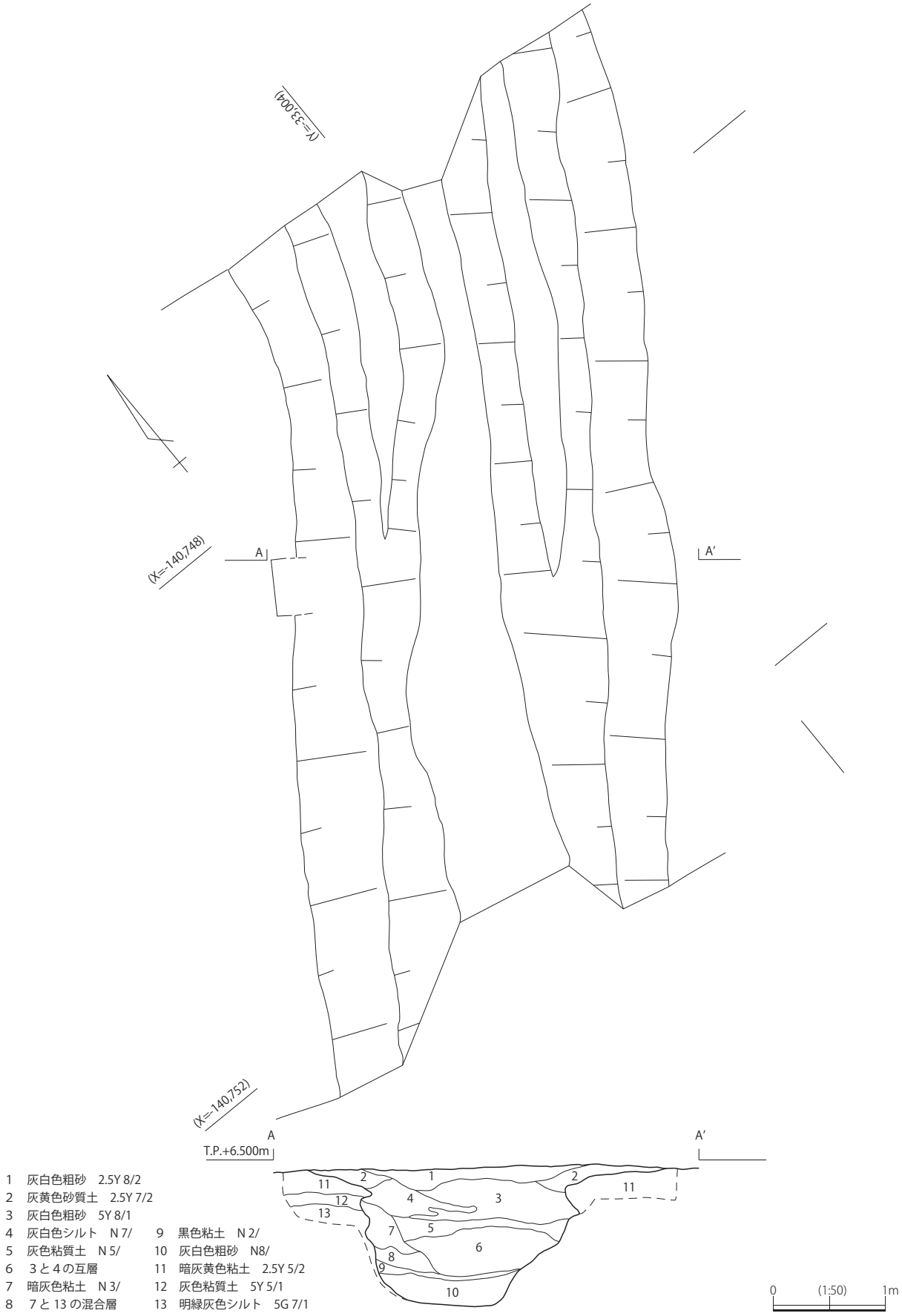
第 3 遺構面



北壁断面

1　アスファルト
2　砕石
3　盛土
4　耕土
5　床土
6　褐灰色砂質土　10YR 6/1　中世包含層
7　灰白色砂質土　10YR 8/2　中世包含層
8　にぶい黄橙色　10YR 7/2　中世包含層
9　浅黄橙色粘土　10YR 8/3
10　黒褐色粘土　2.5Y 3/1
11　黒褐色砂質土　2.5Y 3/1　粗砂混じり　締りやや強い
12　灰黄色粗砂　2.5YR 7/2
13　灰白色粗砂　5Y 8/2
14　明青灰色粗砂　10BG 7/1　縄文
15　灰白色シルト　2.5GY 8/1
16　明青灰色シルト　5B 7/1
17　明青灰色シルト　5B 7/1 に灰白色粗砂　N 7/　混じる
18　暗灰色粘土　N 3/　地山
19　緑灰色シルト　7.5 GY 6/1
20　黒色粘土　N 2/　植物遺体混入
21　灰色砂質土　N2/　締り強い
22　黄色砂質土　2.5Y8/8
23　灰白色シルト　7.5Y 8/2
24　灰白色シルト　5Y 7/1
25　緑灰色粘土　5G 6/1
26　褐灰色シルト　10YR 6/1
27　灰白色シルト　N 7/
28　明オリーブ灰色粗砂　2.5GY 7/1　締り強い
29　暗灰色粗砂　N 3/　締り強い
30　明緑灰色粗砂　7.5GY 7/1　締り強い
31　灰色砂質土　5Y 4/1
32　暗灰色粘土　N 3/
33　浅黄色粗砂　5Y 7/4
34　灰白色粗砂　5Y 7/1　第 3 遺構面
35　灰白色粗砂　5Y 7/2　河川 1 の埋土
36　明青灰色粗砂　5B 7/1　河川 1 の埋土
37　明青灰色シルト　5B 7/1　河川 1 の埋土
38　灰オリーブ色粗砂　5Y 6/2　河川 1 の埋土
39　灰白色シルト　N 8/　河川 1 の埋土
40　灰白色細砂　N 7/　河川 1 の埋土
41　灰色シルト　N6/　河川 1 の埋土
42　灰白色粗砂　5Y 7/1 に 13 層ブロック混入　河川 1 の埋土
43　にぶい黄橙色砂質土　10YR 7/2
44　にぶい黄色砂質土　2.5YR 6/3
45　灰白色砂質土　5Y 7/1
46　灰色シルト　5Y 6/1　第 2 遺構面　溝 1 埋土
47　淡黄色粗砂　5Y 8/3　第 2 遺構面　溝 1 埋土
48　灰色シルト　N 4/　溝 1 埋土
49　灰白色粗砂　5Y 8/1 と 43 層が混じり合っている　溝 1 埋土
50　灰白色粗砂　5Y 8/1　締り強い
51　黄褐色砂質土　2.5Y 5/3
52　黄褐色砂質土　2.5Y 5/4
53　明青灰色粗砂　5B 7/1　締り強い
54　オリーブ黒色粗砂　7.5Y 3/1　締り強い

第 39 図　第 1 遺構面、第 2 遺構面、第 3 遺構面平面図・北壁断面図　(KY2003-1)



1　灰白色粗砂　2.5Y 8/2
2　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2
3　灰白色粗砂　5Y 8/1
4　灰白色シルト　N 7/
5　灰色粘質土　N 5/
6　3と4の互層
7　暗灰色粘土　N 3/
8　7と13の混合層
9　黒色粘土　N 2/
10　灰白色粗砂　N8/
11　暗灰黄色粘土　2.5Y 5/2
12　灰色粘質土　5Y 5/1
13　明緑灰色シルト　5G 7/1

第40図　第2遺構面　溝1平面図・断面図　(KY2003-1)

溝 32　調査地区中央西寄りで検出した。南から北へと向いた溝で、北端は調査地区外であり、、南端は東西方向の溝に切られる。検出できた規模は長さ 6.5m、最大幅 0.3m、深さは 0.09mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋6.390m、底部がT.P.＋6.370mで、南端部分の上端はT.P.＋6.470m、底部はT.P.＋6.380mであった（第 39 図）。瓦器碗（第 41 図－200）などが出土した。鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

溝 35　調査地区西側で検出した。ほぼ水平な溝で、３箇所で東西方向の溝に切られており、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 6.8m、最大幅 1.1m、深さは 0.18mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋6.390m、底部がT.P.＋6.290mで、南端部分の上端はT.P.＋6.440m、底部はT.P.＋6.290mであった（第 39 図）。土師器皿（第 41 図－201）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構であろう。

溝 36　調査地区西側で検出した。東から西へと向いた溝で、東端は溝 35 に切られ、西端は上層の水田段により削平され途切れる。検出できた規模は長さ 3.0m、幅 0.2m、深さは 0.22mである。標高は東端部分の上端がT.P.＋6.460m、底部がT.P.＋6.390mで、西端部分の上端はT.P.＋6.390m、底部はT.P.＋6.240mであった（第 39 図）。瓦器碗（第 41 図－202）などが出土した。鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

【第２遺構面】

溝１　調査地区東端で検出した。北東から南西へと向いた溝で、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 7.5m、最大幅 3.8m、深さは約 1.2mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋6.460m、底部がT.P.＋5.396mで、南端部分の上端はT.P.＋6.393m、底部はT.P.＋5.318mであった（第 39・40 図）。出土遺物が皆無のため詳しい帰属時期は不明であるが、2002-1 次調査第１遺構面の溝４と堆積状況や層位が似ているため、古墳時代後期の溝と考える。

【第３遺構面】

河川１　調査地区東端で検出した。北から南へと向いた旧河川で、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 3.2m、最大幅 0.25m、深さは約 1.7mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋5.698m、底部がT.P.＋4.199mで、南端部分の上端はT.P.＋5.735m、底部はT.P.＋4.144mであった（第 39 図）。縄文土器片（第 41 図－203～208）などが出土した。小片も含め出土遺物は縄文土器のみであった。

（村上・實盛）

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

縄文土器

190 深鉢　最大長：2.7 ㎝（残存）。最大幅：3.8 ㎝（残存）。厚さ：0.8～1.0 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）、外面は黒褐色（7.5YR 3/2）。胎土：粗。直径１～３㎜程度の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。Ｓ字状の沈線による文様。地文の縄文は磨り消しのためか不明瞭である。著しい摩滅はみられない。船元Ⅲ～Ⅳ式併行の縄文中期中葉のものと思われる。（第 41 図－190、写真図版 43－１－190）

191 深鉢　最大長：9.7 ㎝（残存）。最大幅：10.2 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。キャリパー状に開く形態と思われる。体部外面の縄文は磨滅のため不明瞭である。体部外面上半部付近に２条の沈線による連弧文を施している。著しい摩滅はみられない。船元Ⅳ式の縄文中期中葉のものと思われる。（第 41 図－191、写真図版 43－１－191）

土師器

192 皿　口径：8.0 ㎝（復元）。器高：1.2 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は黄橙色（10YR 8/6）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部はナデ調整により若干の面取りがみられる。Jb タイプの 13 世紀後半のものと思われる。（第 41 図－192、写真図版 43－１－192）

貿易陶磁器

193 白磁皿　口径：10.0 ㎝（復元）。器高：2.3 ㎝（残存）。厚さ：0.1 ～0.4 ㎝。色調：内・外面は淡黄色（5Y 8/3）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。底部外面は露胎である。12 世紀後半のものと思われる。（第 41 図－193、写真図版 43－１－193）

194 白磁碗　口径：17.0 ㎝（復元）。器高：4.3 ㎝（残存）。厚さ：0.3 ～0.7 ㎝。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は玉縁状を呈している。12 世紀前半のものと思われる。（第 41 図－194、写真図版 43－１－194）

195 白磁碗　底径：6.0 ㎝（復元）。器高：2.4 ㎝（残存）。高台高：1.0 ㎝。厚さ：0.4 ～1.0 ㎝。色調：内面は灰白色（5Y 7/2）、外・断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。高台部外面は露胎である。見込み部に１条の沈線を巡らしている。12 世紀前半のものと思われる。（第 41 図－195、写真図版 43－１－195）

２．第１遺構面遺構出土遺物

土坑２

瓦器

196 碗　口径：15.0 ㎝（復元）。器高：2.9 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は淡黄色（2.5Y 8/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面は口縁部のみヘラミガキ調整を施し、体部内面はやや粗いヘラミガキ調整を施している。口縁部内端の沈線はわずかに確認できる。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半のものと思われる。（第 41 図－196、写真図版 43－２－196）

溝５

土師器

197 皿　口径：11.6 ㎝（復元）。器高：2.7 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.7 ㎝。色調：内面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）、外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。底部外面にはユビオサエ痕がみられる。Ga-1 タイプの 13 世紀末～14 世紀前葉のものと思われる。（第 41 図－197、写真図版 43－２－197）

溝 12

須恵質土器

198 片口鉢　口径：25.0 ㎝（復元）。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：0.7～1.0 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。東播系の製品である。第Ⅱ期第１段階。12 世紀中頃～12 世紀後半のものと思われる。（第 41 図－198、写真図版 43－２－198）

溝 15

貿易陶磁器

199 白磁碗　口径：16.0 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（残存）。厚さ：0.2 ～0.3 ㎝。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は小さな玉縁状を呈している。12 世紀前半のものと思われる。（第 41 図－199、写真図版 43－２－199）

溝 32

瓦器

200 碗　口径：16.0 ㎝（復元）。器高：2.2 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.5 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は淡黄色（2.5Y 8/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は摩耗のため不明瞭、体部内面はやや粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半のものと思われる。（第 41 図－200、写真図版 43－２－200）

溝 35

土師器

201 皿　口径：10.4 ㎝（復元）。器高：2.1 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。底部外面にはユビオサエ痕がみられる。Ｇa-1 タイプの 13 世紀末～14 世紀前葉のものと思われる。（第 41 図－201、写真図版 43－２－201）

溝 36

瓦器

202 碗　口径：16.0 ㎝（復元）。器高：4.2 ㎝（残存）。厚さ：0.1～0.3 ㎝。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：やや不良。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面は口縁部のみヘラミガキ調整を施し、体部内面は摩耗のため不明瞭であるが、やや密なヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ａ段階。13 世紀初頭のものと思われる。（第 41 図－202、写真図版 43－２－202）

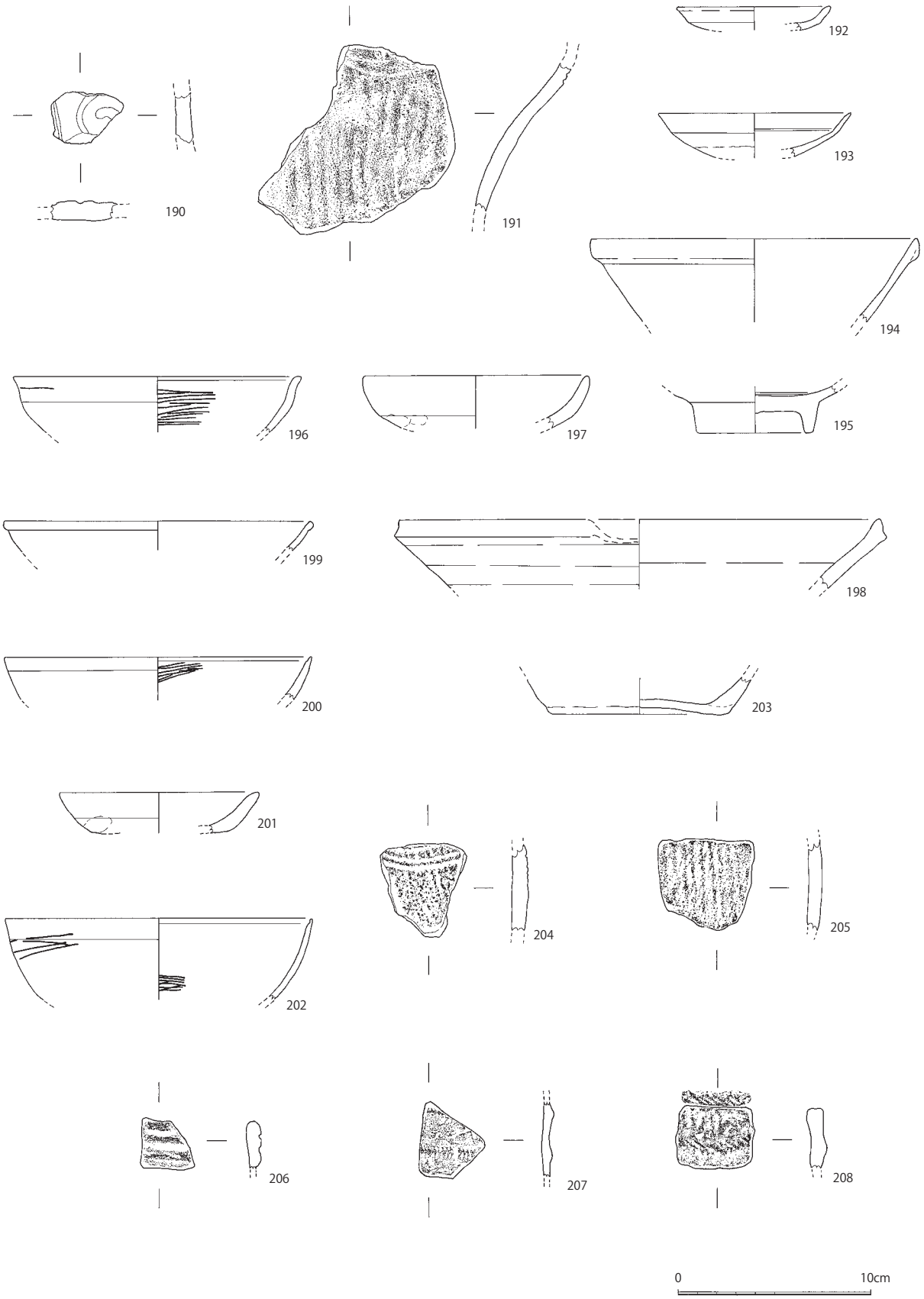
３．第３遺構面遺構出土遺物

河川１

縄文土器

203 底部片　底径：9.0 ㎝（復元）。器高：1.9 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.0 ㎝。色調：内・外面は灰黄褐色（10YR 5/2）、断面は黒褐色（10YR 3/1）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。著しい摩滅はみられない。（第 41 図－203、写真図版 43－２－203）

204 体部片　最大長：4.8 ㎝（残存）。最大幅：4.5 ㎝（残存）。厚さ：0.7～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は灰黄褐色（10YR 5/2）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部付近の破片と思われる。地文の縄文は摩耗により不明瞭である。３条の沈線により連弧文を施している。著しい摩滅はみられない。船元Ⅳ式の縄文中期中葉のものと思われる。（第　41 図－204、写真図版 43－２－204）



第 41 図　出土遺物（KY2003-1）

205 体部片　最大長：4.7 ㎝（残存）。最大幅：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.7 ㎝。色調：内面は灰黄褐色（10YR 5/2)、外・断面は黒褐色（10YR 3/1）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。（第 41 図－205、写真図版 43－２－205）

206 口縁部片　最大長：2.6 ㎝（残存）。最大幅：2.8 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は黒褐色（10YR 3/1）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部下に２条の沈線を巡らしている。著しい摩滅はみられない。（第 41 図－206、写真図版 43－２－206）

207 体部片　最大長：4.0 ㎝（残存）。最大幅：3.4 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.6 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/2)。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。地文に縄文を施し、体部外面の２条の凸帯上部に爪形文を施している。著しい摩滅はみられない。船元Ⅱ式の縄文中期中葉のものと思われる。（第 41 図－207、写真図版 43－２－207）

208 口縁部片　最大長：3.3 ㎝（残存）。最大幅：3.9 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/2)、外・断面は黄灰色（2.5Y 4/1）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。地文に縄文を施し、体部外面の１条の凸帯上部と口縁端部に爪形文を施している。著しい摩滅はみられない。船元Ⅱ式の縄文中期中葉のものと思われる。（第 41 図－208、写真図版 43－２－208）

（村上）

第７章　雁屋遺跡 2003－２次（ＫＹ2003－２）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内西端にあたり、北には 2001-1 次調査地区が、東には 2011-5 次調査地区がある。調査前現況は宅地および駐車場であった。宅地等造成のために 1.1mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.2mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.2mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が第１遺構面であった。第１遺構面の下層に 0.6mほど古墳時代の遺物包含層が堆積し、その下面が古墳時代の水田面である第２遺構面であった。その下層は黒色系の粘土が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 44 図）。

（實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに古墳時代に属するもので、Pit、土坑、溝、井戸、落込、水田があった（第 42・43 図）。遺構面は２面検出し、第１遺構面は古墳時代後期の集落、第２遺構面は古墳時代中期の水田面を検出した。遺構面の標高は第１遺構面東端で T.P.＋2.770m、西端で T.P.＋2.610m、第２遺構面の水田面で T.P.＋2.060mであった。遺構の番号は、遺構の種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

【第１遺構面】

溝４　調査地区東寄りで検出した。南北方向の溝で、北端、南端とも調査地区外である。検出できた規模は長さ約 4.6m、幅約 0.3mであった（第 42 図）。滑石製紡錘車（第 45 図－214）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

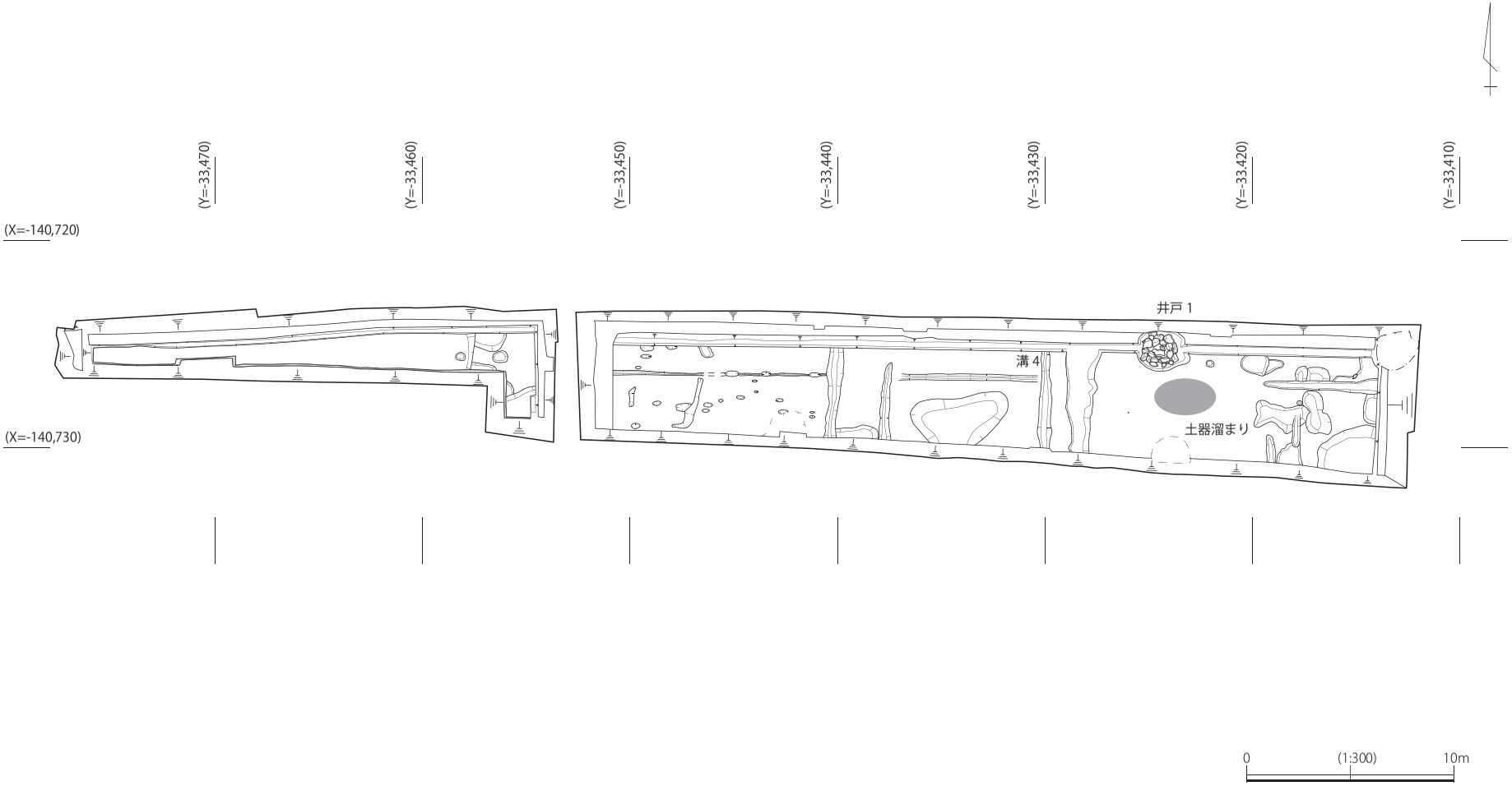
井戸１　調査地区東寄りで検出した。直径 2.6mで円形を呈する。井戸枠は 0.5mほどの大きさの礫を用いた石組みの井戸である（第 42・44 図）。土師器甕（第 45 図－215～217）、須恵器坏蓋（第 45 図－218）、須恵器平瓶（第 45 図－219）、砥石（第 45 図－220）、などが出土した。出土遺物から古墳時代後期末の遺構と考える。

土器溜まり　調査地区東寄り、井戸１のすぐ南側で検出した（第 42 図）。土師器碗（第 46 図－228）、土師器甕（第 46 図－226・227）、土師器高坏（第 46 図－229）、土師器移動式竈（第 46 図－230）、須恵器坏（第 46 図－221～225）、埴輪（第 46 図－231）などが出土した。出土遺物は全体的に古墳時代後期後半にまとまりをもつ。

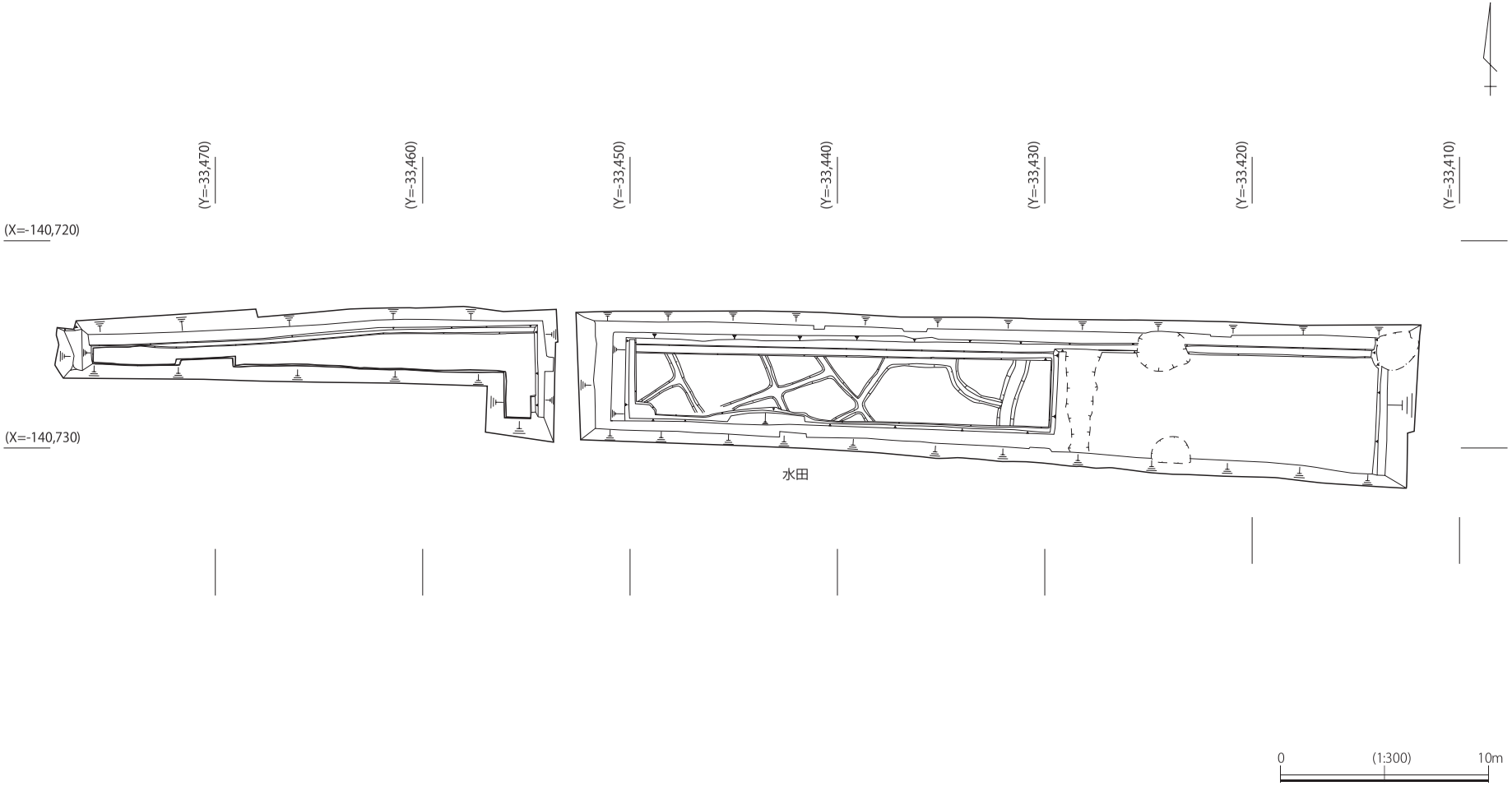
【第２遺構面】

水田　調査地区中央に設定した下層確認トレンチで検出した水田面である。水田面の標高は T.P.＋2.060mであった。地形に即した区画の水田とみられる。この水田面では全面でヒトの足跡および動物の足跡を検出した。ただ、不明瞭な部分があり動物の種は不明である。検出できた畦畔のうち最も東側は大畦畔である。大畦畔の検出規模は長さ約 3.2m、上端の幅約 0.5m、下端の幅約 0.8mであった。全体の形状が想定できた水田区画の規模は東西約 3.2m、南北約 2.1mのいびつな台形であり、面積は 6.09 ㎡であった（第 43 図）。埋土から土師器高坏（第 47 図－232）、砥石（第 47 図－233）などが出土した。出土遺物から古墳時代中期の水田であろう。

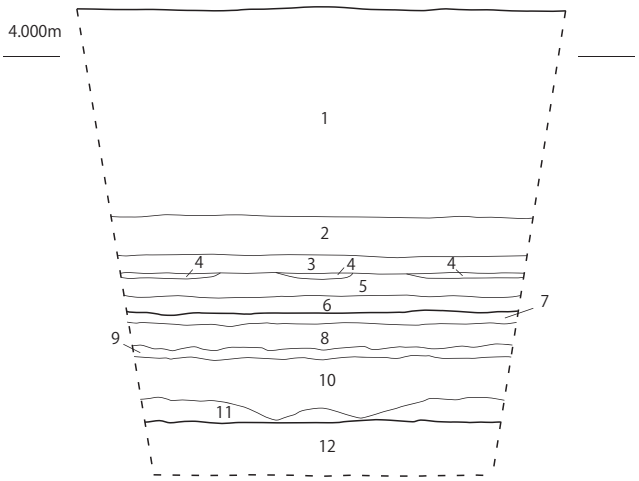
（實盛）



第 42 図　第 1 遺構面平面図　(KY2003-2)

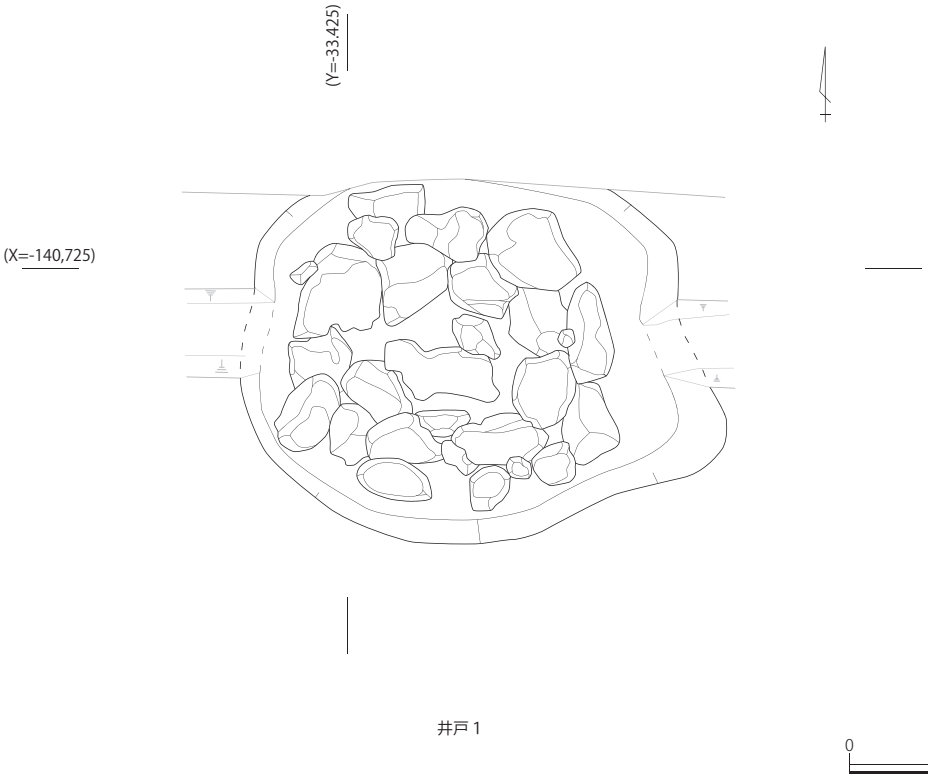


第 43 図　第 2 遺構面平面図　(KY2003-2)



1	盛土	7	明褐色砂質土
2	旧耕土	8	青灰色シルト
3	床土	9	灰白色粗砂
4	黄褐色粘質土	10	暗灰色細砂
5	青灰色砂質土	11	灰色粗砂
6	褐色粘質土	12	黒色粘土

北壁断面



井戸 1

第 44 図　調査地区断面抜粋図・第 1 遺構面井戸 1 平面図　(KY2003-2)

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

須恵器

209 坏蓋　口径:14.0 ㎝。器高：3.8 ㎝。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁部内外面は回転ナデ調整、天井部は回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－209、写真図版 44－１－209）

210 坏蓋　口径：14.8 ㎝（復元）。器高：4.4 ㎝（復元）。厚さ：0.3～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面は回転ナデ調整、天井部は回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－210、写真図版 44－１－210）

211 坏身　口径：8.6 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（復元）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は短く内傾し、端部は丸い。受部は上外方にのび、口縁端部と同じ長さで高さは低い。底部外面は回転ヘラケズリ調整を施し、底部は回転ヘラ切り未調整である。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 45 図－211、写真図版 44－１－211）

212 坏身　口径：11.6 ㎝（復元）。器高：3.0 ㎝（復元）。厚さ：0.2～0.6 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰赤色（2.5YR 5/2）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は内傾し、端部に若干の段を有する。体部外面の下部 2/3 以下に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－212、写真図版 44－１－212）

213瓶　底径：5.8 ㎝（復元）。器高：10.5 ㎝（残存）。厚さ：0.3～1.0 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。円孔部は欠損しているが、頸部が細く大きく開いて口縁部に至る形態と思われる。体部の中位が最大径で、底部は平らである。体部外面の下部から底部にかけて回転ヘラケズリ調整を施している。体部外面中位に２条の沈線、その間にヘラによる数条の斜方向の沈線を巡らしている。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－213、写真図版 44－１－213）

２．第１遺構面遺構出土遺物

溝４

石製品

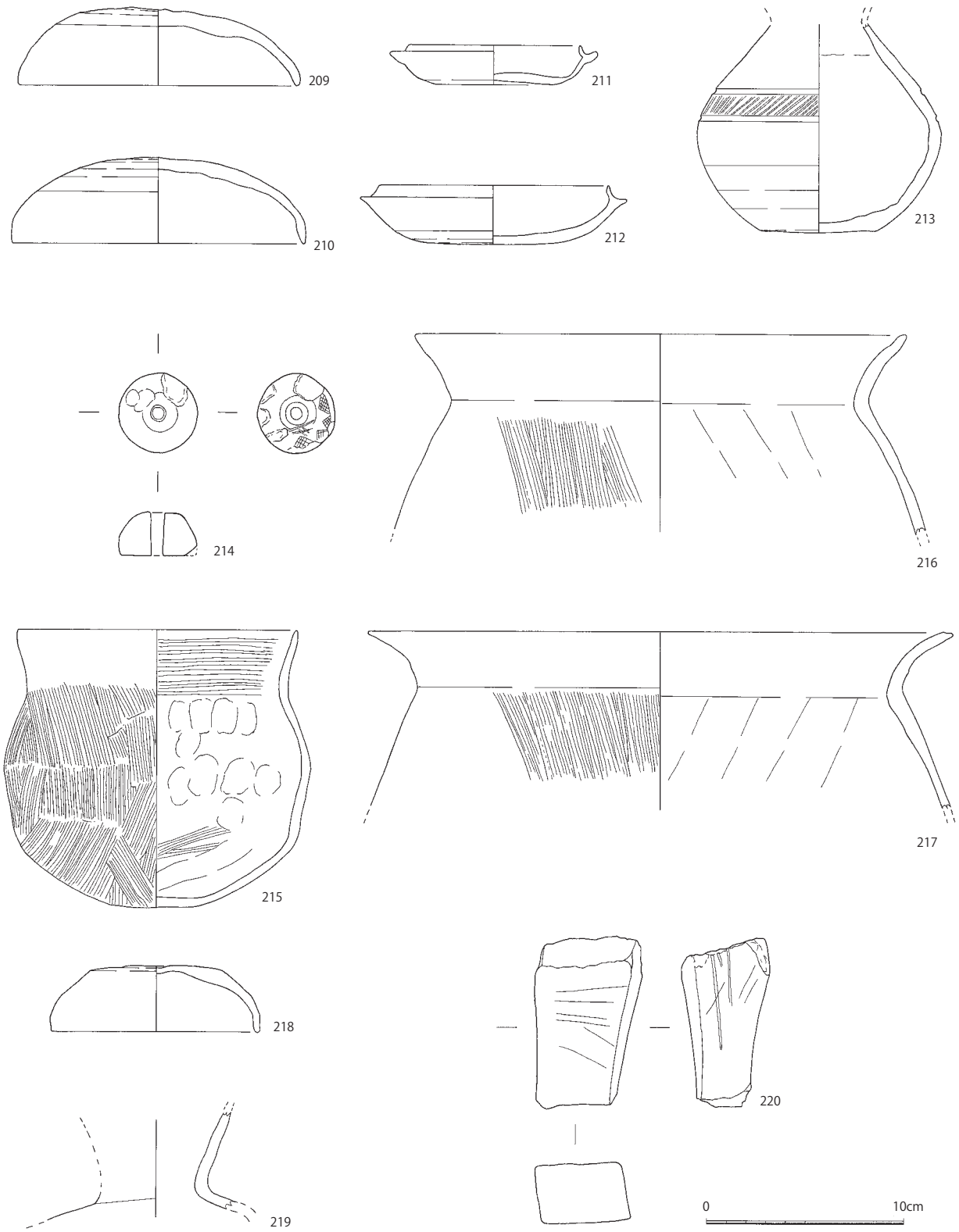
214 紡錘車　直径：4.0 ㎝。高さ：2.2 ㎝。色調：にぶい褐色（7.5YR 5/3）。残存度：ほぼ完形。滑石製。裏面の孔の周囲に２条の沈線と外周に１条の沈線、その間に鋸歯文を巡らしている。（第 45 図－214、写真図版 44－２－214）

井戸１

土師器

215 甕　口径：14.2 ㎝（復元）。器高：14.0 ㎝（復元）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面はヨコナデ調整・体部外面はタテハケ調整、体部内面は指頭痕がみられ、底部はハケ調整後ナデ調整を施している。外面の一部にスス、内面に炭化物が付着している。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－215、写真図版 44－２－215）

216 甕　口径：25.0 ㎝（復元）。器高：10.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整・体部外面はタテハケ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部は２度のヨコナデ調整により端部を成形している。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－



第 45 図　出土遺物（包含層・第 1 遺構面溝・井戸・KY2003-2）

216、写真図版 44－２－216）

217 甕　口径：29.6 ㎝（復元）。器高：8.9 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.9 ㎝。色調：内・外面はにぶい黄橙色(10YR 7/3)。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒と直径２㎜程度の小石をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整・体部外面はタテハケ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部は２度のヨコナデ調整により端部内側に浅いくぼみが巡る。口縁端部外面と胴部にスス、内面に炭化物が付着している。把手付き鍋の可能性もある。６世紀後半のものと思われる。（第 45 図－217、写真図版 44－２－217）

須恵器

218 坏蓋　口径：10.4 ㎝。器高：3.3 ㎝。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：2/3。天井部は回転ヘラ切り未調整。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 45 図－218、写真図版 44－２－218）

219 平瓶　器高：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：やや不良。残存度：小片。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 45 図－219、写真図版 44－２－219）

石製品

220 砥石　長さ：8.6 ㎝（残存）。最大幅：5.5 ㎝（残存）。厚さ：3.0 ㎝（残存）。色調：灰白色（2.5Y 8/2）。残存度：小片。砥面は４面残存する。（第 45 図－220、写真図版 44－２－220）

土器溜まり

須恵器

221 坏蓋　口径：12.4 ㎝（復元）。器高：3.9 ㎝（復元）。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内・断面は灰色（N 6/）、外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4 。口縁部は外方向に開き端部は丸い。体部外面は 2/3 程度回転ヘラケヅリ調整を施し、天井部は回転ヘラ切り未調整である。内面の一部に降灰痕がみられる。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－221、写真図版 45－１－221）

222 坏蓋　口径：13.6 ㎝（復元）。器高：3.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干外方向に開き口縁端部は丸い。体部外面は 1/2 以上に回転ヘラケヅリ調整を施している。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－222、写真図版 45－１－222）

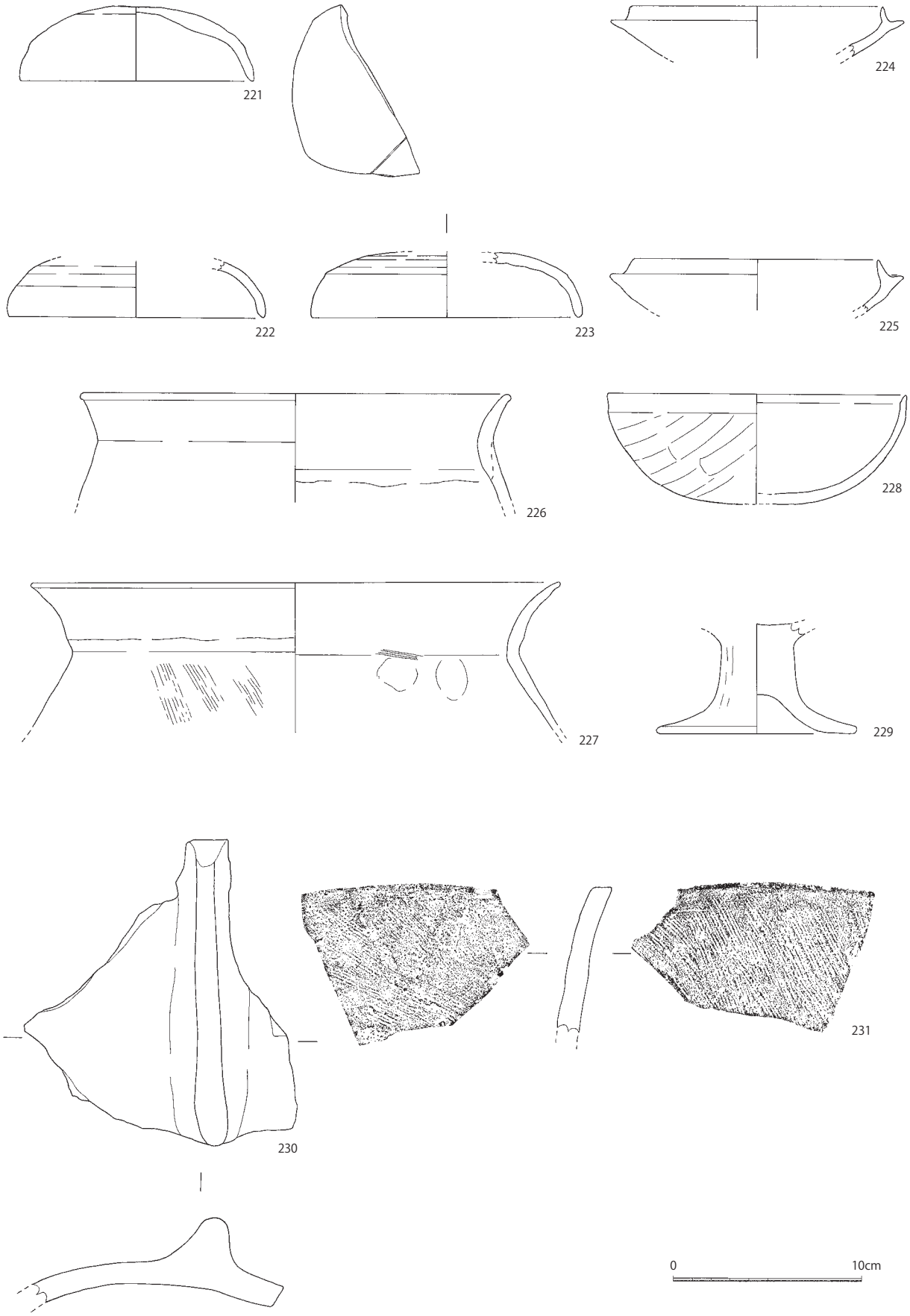
223 坏蓋　口径：14.4 ㎝（復元）。器高：3.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.5 ㎝。色調：内・断面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（7.5YR 7/1）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。天井部の稜線はわずかにみられ、口縁部は若干外方向に開き端部は丸い。体部外面は 1/2 以上に回転ヘラケヅリ調整を施している。天井部外面に１条の直線状のヘラ記号がみられる。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－223、写真図版 45－１－223）

224 坏身　口径：13.4 ㎝（復元）。器高：2.7 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.5 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。体部外面にオリーブ灰色（2.5GY 5/1）の自然釉がみられる。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－224、写真図版 45－１－224）

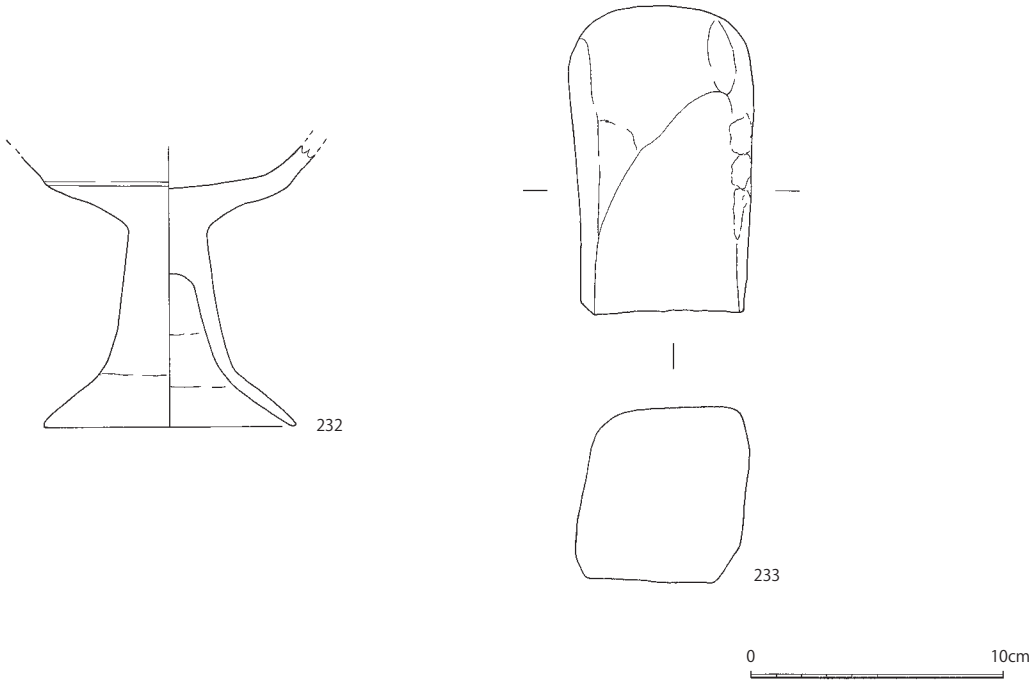
225 坏身　口径：13.0 ㎝（復元）。器高：2.7 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－225、写真図版 45－１－225）

土師器

226 甕　口径：22.6 ㎝（復元）。器高：5.7 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.9 ㎝。色調：内・断面は橙色（5YR 7/6）、外面は褐灰色（5YR 4/1）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く、赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部内外面



第 46 図　出土遺物（第 1 遺構面土器溜まり・KY2003-2）



第 47 図　出土遺物（第２遺構面・KY2003-2）

の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。口縁端部は若干外反し、丸く成形されている。６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－226、写真図版 45－１－226）

227 甕　口径：28.0 ㎝（復元）。器高：7.9 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の砂粒と金雲母をやや多く、赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているためほとんど不明だがタテハケ調整、内面はユビオサエ調整を施している。口縁部と体部との接合部分には一部ヨコハケ調整が残存している。口縁端部は若干外反し、丸く成形されている。６世紀後半のものと思われる。（第 46 図－227、写真図版 45－１－227）

228 碗　口径：15.8 ㎝（復元）。器高：5.8 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.5 ㎝。色調：内・外面は橙色（5YR 7/8）、断面は淡橙色（5YR 8/4）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁部内外面はヨコナデ調整・体部外面はヘラケズリ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。口縁端部には若干の段を有する。（第 46 図－228、写真図版 45－１－228）

229 高坏　底径：10.6 ㎝（復元）。器高：5.8 ㎝（残存）。厚さ：0.5～1.4 ㎝。色調：内・外・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：粗。直径１～３㎜ の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：脚部のみ 1/2。体部内外面はナデ調整を施している。６世紀中頃のものと思われる。（第 46 図－229、写真図版 45－１－229）

230 移動式竈　長さ：16.2 ㎝（残存）。最大幅：14.1 ㎝（残存）。厚さ：1.2～3.8 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整を施している。移動式竈の脚部で焚口の破片である。（第 46 図－230、写真図版 45－１－230）

埴輪

231 円筒埴輪　長さ：7.7 ㎝（残存）。厚さ：1.2 ㎝。色調：内・外・断面は黄橙色（7.5YR 7/8）。胎土：やや粗。直径１～２㎜ の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はタテハケ調整を施している。６世紀代のものと思われる。（第 46 図－231、写真図版 45－１－231）

３．第２遺構面遺構出土遺物

水田

土師器

232 高坏　底径：10.0 ㎝（復元）。器高：11.1 ㎝（残存）。厚さ：0.3～1.3 ㎝。色調：内・外面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面はオリーブ黒色（5Y 3/1）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。体部内外面はナデ調整を施している。５世紀後半のものと思われる。（第 47 図－232、写真図版 45－２－232）

石製品

233 砥石　長さ：12.0 ㎝（残存）。最大幅：7.2 ㎝（残存）。厚さ：6.8 ㎝（残存）。色調：灰色（5Y 6/1）。残存度：小片。砥面は４面残存する。（第 47 図－233、写真図版 45－２－233）

（村上）

第８章　雁屋遺跡 2004－１次（ＫＹ2004－１）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内中央部にあたり、東には 2011-4 次調査地区が、西には 2015-1 次調査地区がある。調査前現況は宅地であった。現道との兼ね合いで、調査は５地区に分割して行った。各調査地区では、宅地造成のために 0.6～1.0mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.2mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.1～0.3mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が中世の耕作面であった。その下層に 0.1～0.2mほど遺物包含層が堆積し、その下面が飛鳥時代の遺構面であった。その下層は灰色系の粗砂や黒色系の粘土が堆積しており、弥生土器が少量出土したものの遺構を検出せず、特に黒色系の粘土より下層は地山であった（第 48 図）。

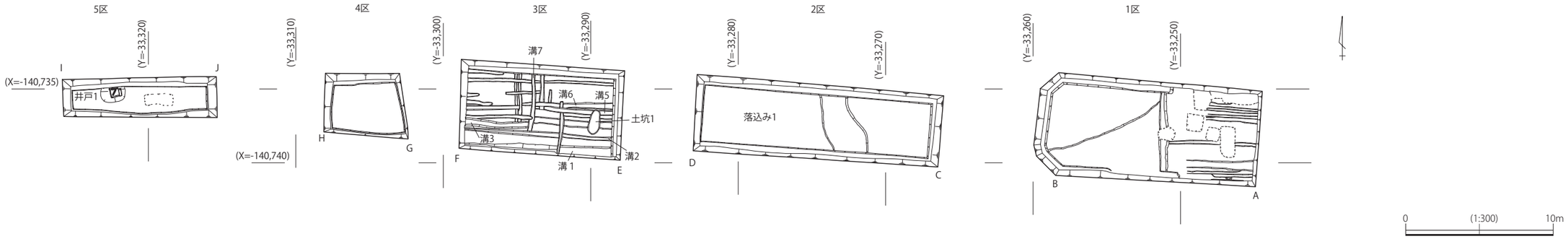
（村上・實盛）

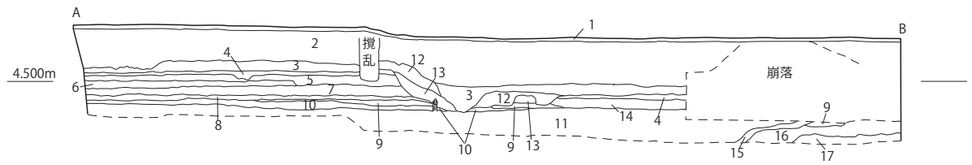
第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに飛鳥時代と中世に属するもので、土坑、溝、井戸、落込があった（第 48 図）。調査では５区において飛鳥時代の遺構面を検出したため、５区および隣接する４区において同一遺構面での調査を行った。ただし、４区では顕著な遺構を検出しなかった。１～３区においては中世の耕作面を検出したため調査を行い、その後下層まで調査を行ったが、顕著な遺構の検出をみなかった。遺構面の標高は中世の耕作面を調査した１区で T.P.＋4.250m、２区で T.P.＋3.800m、３区で T.P.＋3.950m、飛鳥時代の遺構面を調査した４区で T.P.＋3.450m、５区で T.P.＋3.400mであった。遺構の番号は、遺構の種類ごとの検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

井戸１　５区北寄りで検出した。直径 1.7m、深さ 0.5mで円形を呈する。縦板と横板を組み合わせた方形板枠井戸である。いずれの辺でも横板を検出し、さらに北辺と西辺では横板の外側で縦板を検出した。方形板枠の規模は東西 0.55m、南北 0.52mであった。上端の標高は T.P.＋3.410m、底部は T.P.＋2.910m、方形板枠の検出高は T.P.＋3.414mであった（第 48・49 図）。土師器片口鉢（第 50 図－242）、把手（第 50 図－247）、須恵器蓋坏（第 50 図－243～245）、須恵器提瓶（第 50 図－246）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

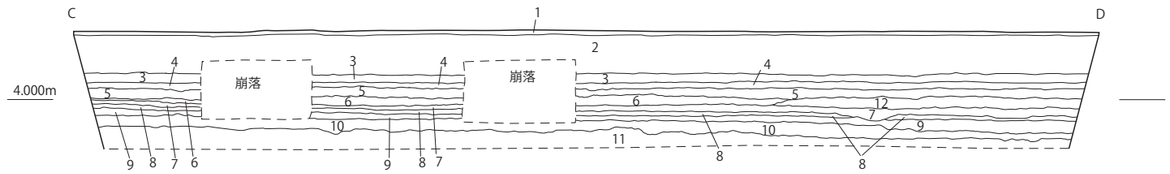
（村上・實盛）





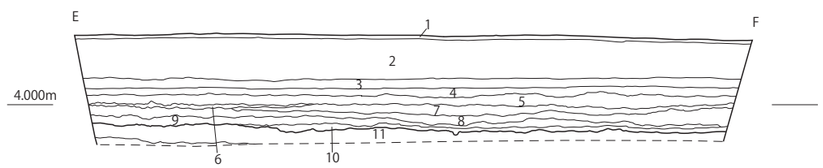
A-B

1 アスファルト
2 盛土
3 耕土
4 床土
5 灰黄褐色砂質土 10YR 5/2 平安～中世
6 灰黄褐色砂質土 10YR 6/2 平安～中世
7 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/2 平安～中世
8 灰白色砂質土 7.5Y 8/2 しまり強
9 淡黄色砂質土 5Y 8/3 しまり強
10 褐灰色砂質土 7.5YR 4/1
11 灰白色粗砂 5Y 8/1 弥生土器少量（10 層と 11 層の間から）
12 灰白色砂質土 N 7/ 耕作地斜面の土
13 灰白色砂質土 2.5Y 8/2 耕作地斜面の土
14 オリーブ灰色砂質土 2.5GY 5/1
15 黒褐色粘土 2.5Y 3/1
16 黒褐色粗砂 2.5Y 3/2
17 灰白色粗砂 5GY 8/1



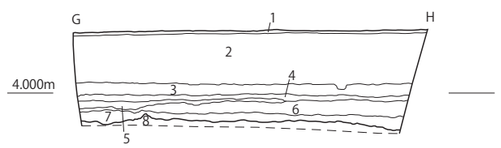
C-D

1 アスファルト
2 盛土
3 耕土
4 床土
5 オリーブ灰色砂質土 2.5GY 5/1 鉱物含む（Mn） 平安～中世
6 灰色粘質土 N 5/ に灰白色細砂 2.5Y 8/2 混入
7 灰白色粘質土 N 7/ 土師器
8 灰色粘質土 N 4/ に粗砂混入
9 黒褐色粘土 2.5Y 3/1
10 黒褐色粗砂 2.5Y 3/2
11 灰白色粗砂 5GY 8/1 弥生土器 1 片混入
12 黄橙色粘土 10YR 7/8



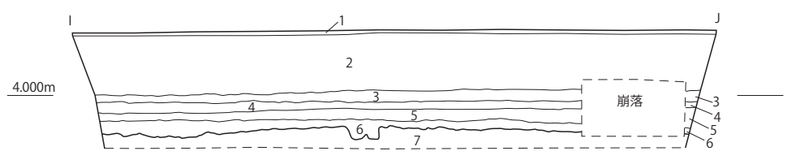
E-F

1 アスファルト
2 盛土
3 耕土
4 床土
5 オリーブ灰色砂質土 2.5GY 5/1
土師器・須恵器包含 平安～中世
6 灰白色細砂 2.5Y 8/1
7 オリーブ灰色粘質土 2.5GY 5/1 土師器・須恵器包含 平安～中世
8 黄橙色粘土 10YR 7/8 遺構面 土師器包含（古墳？）
9 暗オリーブ灰色粘質土 2.5GY 4/1 土師器包含（古墳？）
10 灰白色粗砂 2.5Y 8/1 土師器包含（古墳？）
11 黒褐色粘土 2.5Y 3/1



G-H

1 アスファルト
2 盛土
3 耕土
4 床土
5 オリーブ灰色砂質土 2.5GY 5/1 に同色（6 層）粘土混入
6 オリーブ灰色粘質土 2.5GY 5/1 土師皿包含 平安～中世
7 暗オリーブ灰色粘質土 5GY 4/1 に灰白色粗砂 2.5Y 8/1 混入 土師皿包含 平安～中世
8 黒褐色粘土 2.5Y 3/1

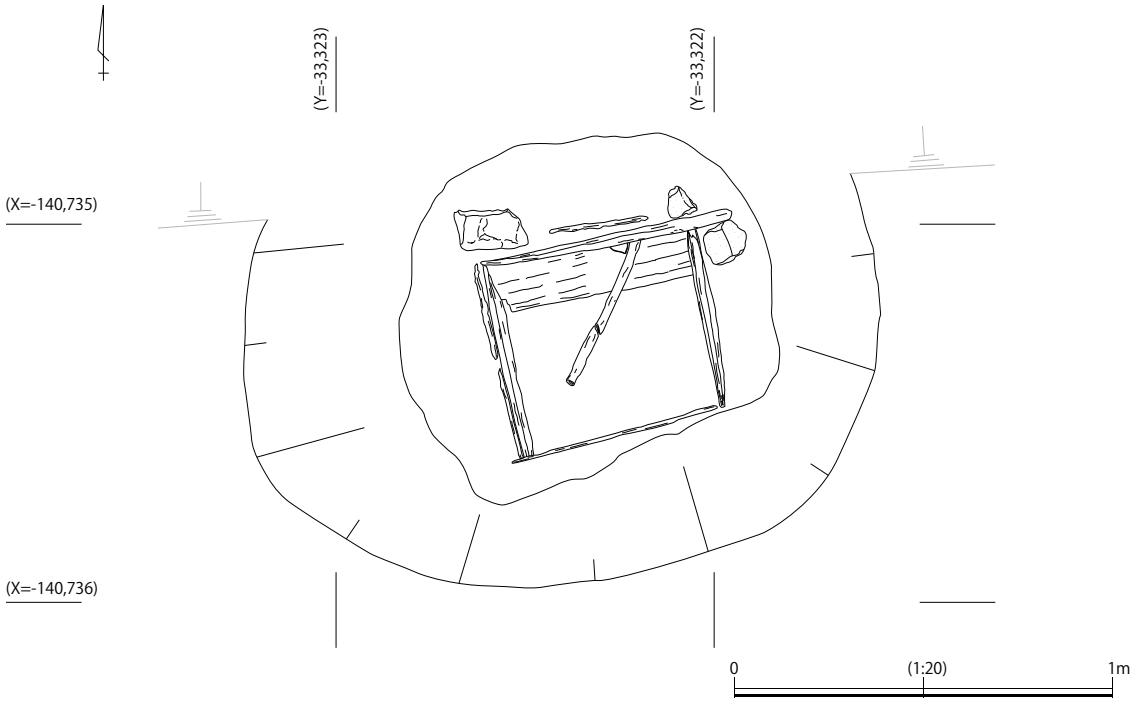


I-J

1 アスファルト
2 盛土
3 耕土
4 床土
5 オリーブ灰色砂質土 2.5GY 5/1
6 灰色粘質土 N 4/ に粗砂混入 須恵器・土師器混入（7C 初）
7 黒褐色粘土 2.5Y 3/1

0 (1:100) 5m

第 48 図 調査地区平面図・断面図 （KY2004-1）



第 49 図　5 区　井戸 1 平面図　（KY2004-1）

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

弥生土器

234 壺　長さ：4.1 ㎝（残存）。幅：4.3 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・断面は灰白色（10YR 8/2）、外面は明褐色（7.5YR 5/6）。胎土：粗。直径１㎜程度の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の頸部付近の破片。頸部下に２条のヘラ描き沈線を巡らしている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 50 図－234、写真図版 46－１－234）

235 底部　底径：8.6 ㎝（復元）。器高：2.8 ㎝（残存）。厚さ：1.1～2.0 ㎝。色調：内・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）、外面は橙色（7.5YR 6/6）。胎土：粗。直径１～３㎜程度の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。（第 50 図－235、写真図版 46－１－235）

須恵器

236 坏身　口径：12.0 ㎝（復元）。器高：3.5 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径１～２㎜ の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部は内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式４段階（TK43 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 50 図－236、写真図版 46－１－236）

237 坏身　口径：15.6 ㎝（復元）。器高：3.5 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.6 ㎝。色調：内・断面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１～２㎜の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅲ型式２段階（TK46 型式）。飛鳥時代中頃の７世紀後半のものと思われる。（第 50 図－237、写真図版 46－１－237）

238 高坏　底径：8.8 ㎝（復元）。器高：2.5 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 7/1）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：脚部のみ 2/3。体部内外面は回転ナデ調整を施している。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 50 図－238、写真図版 46－１－238）

239 高坏　器高：7.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.0 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：脚部のみ 1/3。体部内外面は回転ナデ調整を施している。脚部中位のやや上方に２条の沈線を巡らす。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 50 図－239、写真図版 46－１－239）

240 大甕　口径：34.6 ㎝（復元）。器高：4.7 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は外上方に開き、端部で上下にのばして肥厚させ稜を有する。口縁部外面には、２条の沈線を巡らし、その間に波状文を施している。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 50 図－240、写真図版 46－１－240）

石製品

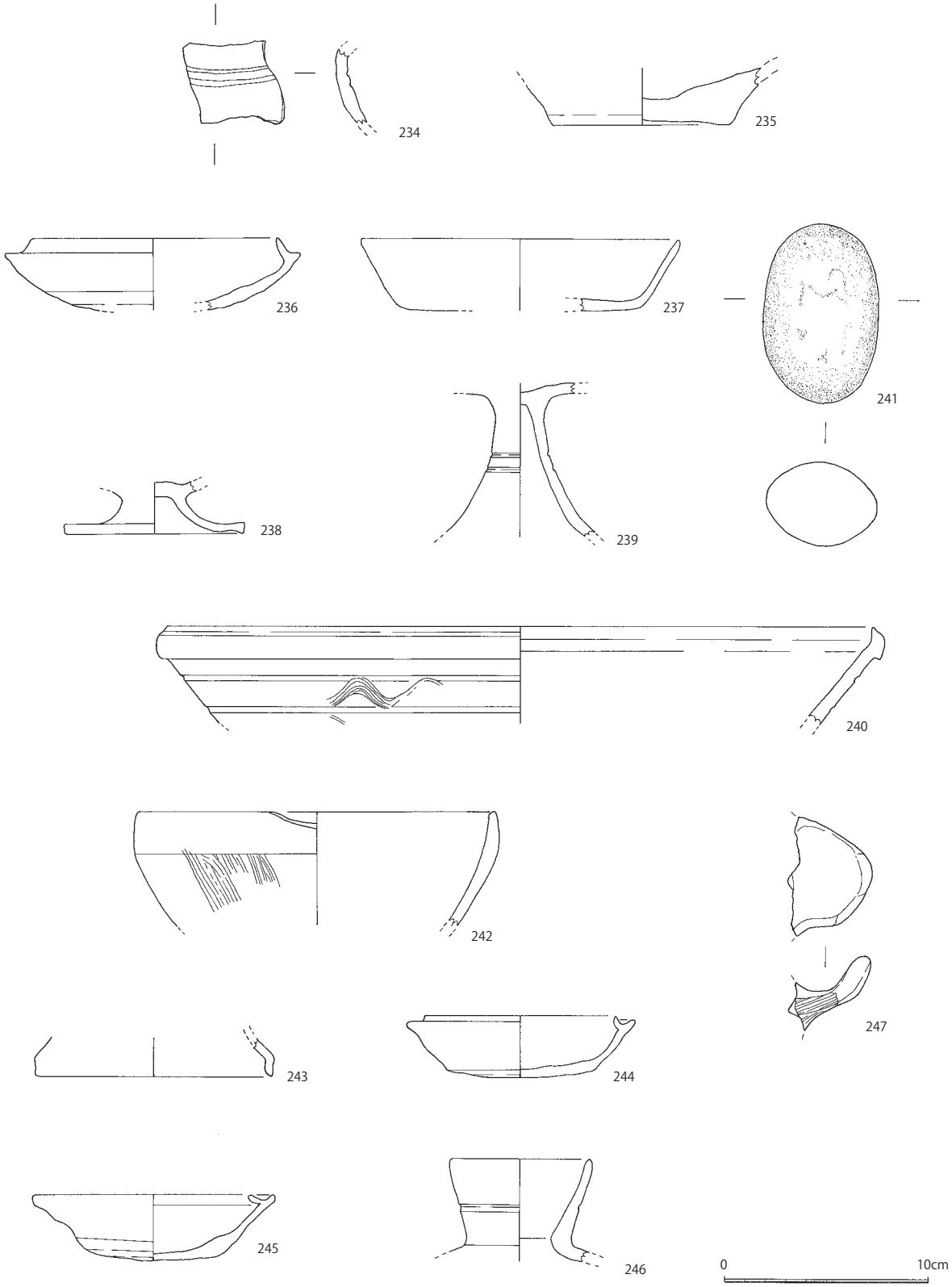
241 敲き石　長さ：8.7 ㎝。最大幅：5.5 ㎝。最大厚さ：4.1 ㎝。残存度：完形。花崗岩製。（第 50 図－241、写真図版 46－１－241）

２．遺構出土遺物

井戸１

土師器

242 片口鉢　口径：17.6 ㎝（復元）。器高：5.5 ㎝（残存）。厚さ：0.5 ～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒・金雲母をやや多く、直径２～３㎜の小石を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整・体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整を施している。飛鳥時代。７世紀代のものと思われる。（第 50 図－242、写真図版 46－２－242）



第 50 図　出土遺物（KY2004-1）

247 把手　長さ:4.2 ㎝。最大幅:5.9 ㎝。厚さ：0.8～2.4 ㎝。色調：外・断面は灰白色(10YR 8/2)。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒・金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。（第 50 図－247、写真図版 46－２－247）

須恵器

243 坏蓋　口径：11.6 ㎝（復元）。器高：1.9 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部の中位に若干のくぼみを有し、端部は丸い。Ⅱ型式６段階（TK217 型式)。７世紀前半のものと思われる。(第 50 図－243、写真図版 46－２－243)

244 坏身　口径：9.4 ㎝（復元）。器高：3.0 ㎝（復元）。厚さ：0.2～0.6 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は短く内傾し、端部は丸い。受部は上外方にのび、口縁端部と同じ長さで高さは低い。底部外面は回転ヘラケズリ調整を施し、底部は回転ヘラ切り未調整である。また底部には、降灰痕がみられる。Ⅱ型式６段階（TK217 型式)。７世紀前半のものと思われる。(第 50 図－244、写真図版 46－２－244)

245 坏身　口径:9.4 ㎝。器高：3.2 ㎝。厚さ：0.2～0.8 ㎝。色調：内・外面は灰白色(2.5Y 8/2)。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：不良。残存度：完形。口縁部は短く内傾し、端部は丸い。受部は上外方にのび、口縁端部と長さと高さが同じである。底部外面は回転ヘラケズリ調整を施し、底部は回転ヘラ切り未調整である。Ⅱ型式６段階（TK217 型式)。７世紀前半のものと思われる。(第 50 図－245、写真図版 46－２－245)

246 提瓶　口径：6.8 ㎝（復元）。器高：5.0 ㎝（残存）。厚さ：0.4～1.0 ㎝。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部の中位に１条の沈線を巡らす。提瓶の口縁部である。Ⅱ型式６段階（TK217 型式)。７世紀前半のものと思われる。(第 50 図－246、写真図版 46－２－246)

（村上）

第９章　雁屋遺跡 2011－４次（ＫＹ2011－４）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内ほぼ中央にあたり、東には 2001-2 次調査地区が、西には 2004-1 次調査地区がある。調査前現況は南接するマンションの駐車場であった。駐車場造成のために 0.4～0.8mほど盛土されていた。その下層はおよそ 0.1～0.2mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.2～0.3mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が中世の耕作面である第１遺構面であった。第１遺構面の下層には部分的に 0.1mほど遺物包含層が堆積し、その下面が弥生時代前期の第２遺構面であった。箇所によってはこの遺物包含層は存在せず、調査地区東側では第１遺構面と第２遺構面が結果的にほぼ同一面となっていた。中世に削平が行われた結果と考えられる。第２遺構面の下層は灰黄色系の粗砂などが堆積しており、弥生時代以前の洪水砂および旧河川とみられる。これらは遺物を包含せず地山であった（第 52・53 図）。

（實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに弥生時代から中世に属するもので、溝、土坑、水田、旧河川があった（第 51 図）。遺構面は２面検出し、第１遺構面は中世の耕作面、第２遺構面は弥生時代前期の集落であった。遺構面の標高は第１遺構面東端で T.P.＋4.535m、西端で T.P.＋4.313m、第２遺構面東端で T.P.＋4.500m、西端で T.P.＋4.000mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

なお、第２遺構面については、図化できないものであっても弥生土器のみが出土した遺構についてはすべて詳述する。これら以外には、古墳時代の小土坑が１基、中世の土坑が２基あるほかは全て出土遺物がないが、弥生土器のみが出土した遺構と同一の埋土であるため、基本的に第２遺構面として検出した土坑群はほとんどが弥生時代の遺構であるとみられる。

【第１遺構面】

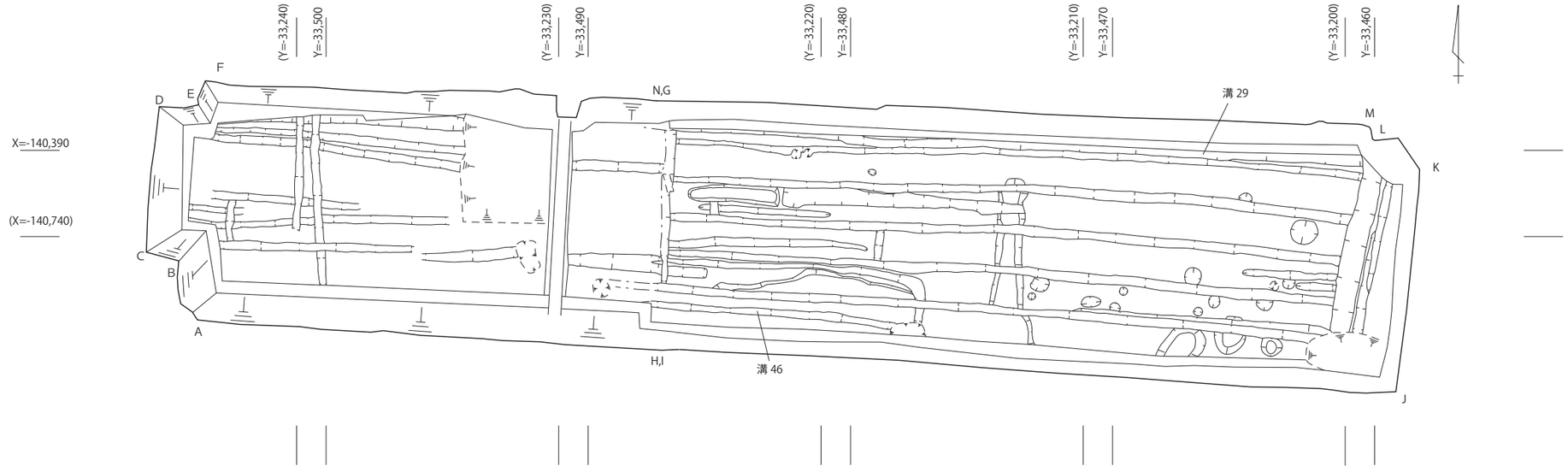
溝 29　調査地区東側北端で検出した。東から西へと向いた溝で、東端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ 26.4m、幅 0.3m、深さは約 0.1mである。標高は東端部分の上端が T.P.＋4.427m、底部が T.P.＋4.318mで、西端部分の上端は T.P.＋4.384m、底部は T.P.＋4.332mであった（第 51 図）。弥生土器壺（第 56 図－251）などが出土した。この土器は混入遺物で、他に江戸期の国産陶磁器などが出土しており、それから近世の鋤溝遺構とみられる。

溝 46　調査地区中央南端で検出した。東から西へと向いた溝で、東端は撹乱により失われ、西端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ 9.7m、最大幅 0.4m、深さは約 0.1mである。標高は北端部分の上端が T.P.＋4.333m、底部が T.P.＋4.252mで、南端部分の上端は T.P.＋4.282m、底部は T.P.＋4.202mであった（第 51 図）。須恵質土器片口鉢（第 56 図－252）などが出土した。出土遺物から中世の鋤溝遺構とみられる。

【第２遺構面】

土坑 21　調査地区西寄りで検出した。直径 0.8m、深さ約 0.1mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋4.070m、底部は T.P.＋4.010mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

土坑 75　調査地区東寄りで検出した。東西 0.55m、南北 0.7m、深さ 0.2mで楕円形を呈する。上端の標高は T.P.＋4.410m、底部は T.P.＋4.210mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土

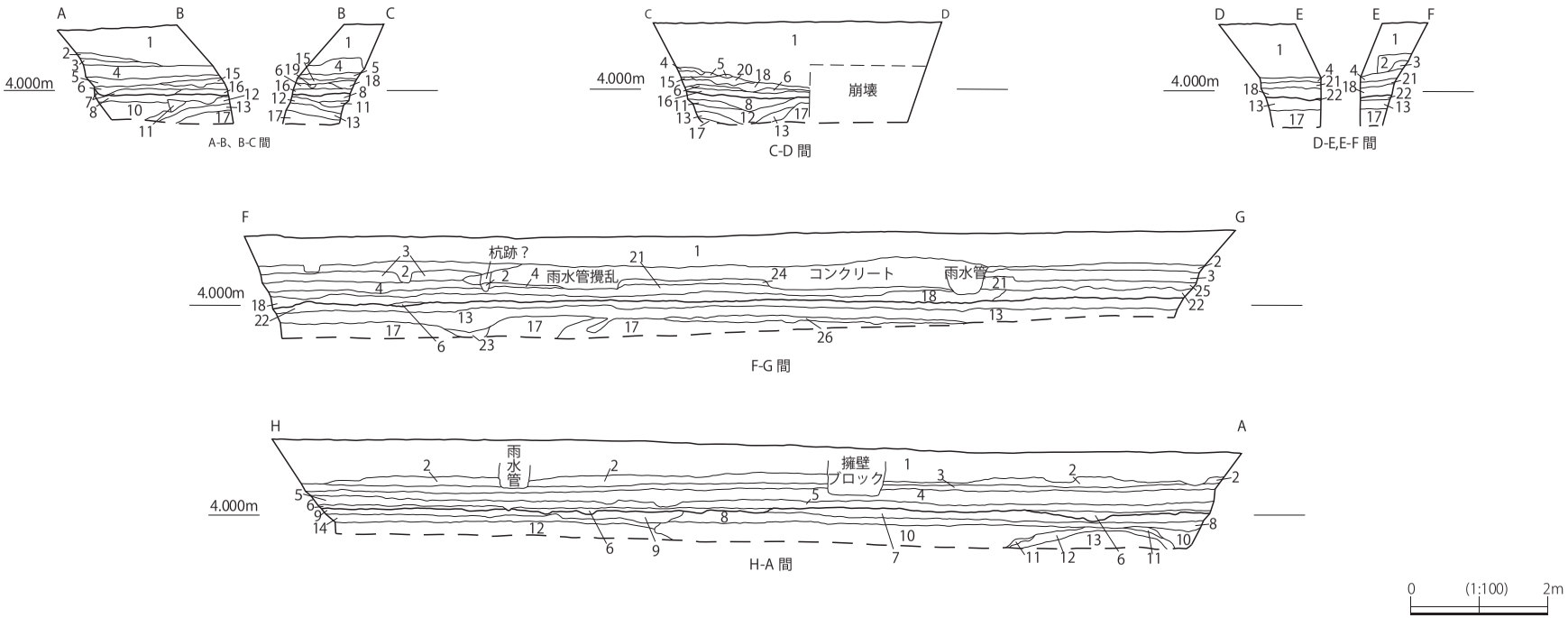


第 1 遺構面

第 2 遺構面

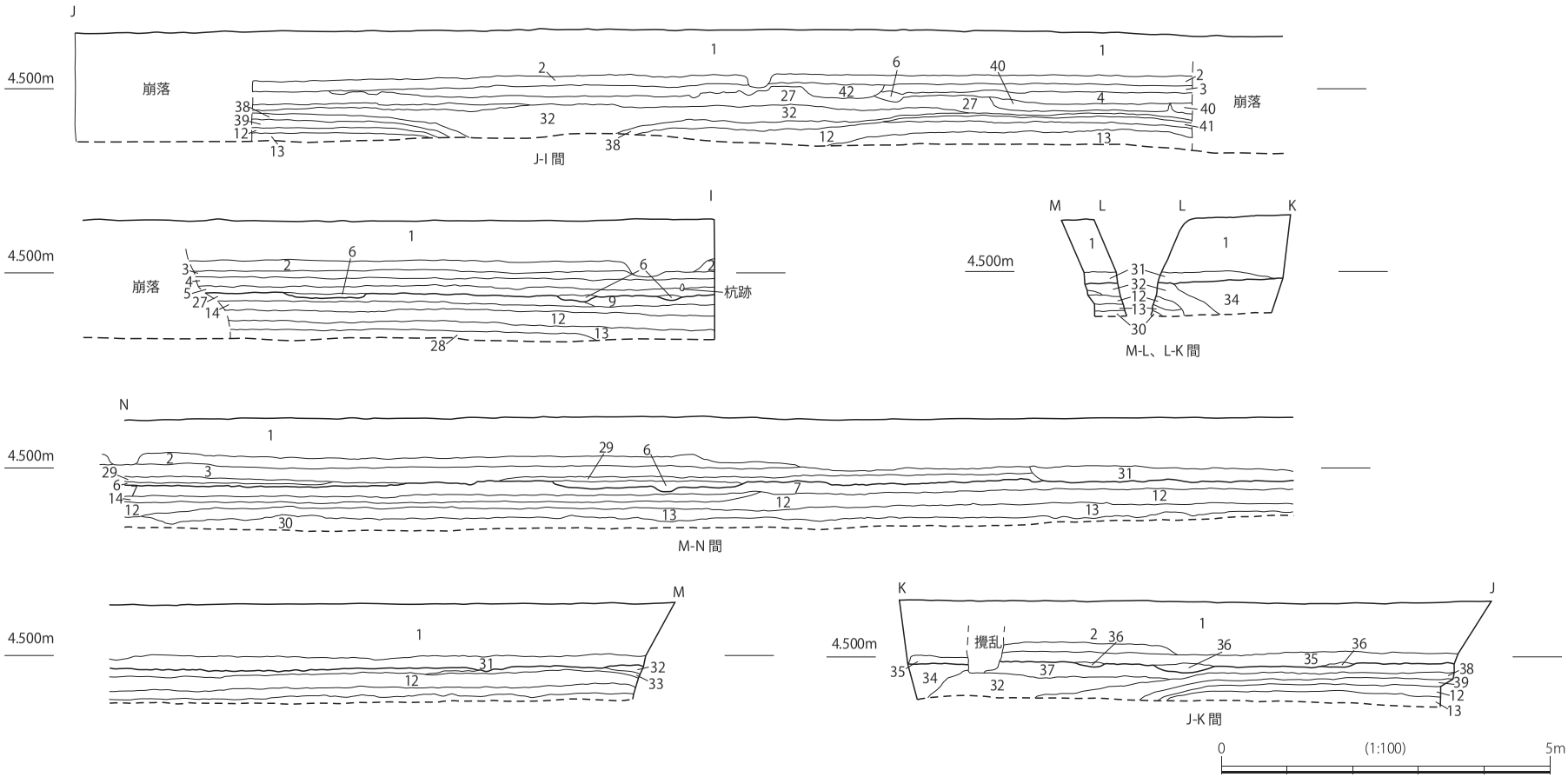
0 (1:200) 10m

第 51 図　調査地区平面図　(KY2011-4)



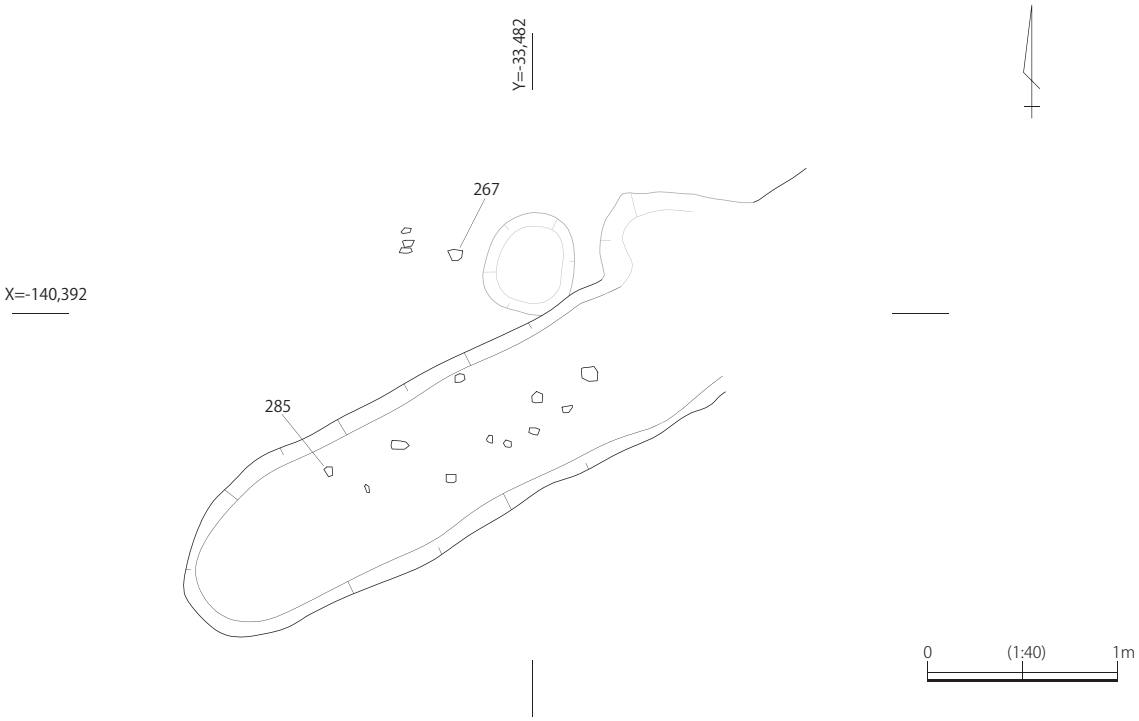
1　盛土＋砕石
2　耕土
3　床土
4　にぶい黄色砂質土　2.5Y 6/3　部分的に還元され緑灰色 10GY 6/1 に変色　中世包含層
5　褐灰色粘質土　10YR 5/1　中世
6　褐灰色砂質土　10YR 4/1　粗砂混　弥生前期遺構
7　灰黄色粗砂　2.5Y 6/2　締り若干あり
8　灰黄色粗砂　2.5Y7/2
9　明オリーブ灰色粘質土　2.5GY 7/1　粗砂多く混じる
10　灰白色粗砂　7.5Y 8/1
11　灰白色シルト　N 7/
12　灰色粘土　N 4/
13　黒色粘土　N 2/　粗砂混じり
14　褐灰色粘土　10YR 6/1
15　灰白色シルト　7.5Y 7/1　中世
16　黄灰色砂質土　2.5Y 4/1　粗砂混じり
17　灰白色粗砂　7.5Y 7/1
18　褐灰色粘質土　10YR 6/1　弥生前期包含層
19　灰白色粗砂　10YR 8/1　中世
20　灰白色砂質土　7.5Y 7/1　粗砂混じり
21　明オリーブ灰色砂質土　2.5GY 7/1　中世
22　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2　粘性あり
23　黒色粗砂　N 2/
24　灰色砂質土　N 4/
25　浅黄色粗砂　2.5Y 7/4　弥生前期包含層　土器群層
26　灰白色粗砂　2.5GY 8/1
27　明オリーブ灰色砂質土　2.5GY 7/1　粗砂多く混入　弥生前期遺構面
28　明緑灰色粗砂　7.5GY 8/1
29　明オリーブ灰色砂質土　2.5GY 7/1　中世遺構面
30　明緑灰色粗砂　7.5GY 7/1
31　3 と 29 の混合土　後世の攪乱のためか？
32　灰白色粗砂　5Y 7/1　旧河川堆積土（無遺物）
33　明緑灰色シルト　10G 7/1
34　33 と 32 と 12 の混合層（12 と 33 がブロック状に混入）　旧河川堆積土（無遺物）
35　浅黄色砂質土　5Y 7/2 に一部還元色混入　中世包含層
36　灰白色砂質土　5Y 7/1　中世遺構
37　明黄灰色粗砂　5BG 7/1　中世遺構面（弥生前期と同一面）
38　灰色シルト　N 6/　粘性あり
39　灰色粘土　N 6/
40　青灰色粗砂　5B 5/1
41　12 層の一部が明褐色　7.5YR 5/6（鉄分か？）に変色
42　3 層に一部が還元により変色

第 52 図　調査地区壁面断面図 (1)　(KY2011-4)



1　盛土＋砕石
2　耕土
3　床土
4　にぶい黄色砂質土　2.5Y 6/3　部分的に還元され緑灰色 10GY 6/1 に変色　中世包含層
5　褐灰色粘質土　10YR 5/1　中世
6　褐灰色砂質土　10YR 4/1　粗砂混　弥生前期遺構
7　灰黄色粗砂　2.5Y 6/2　締り若干あり
8　灰黄色粗砂　2.5Y7/2
9　明オリーブ灰色粘質土　2.5GY 7/1　粗砂多く混じる
10　灰白色粗砂　7.5Y 8/1
11　灰白色シルト　N 7/
12　灰色粘土　N 4/
13　黒色粘土　N 2/　粗砂混じり
14　褐灰色粘土　10YR 6/1
15　灰白色シルト　7.5Y 7/1　中世
16　黄灰色砂質土　2.5Y 4/1　粗砂混じり
17　灰白色粗砂　7.5Y 7/1
18　褐灰色粘質土　10YR 6/1　弥生前期包含層
19　灰白色粗砂　10YR 8/1　中世
20　灰白色砂質土　7.5Y 7/1　粗砂混じり
21　明オリーブ灰色砂質土　2.5GY 7/1　中世
22　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2　粘性あり
23　黒色粗砂　N 2/
24　灰色砂質土　N 4/
25　浅黄色粗砂　2.5Y 7/4　弥生前期包含層　土器群層
26　灰白色粗砂　2.5GY 8/1
27　明オリーブ灰色砂質土　2.5GY 7/1　粗砂多く混入　弥生前期遺構面
28　明緑灰色粗砂　7.5GY 8/1
29　明オリーブ灰色砂質土　2.5GY 7/1　中世遺構面
30　明緑灰色粗砂　7.5GY 7/1
31　３と 29 の混合土　後世の撹乱のためか？
32　灰白色粗砂　5Y 7/1　旧河川堆積土（無遺物）
33　明緑灰色シルト　10G 7/1
34　33 と 32 と 12 の混合層（12 と 33 がブロック状に混入）旧河川堆積土（無遺物）
35　浅黄色砂質土　5Y 7/2 に一部還元色混入　中世包含層
36　灰白色砂質土　5Y 7/1　中世遺構
37　明黄灰色粗砂　5BG 7/1　中世遺構面（弥生前期と同一面）
38　灰色シルト　N 6/　粘性あり
39　灰色粘土　N 6/
40　青灰色粗砂　5B 5/1
41　12 層の一部が明褐色　7.5YR 5/6（鉄分か？）に変色
42　３層に一部が還元により変色

第 53 図　調査地区壁面断面図 (2)　(KY2011-4)



第 54 図　第２遺構面溝 68 遺物出土状況図　(KY2011-4)

器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

土坑 82　調査地区東寄りで検出した。直径 0.5m、深さ 0.18mで円形を呈する。上端の標高は T.P. ＋4.370m、底部は T.P. ＋4.190mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

土坑 89　調査地区中央で検出した。溝 68 に切られ、遺構の半分のみを検出した。検出できた規模は東西 1.8m、南北 0.9m、深さ約 0.1mで元の形状は円形であったとみられる。上端の標高は T.P. ＋4.310m、底部は T.P. ＋4.220mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

土坑 92　調査地区中央で検出した。東西 0.7m、南北 0.5m、深さ 0.1mで楕円形を呈する。上端の標高は T.P. ＋4.240m、底部は T.P. ＋4.140mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

土坑 96　調査地区中央で検出した。直径 2.0m、深さ 0.11mで円形を呈する。内部に径 0.3mの２基の小土坑が存在する。上端の標高は T.P. ＋4.270m、底部は T.P. ＋4.160mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

溝 14　調査地区西寄りで検出した。南東から北西へと屈曲して流れる溝で、両端は調査地区外である。検出規模は長さ 11.5m、最大幅 1.0m、深さは 0.22mである。標高は南東端部分の上端が T.P. ＋4.150m、底部が T.P. ＋4.060mで、北西端部分の上端は T.P. ＋3.960m、底部は T.P. ＋3.930mであった（第 51 図）。石鏃（第 61 図－288）などが出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考えられる。

溝 15　調査地区西寄りで検出した。北東から南西へと流れる溝で、西端で溝 14 に合流する。規模は長さ 2.3m、最大幅 0.7m、深さは約 0.1mである。標高は北東端部分の上端が T.P. ＋4.000m、底部が T.P. ＋3.950mで、南西端部分の上端は T.P. ＋3.980m、底部は T.P. ＋3.940mであった（第 51 図）。図化出来ていないが、弥生土器小片が出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構と考えられる。

溝 68　調査地区中央で検出した。北東から南西へと向いた溝で、北東端は他の溝に切られる。検出規模は長さ 6.6m、最大幅 0.8m、深さは約 0.1mである。標高は北端部分の上端が T.P. ＋4.320m、

底部がT.P.＋4.260mで、南端部分の上端はT.P.＋4.230m、底部はT.P.＋4.180mであった（第51・54図）。弥生土器底部片（第60図－285）などが出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構である。本遺構の脇でも遺物をまとまって検出し、その中に太型蛤刃石斧（第57図－267）が含まれていた。

落込24　調査地区西端で検出した不整形な落込で、西端は調査地区外である。遺構の南寄りに一段窪む箇所がある。検出規模は南北4.1m、東西3.5m、深さは0.17mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋4.010m、底部がT.P.＋3.920mで、南端部分の上端はT.P.＋4.010m、底部はT.P.＋3.890mであった（第51図）。弥生土器壺（第60図－286）、底部片（第60図－287）などが出土した。出土遺物から弥生時代前期の遺構である。

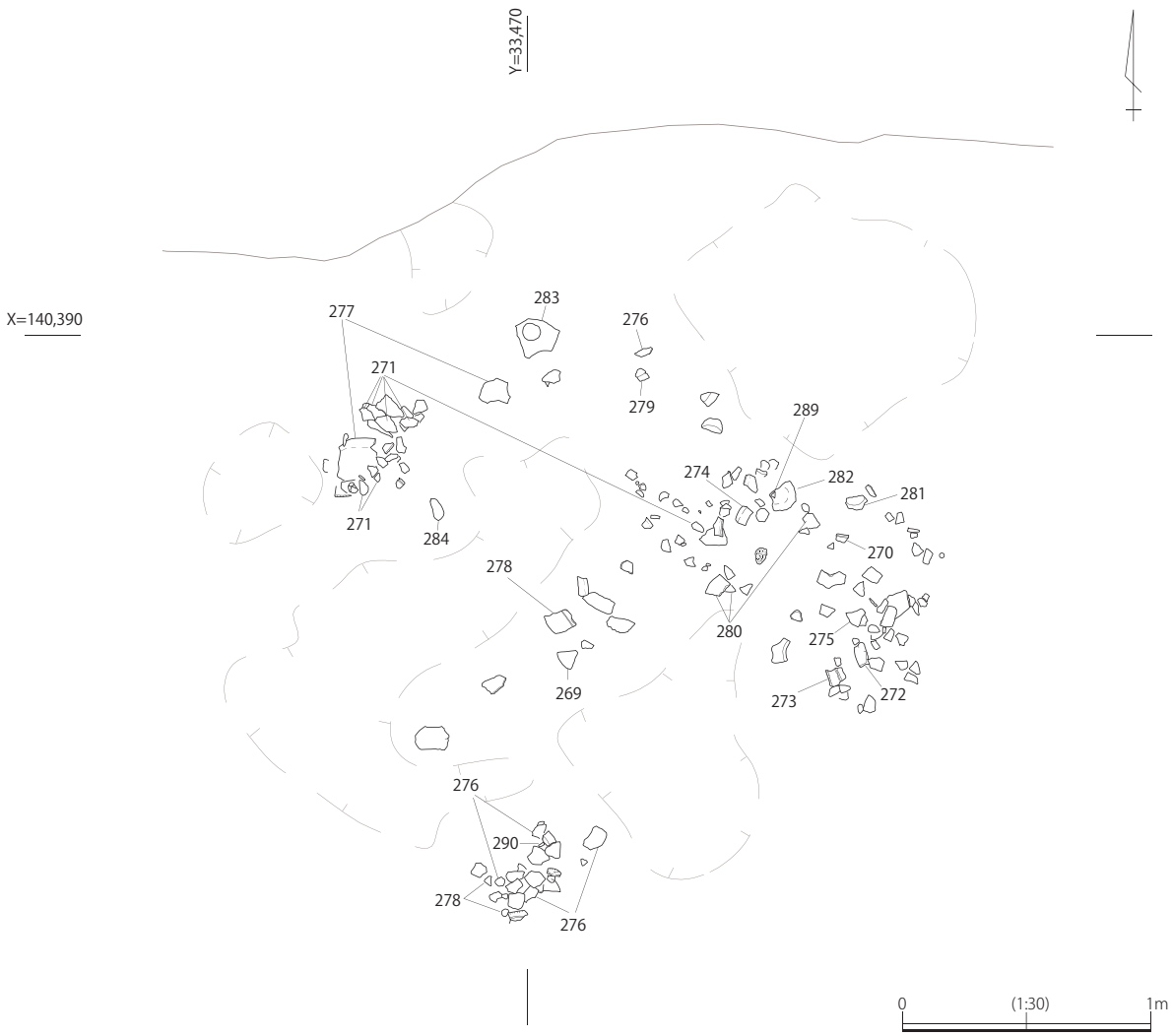
土器群A　調査地区中央北側で検出した。T.P.＋4.010m付近において、東西約2.5m、南北約2.5mの範囲で、弥生土器を密集して検出したものである（第51・55図）。弥生土器蓋（第58図－269）、壺（第58図－270～273）、甕（第59図－274～277）、鉢（第60図－278・279）、高坏（第60図－280）、底部片（第60図－281～283）、粘土塊（第60図－284）、石鏃（第61図－289）、磨製石器（第61図－290）などが出土した。出土遺物は弥生時代前期中頃にまとまりをもつものである。

これらの遺構群出土の土器は、2001-2次調査と同様で、いずれも次節で報告するとおり多条沈線化していない段階のものである。甕で沈線四条のものは包含層内出土土器のみに存在し、遺構出土のものや土器群のものは全て沈線三条までのものであった。今回報告した弥生時代前期の遺構群は、弥生時代前期中頃のもの、近年の広域土器編年（田畑2018）に照らせば4-1期を主体とし、包含層出土土器は一部4-2期にかかる段階であり、北部九州における板付Ⅱb式期併行のものとして位置づけることができよう[1]。

（實盛）

註

1）本調査出土資料群の弥生土器編年における位置づけの詳細については、森岡秀人氏の教示を得た。



第 55 図　第 2 遺構面土器群 A 遺物出土状況図　(KY2011-4)

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物（第１遺構面）

須恵器

248 坏蓋　口径：11.4 cm（復元）。器高：4.7 cm（残存）。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・断面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。天井部の稜線は明瞭で、口縁部内面には内傾する段をもつ。天井部外面の 2/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅰ型式５段階（TK47 型式）。５世紀後半のものと思われる。（第 56 図－248、写真図版 47－１－248）

貿易陶磁器

249 青磁蓮弁文碗　口径：14.8 cm（復元）。器高：3.5 cm（残存）。厚さ：0.4～0.6 cm。色調：内・外面はオリーブ灰色（5GY 6/1）、断面は灰白色（7.5Y 7/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。細い線刻により蓮弁を表現している。15 世紀後半以降のものと思われる。（第 56 図－249、写真図版 47－１－249）

金属製品

250 銅製笄　長さ：10.4 cm（残存）。最大幅：1.0 cm（残存）。厚さ：0.2 cm。江戸時代のものと思われる。（第 56 図－250、写真図版 47－１－250）

２．第１遺構面遺構出土遺物

溝 29

弥生土器

251 壺　長さ：3.4 cm（残存）。最大幅：3.4 cm（残存）。厚さ：0.4～0.8 cm。色調：内・外・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）。胎土：やや密。直径１mm 以下の砂粒と小石を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の口縁部の破片と思われる。口縁部内外面はヘラミガキ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。近世の溝に混入した遺物である。（第 56 図－251、写真図版 47－１－251）

溝 46

須恵質土器

252 片口鉢　底径：7.4 cm（復元）。器高：1.7 cm（残存）。厚さ：0.8～1.2 cm。色調：内・断面は灰白色（7.5Y 7/1）、外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。東播系の製品。12 世紀～14 世紀のものと思われる。（第 56 図－252、写真図版 47－１－252）

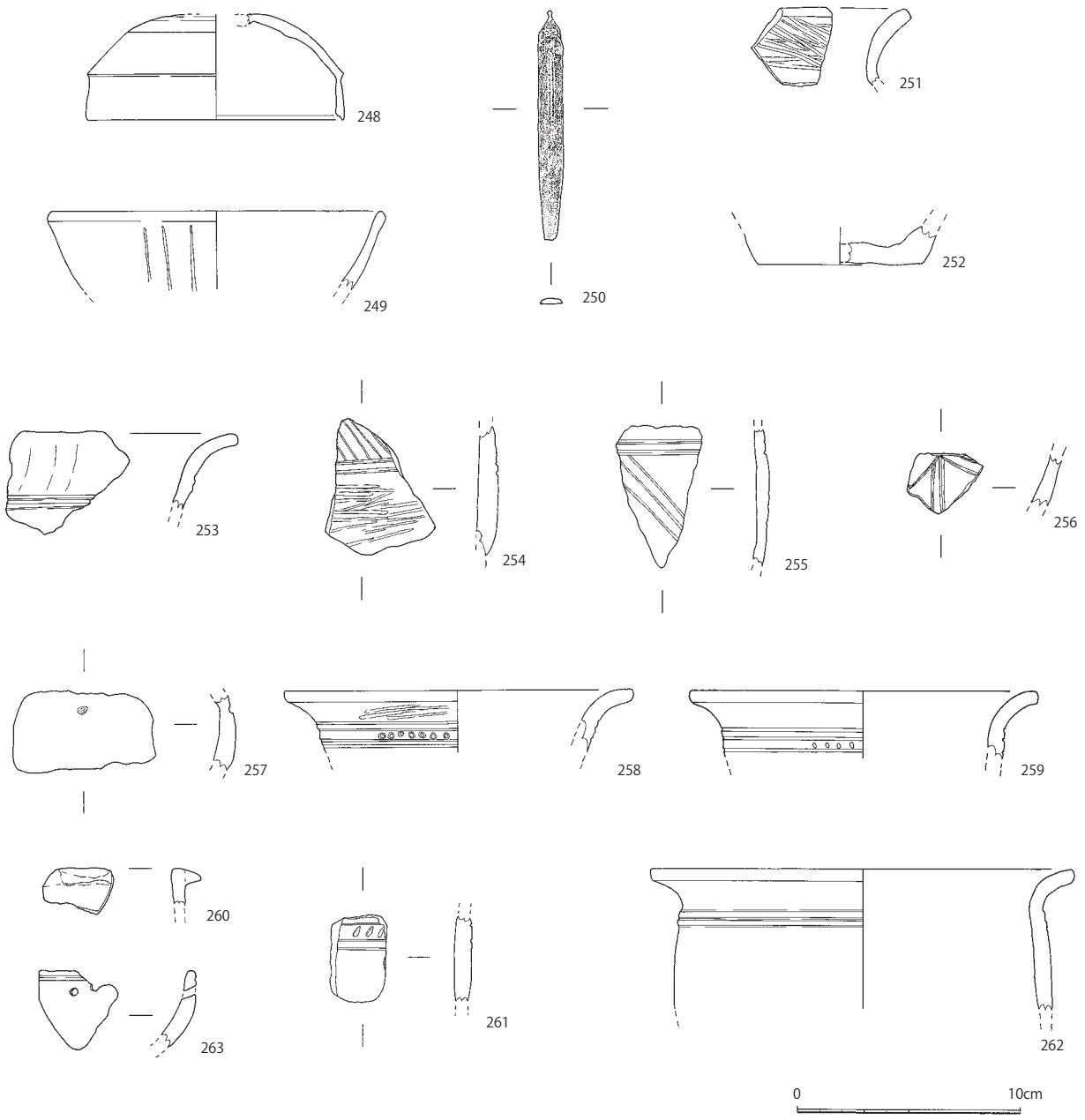
３．遺物包含層内出土遺物（第２遺構面）

弥生土器

253 壺　長さ：4.4 cm（残存）。最大幅：5.4 cm（残存）。厚さ：0.5～0.7 cm。色調：内面は浅黄橙色（10YR 8/4）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３mm の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の口縁部の破片。頸部に削出し突帯を有し、その上部に１条のヘラ描き沈線を巡らしている。その上位は板状工具によるケズリ調整が施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 56 図－253、写真図版 47－２－253）

254 壺　長さ：6.0 cm（残存）。最大幅：5.0 cm（残存）。厚さ：0.7～0.9 cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部の破片と思われる。肩部の上位にはヘラ描きによる２条の沈線を巡らし、その上部に５条以上を１単位とする斜行文を描いている。体部外面はヘラミガキ調整を施している。体部内面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 56 図－254、写真図版 47－２－254）

255 壺　長さ：6.3 cm（残存）。最大幅：3.8 cm（残存）。厚さ：0.4～0.6 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：やや粗。直径１～２mm の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。



第 56 図　出土遺物（第１遺構面・第２遺構面包含層土器・KY2011-4）

残存度：小片。壺の肩部の破片と思われる。肩部の上位にはヘラ描きによる２条の沈線を巡らし、その下部に３条を１単位とする斜行文を描いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 56 図－255、写真図版 47－２－255）

256 壺　長さ：2.7 ㎝（残存）。最大幅：3.4 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）、外面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１～２㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部の破片と思われる。肩部にヘラ描きによる木葉状文を描いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 56 図－256、写真図版 47－２－256）

257 壺　長さ：3.6 ㎝（残存）。最大幅：6.4 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.9 ㎝。色調：内面は浅黄橙色（2.5Y 7/3）、外・断面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：やや粗。直径１～２㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部の破片と思われる。体部内外面の調整については、

器壁が摩耗しているため不明である。体部外面に籾と思われる痕跡がみられる。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第56図－257、写真図版47－２－257）

258壺　口径：15.6㎝（復元）。器高：2.7㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/3)。胎土：密。直径１㎜以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部には半截竹管により２条の沈線を２本巡らし、その間に竹管状の工具による刺突文が施している。体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。播磨系の弥生時代前期(Ⅰ様式)のものと思われる。(第56図－258、写真図版47－２－258)

259壺　口径：15.6㎝（復元）。器高：3.0㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8㎝。色調：内・断面は灰黄褐色（10YR 5/2)、外面はにぶい黄褐色（10YR 5/3）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、丸い端部に至る。頸部には半截竹管により２条の沈線を２本巡らしているが、最下段の沈線は不明である。沈線の間に竹管状の工具によると思われる楕円形の刺突文が施している。体部内外面はナデ調整を施している。播磨系の弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第56図－259、写真図版47－２－259）

260甕　長さ：2.0㎝（残存）。最大幅：3.2㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁は逆「Ｌ」字状を呈し、端部に刻み目はなく若干下方を向いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。瀬戸内系の弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第56図－260、写真図版47－２－260）

261甕　長さ：3.9㎝（残存）。最大幅：2.5㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/3)。胎土：やや粗。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部には半截竹管により２条の沈線を２本巡らしているが、最上段の沈線は不明である。沈線の間に竹管状の工具によると思われる楕円形の刺突文が施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。播磨系の弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第56図－261、写真図版47－２－261）

262甕　口径：19.0㎝（復元）。器高：6.2㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8㎝。色調：内・外・断面は褐色（7.5YR 4/3）。胎土：やや粗。直径１～２㎜の白色砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は大きく開き、丸い端部に至る。肩部に削り出し突帯が巡り、突帯上に１条のヘラ描き沈線を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明であるが、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第56図－262、写真図版47－２－262）

263鉢　長さ：3.5㎝（残存）。最大幅：3.5㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7㎝。色調：内・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。碗状の形態の鉢と思われる。口縁端部下に１条のヘラ描き沈線を巡らす。紐孔と思われる２個一対の孔が開けられている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第56図－263、写真図版47－２－263）

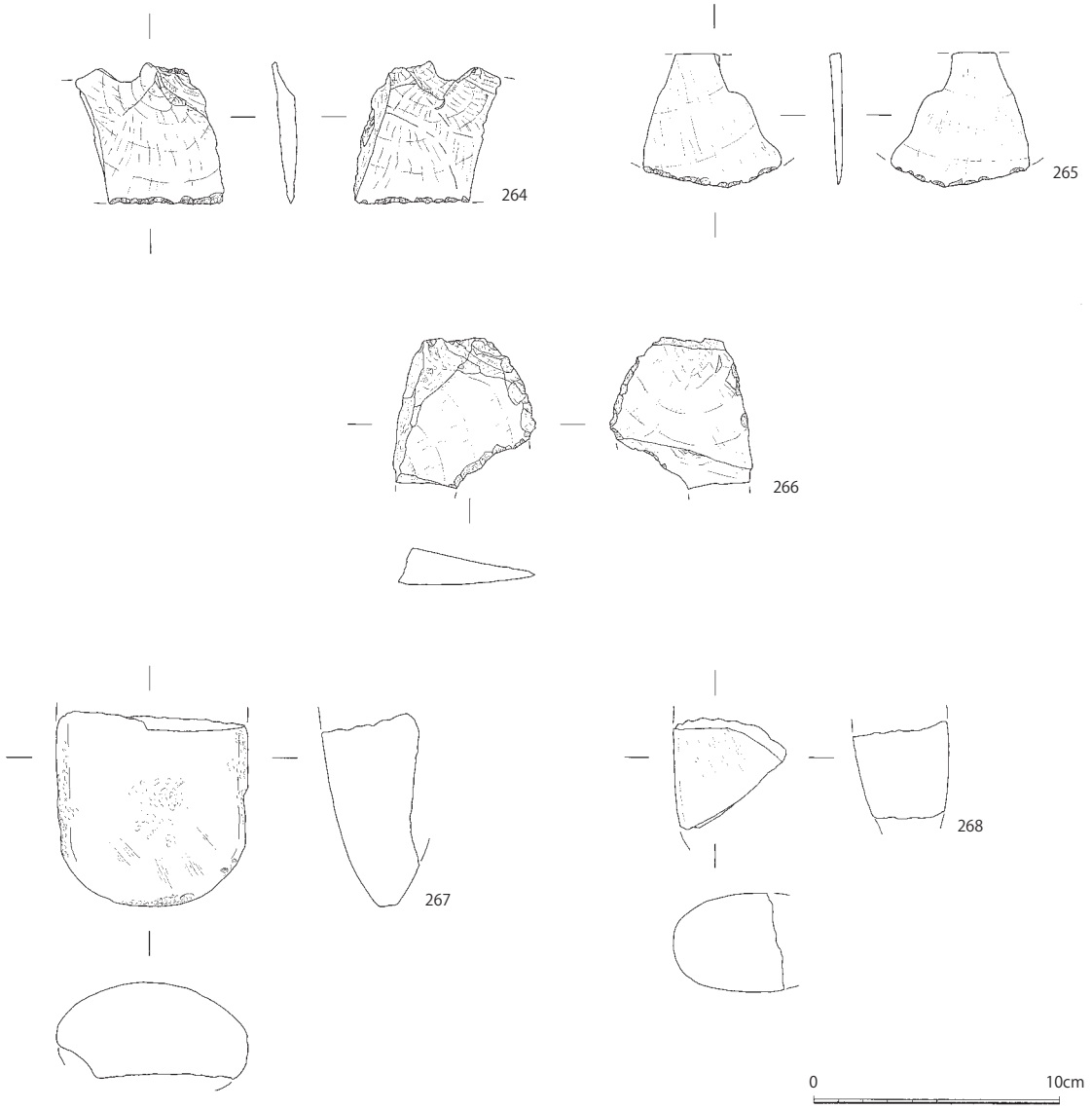
石製品

264削器（サイドスクレイパー）　全長：5.7㎝。最大幅：6.0㎝。厚さ：0.1～0.7㎝。重量：37.8g。色調：灰色（N 6/）。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。（第57図－264、写真図版49－１－264）

265削器（サイドスクレイパー）　全長：5.4㎝。最大幅：5.6㎝。厚さ：0.1～0.5㎝。重量：17.5g。色調：灰白色（N 8/）。白色のスジが入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。（第57図－265、写真図版49－１－265）

266掻器（スクレイパー）　全長：6.1㎝。最大幅：5.7㎝。厚さ：0.1～1.5㎝。重量：52.6g。色調：灰色（N 6/）。白色のスジが細かく入るサヌカイト製（金山産の可能性がある）。一度切損したものを再加工して掻器としている。（第57図－266、写真図版49－１－266）

267太型蛤刃石斧　全長：7.8㎝（残存）。最大幅：7.8㎝（残存）。厚さ：4.0㎝。色調：灰色（10Y 5/1)。敲石として再利用している。弥生時代のものと思われる。溝68の脇で出土した。（第54・57図



第 57 図　出土遺物（第２遺構面包含層土器・KY2011-4）

－267、写真図版 49－１－267）

268 太型蛤刃石斧　全長：4.5 ㎝（残存）。最大幅：4.6 ㎝（残存）。厚さ：4.0 ㎝。色調：灰色（10Y 6/1）。弥生時代のものと思われる。（第 57 図－268、写真図版 49－１－268）

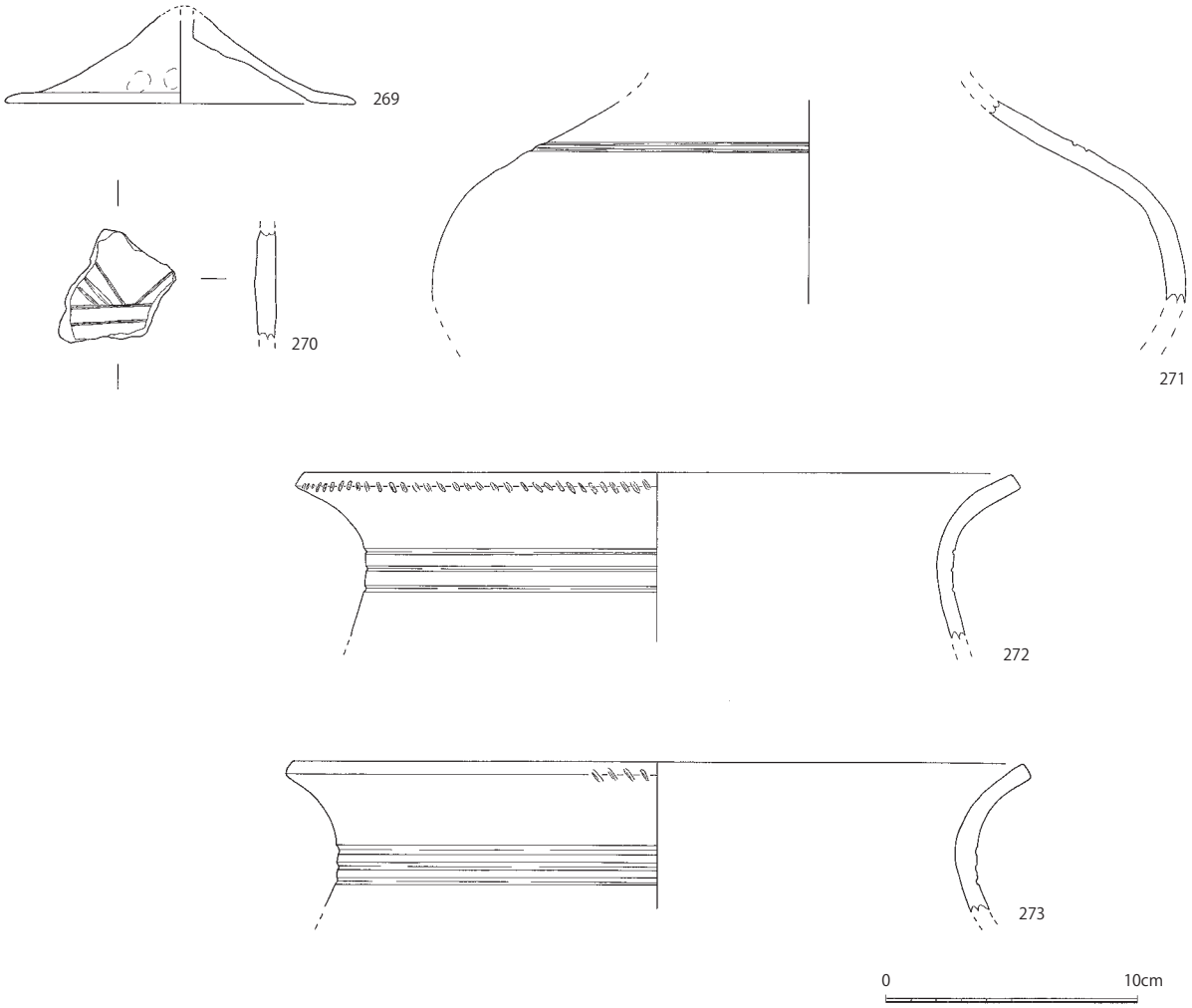
４．第２遺構面遺構出土遺物

土器群Ａ

弥生土器

269 蓋　口径：14.0 ㎝（復元）。器高：3.5 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.9 ㎝。色調：内・外・断面は黄褐色（2.5Y 5/3）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。笠形の形態で天井部に１個の孔を開けている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）の壺の蓋と思われる。（第 55・58 図－269、写真図版 48－１－269）

270 壺　長さ：4.4 ㎝（残存）。最大幅：4.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）、外面の一部は黒色（10YR 2/1）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒



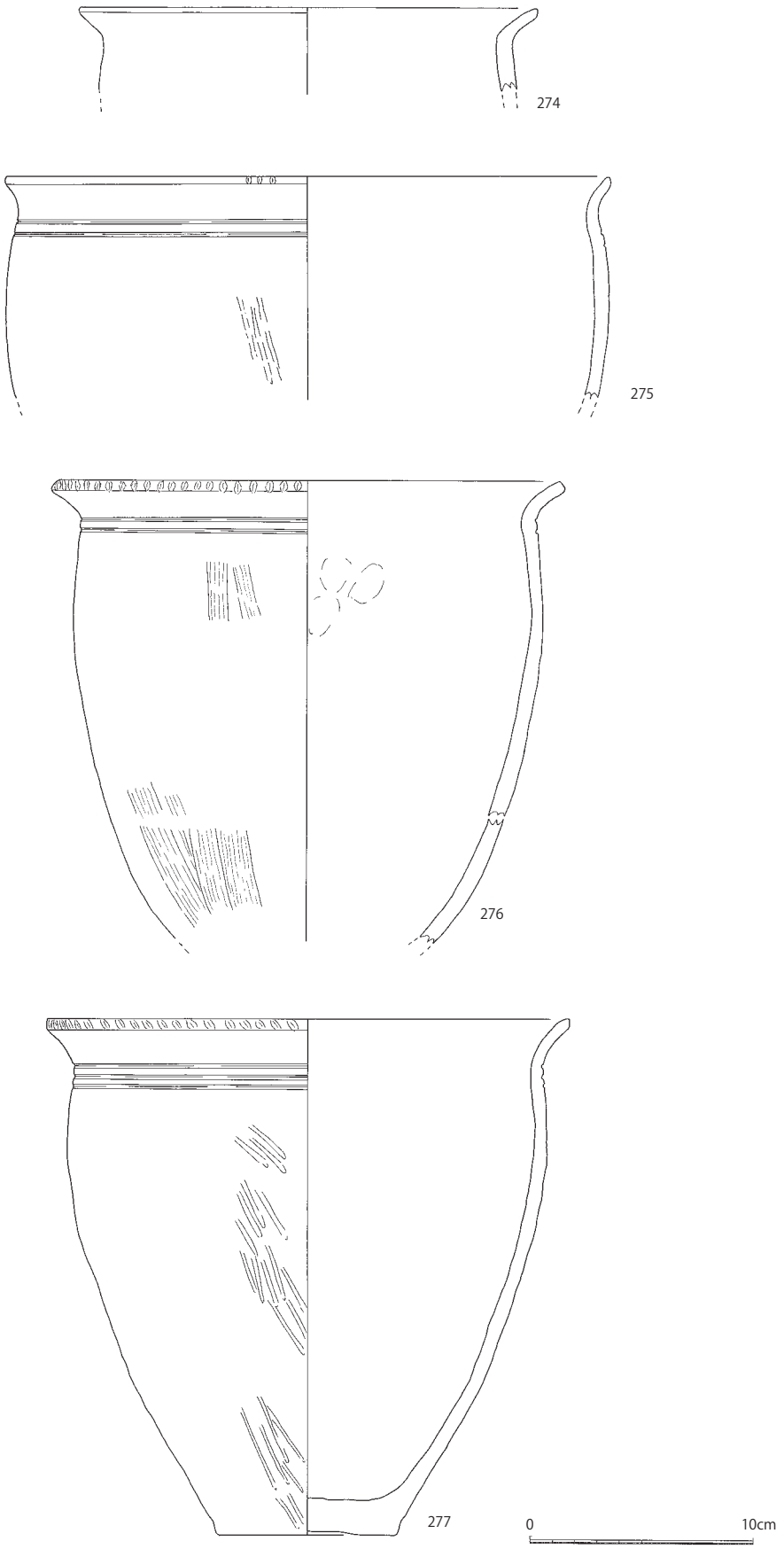
第 58 図　出土遺物（土器群 A 蓋・壺・KY2011-4）

をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部の破片と思われる。肩部の上位にはヘラ描きによる２条の沈線とその上部に３条を１単位とする斜行文を描いている。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・58 図－270、写真図版 48－１－270）

271 壺　胴径：30.0 ㎝（復元）。器高：8.0 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5Y 5/4）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。胴部の上位に２条のヘラ描き沈線を巡らす。体部内外面の調整は器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・58 図－271、写真図版 48－２－271）

272 大型壺　口径：28.2 ㎝（復元）。器高：6.7 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）、外面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は外上方に開き、刻み目を施した端部に至る。頸部に３条のヘラ描き沈線を施している。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・58 図－272、写真図版 48－１－272）

273 甕　口径：29.0 ㎝（復元）。器高：5.8 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.9 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：



第 59 図　出土遺物（土器群 A 甕・KY2011-4）

小片。口縁部は外上方に開き、刻み目を施した端部に至る。頸部に３条のヘラ描き沈線を施している。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・58 図－273、写真図版 48－１－273）

274 甕　口径：20.4 ㎝。器高：3.8 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）、外面は黒褐色（10YR 3/2）。胎土：粗。直径１～５㎜の白色砂粒・小石を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は大きく開き、丸い端部に至る。体部内外面の調整は器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・59 図－274、写真図版 48－１－274）

275 甕　口径：27.0 ㎝（復元）。器高：9.9 ㎝（残存）。厚さ：0.4～0.7 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 4/3）。胎土：やや粗。直径１㎜以下の砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干開き、刻み目を施した端部に至る。刻み目の残存状況は摩耗のため不良である。肩部に２条のヘラ描き沈線を施している。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・59 図－275、写真図版 48－１－275）

276 甕　口径：22.4 ㎝（復元）。器高：20.5 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒・黒色粒子・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部は外上方に開き、刻み目を施した端部に至る。頸部に２条のヘラ描き沈線を施している。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施し、ユビオサエの痕跡がみられる。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・59 図－276、写真図版 48－２－276）

277 甕　口径：23.4 ㎝（復元）。器高：23.0 ㎝（復元）。厚さ：0.4～1.5 ㎝。色調：内・断面は浅黄色（2.5Y 7/4）、外面は明黄褐色（10YR 6/6）。胎土：粗。直径１～３㎜ の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は外上方に開き、刻み目を施した端部に至る。頸部に３条のヘラ描き沈線を施している。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・59 図－277、写真図版 48－２－277）

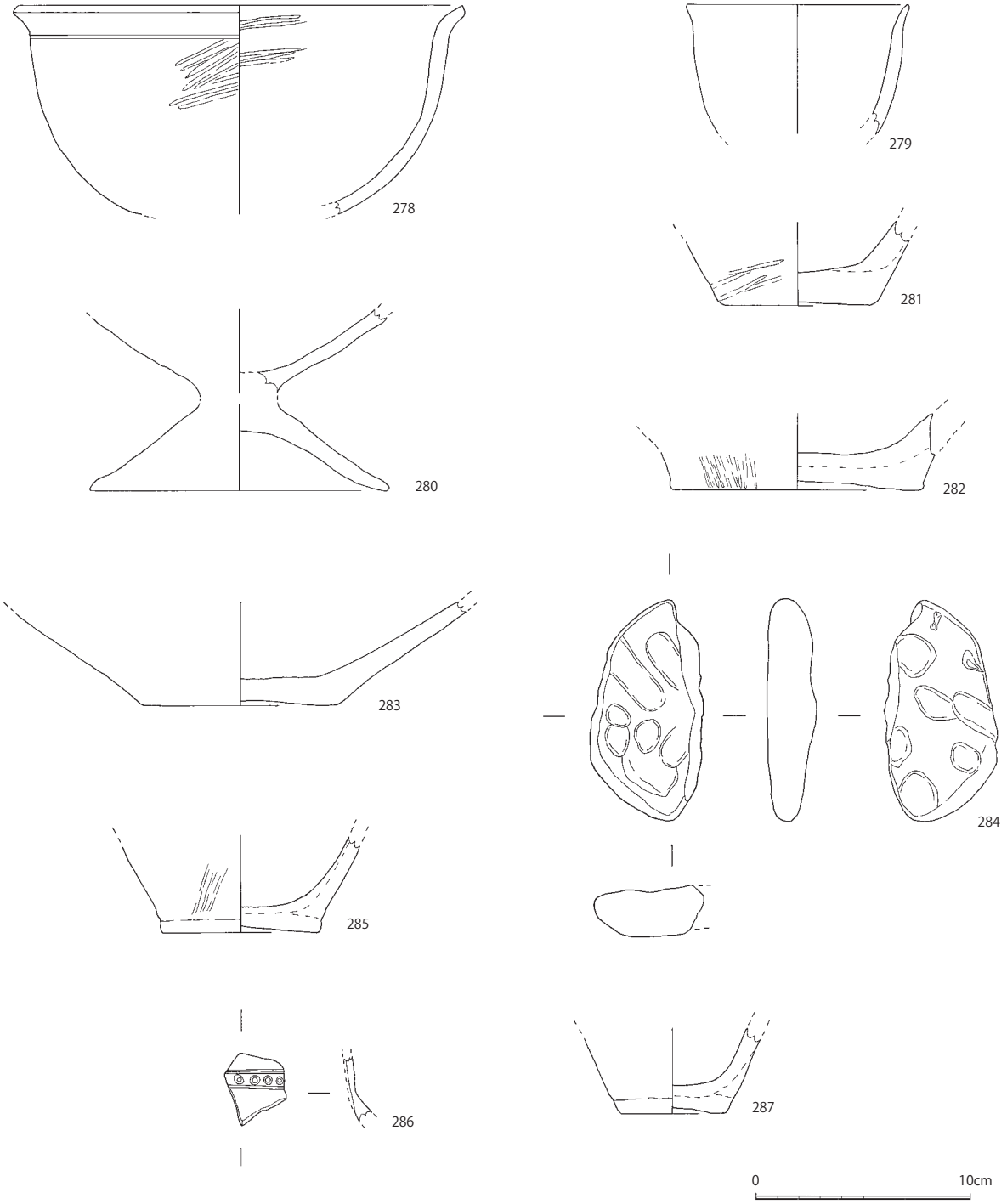
278 鉢　口径：20.8 ㎝（復元）。器高：9.7 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.8 ㎝。色調：内・外面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は緩やかに開き端部に至る。頸部に１条のヘラ描き沈線を施している。体部内外面はヘラミガキ調整を施しているが、器壁が摩耗しているため不明瞭である。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・60 図－278、写真図版 48－２－278）

279 台付き鉢　口径：10.4 ㎝（復元）。器高：6.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。坏部はコップ状を呈し、口縁端部は若干開く。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・60 図－279、写真図版 48－１－279）

280 高坏　底径：13.8 ㎝（復元）。器高：8.0 ㎝（復元）。厚さ：0.5～1.5 ㎝。色調：内・外・断面は褐色（7.5YR 4/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜の白色砂粒・黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。坏部は大きく外上方に、脚部は大きく外下方に開く形態である。体部内外面はナデ調整を施している。弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 55・60 図－280、写真図版 48－１－280）

281 底部片　底径：7.0 ㎝（復元）。器高：3.9 ㎝（残存）。厚さ：1.1～1.9 ㎝。色調：内・断面は浅黄色（2.5Y 7/3）、外面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 2/3。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施している。甕の底部と思われる。（第 55・60 図－281、写真図版 48－２－281）

282 底部片　底径：11.6 ㎝（復元）。器高：3.6 ㎝（残存）。厚さ：1.3～2.3 ㎝。色調：内・外・



第 60 図　出土遺物（土器群 A その他器種・遺構土器・KY2011-4）

断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 2/3。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施している。大型壺の底部と思われる。（第 55・60 図－282、写真図版 48－２－282）

283 底部片　底径：9.0 ㎝（復元）。器高：4.8 ㎝（残存）。厚さ：0.6～1.3 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい黄褐色（10YR 5/4）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒・角閃石・小石を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。体部内面はナデ調整を施している。生駒西麓産の製品である。大型壺の底部と思われる。（第 55・60

図－283、写真図版 48－２－283）

284 粘土塊　長さ：10.3 ㎝（残存）。最大幅：5.2 ㎝（残存）。厚さ：1.0～2.3 ㎝。色調：表・裏面は明赤褐色（2.5YR 5/6）、断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：粗。直径１～３㎜の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。表裏面ともにユビナデ調整と思われる痕跡がみられることから、大型壺の底部の一部の可能性がある。（第 55・60 図－284、写真図版 48－１－284）

石製品

289 石鏃　全長：2.3 ㎝。最大幅：1.9 ㎝。厚さ：0.1～0.3 ㎝。重量：1.2g。サヌカイト製（金山産の可能性がある）。弥生時代の打製凹基無茎式石鏃と思われる。（第 55・61 図－289、写真図版 49－１－289）

290 磨製石器　全長：2.2 ㎝（残存）。最大幅：0.9 ㎝。厚さ：0.2～0.4 ㎝。重量：1.3g。緑泥片岩質。弥生時代の磨製石鏃もしくは石棒の基部と思われる。（第 55・61 図－290、写真図版 49－１－290）

溝 14

石製品

288 石鏃　全長：3.5 ㎝（残存）。最大幅：1.8 ㎝。厚さ：0.1～0.5 ㎝。重量：2.1g。サヌカイト製（二上山産の可能性がある）。基部は欠損している。弥生時代の打製凸基有茎式石鏃と思われる。（第 51・61 図－288、写真図版 49－１－288）

溝 68

弥生土器

285 底部片　底径：7.4 ㎝（復元）。器高：4.5 ㎝（残存）。厚さ：0.7～1.6 ㎝。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。胎土：やや粗。直径１㎜ 以下の砂粒・黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 1/2。体部外面はヘラミガキ調整を施していると思われるが、器壁が摩耗しているため不明瞭である。体部内面はナデ調整を施している。甕の底部と思われる。（第 54・60 図－285、写真図版 47－２－285）

落込 24

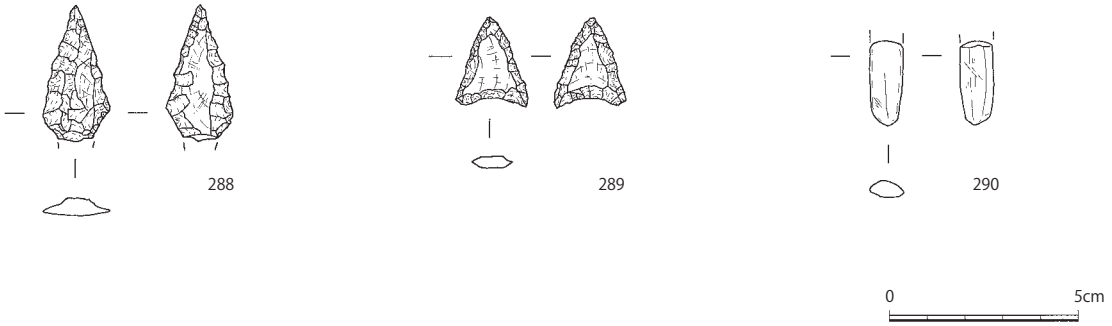
弥生土器

286 壺　長さ：3.4 ㎝（残存）。最大幅：2.9 ㎝（残存）。厚さ：0.6～0.8 ㎝。色調：内・外・断面は橙色（7.5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径１～３㎜ の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部付近の破片と思われる。体部内外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。肩部には半截竹管により２条の沈線を１本巡らし、その間に竹管状の工具による刺突文を施している。播磨系の弥生時代前期（Ⅰ様式）のものと思われる。（第 60 図－286、写真図版 47－２－286）

287 底部片　底径：5.0 ㎝（復元）。器高：4.0 ㎝（残存）。厚さ：0.8～1.9 ㎝。色調：内面は淡黄色（2.5Y 8/4）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：粗。直径１～３㎜ の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。体部外面の調整については、器壁が摩耗しているため不明である。内面はナデ調整を施している。甕の底部と思われる。（第 60 図－287、写真図版 47－２－287）

上記で報告したように、調査で出土したサヌカイト製石器（製品）の合計重量は二上山産と思われるもの 2.1g、金山産の可能性があるもの 109.1g であった。それ以外に剥片、石核が二上山産と思われるもの 171.6g、金山産の可能性があるもの 182.8g 出土しており（写真図版 49－２）、製品と合わせた総計重量は、二上山産と思われるもの 173.7g、金山産の可能性があるもの 291.9g であった。なお、これらの弁別はすべて目視にて行ったため、異同の可能性があることを断っておく。

（村上・實盛）



第 61 図　出土遺物（遺構石器・KY2011-4）

第10章　雁屋遺跡2011－５次（ＫＹ2011－５）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、現国道170号と事業地の接続部から東におよそ70mの箇所で、西には2003-2次調査地区が、東には2015-1次調査地区がある。調査前現況は宅地であった。宅地造成のために0.5～0.7mほど盛土されていた。その下層は0.3～0.4mの耕土であり、東へ行くほど厚く堆積していた。その下層は東端の一部分で0.1mほど床土が貼られていた。宅地造成以前は水田地であったと思われる。

耕土および床土の下層には、調査地区西側で0.6～0.7mほど中世～近世の遺物包含層が堆積しており、東へ行くほど薄くなり西端ではほとんど存在しなかった。その下層には調査地区西側で0.1～0.2m、東側で0.3mほど古墳時代～飛鳥時代の遺物包含層が堆積しており、その下面が遺構面であった。その下層は灰白色系の粗砂が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第62図）。これらの堆積状況から、古墳時代～飛鳥時代には遺跡西側に存在した河内湖へ向かって緩やかに傾斜する土地であったのを、古代もしくは中世に耕作地利用のためほぼ水平な土地とし、近世にもその利用を水田の段差等を設けながら継続していたと考えられる。

（實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに古墳時代と飛鳥時代に属するもので、溝、土坑、落込があった（第62図）。両時代の遺構を同一遺構面で検出した。古墳時代後期から飛鳥時代にかけて継続的に利用された集落と考えられる。遺構面の標高は東端でT.P.＋3.190m、西端でT.P.＋3.010mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

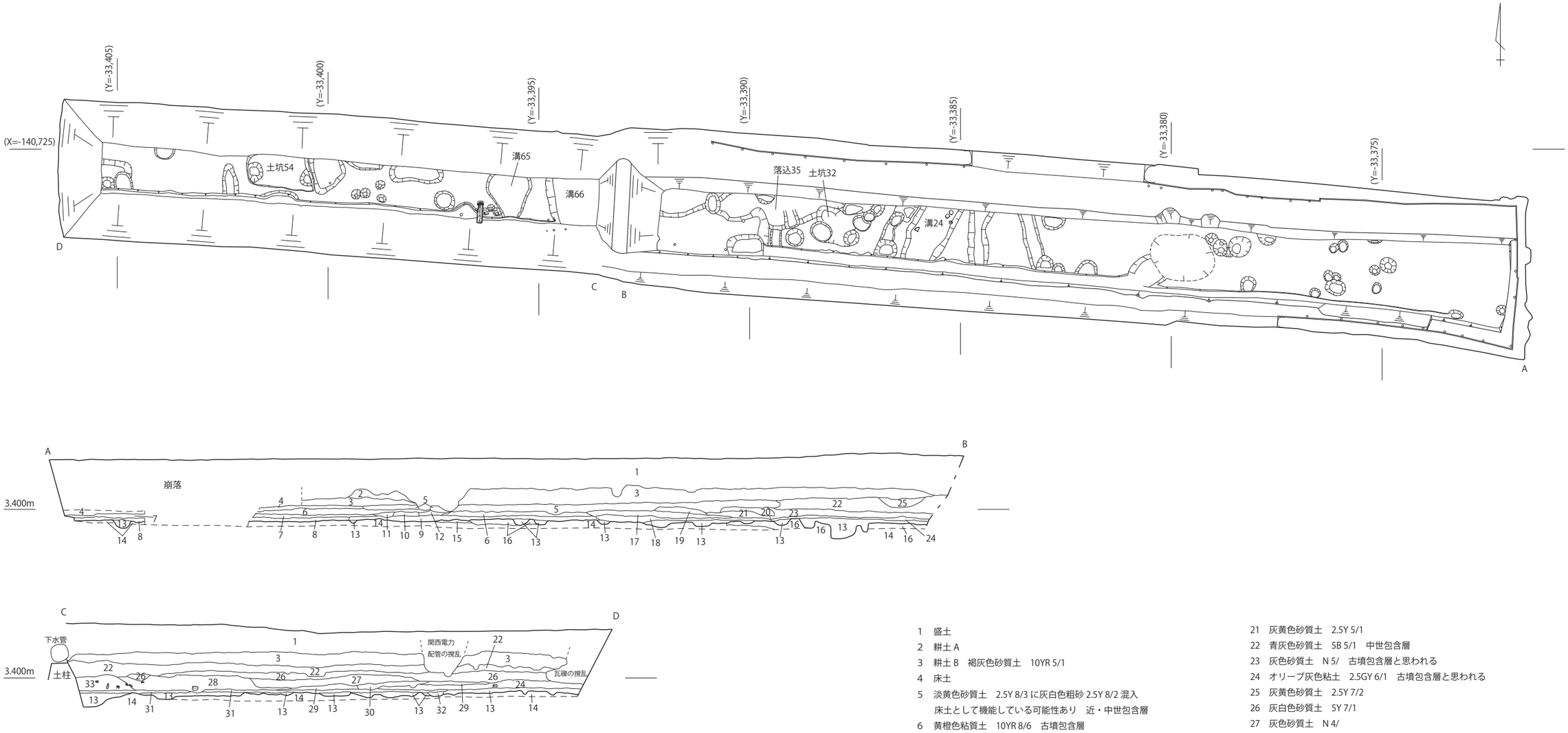
土坑32　調査地区中央で検出した。直径0.9m、深さ0.26mで不整円形を呈する。上端の標高はT.P.＋3.170m、底部はT.P.＋2.850mであった（第62図）。須恵器坏蓋（第64図－291・292）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

土坑54　調査地区西寄りで検出した。東西1.5m、深さ0.13mでいびつな角丸台形を呈する。北端は調査地区外である。土坑内の東端と西端に小土坑が存在する。上端の標高はT.P.＋3.070m、底部はT.P.＋2.940m、東端の小土坑の底部はT.P.＋2.870m、西端の小土坑の底部はT.P.＋2.850mであった（第62図）。須恵器坏身（第64図－293）などが出土した。出土遺物から古墳時代末～飛鳥時代の遺構と考える。

溝24　調査地区中央やや東寄りで検出した。北から南へと向いた直線的な溝で、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ1.3m、最大幅1.0m、深さは0.17mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋3.170m、底部がT.P.＋3.030mで、南端部分の上端はT.P.＋3.110m、底部はT.P.＋3.000mであった（第62・63図）。土師器把手付碗（第64図－294）、碗（第64図－295・296）、須恵器坏蓋（第64図－297・298）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期末の遺構と考える。

溝65　調査地区中央西寄りで検出した。北から南へと向き、部分的に広がる不整形な溝で、両端は調査地区外である。検出できた規模は長さ1.0m、最も広がった部分の最大幅1.1m、深さは0.12mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋3.040m、底部がT.P.＋2.960mで、南端部分の上端はT.P.＋3.020m、底部はT.P.＋2.920mであった（第62図）。須恵器坏身（第64図－299・300）などが出土した。古墳時代後期末の遺構と考える。

溝66　調査地区中央西寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、両端は調査地区外である。東端は下水管保護のため設けた未調査箇所内にあり検出できなかった。検出できた規模は長さ1.1m、幅1.2m、深さは0.2mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋3.030m、底部がT.P.＋2.860mで、南



1　盛土
2　耕土 A
3　耕土 B　褐灰色砂質土　10YR 5/1
4　床土
5　淡黄色砂質土　2.5Y 8/3 に灰白色粗砂 2.5Y 8/2 混入
　床土として機能している可能性あり　近・中世包含層
6　黄橙色粘質土　10YR 8/6　古墳包含層
7　にぶい黄橙色砂質土　10YR 7/2
8　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2
9　７層が還元している　灰白色砂質土　10Y 7/1　古墳包含層
10　６層が還元している　青灰色砂質土　5B 6/1
11　浅黄色砂質土　2.5Y 7/3　中世遺構
12　灰白色シルト　2.5Y 7/1
13　暗灰色砂質土　N 3/　古墳後期遺構
14　灰白色粗砂　2.5Y 8/1
15　明青灰色砂質土　5B 7/1
16　明オリーブ灰色砂質土　5GY 7/1
17　灰黄褐色砂質土　10YR 6/2　古墳包含層
18　灰白色粗砂　2.5Y 8/2　部分的に鉄分により赤変
19　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2
20　灰黄色砂質土　2.5Y 6/2
21　灰黄色砂質土　2.5Y 5/1
22　青灰色砂質土　5B 5/1　中世包含層
23　灰色砂質土　N 5/　古墳包含層と思われる
24　オリーブ灰色粘土　2.5GY 6/1　古墳包含層と思われる
25　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2
26　灰白色砂質土　5Y 7/1
27　灰色砂質土　N 4/
28　26 層と淡黄色粗砂　5Y 8/3 が互層に堆積　近世か？　土器の取上げあり
29　青灰色砂質土　5B 5/1
30　明青灰色シルト　5B 7/1 に灰白色細砂　5Y 8/1 混入
31　灰色砂質土　N 5/
32　灰色粘質土　5Y 6/1
33　灰白色砂質土　N 7/ に灰白色粗砂　N 8/ 混入

0　(1:100)　5m

第 62 図　調査地区平面図・断面図　（KY2011-5）

第63図　溝24遺物出土状況図　(KY2011-5)

端部分の上端はT.P.＋3.020m、底部はT.P.＋2.830mであった（第62図）。須恵器坏身（第64図－301・302）などが出土した。古墳時代後期末の遺構と考える。

落込35　調査地区中央北端で検出した。検出できた規模は東西3.0m、南北0.8m、深さ0.13mで、西側は多くを他の落ち込みにより切られ、検出できた肩の一部も土坑32などにより切られている。上端の標高はT.P.＋3.130m、底部はT.P.＋3.000mであった（第62図）。須恵器坏蓋（第64図－303）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

（實盛）

第３節　出土遺物

１．第１遺構面遺構出土遺物

土坑 32

須恵器

291 坏蓋　口径：8.6 cm（復元）。器高：1.2 cm（残存）。厚さ：0.1～0.2 cm。色調：内・断面は灰色（N 5/）、外面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。天井部につまみを持つ形態と思われる。体部外面に降灰がみられる。Ⅲ型式１段階（TK217 型式）。７世紀中頃のものと思われる。（第 64 図－291、写真図版 50－１－291）

292 坏蓋　口径：10.0 cm（復元）。器高：2.3 cm（残存）。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は灰褐色（5YR 6/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。天井部につまみを持つ形態と思われる。Ⅲ型式１段階（TK217 型式）。７世紀中頃のものと思われる。（第 64 図－292、写真図版 50－１－292）

土坑 54

須恵器

293 坏身　口径：8.8 cm（復元）。器高：2.1 cm（残存）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面は灰褐色（5YR 6/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。Ⅱ型式６段階（TK217 型式）。７世紀前半のものと思われる。（第 64 図－293、写真図版 50－１－293）

溝 24

土師器

294 把手付碗　口径：11.0 cm（復元）。器高：7.4 cm（残存）。厚さ：0.3～1.4 cm。色調：内・外・断面は褐灰色（10YR 4/1）。胎土：やや粗。直径１mm 以下の砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/4。体部外面の下半部と把手の接合部はハケメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面下半部はナデ調整を施している。把手には直径７mm程度のひとつの孔を開けている。６世紀代のものと思われる。（第 63・64 図－294、写真図版 50－１－294）

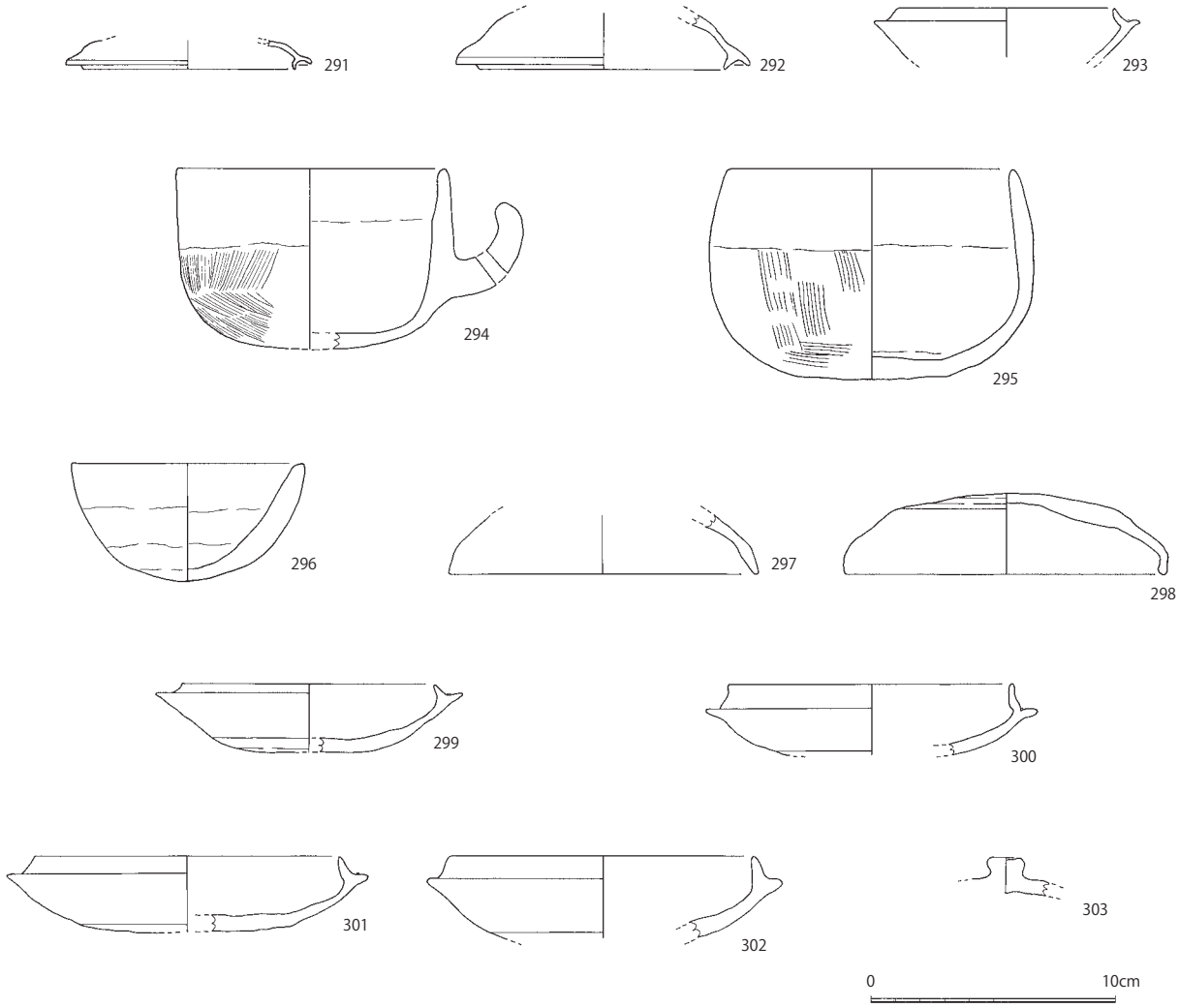
295 碗　口径：11.6 cm（復元）。器高：8.6 cm（復元）。厚さ：0.3～0.8 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：やや粗。直径１mm 以下の砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。体部外面の下半部はハケメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面下半部はナデ調整を施している。底部内面に粘土紐の痕跡がみられる。６世紀代の把手付碗と思われる。（第 63・64 図－295、写真図版 50－１－295）

296 碗　口径：9.4 cm（復元）。器高：4.8 cm（復元）。厚さ：0.4～1.0 cm。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径１～２mm 程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。ナデ調整を施しているが、粘土紐の痕跡がみられる。６世紀代のものと思われる。（第 63・64 図－296、写真図版 50－１－296）

須恵器

297 坏蓋　口径：12.6 cm（復元）。器高：2.4 cm（残存）。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・断面は灰色（N 5/）、外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。天井部の稜線は無く、口縁部は若干外方向に開く。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）。６世紀末のものと思われる。（第 64 図－297、写真図版 50－１－297）

298 坏蓋　口径：13.0 cm（復元）。器高：3.3 cm（残存）。厚さ：0.3～0.8 cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：やや粗。直径１～２mm 程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。天井部の稜線は無く、口縁部は直下する。天井部外面の 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）。６世紀末のものと思われる。（第 63・64 図－298、写真図版 50－１－298）



第 64 図　出土遺物（KY2011-5）

溝 65

須恵器

299 坏身　口径：10.4 cm（復元）。器高：2.8 cm（残存）。厚さ：0.2～0.6 cm。色調：内・断面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径 1 mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ型式 5 段階（TK209 型式）。6 世紀末のものと思われる。（第 64 図－299、写真図版 50－ 1 －299）

300 坏身　口径：11.6 cm（復元）。器高：2.9 cm（残存）。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径 1 mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。体部外面に降灰がみられる。Ⅱ型式 5 段階（TK209 型式）。6 世紀末のものと思われる。（第 64 図－300、写真図版 50－ 1 －300）

溝 66

須恵器

301 坏身　口径：12.4 cm（復元）。器高：3.3 cm（残存）。厚さ：0.3～0.7 cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：密。直径 1 mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：不良。残存度：小片。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。Ⅱ

型式３段階（MT85 型式）又はⅡ型式４段階（TK43 型式）。６世紀後半のものと思われる。（第 64 図－301、写真図版 50－１－301）

302 坏身　口径：12.4 ㎝（復元）。器高：3.1 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.6 ㎝。色調：内・断面は灰色（N 5/）、外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部は若干内傾し、端部は丸い。体部外面の下部 1/3 程度に回転ヘラケズリ調整を施している。体部外面に降灰がみられる。Ⅱ型式５段階（TK209 型式）。６世紀末のものと思われる。（第 64 図－302、写真図版 50－１－302）

落込 35

須恵器

303 坏蓋のつまみ　最大長：3.2 ㎝（残存）。器高：1.5 ㎝（残存）。厚さ：0.5～0.7 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。Ⅲ型式１段階（TK217 型式）又はⅢ型式２段階（TK46 型式）。７世紀中～後半のものと思われる。（第 64 図－303、写真図版 50－１－303）

（村上）

第 11 章　雁屋遺跡 2012－１次（ＫＹ2012－１）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内東端にあたり、西には 2003-1 次調査地区が、東には周辺調査の 2010-2 次調査地区がある。調査前現況は民間事務所であった。事務所建設のために 0.4mほど盛土されていた。その下層は 0.1～0.2mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。事務所建設以前は水田地であったと思われる。

床土の下層に 0.2mほど中世～近世の遺物包含層が堆積しており、その下面が第１遺構面であった。その下層は暗灰色系の粘土や褐灰色系の粘質土などが堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 65 図）。

（實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに鎌倉時代に属するもので、Pit、土坑、溝、井戸があった（第 65 図）。全体的には中世の鋤溝遺構と、Pit、土坑、井戸といった集落遺構を検出したが、集落遺構は鋤溝遺構よりのちに掘削されていた。中世の段階で耕作地として利用していたのを集落に転用したと考えられる。転用の時期は出土遺物からみて 13 世紀末～14 世紀初頭であろう。遺構面の標高は東端で T.P.＋6.450m、西端で T.P.＋6.580mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

Pit２　調査地区東寄りで検出した。直径 0.3m、深さ 0.21mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.620m、底部は T.P.＋6.410mであった（第 65 図）。土師器皿（第 67 図－308）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

Pit19　調査地区東寄りで検出した。直径 0.35m、深さ 0.11mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.625m、底部は T.P.＋6.510mであった（第 65 図）。瓦器碗（第 67 図－309）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

Pit20　調査地区東寄りで検出した。直径 0.35m、深さ 0.19mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.650m、底部は T.P.＋6.460mであった（第 65 図）。瓦器碗（第 67 図－310）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

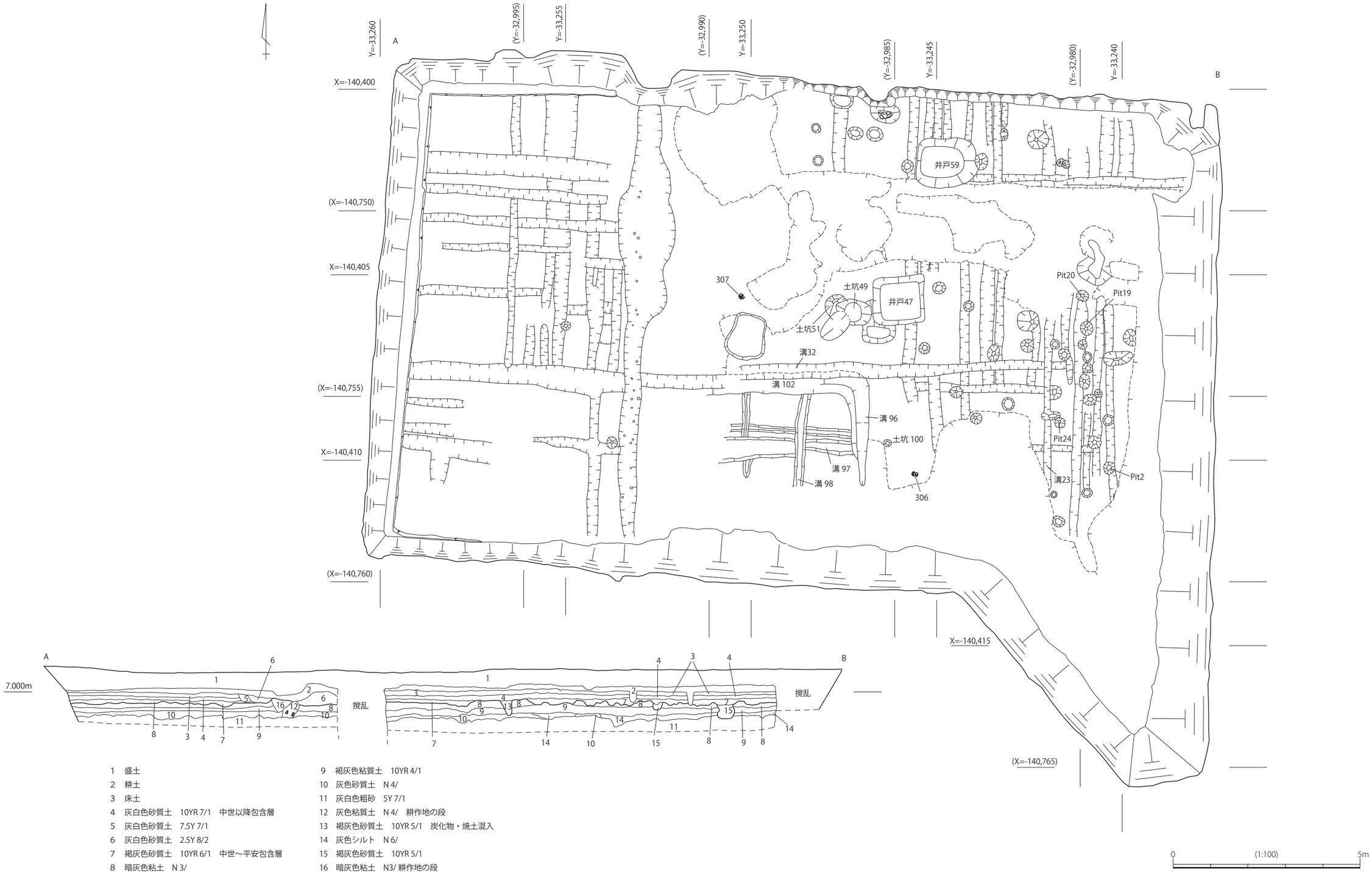
Pit24　調査地区東寄りで検出した。直径 0.25m、深さ 0.24mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.610m、底部は T.P.＋6.370mであった（第 65 図）。土師器皿（第 67 図－311）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

土坑 49　調査地区中央で検出した。東西 0.9m、南北 0.6m、深さ 0.62mでいびつな楕円形を呈する。遺構の南西側の一部を他の土坑により切られる。上端の標高は T.P.＋6.700m、底部は T.P.＋6.080mであった（第 65 図）。土師器皿（第 67 図－312）、瓦器碗（第 67 図－313・314）、青磁碗（第 67 図－315）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

土坑 51　調査地区中央で検出した。直径 0.55m、深さ 0.1mで円形を呈する。遺構の南西半は土坑 49 などにより失われる。上端の標高は T.P.＋6.700m、底部は T.P.＋6.600mであった（第 65 図）。土師器皿（第 67 図－316）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

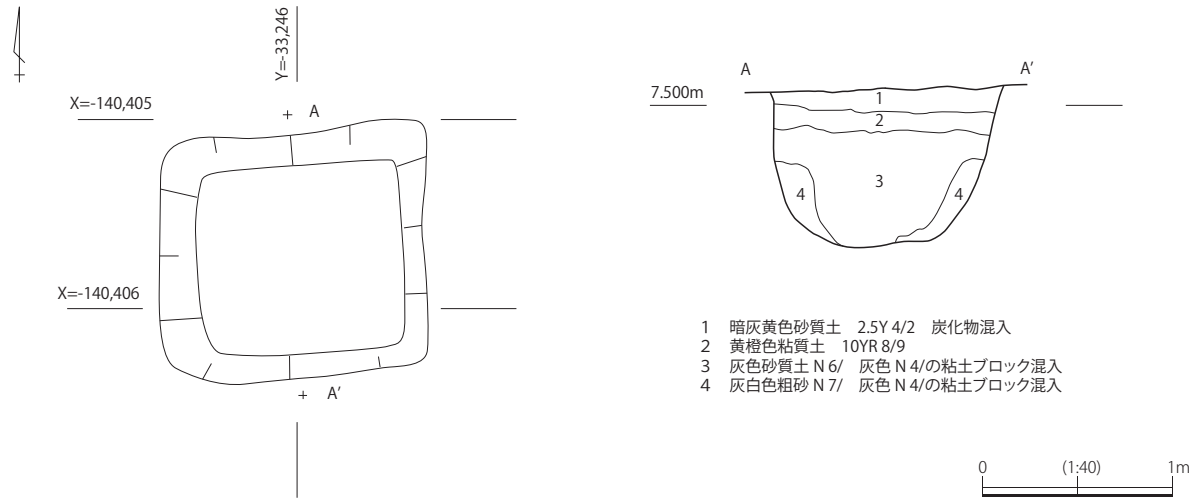
土坑 100　調査地区中央南寄りで検出した。直径 0.2m、深さ約 0.1mで円形を呈する。上端の標高は T.P.＋6.560m、底部は T.P.＋6.530mであった（第 65 図）。土師器皿（第 67 図－317）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。

溝 23　調査地区東側で検出した。北から南へと向いた溝で両端とも後世の撹乱による削平のため失われる。検出できた規模は長さ 4.6m、最大幅 0.25m、深さは約 0.1mである。標高は北端部分の上

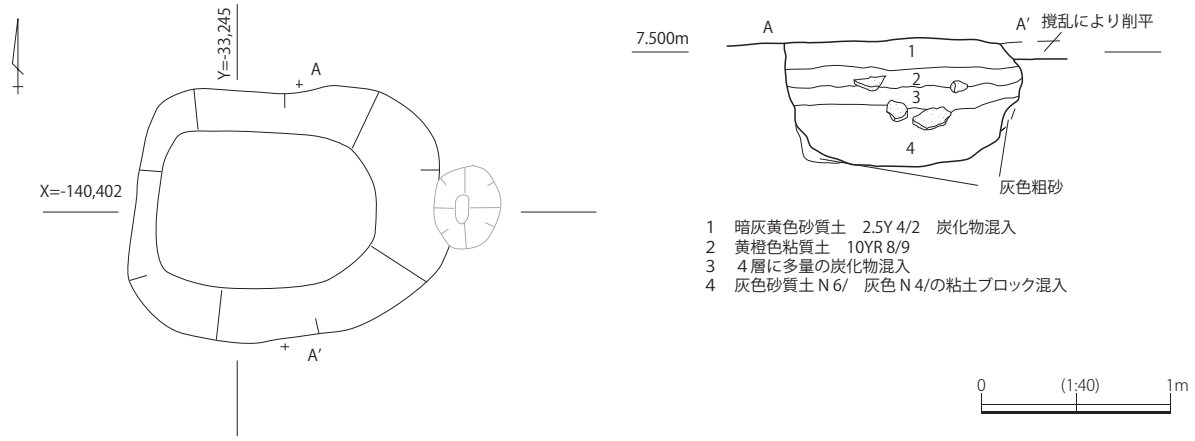


1　盛土
2　耕土
3　床土
4　灰白色砂質土　10YR 7/1　中世以降包含層
5　灰白色砂質土　7.5Y 7/1
6　灰白色砂質土　2.5Y 8/2
7　褐灰色砂質土　10YR 6/1　中世～平安包含層
8　暗灰色粘土　N 3/
9　褐灰色粘質土　10YR 4/1
10　灰色砂質土　N 4/
11　灰白色粗砂　5Y 7/1
12　灰色粘質土　N 4/　耕作地の段
13　褐灰色砂質土　10YR 5/1　炭化物・焼土混入
14　灰色シルト　N 6/
15　褐灰色砂質土　10YR 5/1
16　暗灰色粘土　N3/ 耕作地の段

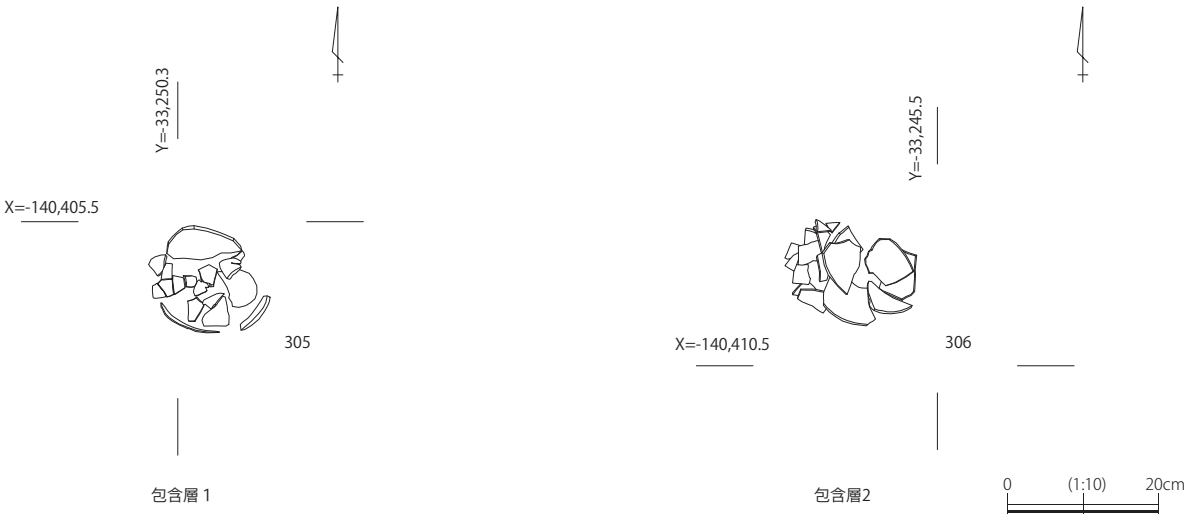
第 65 図　調査地区平面図・断面図　(KY2012-1)



井戸 47



井戸 59



包含層 1　　包含層2

第66図　井戸47・59平面図・断面図・包含層内遺物出土状況図（KY2012-1）

端がT.P.＋6.625m、底部がT.P.＋6.590mで、南端部分の上端はT.P.＋6.630m、底部はT.P.＋6.575mであった（第65図）。瓦器碗（第67図－318）などが出土した。鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

溝32　調査地区東側で検出した。西から東へと向いた溝で、西端は後世の削平により失われ、東端は他の溝により切られる。検出できた規模は長さ8.7m、最大幅0.4m、深さは0.11mである。標高は東端部分の上端がT.P.＋6.640m、底部がT.P.＋6.580mで、西端部分の上端はT.P.＋6.725m、底部はT.P.＋6.640mであった（第65図）。土師器皿（第67図－319）などが出土した。鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

溝96　調査地区中央南寄りで検出した。東西方向の溝がL字状に屈曲し南北方向となる。西端は溝102と交錯する状況となり、南端は削平のため途切れる。検出できた規模は長さ3.7m、最大幅0.4m、深さは約0.1mである。標高は西端部分の上端がT.P.＋6.547m、底部がT.P.＋6.491mで、南端部分の上端はT.P.＋6.538m、底部はT.P.＋6.485mであった（第65図）。土師器皿（第67図－320）などが出土した。鎌倉時代の遺構と考えられる。

溝97　調査地区中央南寄りで検出した。東西方向の溝で、両端とも南北方向の溝に切られる。検出できた規模は長さ1.3m、最大幅0.4m、深さは約0.1mである。標高は東端部分の上端がT.P.＋6.538m、底部がT.P.＋6.462mで、西端部分の上端はT.P.＋6.555m、底部はT.P.＋6.462mであった（第65図）。瓦器碗（第67図－321）などが出土した。鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

溝98　調査地区中央南寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、北端は東西方向の溝102に切られ、南端は削平のため途切れる。検出できた規模は長さ2.4m、最大幅0.3m、深さは約0.1mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋6.562m、底部がT.P.＋6.529mで、南端部分の上端はT.P.＋6.561m、底部はT.P.＋6.523mであった（第65図）。土師質土器羽釜（第67図－322）などが出土した。鎌倉時代の鋤溝遺構と考えられる。

溝102　調査地区中央南寄りで検出した。東西方向の溝がL字状に屈曲し南北方向となる。西端は撹乱により削平され、南端は削平のため途切れる。検出できた規模は長さ5.2m、最大幅0.6m、深さは約0.1mである。標高は西端部分の上端がT.P.＋6.545m、底部がT.P.＋6.451mであった（第65図）。瓦器碗（第67図－323）などが出土した。鎌倉時代の遺構と考えられる。

井戸47　調査地区中央で検出した。東西1.4m、南北1.3m、深さ0.75mで隅丸方形を呈する。堆積状況から井戸枠等を設置していたものを廃絶時に井戸枠を抜き、その後３層上面まで埋め戻したとみられる。上端の標高はT.P.＋6.710m、底部はT.P.＋5.960mであった（第65・66図）。土師器皿（第67図－324・325）、瓦器碗（第67図－326・327）などが出土した。出土遺物はいずれも土層堆積状況から廃絶時のものとみられる。鎌倉時代の遺構と考える。

井戸59　調査地区北寄りで検出した。東西1.6m、南北1.3m、深さ0.53mでいびつな隅丸方形を呈する。堆積状況から井戸枠等を設置していたものを廃絶時に井戸枠を抜き、その後３層上面まで埋め戻したとみられる。中層位で人頭大の礫を複数検出した（第66図・写真図版27－２）。上端の標高はT.P.＋6.560m、底部はT.P.＋6.030mであった（第65・66図）。土師器皿（第67図－328・329）、瓦器碗（第67図－330）などが出土した。出土遺物はいずれも土層堆積状況から廃絶時のものとみられる。鎌倉時代の遺構と考える。

（實盛）

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

土師器

304 皿　口径：13.8 ㎝（復元）。器高：2.7 ㎝（復元）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。口縁部と端部を二度ヨコナデ調整することにより端面に若干の圏線がみられる。内外面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－304、写真図版 50－２－304）

瓦器

305 皿　口径：9.8 ㎝。器高：2.0 ㎝。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は摩耗のため不明瞭、体部内面はジグザグ状のヘラミガキ調整を施している。13 世紀前半のものと思われる。（第 65･66･67 図－305、写真図版 50－２－305）

306 碗　口径：13.8 ㎝。器高：4.5 ㎝。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、体部内面はやや密なヘラミガキ調整を施している。見込部には連結輪状の暗文を施している。高台は断面三角形を呈する。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 65・66・67 図－306、写真図版 50－２－306）

銅銭

307 元豊通寶　直径：2.4 ㎝。厚さ：0.1 ㎝。1078 年初鋳の北宋銭。（第 67 図－307、写真図版 50－２－307）

２．第１遺構面遺構出土遺物

Pit２

土師器

308 皿　口径：9.0 ㎝（復元）。器高：1.2 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.3 ㎝。色調：内・断面は灰白色（10YR 8/2）、外面は褐灰色（10YR 4/1）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀中頃～後半のものと思われる。（第 67 図－308、写真図版 51－１－308）

Pit19

瓦器

309 碗　口径：15.0 ㎝（復元）。器高：2.5 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、体部内面はやや粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－309、写真図版 51－１－309）

Pit20

瓦器

310 碗　底径：6.6 ㎝（復元）。器高：2.0 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 1/3。体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。見込部には連結輪状の暗文を施している。高台は断面三角形を呈する。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－310、写真図版 51－１－310）

Pit24

土師器

311 皿　口径：8.2 cm（復元）。器高：1.2 cm（残存）。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀中頃～後半のものと思われる。（第 67 図－311、写真図版 51－１－311）

土坑 49

土師器

312 皿　口径：8.4 cm（復元）。器高：1.4 cm（残存）。厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部と端部を二度ヨコナデ調整することにより端面の中央に若干の圏線がみられる。内外面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－312、写真図版 51－２－312）

瓦器

313 碗　口径：14.4 cm（復元）。器高：2.6 cm（残存）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、体部内面はやや密なヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－313、写真図版 51－２－313）

314 碗　底径：4.4 cm（復元）。器高：1.0 cm（残存）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：底部のみ 1/3。体部内面はやや密なヘラミガキ調整を施している。見込部には連結輪状の暗文を施している。高台は断面三角形を呈する。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－314、写真図版 51－２－314）

貿易陶磁器

315 青磁劃花文碗　口径：17.4 cm（復元）。器高：5.4 cm（残存）。厚さ：0.3～0.7 cm。色調：内・外面はオリーブ灰色（2.5GY 6/1）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。内面に劃花文が施されている。13 世紀前半のものと思われる。（第 67 図－315、写真図版 51－２－315）

土坑 51

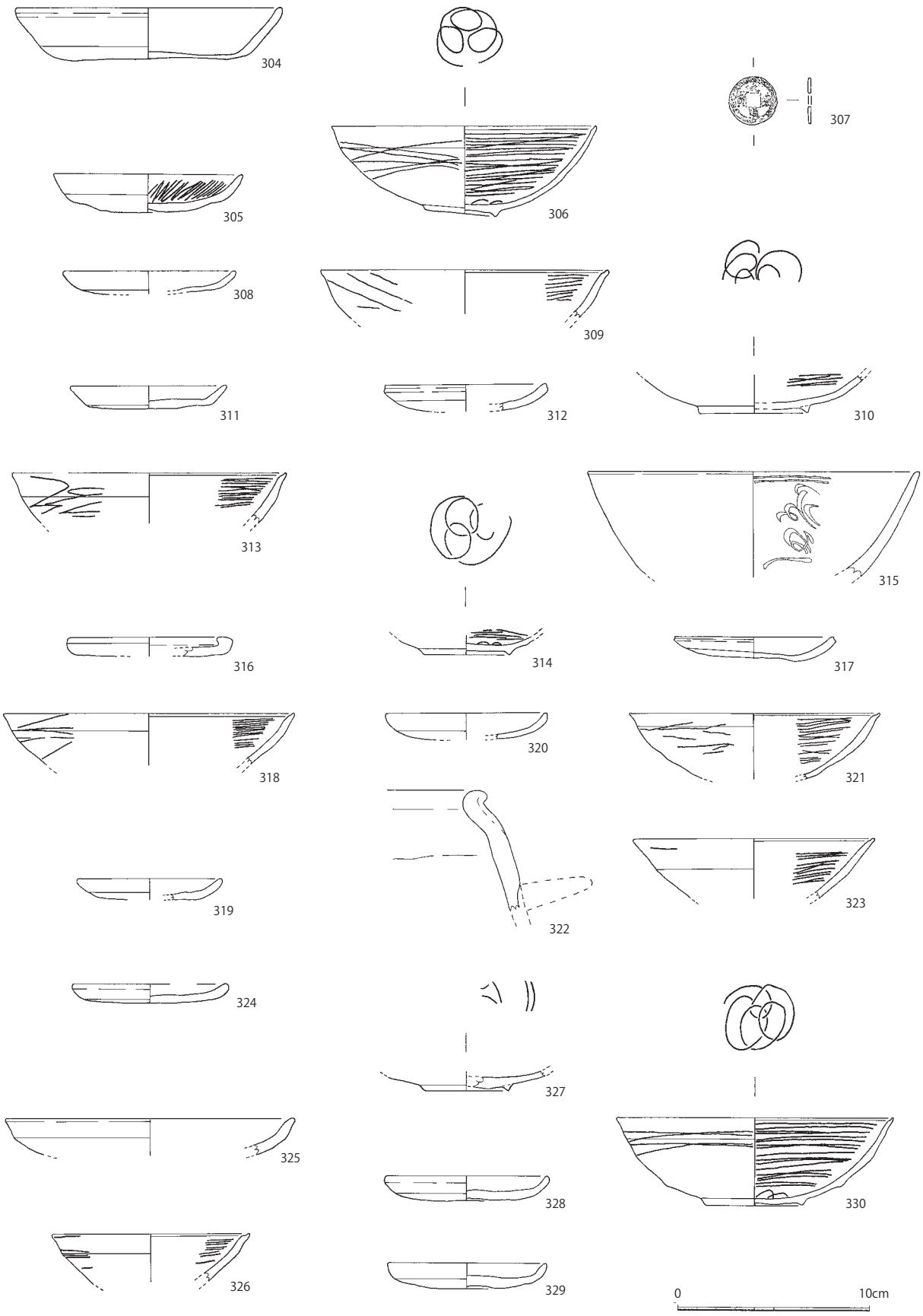
土師器

316 皿　口径：8.4 cm。器高：1.1 cm。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。体部内外面はナデ調整を施している。コースター型を呈している。Ｃタイプの 13 世紀代のものと思われる。（第 67 図－316、写真図版 51－２－316）

土坑 100

土師器

317 皿　口径：8.2 cm（復元）。器高：1.0 cm（残存）。厚さ：0.4～0.9 cm。色調：内・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）、外面は褐灰色（10YR 5/1）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部と端部を二度ヨコナデ調整することにより端面の中央に若干の圏線がみられる。内外面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－317、写真図版 51－２－317）



第 67 図　出土遺物（KY2012-1）

溝 23

瓦器

318 碗　口径：15.2 ㎝（復元）。器高：2.7 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.3 ㎝。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径 1 ㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、体部内面はやや密なヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－318、写真図版 51－１－318）

溝 32

土師器

319 皿　口径：7.6 ㎝（復元）。器高：1.1 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径 1 ㎜ 以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀中頃～後半のものと思われる。（第 67 図－319、写真図版 51－１－319）

溝 96

土師器

320 皿　口径：8.4 ㎝（復元）。器高：1.4 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：密。直径 1 ㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀中頃～後半のものと思われる。（第 67 図－320、写真図版 51－１－320）

溝 97

瓦器

321 碗　口径：13.0 ㎝（復元）。器高：3.4 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径 1 ㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、体部内面はやや粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－321、写真図版 51－１－321）

溝 98

土師質土器

322 羽釜　器高：6.3 ㎝（残存）。厚さ：0.9～1.0 ㎝。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/3）、断面は黒色（5Y 2/1）。胎土：密。直径 1 ㎜ 以下の黒色粒子と白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。内傾する口縁端部は外側へ若干折り返し、肥厚して玉縁状を呈する。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。河内産で 13 世紀後半のものと思われる。（第 67 図－322、写真図版 51－１－322）

溝 102

瓦器

323 碗　口径：12.6 ㎝（復元）。器高：3.1 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径 1 ㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は煤が付着しているため不明瞭、体部内面はやや密なヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｄ段階。13 世紀後半のものと思われる。（第 67 図－323、写真図版 51－１－323）

井戸 47

土師器

324 皿　口径：8.0 cm（復元）。器高：1.0 cm（復元）。厚さ：0.3～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀末～14 世紀初頭のものと思われる。（第 67 図－324、写真図版 51－２－324）

325 皿　口径：15.0 cm（復元）。器高：1.9 cm（残存）。厚さ：0.3～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Ja タイプの 13 世紀末～14 世紀初頭のものと思われる。（第 67 図－325、写真図版 51－２－325）

瓦器

326 碗　口径：10.4 cm（復元）。器高：2.5 cm（残存）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部内外面はやや粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｅ段階。13 世紀末～14 世紀初頭のものと思われる。（第 67 図－326、写真図版 51－２－326）

327 碗　底径：4.4 cm（復元）。器高：1.0 cm（残存）。厚さ：0.3～0.5 cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。見込部には連結輪状と思われる暗文を施している。高台は断面三角形を呈する。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－327、写真図版 51－２－327）

井戸 59

土師器

328 皿　口径：8.4 cm（復元）。器高：1.3 cm（復元）。厚さ：0.3～0.5 cm。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施している。Jb タイプの 13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－328、写真図版 51－２－328）

329 皿　口径:8.2 cm（復元）。器高：1.3 cm（復元）。厚さ：0.3～0.6 cm。色調：内面は褐灰色（10YR 4/1）、外・断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒を少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Ｊｂタイプの 13 世紀中頃～後半のものと思われる。（第 67 図－329、写真図版 51－２－329）

瓦器

330 碗　口径：14.4 cm（復元）。底径：5.2 cm（復元）。器高：4.6 cm（復元）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１mm 以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、体部内面はやや密なヘラミガキ調整を施している。見込部には連結輪状の暗文を施している。高台は断面三角形を呈する。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半～中頃のものと思われる。（第 67 図－330、写真図版 51－２－330）

（村上）

第 12 章　雁屋遺跡 2015－１次（ＫＹ2015－１）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区は、事業地内西寄りにあたり、東には 2004-1 次調査地区が、西には 2011-5 次調査地区がある。調査前現況は宅地であった。宅地造成のために 0.6～1.3mほど盛土されていた。その下層は 0.2～0.3mの耕土であり、その下層は 0.1mほどの床土であった。宅地造成以前は水田地であったと思われる。水田地であった際には、調査地区のほぼ中央東西に、水田の段差があったとみられる。

床土の下層に 0.4～0.6mほど中世～近世の遺物包含層が堆積し、その下面が第１遺構面であった。その下層には部分的に 0.1～0.2mほど遺物包含層が堆積し、その下面が第２遺構面であった。その下層は暗青色系の粘土が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第 69 図）。

（實盛）

第２節　検出遺構

この調査で確認した遺構はおもに中世に属するもので、溝、井戸、土坑、水田があった（第 68 図）。遺構面は２面検出し、第１遺構面は中世の集落、第２遺構面は古墳時代以降の水田であった。遺構面の標高は第１遺構面東端でT.P.＋3.393m、西端でT.P.＋3.285m、第２遺構面東端でT.P.＋3.249m、西端で T.P.＋3.160mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、主な遺構について詳述する。

【第１遺構面】

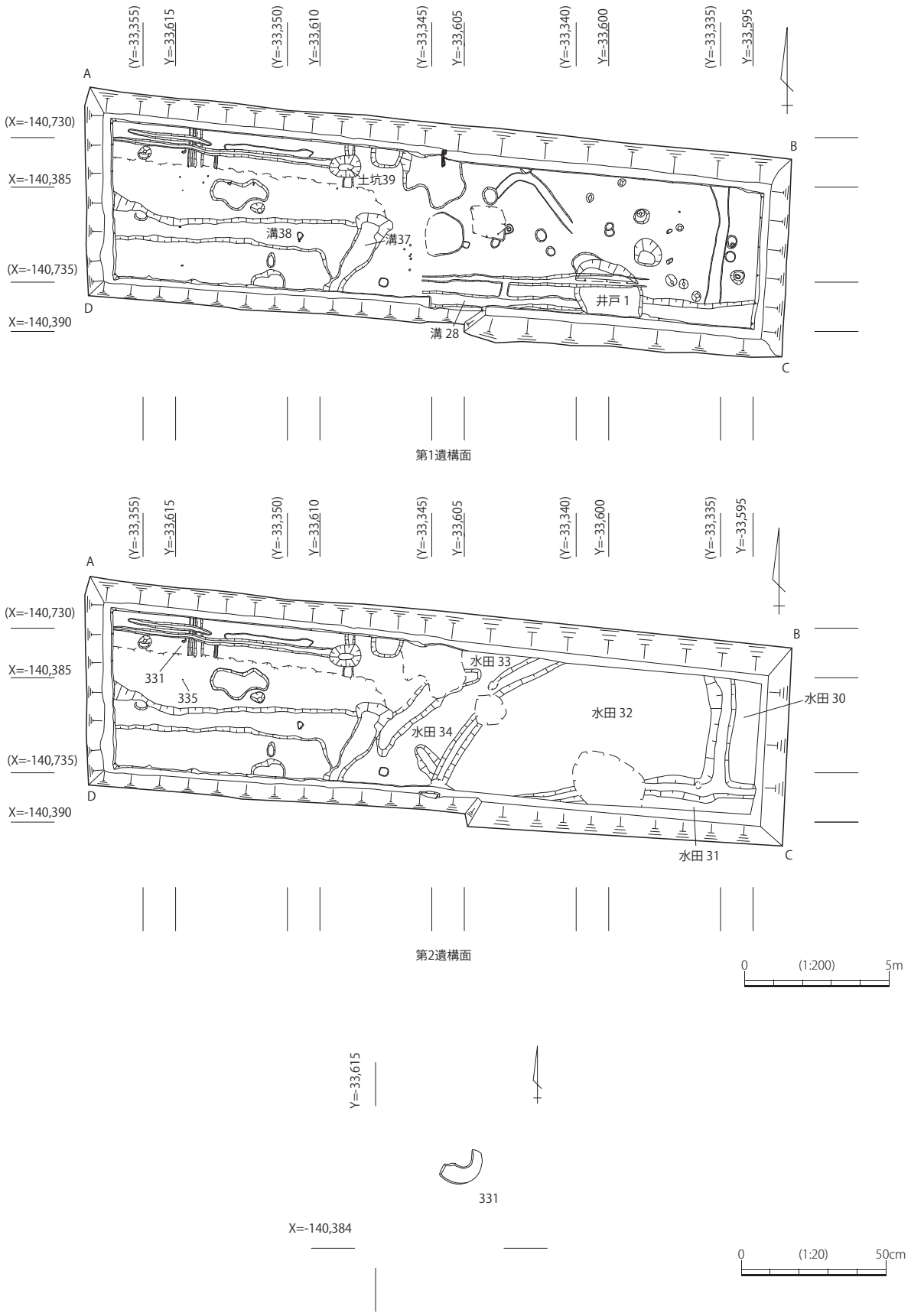
土坑 39　調査地区中央北寄りで検出した。東西 1.1m、南北 0.7m、深さ約 0.3mで惰円形を呈する。上端の標高はT.P.＋3.426m、底部はT.P.＋3.099mであった（第 68 図）。図示出来なかったが、土師器皿、羽釜、瓦器碗小片などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

溝 28　調査地区東側で検出した。東から西へと向いた溝で、東端は井戸１に切られ、西端は削平のため途切れる。検出できた規模は長さ 5.5m、最大幅 0.4m、深さは約 0.1mである。標高は東端部分の上端が T.P.＋3.346m、底部が T.P.＋3.277mで、南端部分の上端は T.P.＋3.332m、底部は T.P.＋3.240mであった（第 68 図）。土師器皿（第 70 図－338）、瓦器碗（第 70 図－339）などが出土した。出土遺物から、この遺構は鎌倉時代のものと考えられる。

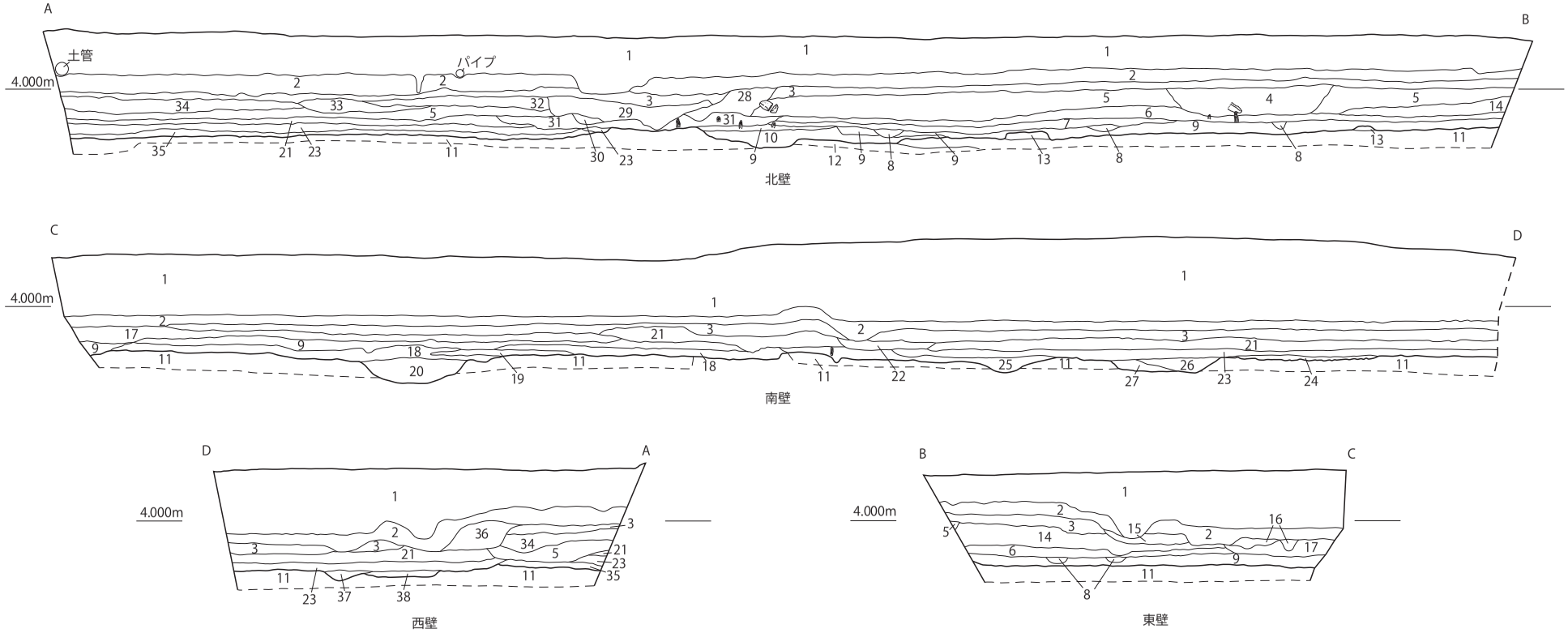
溝 37　調査地区東側で検出した。北から南へと向いた溝で、南端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 3.1m、最大幅 1.2m、深さは約 0.3mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋3.315m、底部が T.P.＋3.095mで、南端部分の上端は T.P.＋3.148m、底部は T.P.＋3.000mであった（第 68 図）。図示出来なかったが、土師質土器小片などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

溝 38　調査地区西側で検出した。東から西へと向いた溝で、東端は溝 37 に切られ、西端は調査地区外である。検出できた規模は長さ 8.4m、幅 1.5m、深さは約 0.3mである。標高は東端部分の上端がT.P.＋3.265m、底部がT.P.＋3.121mで、西端部分の上端はT.P.＋3.185m、底部はT.P.＋2.966mであった（第 68 図）。瓦器碗（第 70 図－340）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考えられる。

井戸１　調査地区東側南端で検出した。直径 2.4m、深さ約 0.6mで円形を呈する。南端は調査地区外である。井戸枠等は検出されず、明緑灰色砂質土に暗灰色粘土ブロック土が混入した一時に埋め戻されたような堆積であり、廃絶時に井戸枠等は抜かれたものとみられる。上端の標高は T.P.＋3.368m、底部はT.P.＋2.784mであった（第 68 図）。土師器皿（第 70 図－341）などが出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考える。



第68図　調査地区平面図・包含層内遺物出土状況図　(KY2015-1)



1　盛土
2　耕土
3　床土
4　灰白色粗砂　2.5Y 8/2　近世以降の遺構と思われる
5　にぶい黄橙色砂質土　10YR 7/3
6　緑灰色砂質土（シルト混入）　5G 6/1
7　緑灰色砂質土（シルト混入）　5G 5/1
8　暗青灰色砂質土　10BG 4/1　第一遺構面遺構
9　灰白色粗砂　5Y 8/1
10　灰白色シルト　5Y 5/1　粘性有
11　暗青色粘土　N 3/
12　灰色細砂　N 5/
13　灰色粘土　N 4/
14　緑灰白色砂質土　7.5GY 6/1　灰白色粗砂　5Y 7/1　混入
15　灰色砂質土　N 5/　床土か？
16　オリーブ灰色砂質土　2.5GY 6/1　床土か？
17　オリーブ灰色粘質土　5GY 6/1
18　灰色粘土　N 5/
19　灰白色粗砂　2.5Y 8/1
20　灰色粘質土　N 4/
21　緑灰色粘質土　5G 6/1
22　オリーブ灰色中砂　2.5Y 5/1
23　灰色砂質土　10Y 4/1　遺物包含層・溝 37 埋土
24　灰色粗砂　N 6/0
25　灰色粗砂　N 6/0
26　灰色粗砂　7.5Y 4/1　地山（11 層）のブロックが混じる　土坑 50 埋土
27　灰白色粗砂　7.5Y 7/1　土坑 50 埋土
28　灰黄色砂質土　2.5Y 7/2　撹乱（近代）
29　明黄褐色粗砂　2.5Y 6/6　撹乱（近代）
30　明黄褐色粗砂　2.5Y 7/6　撹乱（近代）
31　灰黄色シルト　2.5Y 6/2
32　にぶい黄橙色砂質土　10YR 6/4
33　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2
34　にぶい黄褐色砂質土　10YR 5/4　に 34 層のブロック混入
35　黒褐色砂質土　10YR 3/2　弥生の包含層
36　にぶい黄橙色砂質土　10YR 6/3　耕作地段の盛土
37　オリーブ黒色砂質土　5Y 3/1　土器多量　溝 37 の覆土
38　灰色中砂　5Y 4/1　シルト混入土

0　(1:100)　5m

第 69 図　調査地区断面図　(KY2015-1)

【第２遺構面】

水田 30　調査地区東端で検出した耕作地である。東側の大部分および北側の一部は調査地区外である。検出できた規模は東西 1.0m以上、南北 3.5m以上であり、面積は 3.5 ㎡以上である。標高は北東端が T.P. ＋3.270m、北西端が T.P. ＋3.277m、南東端が T.P. ＋3.247m、南西端が T.P. ＋3.247mであった（第 68 図）。

水田 31　調査地区東側で検出した耕作地である。南側の大部分は調査地区外であり、東端および西端も調査地区外で検出できなかった。検出できた規模は東西 6.3m以上、南北 0.5m以上であり、面積は 3.15 ㎡以上である。標高は東端が T.P. ＋3.235m、西端が T.P. ＋3.200mであった（第 68 図）。

水田 32　調査地区東側で検出した耕作地である。もっとも広範囲を検出し、検出範囲からは三角形状もしくは台形状の水田と推察される。検出できた規模は南側で東西 8.8m、北側の東西 4.9m、南北 4.3m以上であり、面積は 29.5 ㎡以上である。標高は北東端が T.P. ＋3.242m、北西端が T.P. ＋3.196m、南東端が T.P. ＋3.277m、南西端が T.P. ＋3.205mであった（第 68 図）。

水田 33　調査地区中央北端で検出した耕作地である。北側の大部分は調査地区外である。南端の水田 34 との境は畔がなく水口状である。検出できた規模は東西 2.6m以上、南北 0.6m以上であり、面積は 1.56 ㎡以上である。標高は北西端が T.P. ＋3.243m、南西端が T.P. ＋3.227m、東端が T.P. ＋3.217mであった（第 68 図）。

水田 34　調査地区中央で検出した耕作地である。ほぼ全体を検出した。北端の水田 34 との境および、南端の一部は畔がなく水口状である。規模は東西 3.5m、南北 1.5mであり、面積は 5.25 ㎡である。標高は北東端が T.P. ＋3.175m、北西端が T.P. ＋3.247m、南東端が T.P. ＋3.187m、南西端が T.P. ＋3.216mであった（第 68 図）。

これらの水田はいずれも埋土からは弥生時代から中世にかけての遺物が出土している。このため水田が完全に埋没していったのは中世とみられる。ただ、古代の条里制施行以降、讃良郡域では基本的に長地型の地割をとることが讃良郡条里遺跡の調査などで判明している。しかしこれらの水田はそれを採っておらず、古代以前の水田の可能性がある。隣接する地区の調査成果などから考えると、古墳時代もしくは飛鳥時代のものの可能性を考える。

（實盛）

第３節　出土遺物

１．遺物包含層内出土遺物

弥生土器

331 蓋　底径：14.8 ㎝（復元）。器高：2.2 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.8 ㎝。色調：内面は黒褐色（10YR 3/1）、外・断面は灰黄褐色（10YR 5/2）。胎土：やや粗。直径 1㎜以下の砂粒と黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。２個で一対の円孔が開けられている。（第 68・70 図－331、写真図版 52－１－331）

土師器

332 皿　口径：9.8 ㎝（復元）。器高：1.3 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.3 ㎝。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。「て」の字状口縁の皿である。内外面はナデ調整を施している。Ｂｃタイプの 11 世紀末のものと思われる。（第 70 図－332、写真図版 52－２－332）

貿易陶磁器

333 白磁碗　口径：15.4 ㎝（復元）。器高：4.5 ㎝（残存）。厚さ：0.4 ～0.9 ㎝。色調：内・外面は灰白色（5Y 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は玉縁状を呈している。12 世紀前半のものと思われる。（第 70 図－333、写真図版 52－２－333）

土製品

334 土錘　長さ：3.9 ㎝。最大幅：0.7 ㎝。厚さ：0.2～0.3 ㎝。孔の直径：0.2 ㎝。（第 70 図－334、写真図版 52－２－334）

石製品

335 石鏃　全長：4.5 ㎝。茎長：1.0 ㎝。最大幅：1.1 ㎝。厚さ：0.3～0.9 ㎝。サヌカイト製。弥生時代の打製凸基有茎式石鏃と思われる。（第 68・70 図－335、写真図版 52－１－335）

336 砥石　最大長：8.6 ㎝（残存)。最大幅：8.4 ㎝（残存）。最大厚：5.3 ㎝。砂岩系で２面が砥面として使用している。砥面でない裏面の一部に火を受けたと思われる炭化物が付着している。（第 70 図－336、写真図版 52－２－336）

鉄製品

337 鋤（鍬）先　全長：7.1 ㎝（残存）。最大幅：7.2 ㎝。厚さ：0.2～0.7 ㎝。木製鋤（鍬）の刃先である。共伴遺物から中世のものと思われる。（第 70 図－337、写真図版 52－２－337）

２．第１遺構面遺構出土遺物

溝 28

土師器

338 皿　口径：9.0 ㎝（復元）。器高：1.8 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外面は灰白色（2.5Y 8/2)、断面は明褐色（7.5YR 5/6）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部はナデ調整により面取りがみられる。Jb タイプの 13 世紀前半のものと思われる。（第 70 図－338、写真図版 52－２－338）

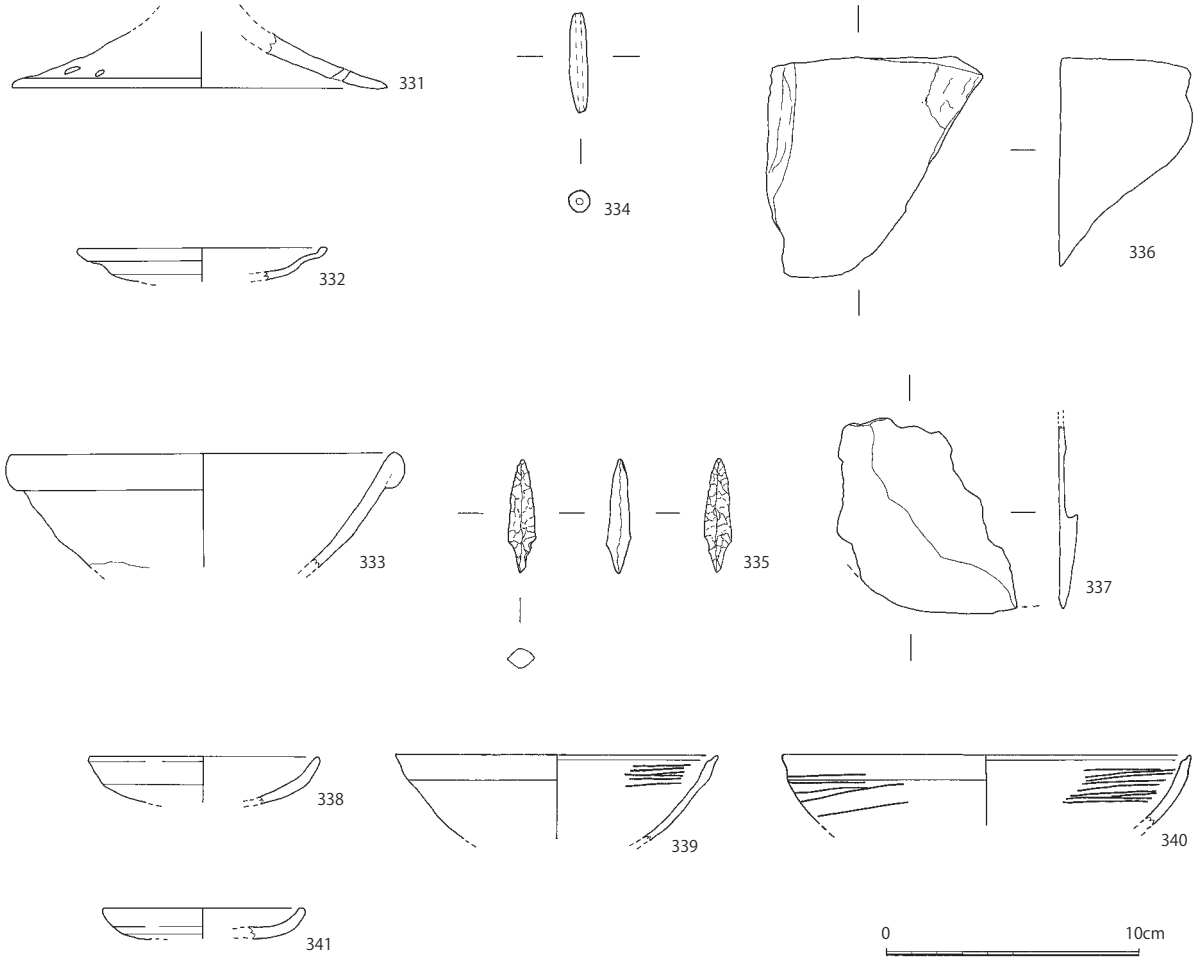
瓦器

339 碗　口径：12.8 ㎝（復元）。器高：3.3 ㎝（残存）。厚さ：0.2～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキ調整は摩耗のため不明瞭、体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半のものと思われる。（第 70 図－339、写真図版 52－２－339）

溝 38

瓦器

340 碗　口径：16.2 ㎝（復元）。器高：2.8 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外面は暗



第 70 図　出土遺物（KY2015-1）

灰色（N 3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜ 以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面の口縁部付近に粗いヘラミガキ調整、体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｂ段階。13 世紀前半のものと思われる。（第 70 図－340、写真図版 52－２－340）

井戸１

土師器

341 皿　口径：10.0 ㎝（復元）。器高：1.2 ㎝（残存）。厚さ：0.3～0.4 ㎝。色調：内・外・断面は灰黄褐色(10YR 6/2)。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部の面取りは粗雑である。Jb タイプの 13 世紀中頃のものと思われる。（第 70 図－341、写真図版 52－２－341）

（村上）

第 13 章　調査のまとめ

第１節　調査のまとめ

１．縄文時代および古墳時代以降の調査成果

雁屋遺跡で実施した今回の一連の調査では、特筆すべき成果として弥生時代前期の集落を検出し、雁屋遺跡の弥生時代拠点集落を考えるうえで重要な資料となった。また、前後する各時期の遺構を検出し、雁屋遺跡における土地利用の変遷を追うことができた。以下、特筆すべき遺構・遺物の時期ごとにまとめを行いたい。まずは、弥生時代を除く各時期の成果から検討していくことにする。

縄文時代　縄文時代の遺物は、2002-１次調査で滋賀里式の縄文時代晩期のものが、2003-1 次調査で船元式の縄文時代中期のものが出土した。いずれも旧河川からの出土で周辺にこれらの時期の集落が存在した可能性がある。縄文時代中期の集落は周辺では未検出であり、今後のこの地域での発掘調査で、この時期の集落が発見できることを期待したい。一方縄文時代晩期のものは、これまでにも弥生時代前期の集落の近辺を中心に出土していた（1996-1 次調査）。今後この時期の集落がみつかれば、この地域における縄文時代晩期から弥生時代前期への変遷を考えるうえで一石を投じる成果となる可能性がある。今後の調査でこの点についても明らかにしていくこととしたい。

古墳・飛鳥・奈良時代　2001-1 次、2003-2 次、2011-5 次、2004-1 次調査で古墳時代後期～奈良時代にかけての集落を、2015-1 次調査で同時期の可能性がある水田を、2002-1 次調査で古墳時代後期の溝と中期の集落を、2003-2 次調査で古墳時代中期の水田を、2001-2 次調査で古墳時代後期の溝と庄内式期の溝を検出した。

2001-2 次調査で確認した庄内式期の溝は、この時期のものとしては市域でも稀なものであった。この遺構を最後に雁屋遺跡の弥生時代集落は断絶し、その後は流路等から少数の遺物が出土するのみとなる。この遺構が雁屋遺跡弥生時代集落の最終段階を示す可能性がある。

2001-1 次、2003-2 次、2011-5 次、2004-1 次調査で検出した古墳時代後期～奈良時代にかけての集落は、特に飛鳥時代を中心としており、同時期の集落として明確なものでは市内で最も西に位置し、河内湖岸に位置するものであることが予想される。飛鳥時代の集落は市内でも不明な部分が多くあるが、今回の成果を加えることで集落変遷を新たに描くことができるようになると考える。また、重要なのは飛鳥期の集落が前段階の古墳時代後期から位置を違えず営まれ続けることで、市内でもまれな状況であり、今後も検討を重ねていきたい。

2003-2 次調査では、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落の下層から古墳時代中期の水田面を検出した。古墳時代の水田は鎌田遺跡の調査や（野島 1993b）、讃良郡条里遺跡の調査などで検出していたが（後川・實盛・井上編 2015）、市域南部での状況が判明したのは初めてであった。この状況からは、市域西部においては微高地の間の低地部は水田地として多く利用されていた可能性があるといえるだろう。

中世以降　多くの調査地区で中世段階の鋤溝面を確認した。中世段階には調査地区の多くが耕作地として利用されていたとみられる。そういった中で、2012-1 次調査においては、鎌倉時代に耕作地が集落へと変更されていることを確認した。隣接する周辺調査の 2010-2 次および 2011-3 次調査地区でも集落を検出している。これらの調査地区の間には、江戸期に枚方街道、明治期に河内街道と呼ばれるようになった道が存在する。この道路が存在したことで、この箇所に集落が営まれた可能性があるだろう。この状況は、中野遺跡の 2013-1 次調査（村上・實盛 2018）において中世以前に耕作地であったのが、中世段階に道の隣接地のみ盛土造成を行い集落として利用されることと共通している。これらのことから考えると、この河内街道の前身となる道は、既に鎌倉時代には存在していた可能性があるといえるだろう。中世段階の交通網の発達を考えるうえで、重要な成果であると考える。今後も調査を重ねていくことで、このことをさらに明らかにしていきたい。

２．弥生時代の調査成果

今回の一連の調査におけるもっとも重要な成果として、2001-2 次および 2011-4 次調査地区を中心に、弥生時代前期中頃にまとまりをもつ溝および遺構群を検出した。検出状況としては、2001-2 次調査溝 18 に相当数の遺物が含まれ、それより西側に Pit や土坑、溝などの土坑群が存在した。溝 18 より東にも一部 Pit が存在するものの、少数であった。また 2011-4 次調査でも調査地区東側を中心に弥生時代前期の遺構群を検出した。この調査の溝 14 を境に西側は落込が存在するのみで、さらに西側で行った 2004-1 次調査地区では弥生時代前期の顕著な遺構は検出しなかった。これらのことから、2001-2 次溝 18 と 2011-4 次溝 14 は、居住域を区画する溝であり、このためその内側に遺構を多く検出したと考えられる。

このように溝で集落が区切られる状況から当時の居住集団の規模を類推することができ、その直径は 100mほどと考える。この居住域を区画する溝は底部が緩やかにＶ字状に窪み、その部分には粘質土が堆積しており水性堆積も想定できる状況であった（2001-2 次溝 18）。また、堆積状況から後世の削平が行われており、本来は一定の深さがあったと考えられる。今後の調査の進展によっては、この溝を環壕として認識できる可能性があるだろう。

これらの調査の遺物をみると他地域系の土器が一定程度出土しており、石器石材も香川県産の可能性がある資料が含まれることから、他地域との交流もすでにこの時点から積極的に行っているとみてよいであろう。このことから、集団自体は大規模化していないものの、近隣地域の拠点的な機能を有していた可能性は十分に考えられる。

３．まとめ

今回の一連の調査により、各時代において新たな検討材料を得ることができた。縄文時代の資料の出土により、これまで不明であった市域南部における縄文時代の集落存在の可能性が判明した。弥生時代前期集落の検出により、雁屋遺跡の弥生時代集落の変遷過程がより明らかとなってきた。古墳時代中～後期の集落および水田の検出により、これまで不明だった市域南西部の同時期の状況が判明した。飛鳥時代の集落はまとまったものとしては市域では稀なものであり、同時期の市域の状況を検討するうえで新たな資料を提供した。中世の集落および耕作地の検出により、中世において河内街道の前身となる道がすでに機能していた可能性が判明した。今後も調査を継続し、市域の歴史をさらに明らかにできるよう努めていきたい。

（實盛）

第２節　雁屋遺跡における弥生時代拠点集落の変遷

１．はじめに

ここまで報告してきたように、雁屋遺跡の調査では弥生時代前期中頃の集落を検出した。ここではその成果をこれまでの調査成果の中に位置づけ、これまでの調査成果全体を俯瞰したうえで、今回の調査成果および雁屋遺跡自体の意義について検討しておきたい。

２．雁屋遺跡についての研究史と問題の所在

雁屋遺跡について、もう一度簡単に概要を述べておきたい。遺跡は、大阪府四條畷市雁屋北町から江瀬美町・美田町にかけて所在し、府立四條畷高等学校を中心にして東西約 800m、南北約 500mの広さが、弥生時代、古墳時代、中世の集落遺跡などとして周知されている。その地勢は生駒山系の西側へ広がる沖積地で、旧大和川水系や寝屋川水系の大小河川による土砂によって形成されたものである。

雁屋遺跡はこれまでに多くの発掘調査が行われており、遺跡は弥生時代前期から後期まで続き、この地域の拠点的な集落と考えられている。遺跡の発見は 1983 年で、同年の発掘調査で弥生時代前期の資料が出土した（野島 1984）。注目されたのは 1985 年度の調査で、中期の方形周溝墓４基を検出し、合計 20 基の組合式木棺がみつかった（野島 1987a）。その後も府立四條畷高等学校内での調査や（辻本 1987、阿部 1999 など）、府立四條畷保健所建て替えに伴う調査（野島 1994）などで、相次いで中期から後期にかけての方形周溝墓群や竪穴建物群が検出されるに及び、遺跡は弥生時代全時期にわたる拠点集落と評価されるようになった。

調査報告以外で雁屋遺跡の評価が行われた主な論考としては、初期のものとして瀬川芳則によるものがあり、河内潟北畔における大集落とされた（瀬川 1991）。塩山則之は弥生時代全時期にわたる集落と評価し、中期から後期にかけて付近一帯に大規模な方形周溝墓群があったと述べた（塩山 1995）。三好孝一は河内湖周辺部における弥生時代集落について述べる中で、雁屋遺跡を生駒山西麓における中核的集落の一つと位置付けた（三好 1999）。濱田延充は北河内地域の弥生集落の動態を述べる中で、３つの基礎地域のうち生駒西麓に属する遺跡として取り上げ、前期から後期に継続した集落として紹介した（濱田 2001）。山田隆一は既往の 1992 年度調査において大型掘立柱建物柱建物が検出されている可能性を指摘し、前期から後期までの遺構の変遷を詳述した（山田 2002）。若林邦彦は一連の研究の中で大阪平野の主要弥生集落の一つとして取り上げた（若林 1999、2001、2009）。若林は弥生時代の大規模集落を、複数の居住域（基礎集団）の複合体から成ると述べ、その複合体を「複合型集落」と呼称した（若林 2001）。そして、雁屋遺跡をこの複合型集落として位置づけた（若林 2009）。

このように、雁屋遺跡は拠点的な集落のひとつとして位置づけられてきているが、遺跡の変遷についての検討としては、野島稔がこれまでの調査成果を詳細にまとめたものと（四條畷市史編さん委員会 2016）、阿部幸一による報告書内での検討があり（阿部 1999）、さらに、調査成果全体を俯瞰し、詳しくまとめて述べたものとして、山田隆一の研究がある（山田 2002）。しかし、これらの研究以降も雁屋遺跡では多くの調査を行ってきており、新たな集落域等を検出してきている。そこで、ここではこれまでの調査成果全体を俯瞰し、居住域や墓域の具体的な変遷について時期別に検討することで、集落の変遷および遺跡の評価について、あらためて考察することとしたい。

なお、各遺構の時期については、今回は基本的に各調査報告に依拠することとする。近年の土器編年に詳細に照らし合わせたうえでの検討は後日に期すこととしたい。

３．雁屋遺跡におけるこれまでの弥生時代集落調査とその成果

《四條畷市教育委員会による発掘調査》

遺跡は 1983 年２月に旧日本道路公団の職員住宅建設工事に伴う試掘調査によって発見した。1983 年度（昭和 58 年度）に同工事に伴う発掘調査を行い、地表下約 2.5mにおいて幅約 0.4mの溝を検出し、弥生時代前期の大型壺・壺・甕、磨製の石庖丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・土製紡錘車などが出土した（野島 1984）。また、中期の土器棺墓を検出した。

1985 年度には、病院建設工事に伴う発掘調査で、弥生時代後期の旧河川・周溝墓・竪穴建物・土

壙、中期の方形周溝墓４基を検出した（野島 1987a）。後期の周溝墓は大きく削平を受けており、主体部に関しては痕跡を残すのみであったが、周溝内からは在地の土器とともに丹後系の台付鉢や甕、近江系の鉢、出雲・山陰系の低脚坏や土玉が出土した。また竪穴建物からは丹後系の把手付鉢が出土した（三好ほか 2007）。これらのことから、弥生後期の雁屋遺跡は日本海側地域との交流があったものと考えられる。中期の方形周溝墓については、第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓内から子ども用のものを含めて合計 20 基の組合式木棺を検出した（野島 1987a）。棺材の樹種鑑定から高野槇・ヒノキ・カヤ材が使用されていたことが判明し、特に高野槇の木棺は遺存状態が良好なものが多くみられた。また第１号方形周溝墓２号主体部では、高野槇の底板上の腹部から腰部にあたるところからサヌカイト製の打製石鏃が 11 点出土した。第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓の共有する周溝内から出土した壺３点・把手付鉢・水差形土器の５点には水銀朱が塗られていた。塗布された部分が土器の一部の面であることから、土器の正面を意識した可能性がある。また同じ周溝からは蓋付木製四脚容器が出土した。容器は、ヤマグワ材を４本の脚が付く隅丸方形に刳りぬいて作成しており、口縁部の左右にはそれぞれ２個の孔を開けた突出した耳が付いていた。蓋の上面には双頭渦文が浮き彫りされており、左右にはそれぞれ２個の孔を開けた突出した耳が付き、容器と蓋を紐で固定できる状態で、この蓋にも水銀朱が塗られていた。

1990 年度には病院増築に伴い 1985 年度調査地の北隣を調査し、弥生時代後期の溝、中期の溝等を検出した。方形周溝墓群が続いているものとみられる。

1992 年度と 1994 年に、府立四條畷保健所の建替え工事に伴い発掘調査を行った（野島 1994）。調査の結果、中期の竪穴建物や方形周溝墓、後期の竪穴建物などを検出した。第１号方形周溝墓の西側周溝内からは、長さ約 1.4mで断面Ｕ字状の隅丸長方形をしたモミ材の板状木製品とともに、ノグルミ製の鳥形木製品が出土した。火災を受けた中期の竪穴建物からは分銅形土製品や炉跡から卜骨とみられる肩甲骨が出土した。また土坑からは木製盤・杓子など未成品のものが多く出土しており、未成品の貯蔵施設と考える。石製品としては特筆すべきものとして、銅鐸の舌が２本出土した。

1996 年度には 1983 年度調査地の 50m東で公的住宅建設に伴い調査を行い、弥生時代中期の方形周溝墓を４基検出した。

1998 年度にはマンション建設に伴い調査を行い、弥生時代の集落を検出した。

2001 年度からは都市計画道路雁屋畑線建設に伴う一連の調査を開始し、2001 年度と 2011 年度の調査では、弥生時代前期の集落を検出した（本書）。

2010 年度第１次の宅地造成に伴う調査では、弥生時代中期から後期にかけての４面の遺構面を検出し、掘立柱建物を構成すると考えられる中期の柱が２基出土したほか、同時期の木製品の貯蔵施設と、それを囲むように区画する杭列を検出した（村上・實盛 2011）。遺物としては播磨地域の特徴を示す土器が出土しており、中期から他地域との交流があったことを示している。

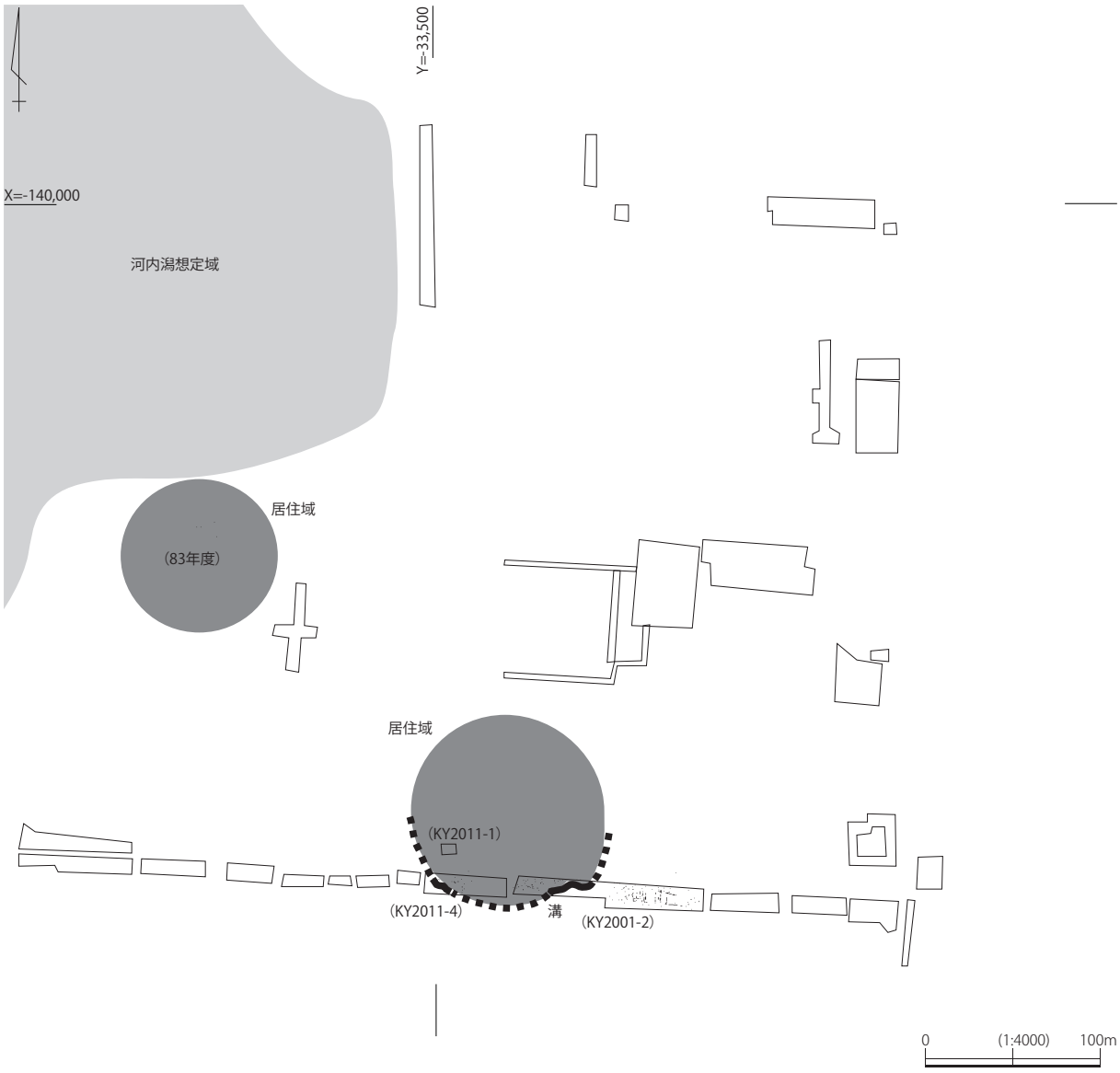
2011 年度のグループホーム建設に伴う第１次調査では弥生時代前期の耕作地遺構を検出した（本書）。宅地造成に伴う第２次調査では中期の集落においてサヌカイト埋納土坑を検出した。2013 年度には民間店舗建設に伴い調査を行い、弥生後期～古墳初頭の方形周溝墓の可能性がある溝を検出した（本書）。

2018 年度には宅地造成に伴い 1985 年度調査地の西隣で調査を行い、弥生時代中期と後期の２面の遺構面を検出した。後期の遺構からは革袋形土器などが出土した。中期の遺構面では方形周溝墓群と集落跡を検出し、墓域と居住域との境が盛土により構築された堤防を伴う溝で区画されているのを確認した。

《大阪府教育委員会による発掘調査》

1986 年度に府立四條畷高等学校東館建設工事及び汚水排水管敷設工事に伴い発掘調査が行われた（辻本 1987）。調査の結果、後期の河川・大溝や中期の方形周溝墓３基・土壙２基・溝・大溝などが検出された。第１号方形周溝墓の周溝内からは第Ⅲ様式新～第Ⅳ様式の遺物がまとまって出土しており、土器焼成後に穿孔されているものが多くあった。

1993 年度に府立四條畷高等学校内排水管切替工事に伴う発掘調査が行われた。調査の結果、後期の溝などが検出された（酒井 1994）。



第71図　弥生時代前期（Ⅰ様式期）の雁屋遺跡

1995 年度に府立四條畷高等学校体育館建替えに伴う発掘調査が行われた（佐久間 1995、大阪府教育庁文化財保護課保存管理グループ 2017）。調査の結果、後期の竪穴建物 10 棟、溝、土坑などの遺構とシャーマンを線刻した土器などが出土した。

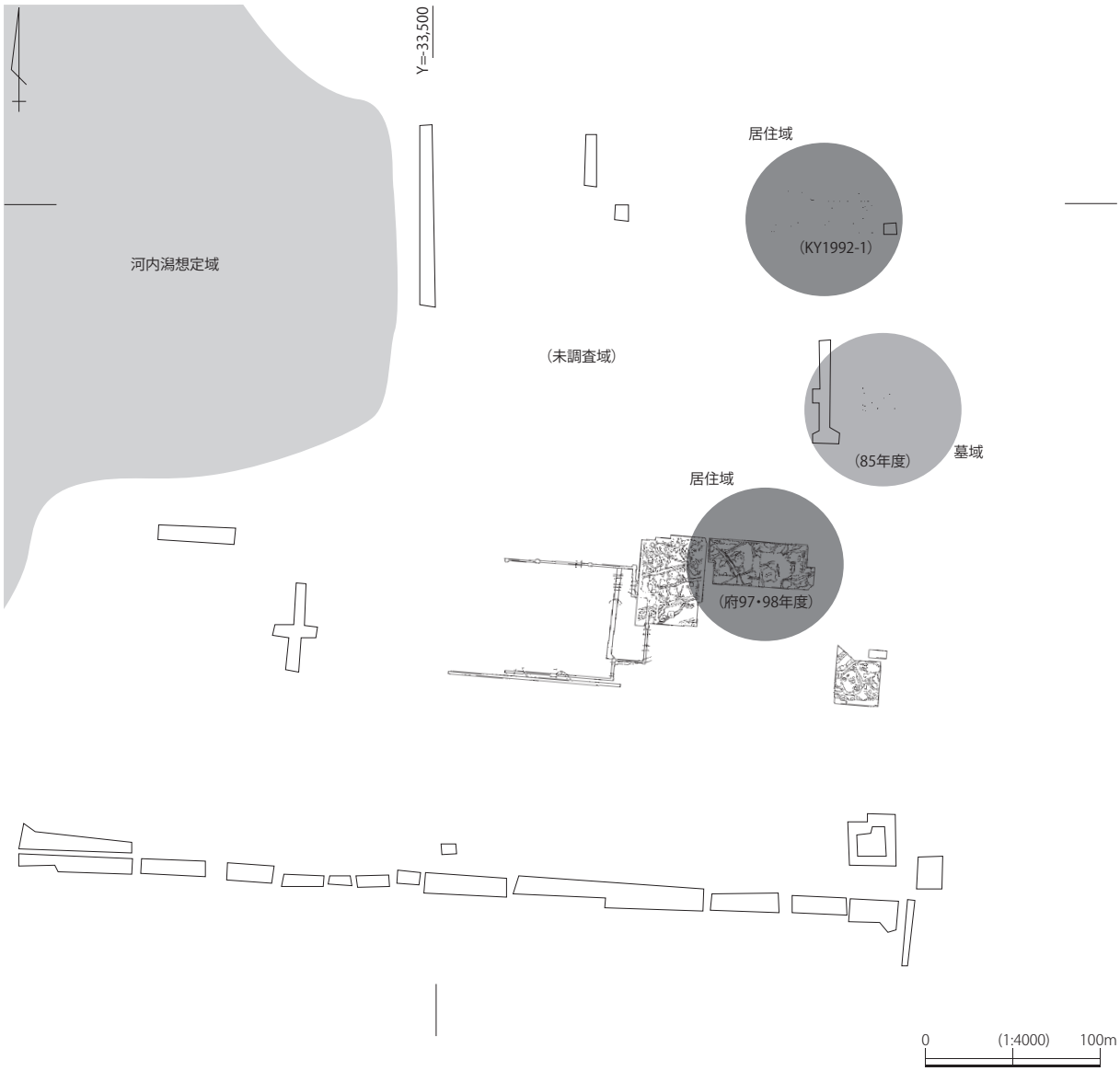
1997 年度～1998 年度には府立四條畷高等学校校舎建替えに伴う発掘調査が行われた（阿部 1999）。中期の方形周溝墓２基と後期の竪穴建物１棟などが検出され、中期の鳥形木製品などが出土した。

2001 年度には 1986 年度の汚水排水管敷設地の南側で調査が行われ、弥生時代の自然河川が検出された（井西 2003）。

2004 年度には防火水槽設置に伴い、1986 年度調査の東館建設地の北側で調査が行われ、弥生後期の溝が検出された（岡田 2006）。

４．雁屋遺跡の集落復元（１）弥生時代前期

弥生時代前期の集落は、遺跡の南西側を中心に展開している（第 71 図）。現時点では集落は２箇所に分かれて分布している。ひとつは遺跡発見の契機となった 1983 年度調査箇所を中心としたもので、ここでは幅 0.4mの細い溝状の遺構が検出された。この溝上面から板付Ⅱ式併行期の大型壺が出土し



第72図　弥生時代中期前葉（Ⅱ様式期）の雁屋遺跡

ている（野島 1984）。時期は弥生時代前期中頃を中心とする。

もうひとつは今回報告した 2001-2 次および 2011-4 次調査地区を中心としたもので、弥生時代前期中頃にまとまりをもつ溝および遺構群を検出した。それぞれの集団の直径は、今回報告における集落が溝（2001-2 次溝 18、2011-4 次溝 14）で区切られる状況から類推でき、大きくても 100mほどとみられる。集落の規模としてはこのころはまだ大きなまとまりをもつには至らず、割合小規模な集団が散在している状況であろう。この居住域を区画する溝は底部が緩やかにＶ字状に窪み、その部分には粘質土が堆積しており水性堆積も想定できる状況であった（2001-2 次溝 18）。今後の調査の進展によっては、この溝を環壕として認識できる可能性があるだろう。遺物をみると他地域系の土器が一定程度出土しており、石器石材も香川県産の可能性がある資料が含まれることから、他地域との交流もすでにこの時点から積極的に行っているとみてよいであろう。これらのことから、集団自体は大規模化していないものの、近隣地域の拠点的な機能を有していた可能性は十分に考えられる。

なお、前期後葉の遺構は現時点では顕著なものを検出しておらず、小断絶がある可能性がある。ただし、一時的に集団が周辺へ移動していたか、もしくは遺跡の調査が進んでおらず集落が未発見である可能性も考慮すべきであろう。

５．雁屋遺跡の集落復元（２）弥生時代中期前葉

弥生時代中期前葉の集落は、おもに遺跡の東側に集落が展開する（第 72 図）。この時期は大阪府の 1997・98 年度調査で方形周溝墓下層から検出された中期初頭の遺構を嚆矢に遺構が形成される。また、1992 年度調査でもこの時期に遡る遺構群を検出している。さらに、四條畷市の 1985 年度調査では中期初頭から方形周溝墓が造営されることを確認しており、初期の墓域の中心域であろう。

この段階での集落は、これらの遺構群を検出した地域に限定されているようであり、居住域は散在している状況とみられ、前段階の集落状況から大きく発展している状況ではない。しかし墓域と居住域双方が明確に存在しはじめるとみられ、その後の発展の基礎が築かれるといえるだろう。

６．雁屋遺跡の集落復元（３）弥生時代中期中葉

弥生時代中期中葉の集落は、遺跡の全体に集落が拡大する発展期である（第 73 図）。この時期は 1992、1994 年度調査で、竪穴建物群を検出しており、この付近に明確な集落域が存在する。墓域は 1985 年度調査と、隣接する 1990 年度調査、大阪府の 1986 年度調査および 1997・98 年度調査で方形周溝墓群を検出しており、一連の方形周溝墓群を形成するものとみられる。また、1983 年度調査で同時期の土器棺墓を検出し、周辺では 1996 年度調査でも方形周溝墓群を確認していることから、墓域は遺跡西部にも存在するものとみられる。

前段階に集落域であった 1997・98 年度調査地は居住域から墓域に変更されて、新たに北側の 1992、1994 年度調査地に居住域が設けられている。墓域の拡大の必要が生じ、居住域を北側の微高地に変更したうえで墓域を南へと拡大した可能性がある。墓域と居住域をあわせた集落域は東西約 420m、南北約 300mに拡大しており、今後の調査によってはさらに広がる可能性がある。

この時期、周辺でも中期中葉に鎌田遺跡（野島 1994b）、同じく中期中葉に中野遺跡（村上・實盛 2018）に方形周溝墓群が営まれる。これらの遺構も、雁屋遺跡の集落との関連で捉えるべきであり、今後の調査の進展によっては、一連の遺跡群として評価すべき資料であろう。仮にこれらを一連の集落として捉えられるなら、中心に居住域が存在し、その周囲に環状に墓域が展開している可能性がある。

７．雁屋遺跡の集落復元（４）弥生時代中期後葉

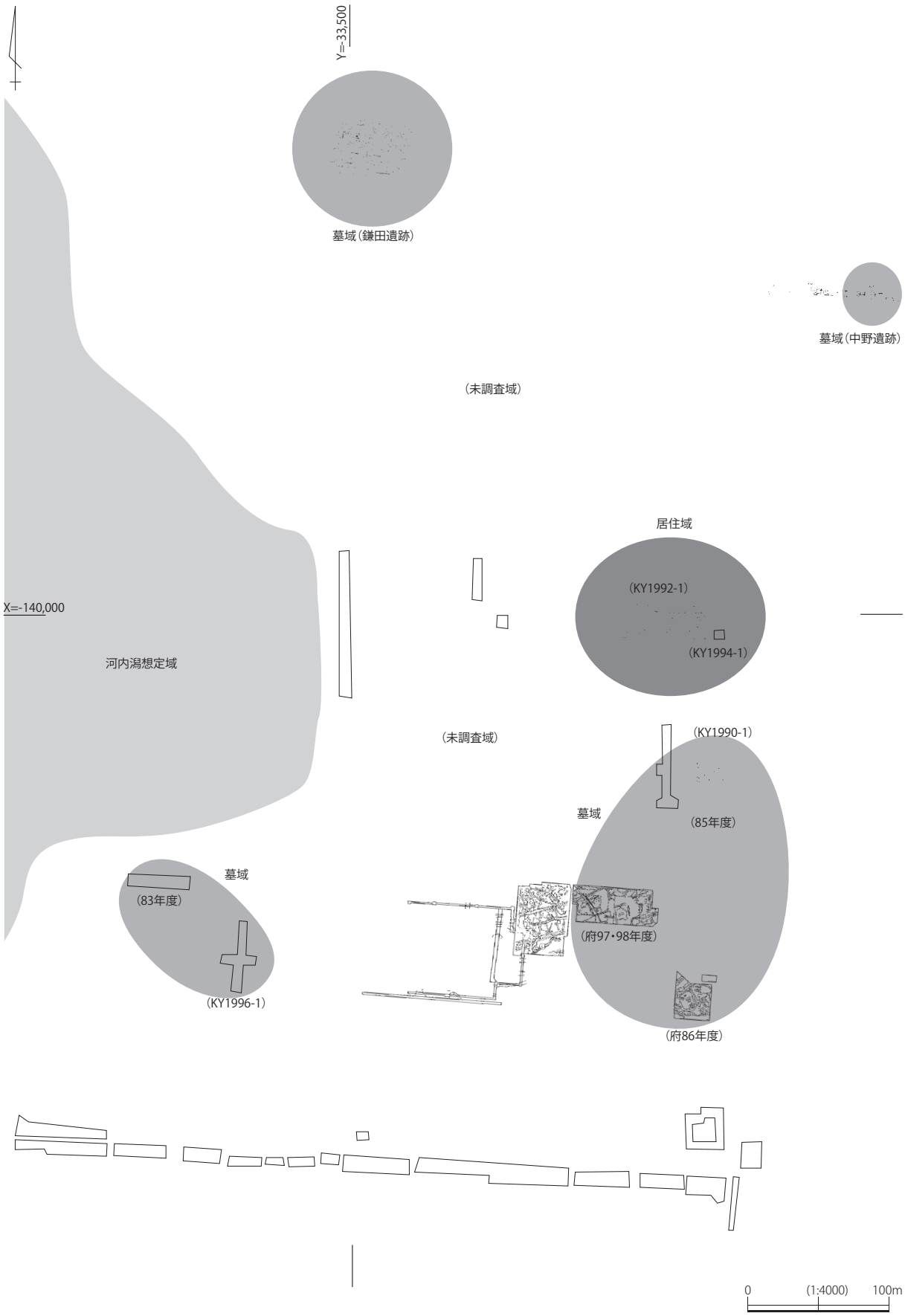
弥生時代中期後葉の集落は、前段階の繁栄が継続する（第 74 図）。この時期に属する居住域は 1992 年度調査を皮切りに 1998 年度、2010-1 次、2011-2 次、2018-1 次調査で確認しており、遺跡北方に広く展開するものとみられる。1992 年度調査では大型掘立柱建物の存在が指摘されており（山田 2002）、中心域となる可能性がある。墓域は 1985 年度・1990-1 次調査を筆頭に、2018-1 次、大阪府の 1986 年度、1997・98 年度調査で検出しており、ほぼ前段階の墓域が継続する。前段階に存在した西側の墓域については未整理のため、今後の整理によっては西側の墓域もこの段階まで存在する可能性がある。注目すべきは 2018-1 次調査で検出した区画溝で、溝の両岸を盛土により堤防状に構築しており、墓域と居住域を区画する意図が明らかである。

この段階は前段階のように広域の遺跡群が想定できるわけではないが、居住域が河内潟沿岸地域まで拡大しており、集住傾向はむしろ高くなっているといえる。特に 1992 年度調査で指摘される大型掘立柱建物は、特殊な施設としての機能を想定することが可能であり、雁屋遺跡の拠点的性格を物語る資料であろう。

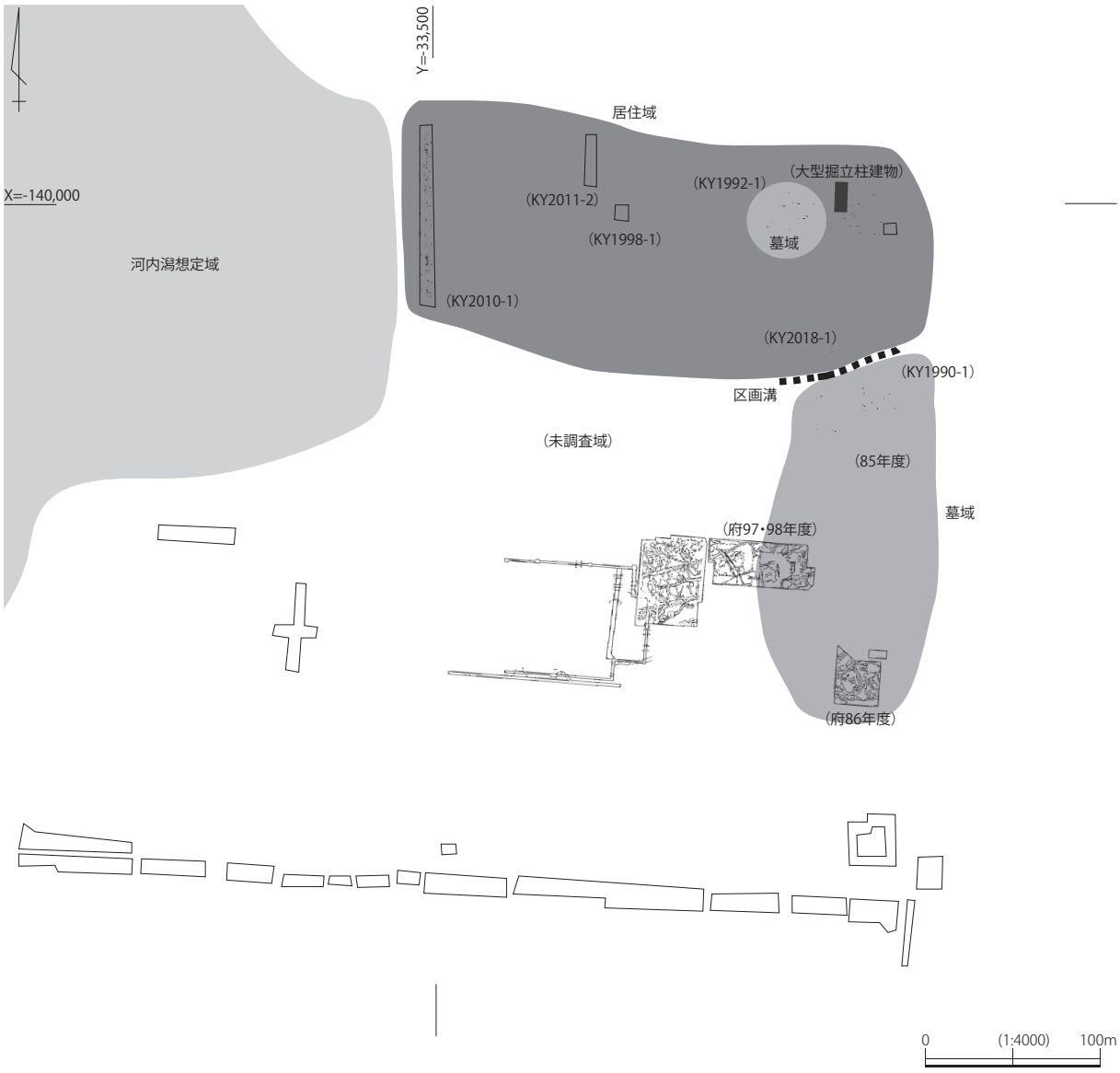
この建物廃絶後に中期後葉でも末の一時期に隣接地が居住域から墓域に変更されている。この墓域が居住域の中に存在するのか、居住域が実は複数ありその間に墓域が存在することになるのかについては、現時点では不明と言わざるを得ない。今後の調査により明らかにできると考える。

８．雁屋遺跡の集落復元（５）弥生時代後期

弥生時代後期も、雁屋遺跡の集落では引き続き前段階の繁栄が継続する（第 75 図）。居住域が検出されたのは四條畷市調査の 1985 年度、2010-1 次、2011-2 次、2018-1 次、大阪府調査の 1986 年度、1995 年度、1997・98 年度調査地などで、遺跡中心の広範囲に及んでいる。1985 年度調査では北近畿や山陰系の土器も出土しており、広範囲に交流を行っていた状況が読み取れる。また墓域は四條畷市



第73図　弥生時代中期中葉（Ⅲ様式期）の雁屋遺跡



第74図　弥生時代中期後葉（Ⅳ様式期）の雁屋遺跡

1985 年度、2013-1 次調査で検出しており、位置関係からみると居住域の周縁部に散在して分布している可能性がある。この時期で注目すべきは大阪府の 1993 年度・1995 年度・1997・1998 年度調査地で検出された同一方向の溝群である。これらの溝群はいずれもおおよそ緩やかに北東方向から西へと流れるものであり、それが２～３条以上同一方向に並行して掘削されている。この溝群より北側は居住域が分布するが、南側はいずれの調査地でも居住域を検出しておらず、2013-1 次調査の墓域が存在するのみである。以上のことから、これらの溝群は、居住域を区画する機能を有した可能性が考えられる[1]。面的な調査がいまだ不足しており、これらを環壕と断定することは現時点ではできないが、少なくとも集落の南限はこの溝群により区画されている可能性が高いといえるだろう。

なお、この時期の雁屋遺跡が完全な環濠集落であるかどうかを類推する資料としては、1985 年度調査地で竪穴建物と周溝墓とが、東西方向の溝と旧河川に区切られた微高地において周溝以外に南北方向の区画溝をもつことなく存在している状況が示唆的である。これが集落縁辺部の状況を示している可能性もあろうが、仮にこの調査地より東側で東西方向の区画溝がみつかれば、雁屋遺跡は環濠集落である可能性が高くなるといえるだろう。しかし現時点では、環濠集落である可能性は積極的には評価できない。

第75図　弥生時代後期（Ⅴ様式期）の雁屋遺跡

この弥生時代後期まで雁屋遺跡の繁栄は継続するが、2001-2 次調査で検出した庄内式期前半期の遺構を最後に遺跡は断絶し、その後は流路等から少数の遺物が出土するのみとなる。代わって庄内式期には、遺跡北方約 1.5km の位置にある寝屋川市小路遺跡が、この地域の拠点的集落となる。

９．雁屋遺跡の位置づけ

このような変遷過程をとる雁屋遺跡は、どのような集落として位置づけられるであろうか。雁屋遺跡に人が住み始めるのは、遺跡北方約 1.5km の箇所にある讃良郡条里遺跡で、近畿地方でも初現期の弥生集落が営まれ（中尾・山根編 2009）、廃絶したのちのことである。近年の土器編年成果に照らせば（田畑 2018）、讃良郡条里遺跡と雁屋遺跡の間には小断絶を挟む可能性がある。ただし、2011-2 次調査では甕沈線三条化前の時期に遡る可能性がある遺構を検出し、周辺では遺跡の山手東方約 0.8km の四條畷小学校内遺跡でも同様の時期に遡る可能性がある石敷き遺構を検出しているため（四條畷市史編さん委員会 2016）、周辺には未発見の集落が存在する可能性を考慮すべきであろう。雁屋遺跡の人びとは、讃良郡条里遺跡からの移動を想定しておくのが現時点では妥当であろうと考える。

前期中頃に雁屋遺跡には初めて人が住み始めるが、この時期は小集団が散在している状況である。

ただし、この状況はこの時期畿内の他の多くの遺跡でもみられるとされ（森岡 2011）[2]、むしろこの地域における弥生時代前期集落の形態を逸脱しない資料が増えたといえるだろう。評価すべきは居住域を円形に区画する可能性のある溝の存在であり、今後の調査の進展によっては環濠として認識できる可能性があると考える。

その後、前期後半段階の資料は、現時点では確実なものがみられない。この時期は一時的に集団が周辺へ移動していたか、もしくは遺跡の調査が進んでおらず集落が未発見である可能性があろう。

中期になると、大阪府の 1997・98 年度調査で方形周溝墓下層から検出された中期初頭の遺構と、四條畷市 1985 年度調査の３号方形周溝墓を嚆矢に、継続的に遺跡に人が住み続ける。

中期中葉には墓域が広範囲に営まれる状況が確認でき、居住域も範囲が広くなっていることが予想される。この時期は周辺でも鎌田遺跡や中野遺跡で方形周溝墓群が営まれており、雁屋遺跡を中心に大規模な集落群を形成している可能性がある。

中期後葉は墓域が東側に、一方集落域はその北西に存在しており、2018-1 次調査で墓域と居住域を区画する溝を確認した。居住域は少なくとも東西 200mを超える規模を有しているとみられ、その東側に墓域が南北 200mほどの範囲で存在する可能性があることから、相当規模の集落であったとみられる。この時期には 1992 年度調査で大型掘立柱建物が検出されており、短期間の存在だが特殊な機能が想定される。さらに、この建物廃絶後に中期後葉でも末の一時期に隣接地が居住域から墓域に変更されている。この墓域が居住域の中に存在するのか、居住域が実は複数ありその間に墓域が存在することになるのかについては、今後の調査の進展を待ちたい。

後期には居住域が直径 300mほどの範囲に広がっているとみられ、少なくとも南側は複数の同一方向の溝により墓域と居住域とが区画されている。居住域の規模は最大となるとみられ、大規模集落として位置づけられるであろう。

以上、雁屋遺跡は前期中頃に出現し、中期中葉に規模が大きくなり、その後も後期まで規模を保ちながら継続する集落とみられる。前期における他地域での集落状況や、各時期における他地域系土器の出土、遺物の出土量、墓域や居住域の分布状況などからみて、前期から後期にわたって拠点的な機能を有した集落と言えるだろう。

10. おわりに

このように、雁屋遺跡の集落変遷について簡単にまとめてきた。周辺では高宮八丁遺跡と太秦遺跡、中垣内遺跡と鍋田川遺跡などが拠点的集落とされるが（濱田 2001）、前期から後期までほぼ同一地で拠点的な集落が営まれるのは、淀川北岸では高槻市安満遺跡や茨木市東奈良遺跡が存在する一方、淀川南岸～河内潟北岸にかけての地域では雁屋遺跡が唯一といっても過言ではない。これは、これまでの確認調査から今回河内潟の汀線予想ラインとともに遺跡変遷を示したが、河内潟岸にあって西方地域との交流を行う上で都合の良い立地であったこととかかわりがあるのではなかろうか。

今回、雁屋遺跡の集落変遷を現時点の資料から考察したが、いまだ遺跡全体の状況を細かく考察するには資料が不足している。このため、資料の存在しないものは推測で埋めた部分があり、問題を残したといえる。この点については、今後の調査の蓄積により再検討していきたい。いずれにせよ、雁屋遺跡の調査全体を俯瞰し、集落変遷について検討するという、当初の目的は達することができた。今後も調査研究を継続し、雁屋遺跡の変遷についてさらに明らかにしていきたい。

（實盛）

註

１）これらの溝群が環壕としての機能を有する可能性は、山田隆一がすでに指摘している（山田 2002）。

２）森岡秀人氏から、出土土器検討の際に直接教示を得た。

挿図出典

第 71 図～第 75 図は、各調査報告書掲載図等を用い筆者が作成した。

参考文献

後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編 2015『讃良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
阿部幸一 1999『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪府教育委員会。
井西貴子 2003『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅴ、大阪府教育委員会。
井上智博・多賀晴司編 2003『讃良郡条里遺跡』その２、財団法人大阪府文化財センター。
井上智博編 2008『讃良郡条里遺跡』Ⅵ、財団法人大阪府文化財センター。
岩瀬　透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編 2010『蔀屋北遺跡』Ⅰ、大阪府教育委員会。
岩瀬　透編 2012『蔀屋北遺跡』Ⅱ、大阪府教育委員会。
梅原末治 1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第４、日本古文化研究所。
梅原末治 1985『銅鐸の研究』木耳社。
大阪府教育委員会編 1970『四条畷町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
大阪府教育庁文化財保護課保存管理グループ 2017「四條畷高等学校（雁屋遺跡）」『大阪府教育庁文化財保護課ホームページ学校に眠る遺跡』http://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/kariyaiseki.html（2018.12.25 閲覧）
岡田　賢 2006『雁屋遺跡』大阪府教育委員会。
片山長三 1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
片山長三 1967b「縄文時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。。
木下保明編 2004『小路遺跡（その３）』（財）大阪府文化財センター。
黒須亜希子編 2004『高宮遺跡（その２）』（財）大阪府文化財センター。
黒田　淳 1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988 年度、大東市教育委員会。
黒田　淳 1997『北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
黒田　淳 2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
古代の土器研究会編 1993『都城の土器集成』Ⅱ、古代の土器研究会。
近藤章子・山本雅和・多賀晴司編 2006『讃良郡条里遺跡』Ⅳ、財団法人大阪府文化財センター。
佐伯博光・六辻彩香編 2007『讃良郡条里遺跡』Ⅴ、財団法人大阪府文化財センター。
酒井泰子 1994『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
佐久間貴士 1995「四條畷市雁屋遺跡の発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第 32 回）資料』。
櫻井敬夫 1972「考古学」『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
塩山則之 1995「北河内の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』大阪経済法科大学出版部。
四條畷市教育委員会編 2002『みどりの風と古墳』第 17 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2004『馬と生きる』開館 20 周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2008『ひとつぶの籾』第 23 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市史編さん委員会編 2016『四條畷市史』第５巻考古編、四條畷市。
瀬川芳則 1991「潟湖北畔の大集落」『大阪府史』別巻、大阪府。
瀬川芳則 1992「最古の木製下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ、同刊行会。
大東市北新町遺跡調査会編 1991『北新町遺跡第２次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。
田畑直彦 2018「遠賀川式土器の特質と広域編年・歴年代」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣。
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社。
辻本　武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
寺沢　薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会。
寺沢　薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、木耳社。
中尾智行・山根　航編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。
中村　浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
西尾　宏1987『中野遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
西尾　宏1988『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1977「四條畷市中野遺跡」『まんだ』第２号、まんだ編集部。
野島　稔1978a『中野遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1978b「南山下遺跡」『まんだ』第５号、まんだ編集部。
野島　稔 1978c「大阪府四條畷市発見の製塩土器」『古代学研究』第 86 号、古代学研究会。
野島　稔 1979a「岡山南遺跡出土の古代下駄」『まんだ』第８号、まんだ編集部。
野島　稔 1979b「大阪府下における製塩土器出土遺跡」『ヒストリア』第 82 号、大阪歴史学会。
野島　稔 1980a『清滝古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会。
野島　稔 1980b「四條畷市奈良井遺跡（２）」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔 1980c「四條畷市奈良田遺跡」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔 1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1982『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1983『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1984a『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1984b「河内の馬飼」『万葉集の考古学』筑摩書房。

野島　稔 1985「四條畷市南野米崎遺跡」『まんだ』第 24 号、まんだ編集部。
野島　稔 1986a『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要―1985 年度―』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1986b『中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第 30 号、まんだ編集部。
野島　稔 1987d「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第 30 号、まんだ編集部。
野島　稔 1987e「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅰ、韓式系土器研究会。
野島　稔 1988「四條畷市“南山下遺跡”」『まんだ』第 35 号、まんだ編集部。
野島　稔 1990「四條畷市・中野遺跡」『まんだ』第 39 号、まんだ編集部。
野島　稔 1991「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ、韓式系土器研究会。
野島　稔 1992「四條畷市・大上遺跡」『まんだ』第 47 号、まんだ編集部。
野島　稔 1993a「四條畷市忍ケ丘駅前遺跡」『まんだ』第 49 号、まんだ編集部。
野島　稔 1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第 50 号、まんだ編集部。
野島　稔 1994a『雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1994b「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第 51 号、まんだ編集部。
野島　稔 1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第 53 号、まんだ編集部。
野島　稔 1995『南野遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1996a「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第 57 号、まんだ編集部。
野島　稔 1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第 58 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997a「五絃の琴」『まんだ』第 60 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」『まんだ』第 62 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997c『はにわはともだち』第 12 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
野島　稔 1999「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第 66 号、まんだ編集部。
野島　稔編 2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 2006『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 2008「王権を支えた馬」『牧の考古学』高志書院。
野島　稔 2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1976『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1977『正法寺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・前田　暢1984『岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始1999『正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2000『奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2001『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2002『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始・實盛良彦 2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
濱田延充 2001「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要』第８号、寝屋川市教育委員会。
原田昌則・尾崎良史 2014『考古資料からみる八尾の歴史』公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
平尾兵吾 1931『北河内史蹟史話』（1973 年増補再刊）。
松岡良憲 1987『中野遺跡発掘調査概報』四條畷市教育委員会。
宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
宮野淳一 1992『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
三好　玄・杉本厚典・野島　稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号、財団法人大阪市文化財協会。
三好孝一1999「河内湖周辺部における弥生時代中・後期の集落」『弥生時代の集落』第45回埋蔵文化財研究集会実行委員会。
六辻彩香編2006『小路遺跡』Ⅲ、（財）大阪府文化財センター。
村上　始1997a『木間池北方遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始1997b『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始2000『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001a『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001b『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
村上　始2001d「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
村上　始2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
村上　始2001f「四條畷市雁屋遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
村上　始2003a『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2003b「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
村上　始2004『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2006『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第 14 回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
村上　始・實盛良彦 2013a『中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2013b『北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2014『四條畷市文化財調査年報』第１号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2016『四條畷市文化財調査年報』第３号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2018『四條畷市文化財調査年報』第５号、中野遺跡、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦編 2013『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。

村上　始・實盛良彦編 2017『四條畷市文化財調査年報』第４号、大上遺跡（大上古墳群）、四條畷市教育委員会。
森岡秀人 2011「弥生文化の地域的様相と発展　近畿地域」『講座日本の考古学５　弥生時代（上)』青木書店。
森岡秀人編 2018『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣。
山口　博編 1972『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
山田隆一 2002「大阪府雁屋遺跡の大型掘立柱建物」『究班』Ⅱ、埋蔵文化財研究会 25 周年記念論文集、25 周年記念論文集編集委員会。
若林邦彦 1999「大阪平野における拠点集落の性格」『みずほ』第 31 号、大和弥生文化の会。
若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第 12 号、日本考古学協会。
若林邦彦 2009「集落分布パターンの変遷からみた弥生社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集、国立歴史民俗博物館。

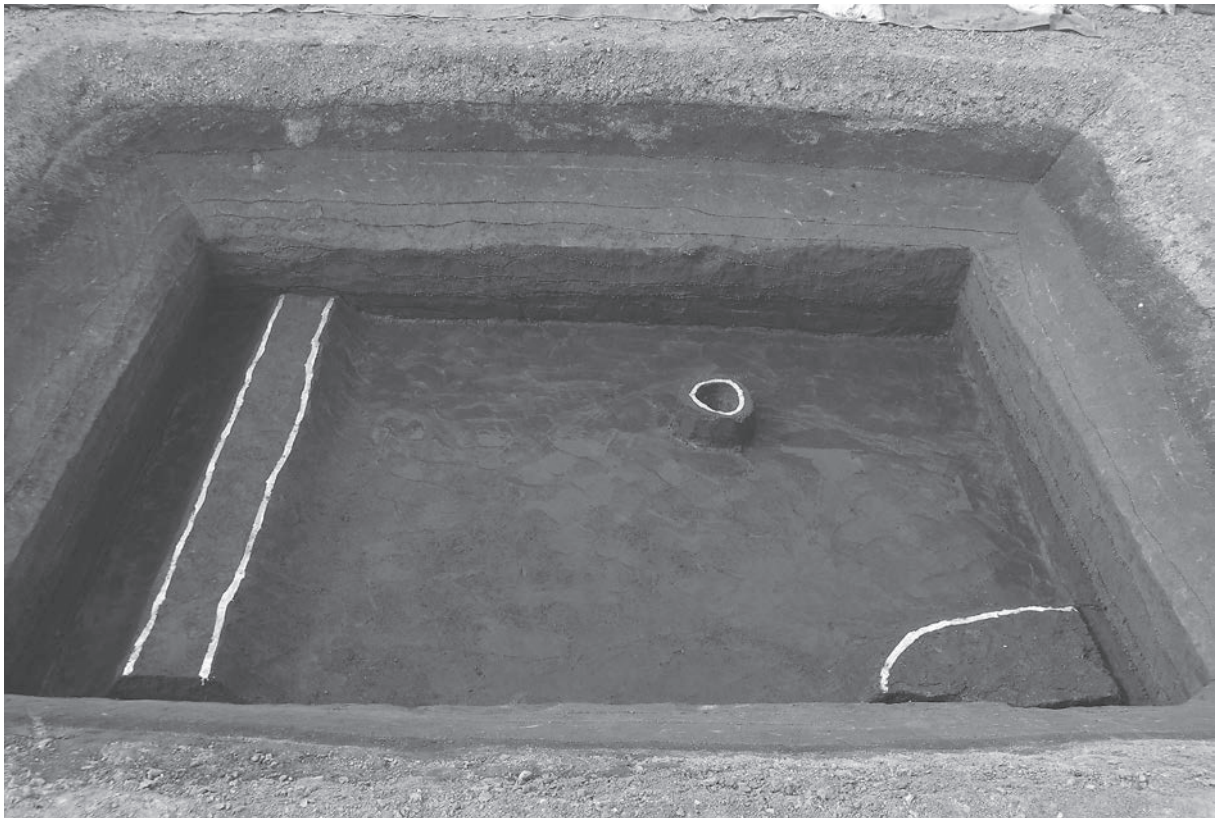
写 真 図 版 1

1．ＫＹ2010－２　第１遺構面　全景（北から）

2．ＫＹ2010－２　井戸37　調査状況（東から）

写 真 図 版 2

1．ＫＹ2011－１　第１遺構面　全景（南から）



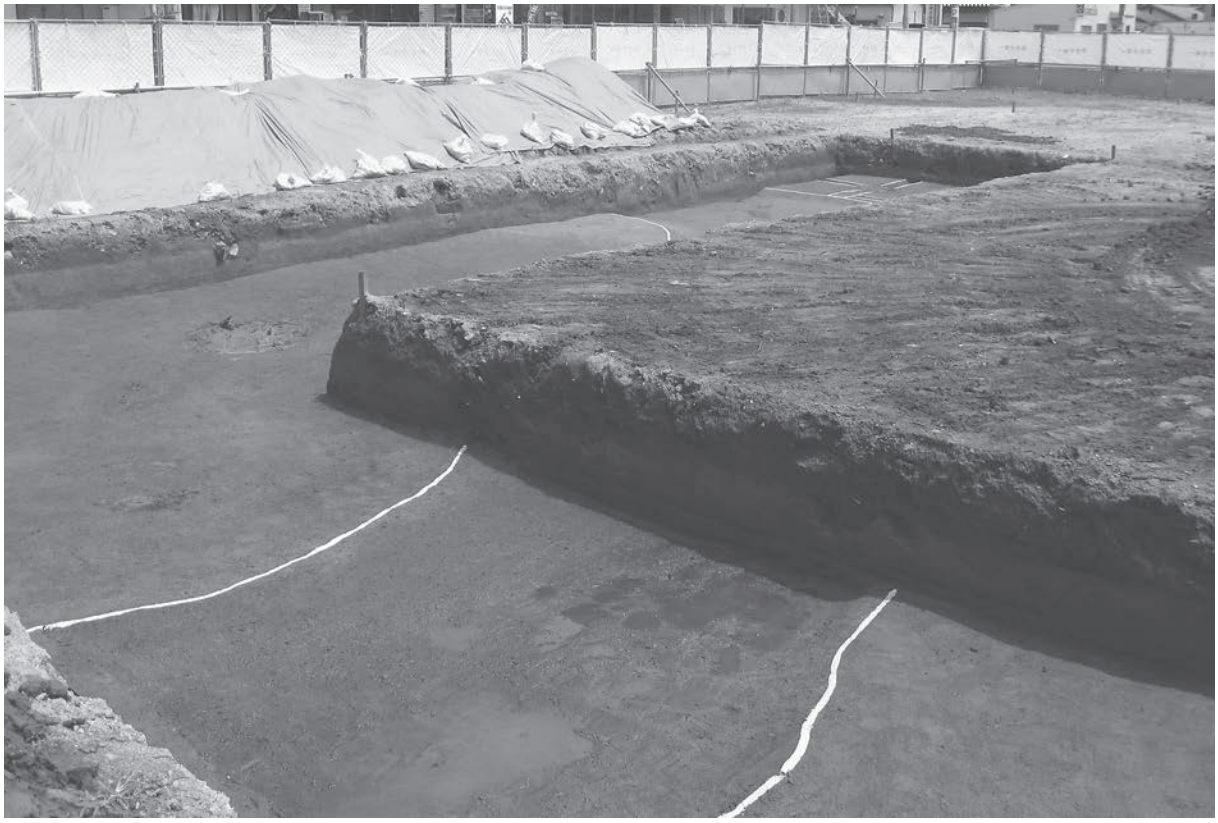
2．ＫＹ2011－１　第２遺構面　全景（南から）

写 真 図 版 3

1．ＫＹ2011－３　調査地区　全景（南から）

2．ＫＹ2011－３　掘立柱建物Ａ　全景（北から）

写 真 図 版 4



1．ＫＹ2013－１　溝２（方形周溝墓）　近景（北西から）

2．ＫＹ2013－１　溝２（方形周溝墓）　近景（南東から）

写 真 図 版 5

1．ＫＹ2001－1　調査前　全景（西から）

2．ＫＹ2001－1　調査地区　遺構検出状況（西から）

写 真 図 版 6

1．ＫＹ2001－1　調査地区　遺構完掘状況（西から）

2．ＫＹ2001－1　調査地区　遺構完掘状況（北東から）

写 真 図 版 7

1．ＫＹ2001－２　東側地区　全景（西から）

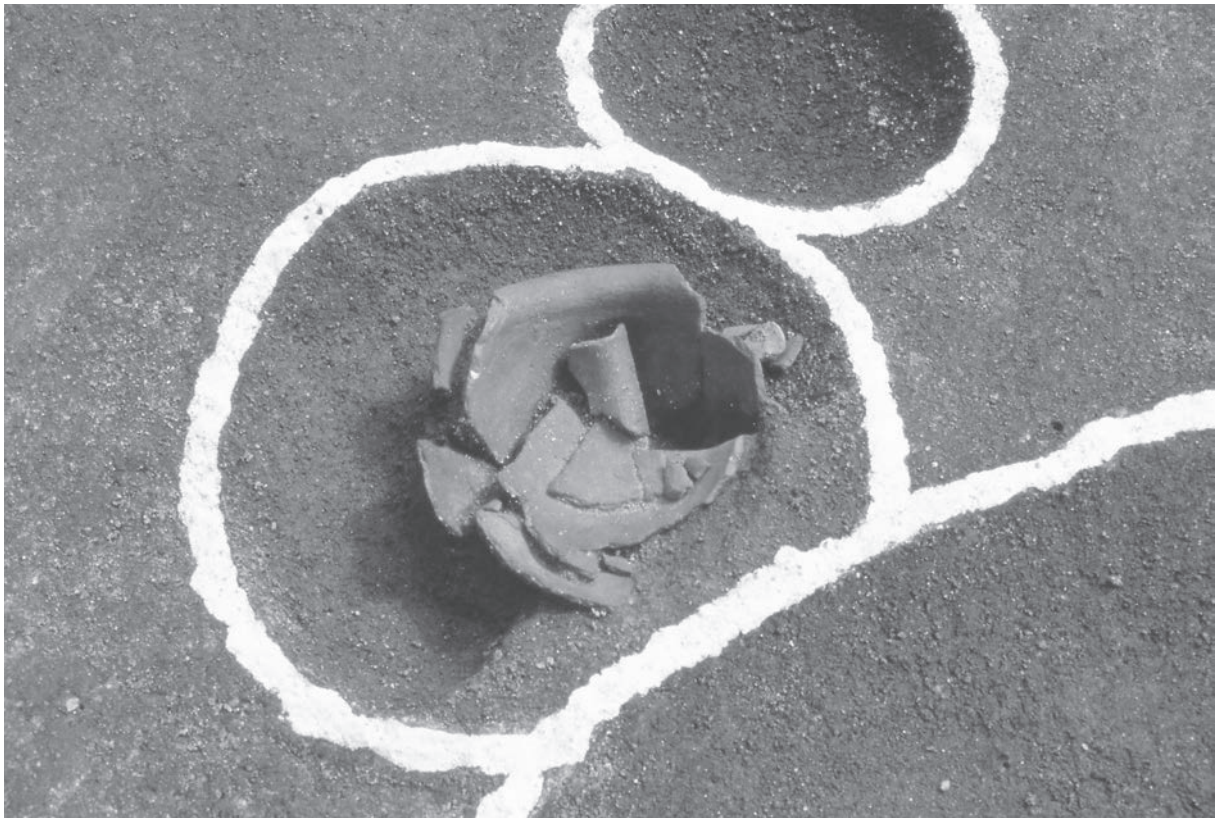
2．ＫＹ2001－２　東側地区　全景（東から）

写 真 図 版 8

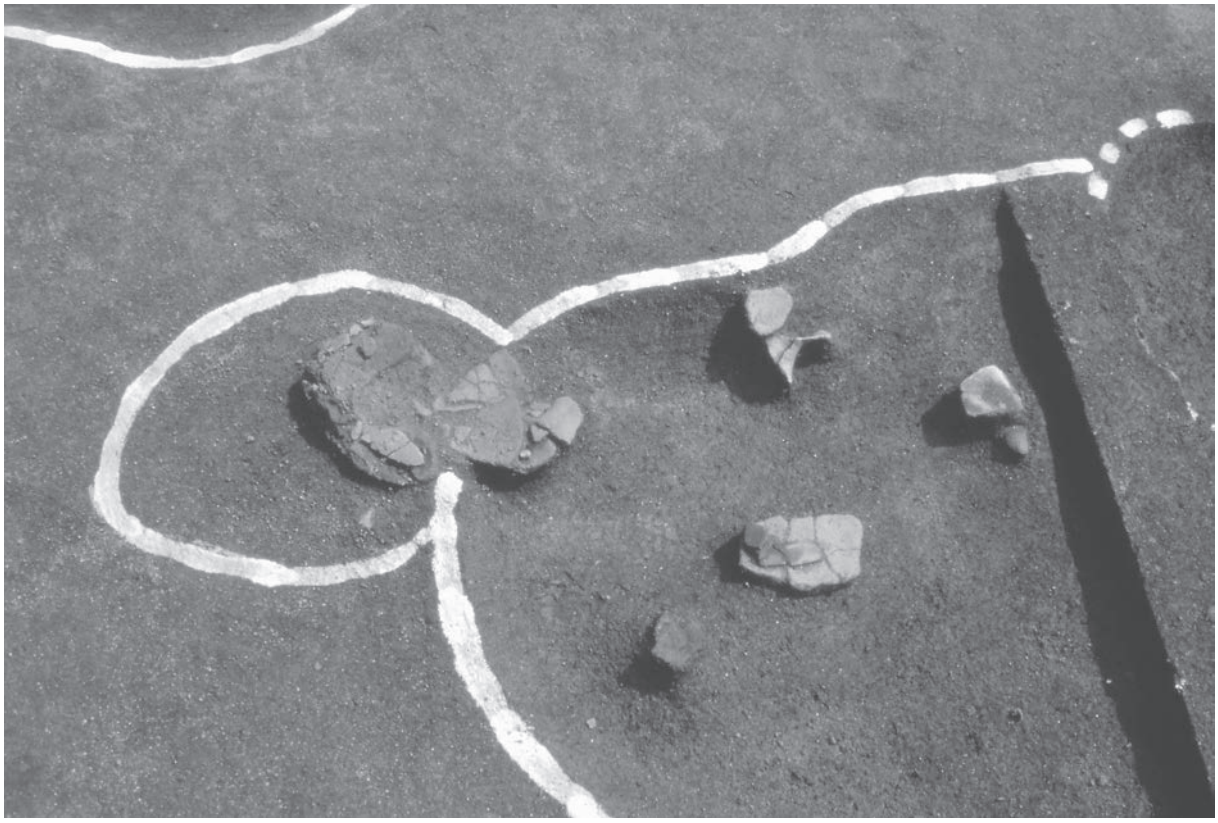
1．ＫＹ2001－２　西側地区　全景（東から）

2．ＫＹ2001－２　西側地区　全景（西から）

写 真 図 版 9

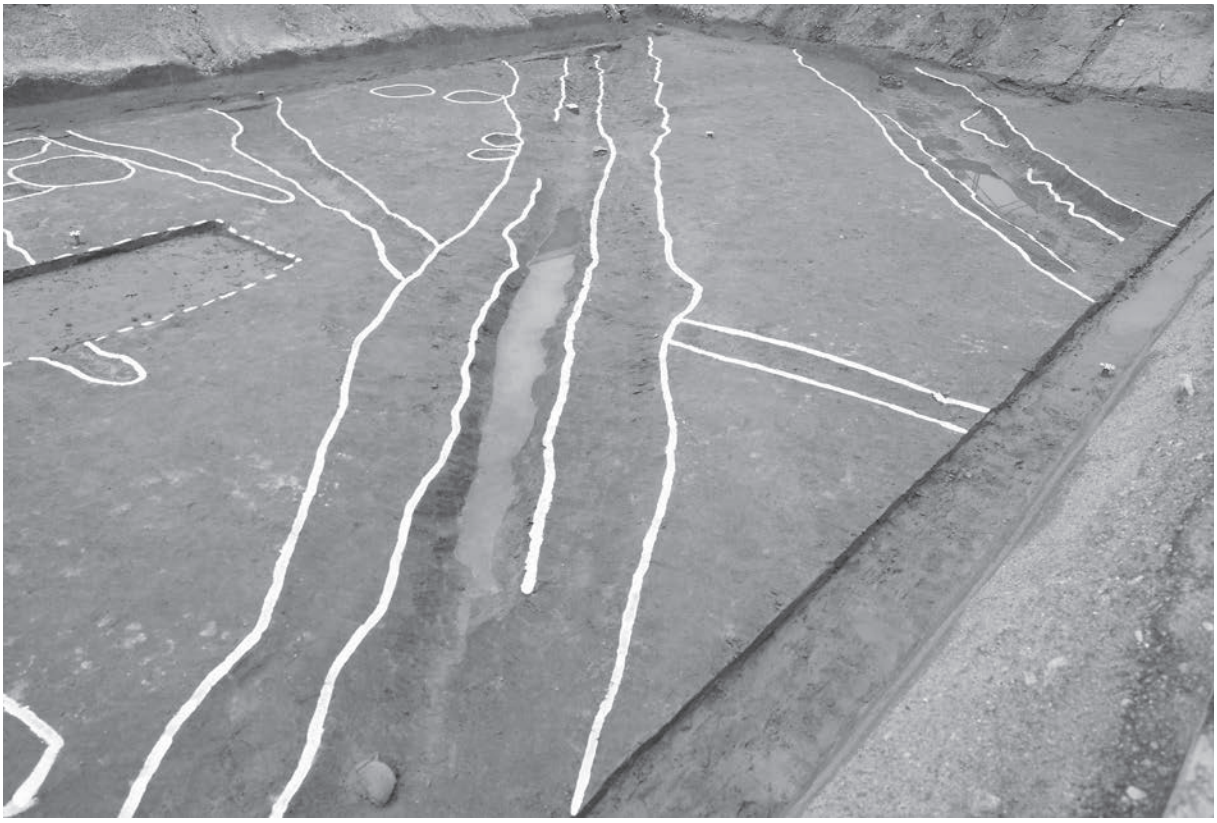


1．ＫＹ2001－２　土坑11　遺物出土状況（北から）



2．ＫＹ2001－２　土坑10　遺物出土状況（北から）

写 真 図 版 10



1．ＫＹ2001－２　溝16　全景（北東から）

2．ＫＹ2001－２　溝17　遺物出土状況（北東から）

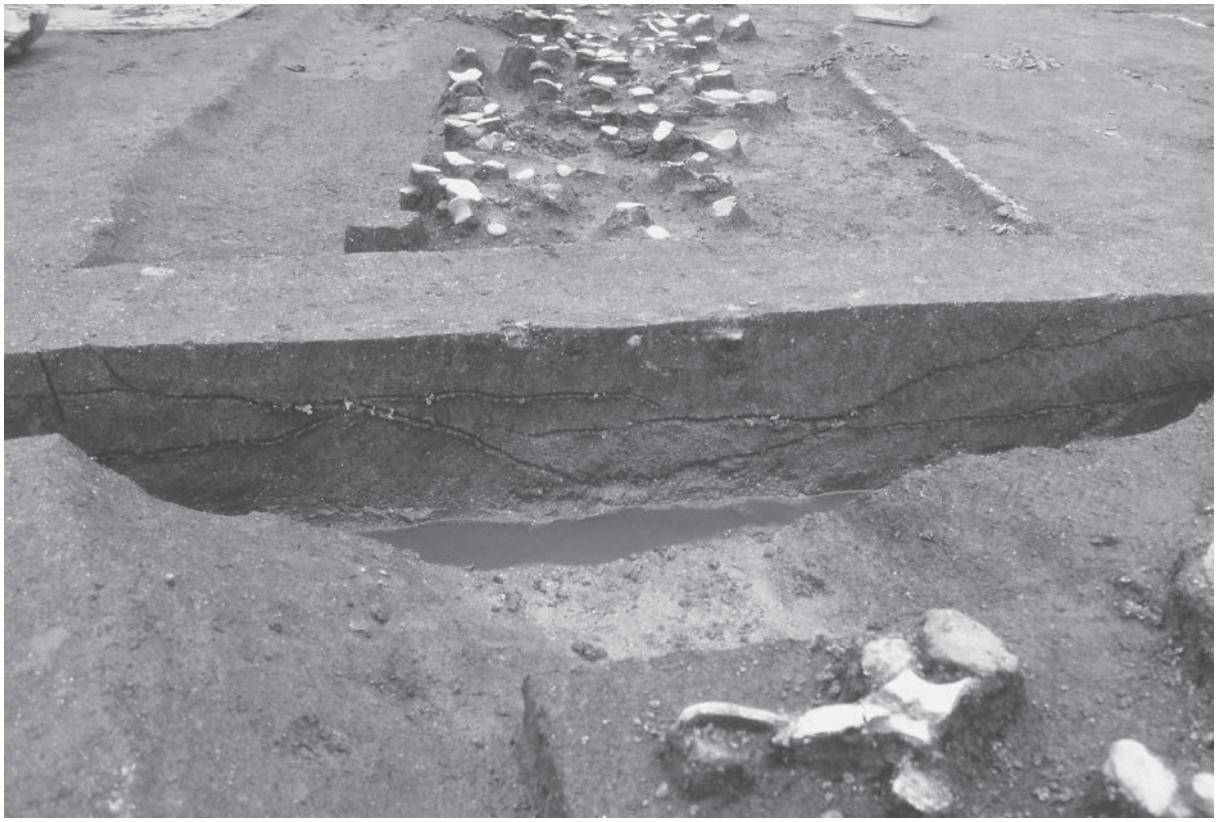
写 真 図 版 11

1．ＫＹ2001－２　溝18　遺物出土状況（南西から）

2．ＫＹ2001－２　溝18　遺物出土状況（北東から）

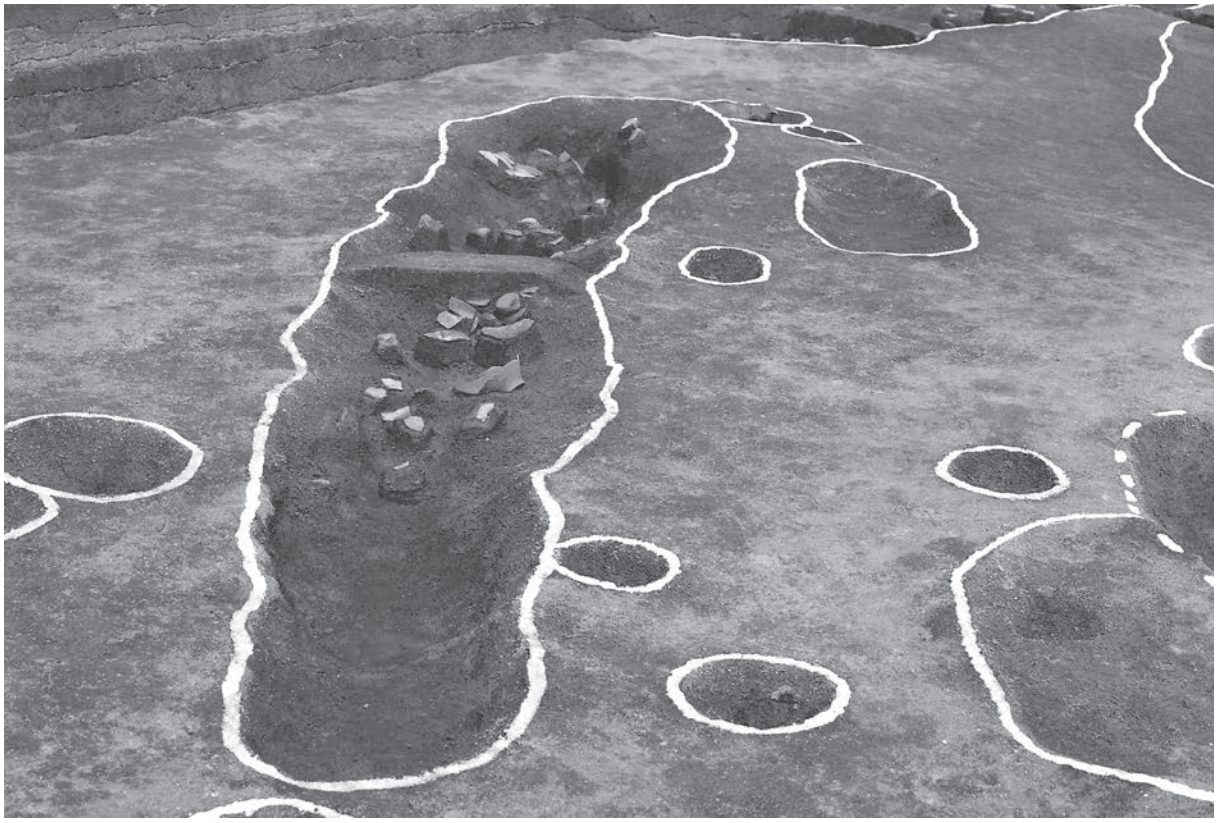
写 真 図 版 12

1．ＫＹ2001－２　溝18　遺物出土状況（北東から）

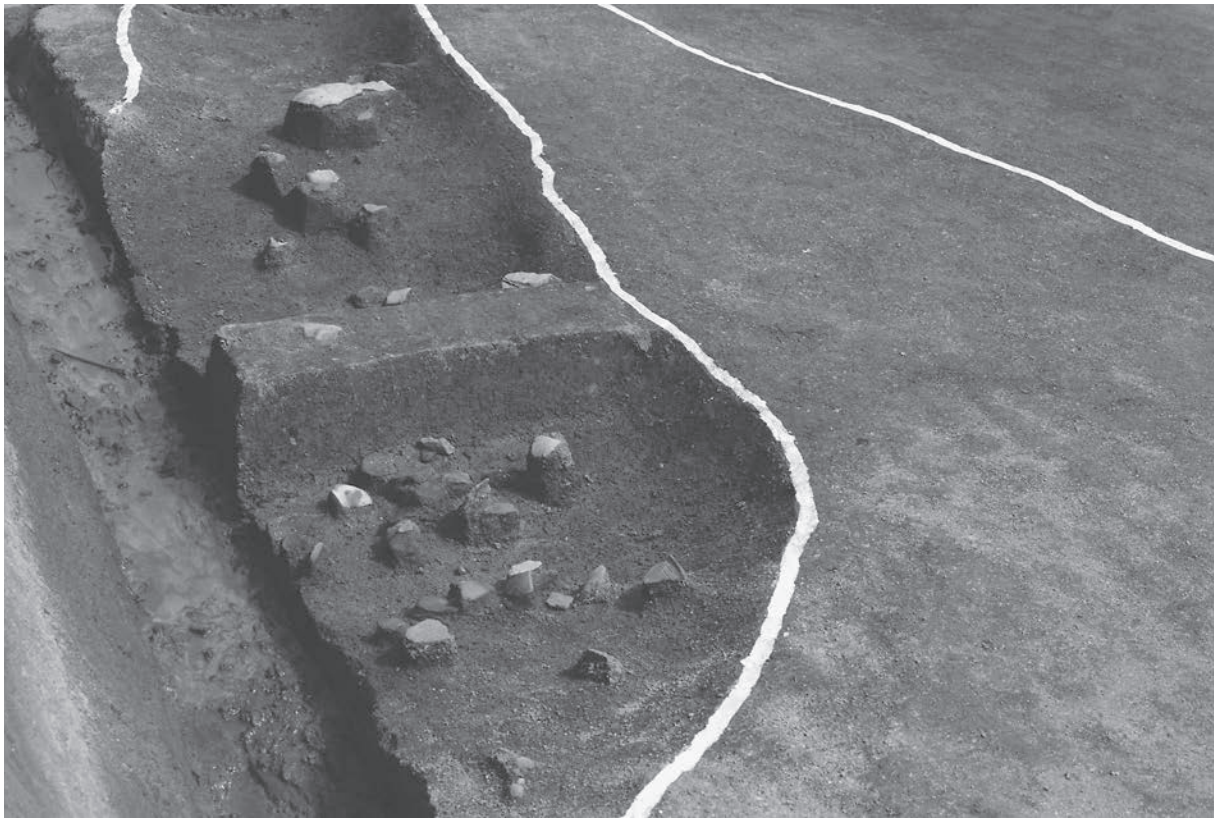


2．ＫＹ2001－２　溝18　Ｂ－Ｂ′断面（東から）

写 真 図 版 13



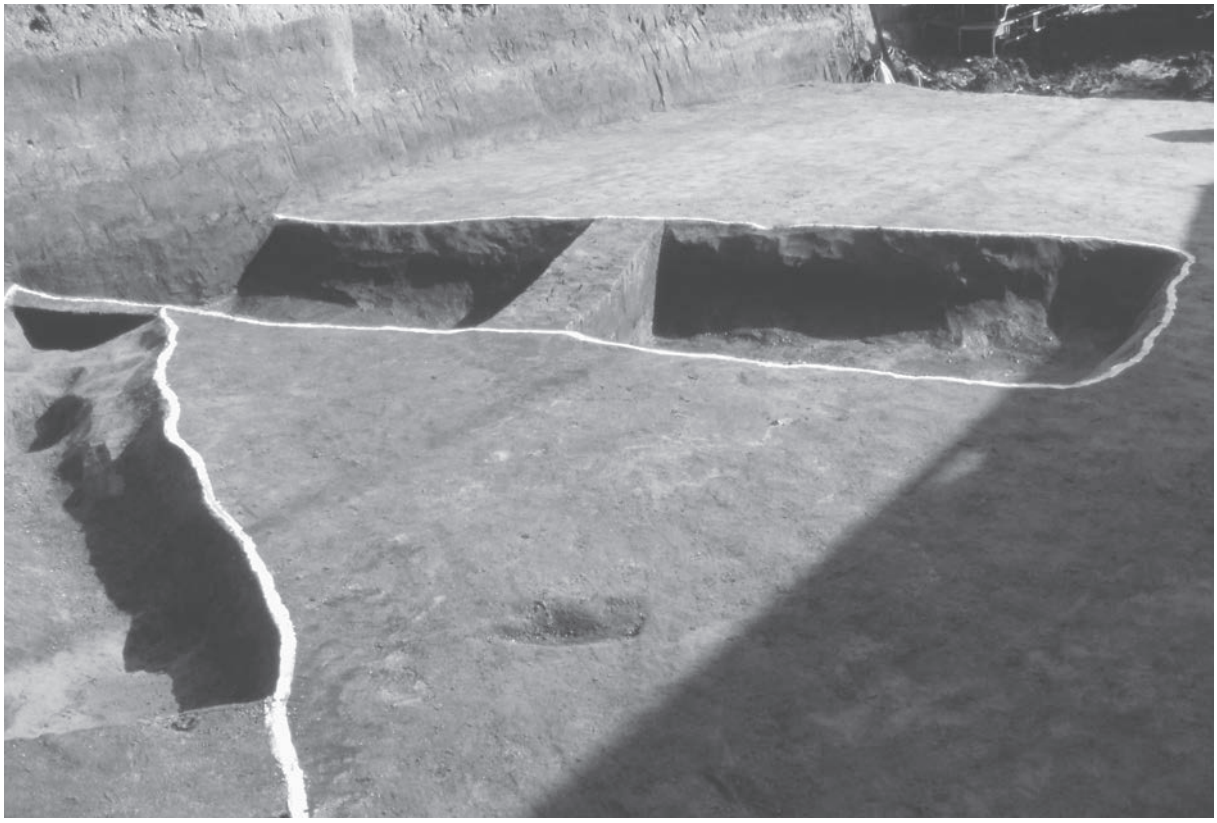
1．ＫＹ2001－２　溝19　遺物出土状況（南西から）



2．ＫＹ2001－２　溝20　遺物出土状況（北西から）

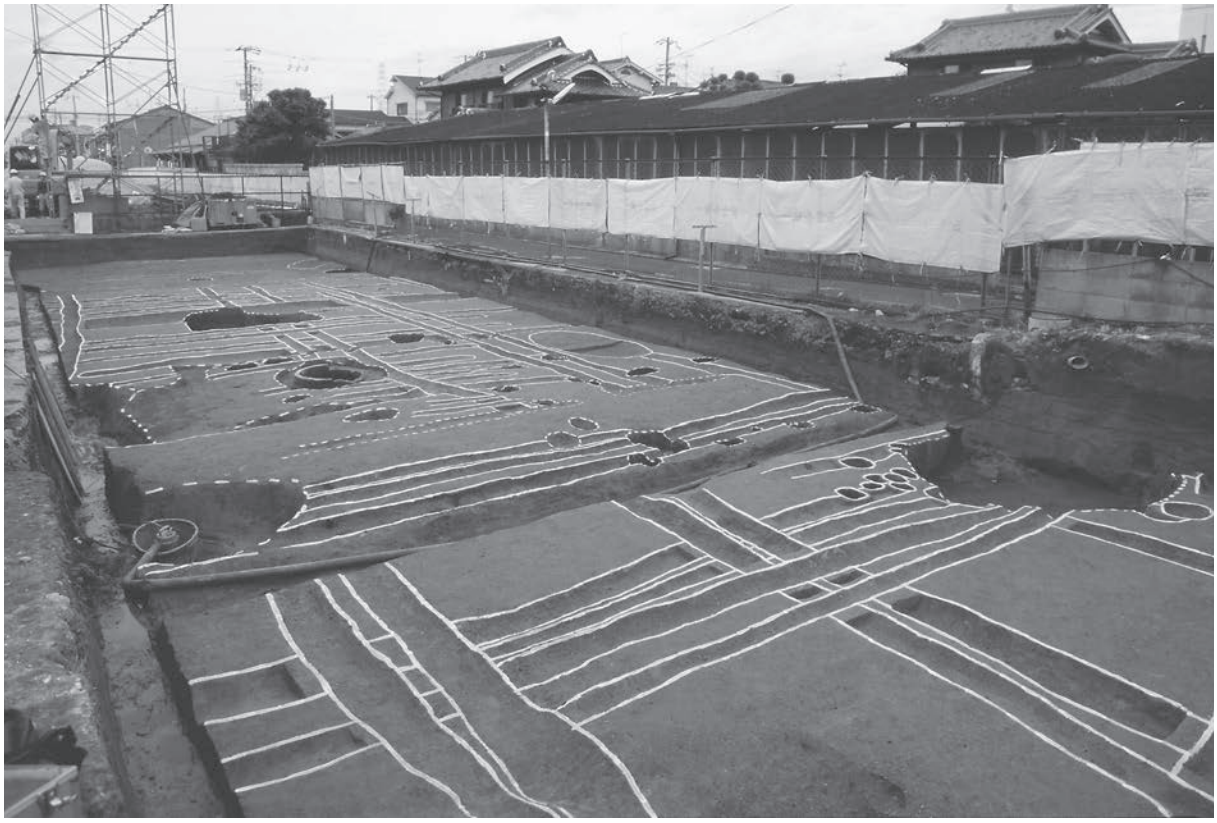
写 真 図 版 14

1．ＫＹ2002－１　第１遺構面　全景（西から）

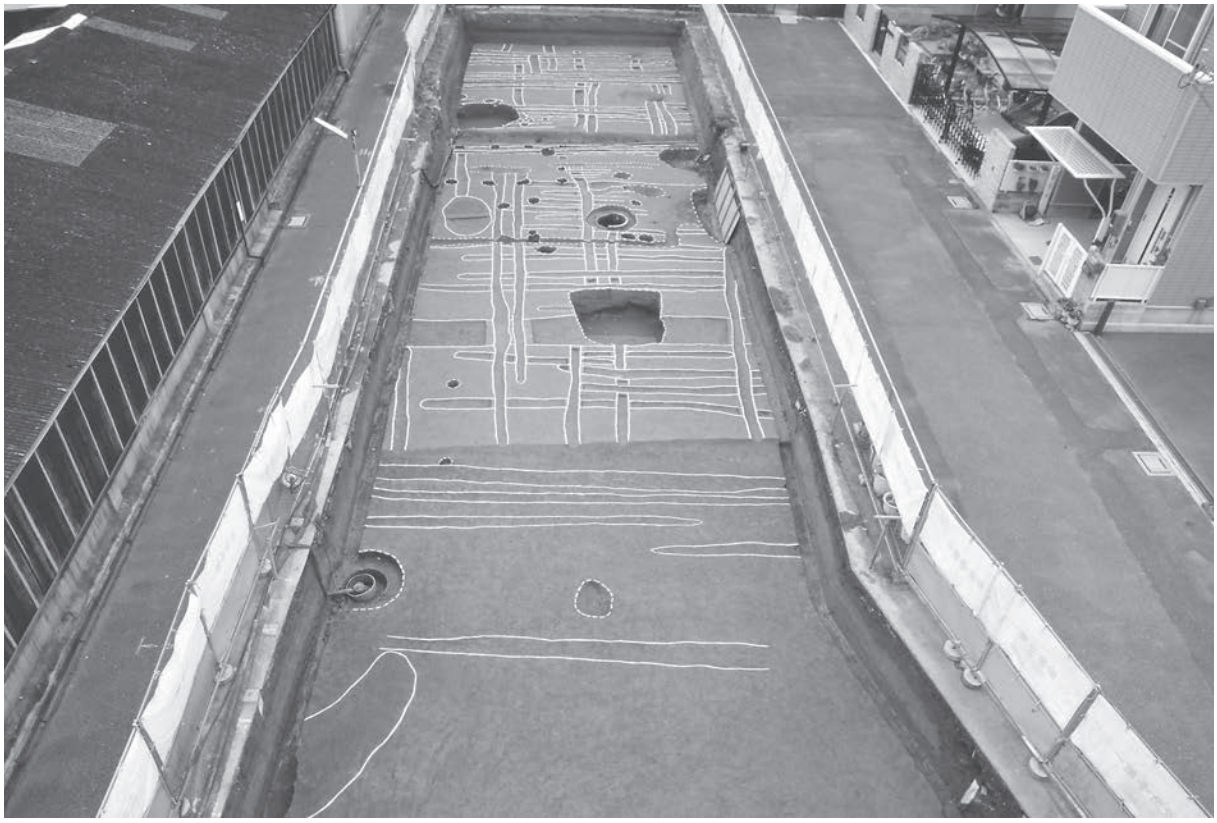


2．ＫＹ2002－１　第２遺構面　土坑２　近景（西から）

写 真 図 版 15

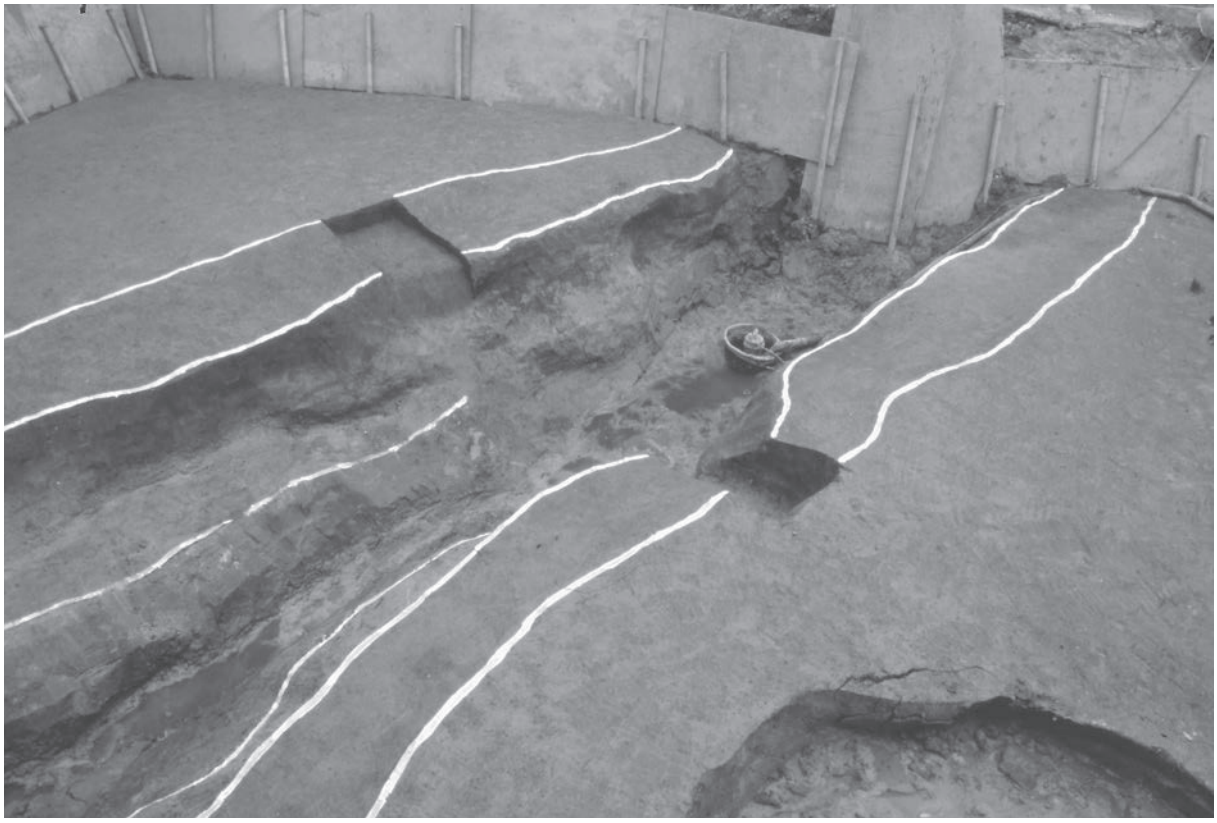


1．ＫＹ2003－１　第１遺構面　全景（南東から）



2．ＫＹ2003－１　第１遺構面　全景（西から）

写 真 図 版 16

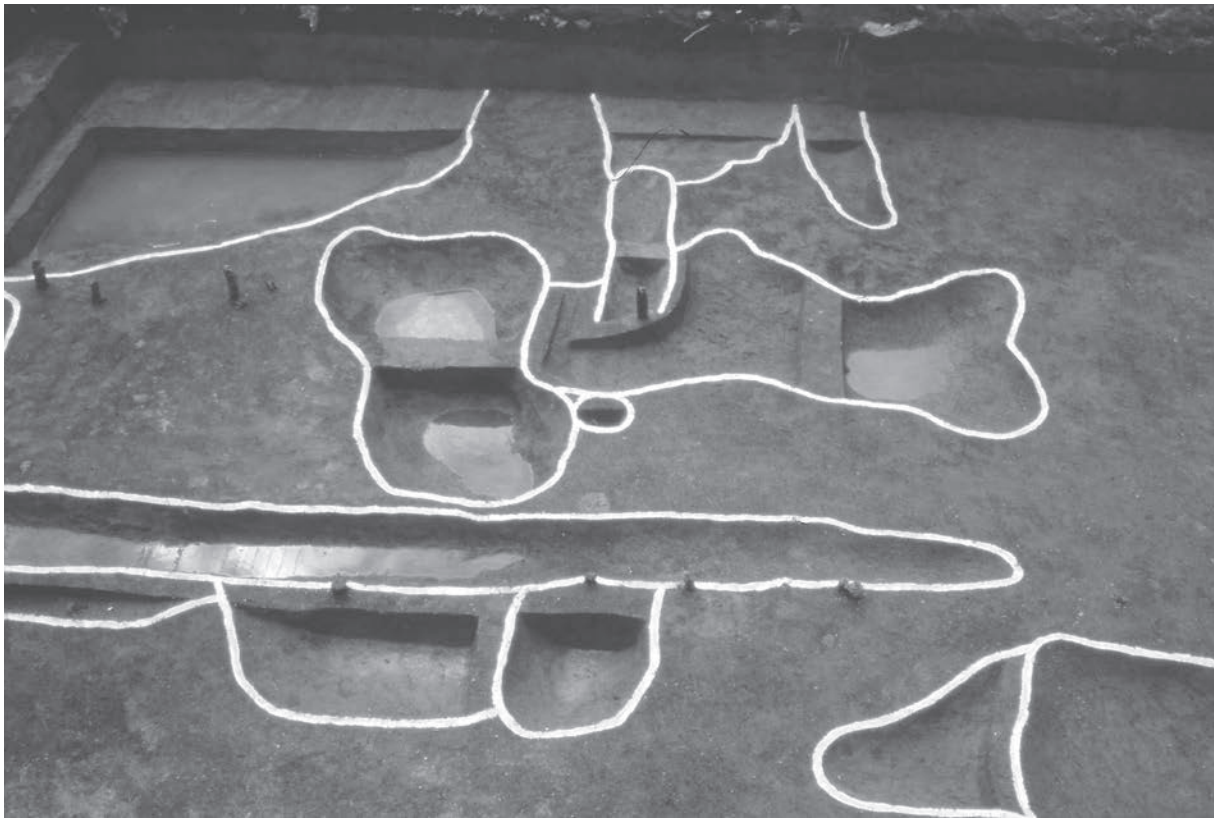


1．ＫＹ2003－１　第２遺構面　溝１　全景（北西から）

2．ＫＹ2003－１　第３遺構面　河川１　全景（南東から）

写 真 図 版 17

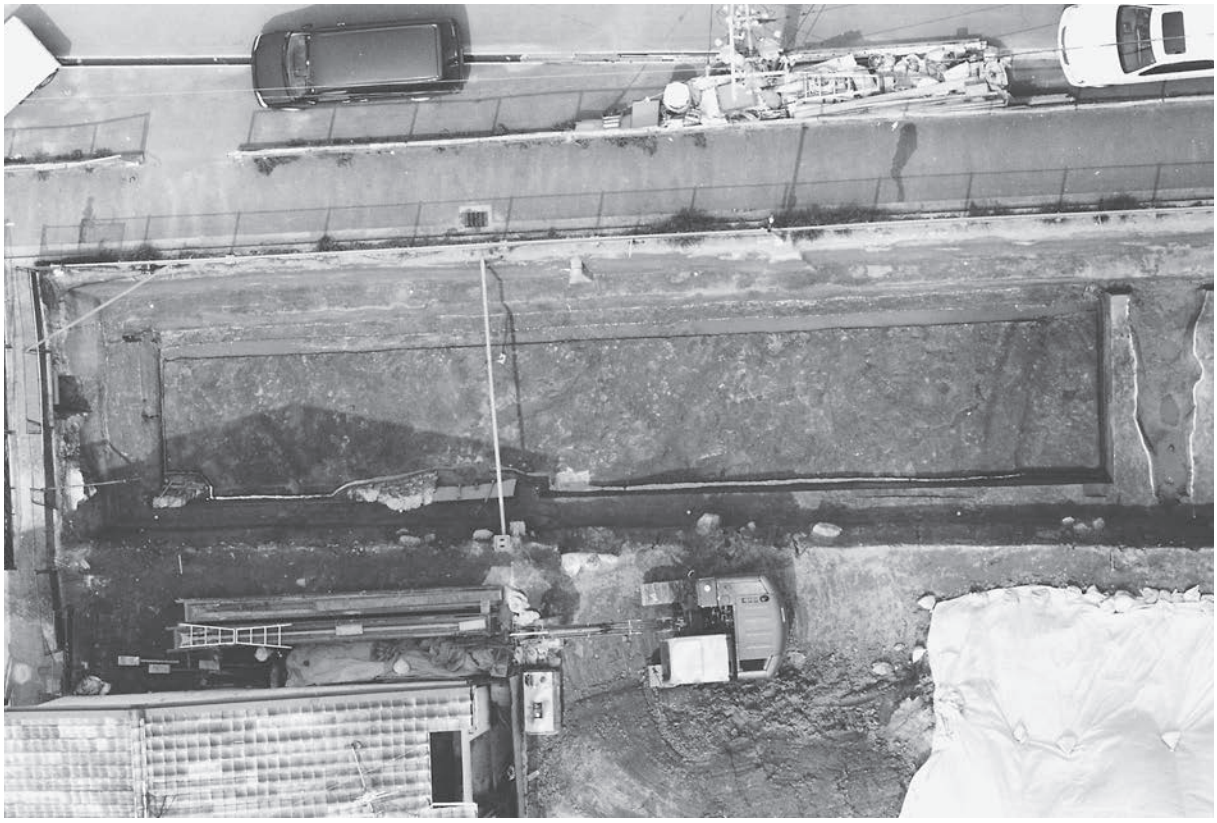
1．ＫＹ2003－２　東側地区　第１遺構面　遠景（垂直写真）



2．ＫＹ2003－２　東側地区　第１遺構面　近景（北から）

写 真 図 版 18

1．ＫＹ2003－２　井戸１・土器溜まり　全景（垂直写真）



2．ＫＹ2003－２　第２遺構面　全景（垂直写真）

写 真 図 版 19

1．ＫＹ2004－１　調査前　全景（北東から）

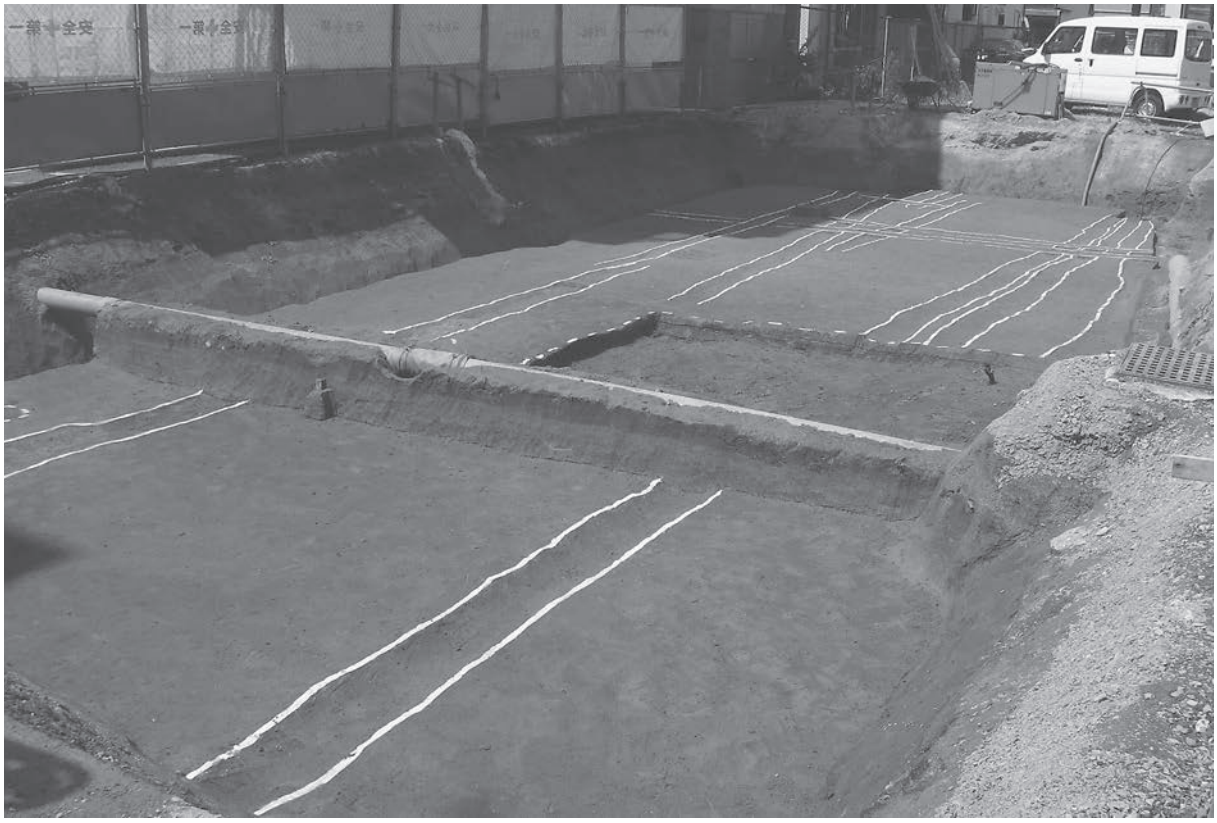
2．ＫＹ2004－１　５区　全景（西から）

写 真 図 版 20

1．ＫＹ2004－１　井戸１　井戸枠内完掘状況（南から）

2．ＫＹ2004－１　井戸１　裏込め土半截状況（南から）

写 真 図 版 21



1．ＫＹ2011－４　西側地区　第１遺構面　全景（北東から）

2．ＫＹ2011－４　西側地区　第２遺構面　全景（西から）

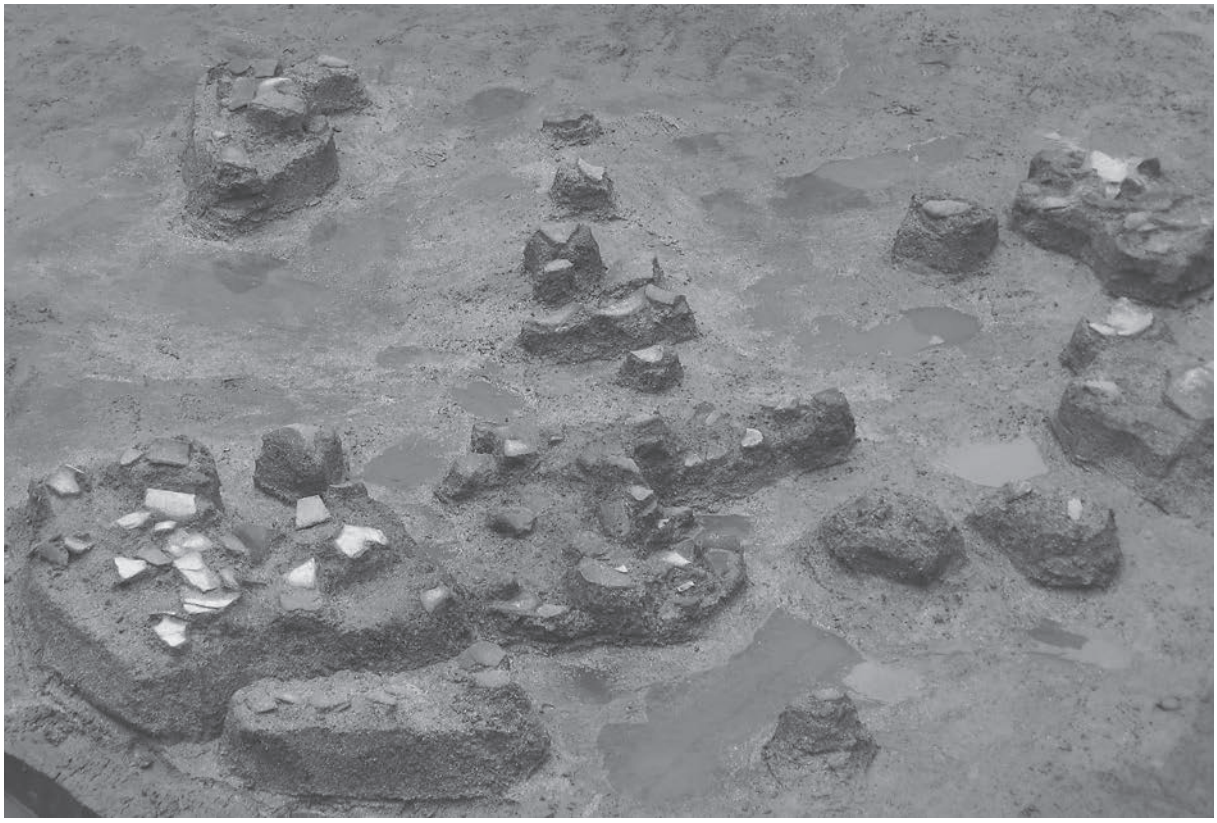
写 真 図 版 22

1．ＫＹ2011－４　東側地区　第２遺構面　全景（西から）

2．ＫＹ2011－４　溝68　遺物出土状況（南から）

写 真 図 版 23

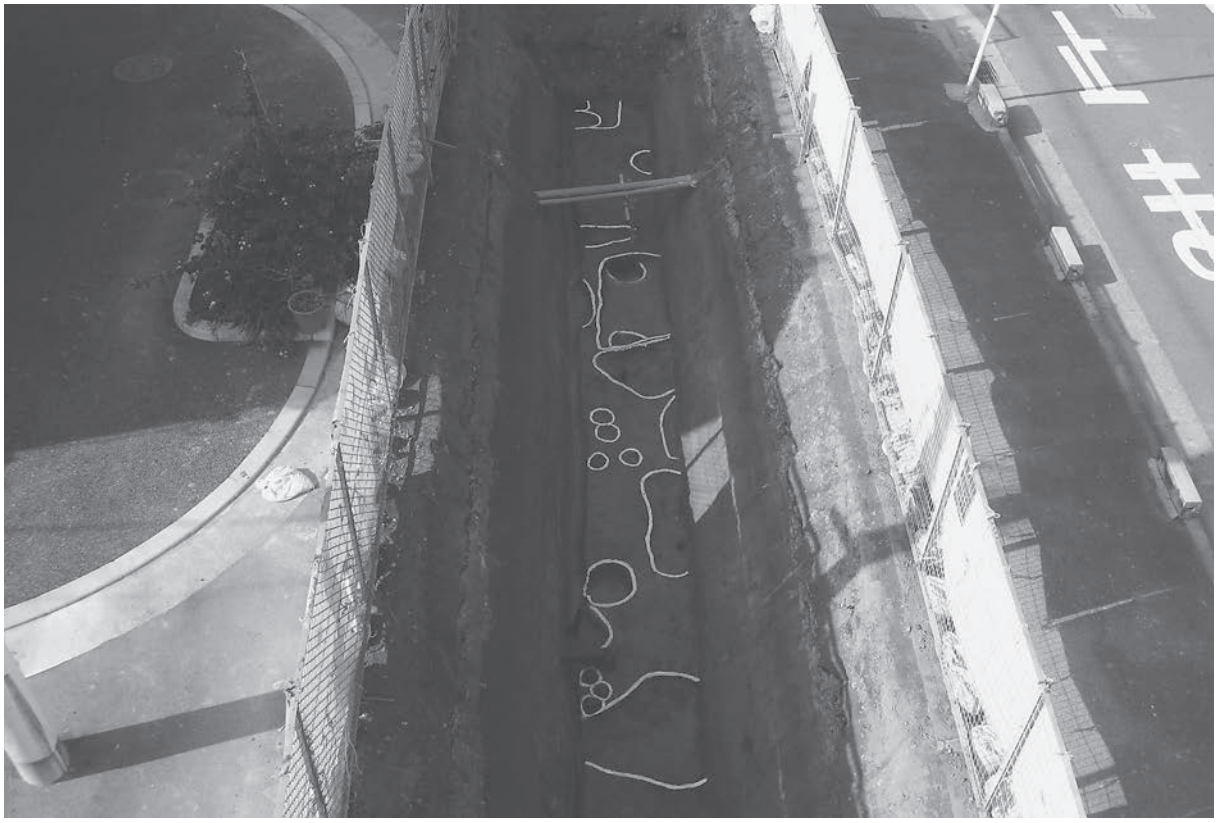
１．ＫＹ2011－４　溝14　石鏃出土状況近景（南から）



２．ＫＹ2011－４　土器群Ａ　遺物出土状況（北東から）

写 真 図 版 24

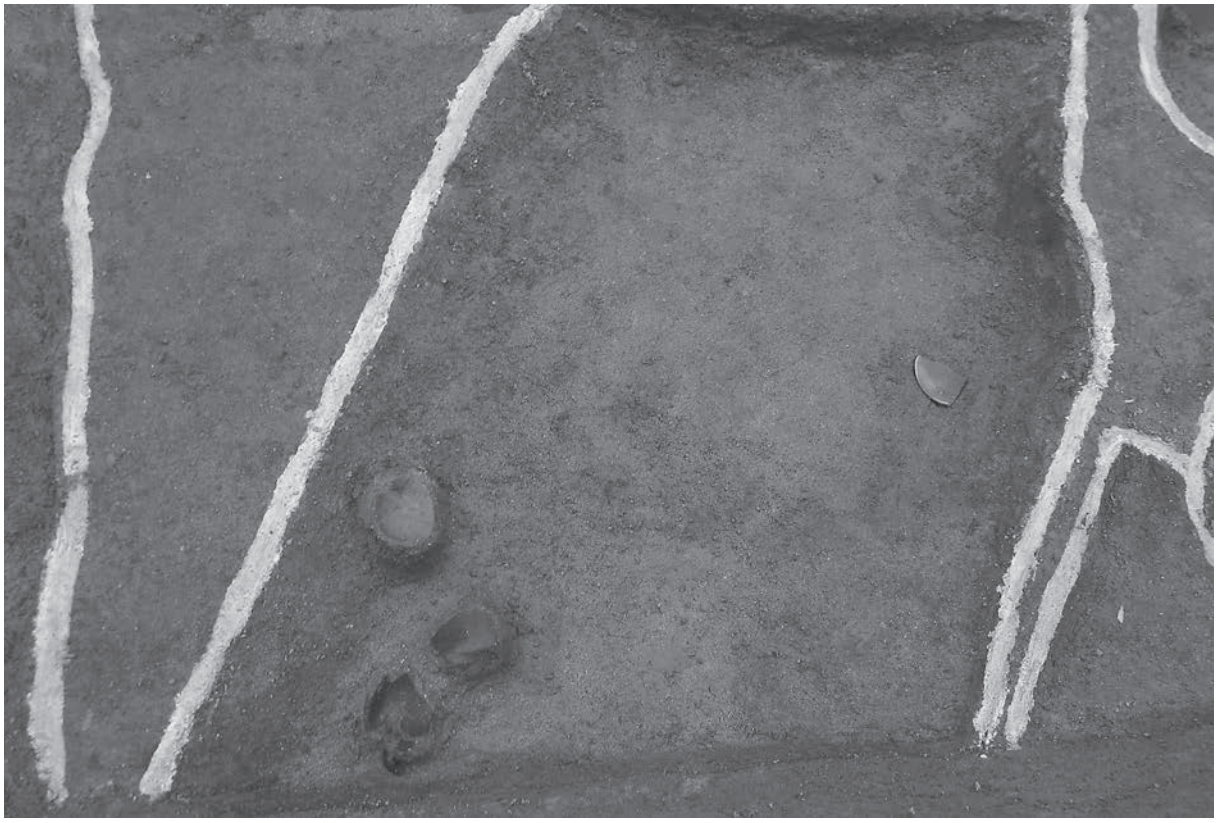
1．ＫＹ2011－５　東側地区　全景（南西から）



2．ＫＹ2011－５　西側地区　全景（東から）

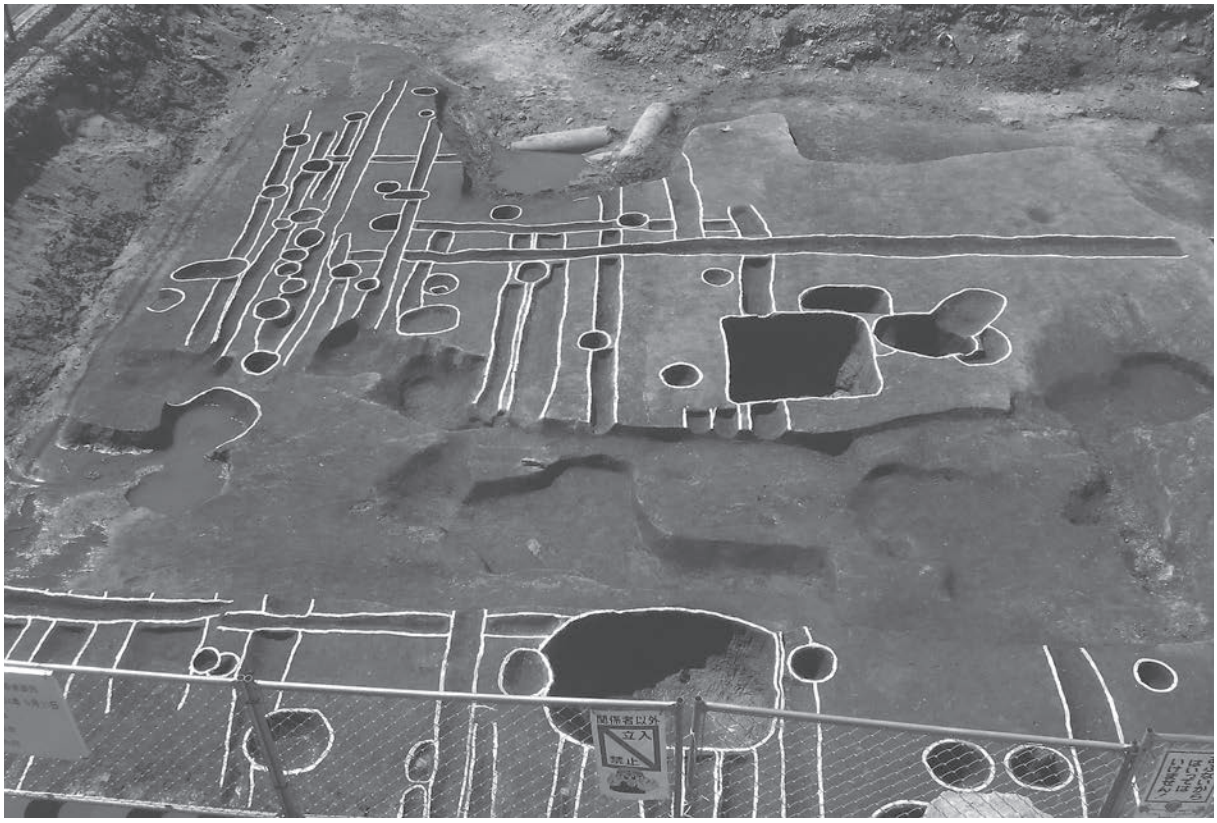
写 真 図 版 25

1．ＫＹ2011－５　西側地区　南壁断面（北西から）

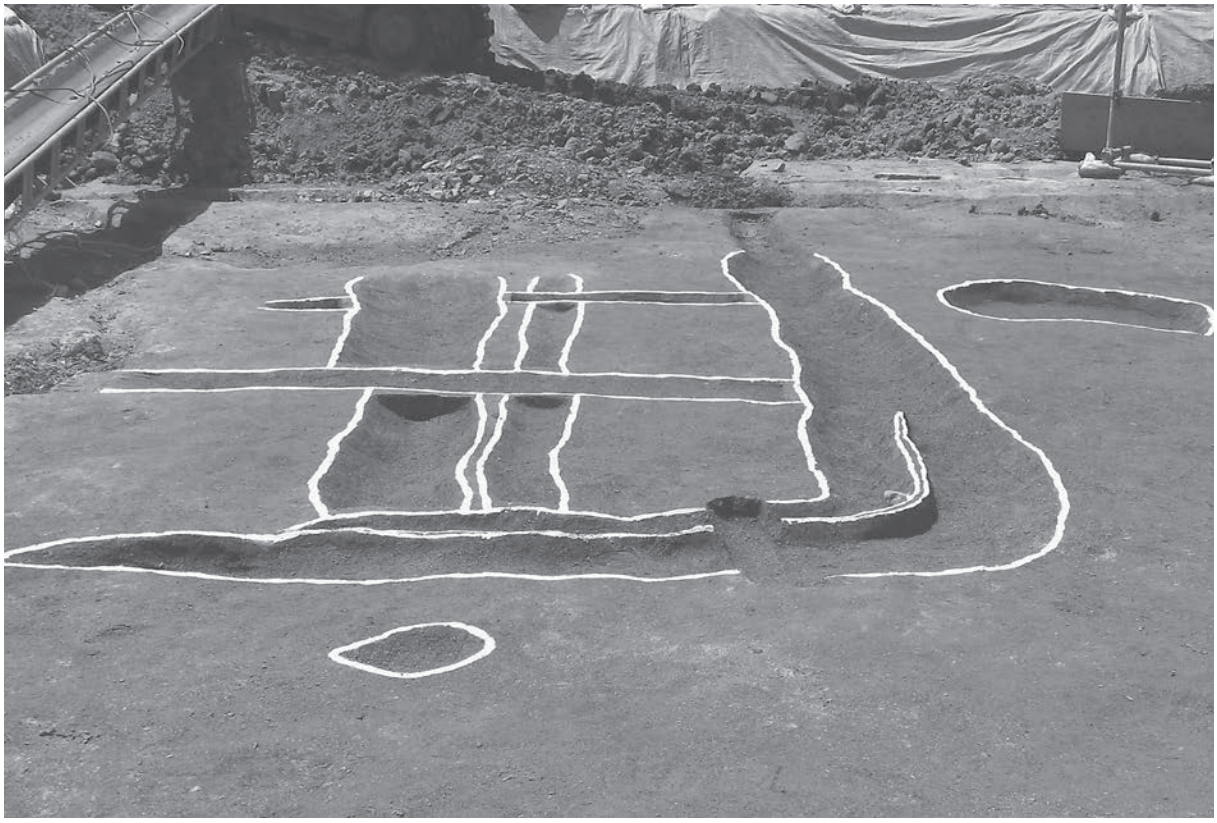


2．ＫＹ2011－５　溝24　遺物出土状況（北から）

写 真 図 版 26

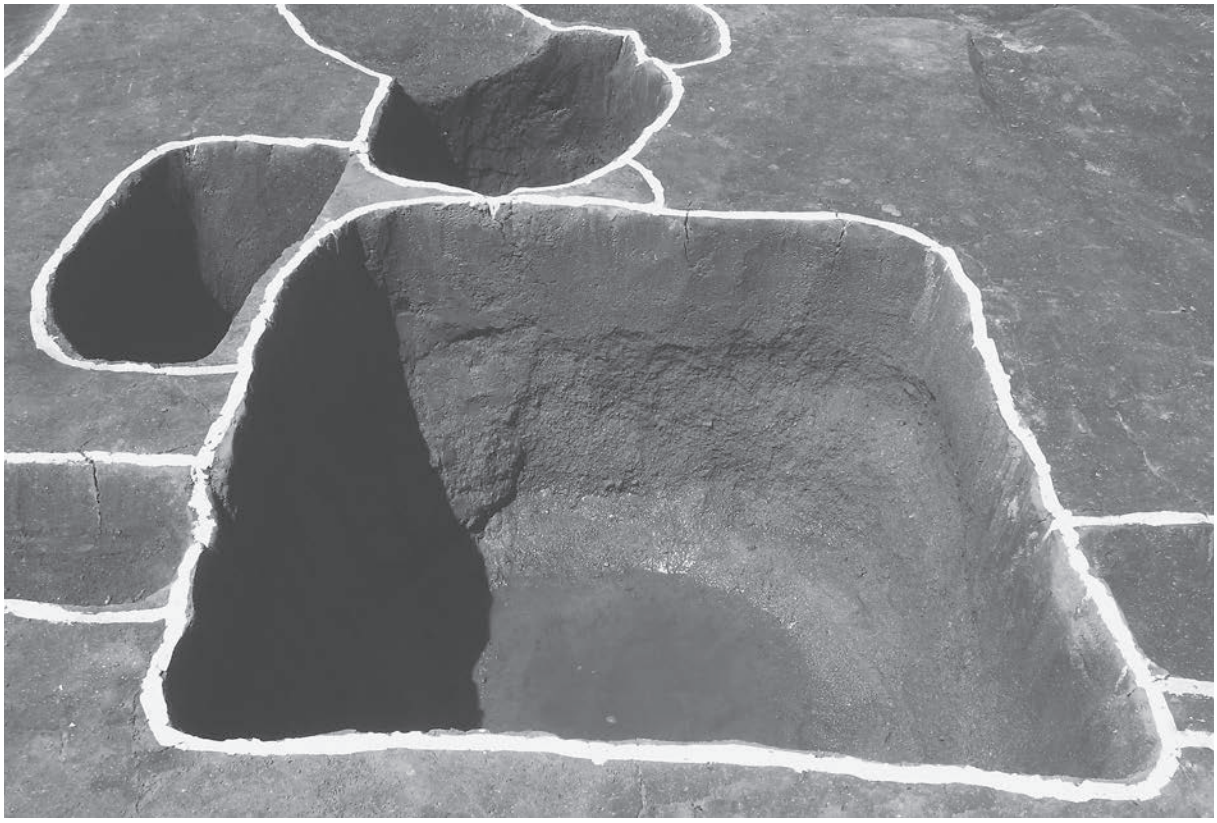


1．ＫＹ2012－１　調査地区　近景（北から）



2．ＫＹ2012－１　溝96～102　完掘状況（東から）

写 真 図 版 27

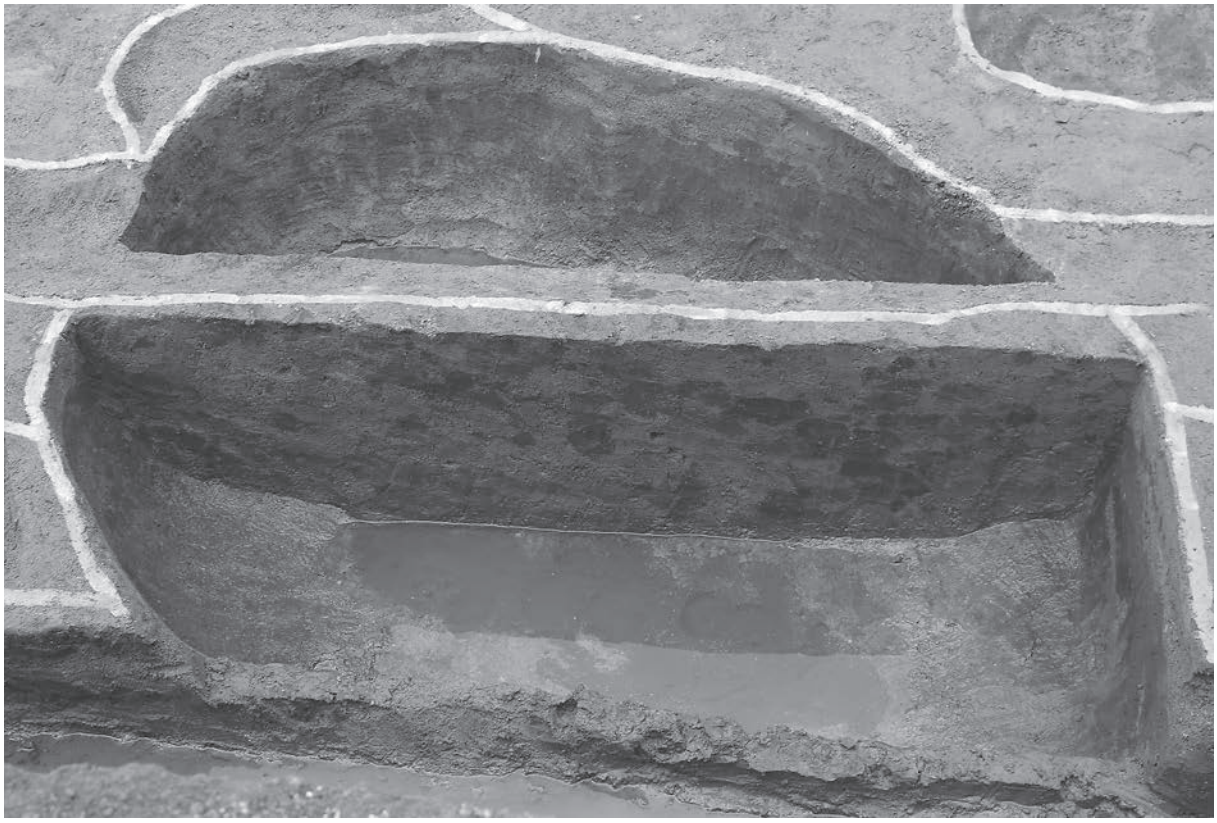


1．ＫＹ2012－１　井戸47　完掘状況（東から）

2．ＫＹ2012－１　井戸59　中層　礫出土状況（西から）

写 真 図 版 28

１．ＫＹ2015－１　西側地区　全景（東から）

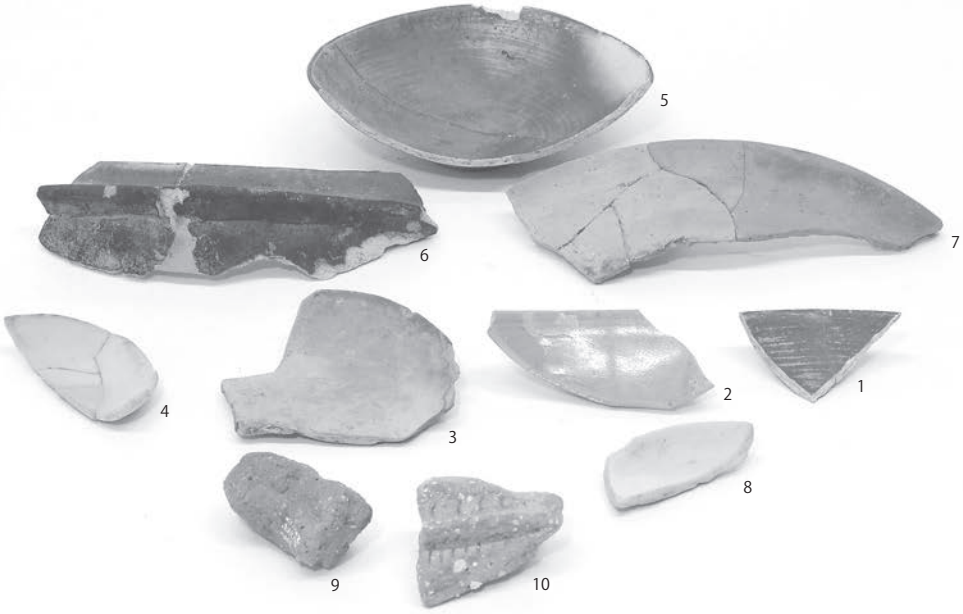


２．ＫＹ2015－１　井戸１　堆積状況（南から）

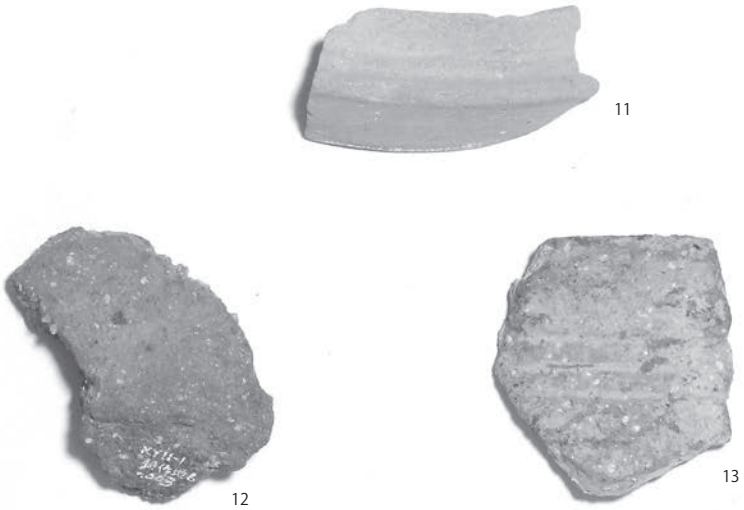
写 真 図 版 29

１．ＫＹ2015－１　東側地区　第２遺構面　全景（西から）

２．ＫＹ2015－１　包含層内　石鏃出土状況（東から）

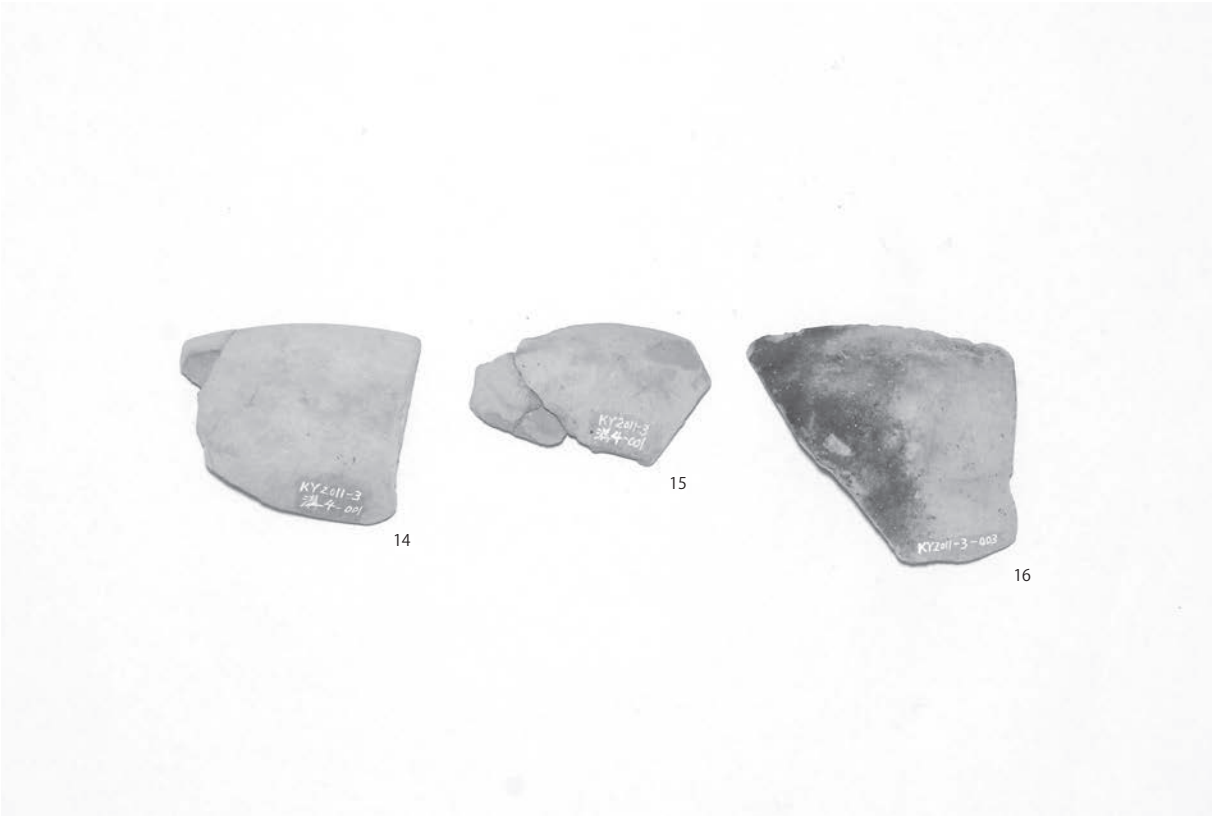


1．ＫＹ2010－２　出土遺物

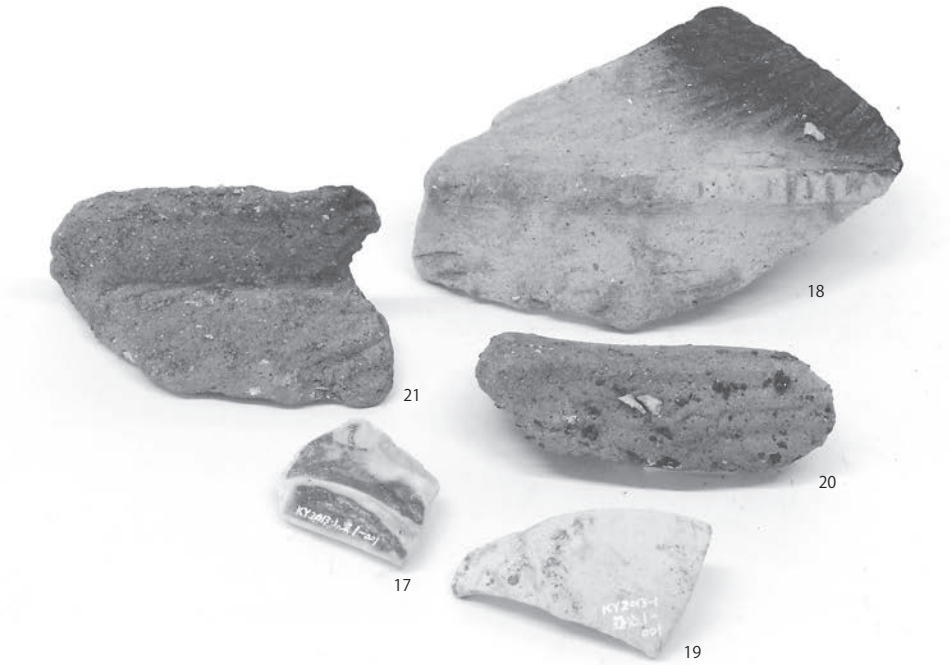


2．ＫＹ2011－１　出土遺物

写 真 図 版 31



1．ＫＹ2011－３　出土遺物



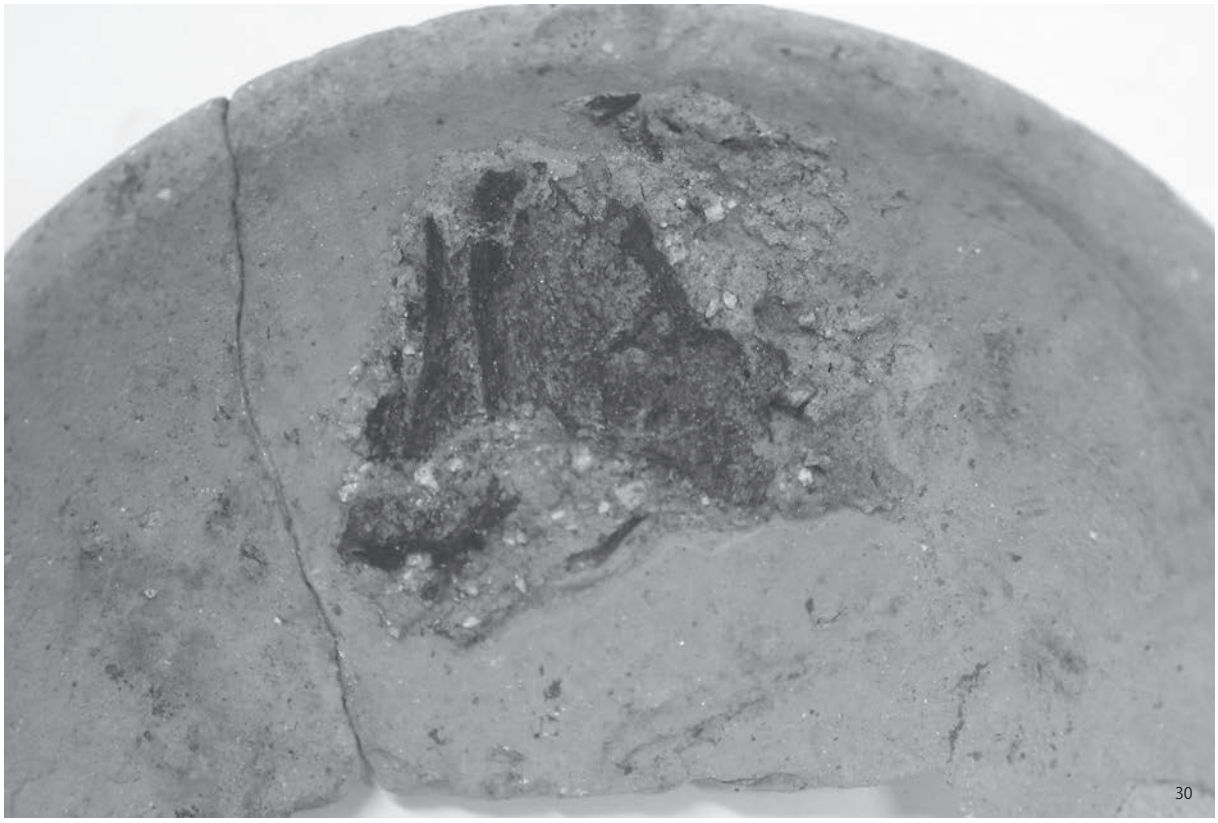
2．ＫＹ2013－１　出土遺物

写 真 図 版 32

1．ＫＹ2001－1　出土遺物（包含層）

2．ＫＹ2001－1　出土遺物（遺構土器）

写 真 図 版 33



1．ＫＹ2001－1　土器内面付着有機物

2．ＫＹ2001－1　出土遺物（石製品・土製品）

写 真 図 版 34

1．ＫＹ2001－1　出土馬歯（包含層）

2．ＫＹ2001－2　出土遺物（包含層）

写 真 図 版 35

1．ＫＹ2001－２　出土遺物（土坑10・11）

2．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝16・17）

写 真 図 版 36

1．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝18・大型品）

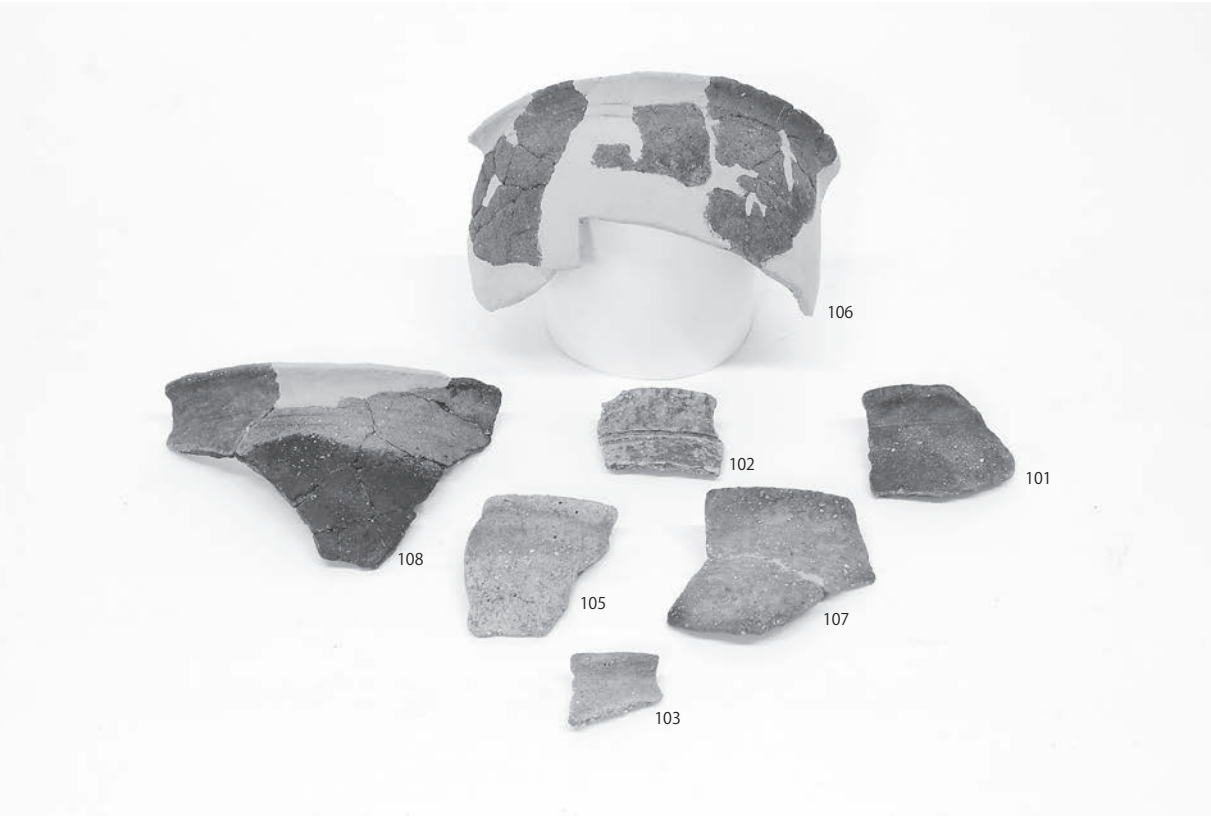
2．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝18・蓋・ミニチュア壺・土製品）

写 真 図 版 37

1．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝18・施文壺）

2．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝18・壺）

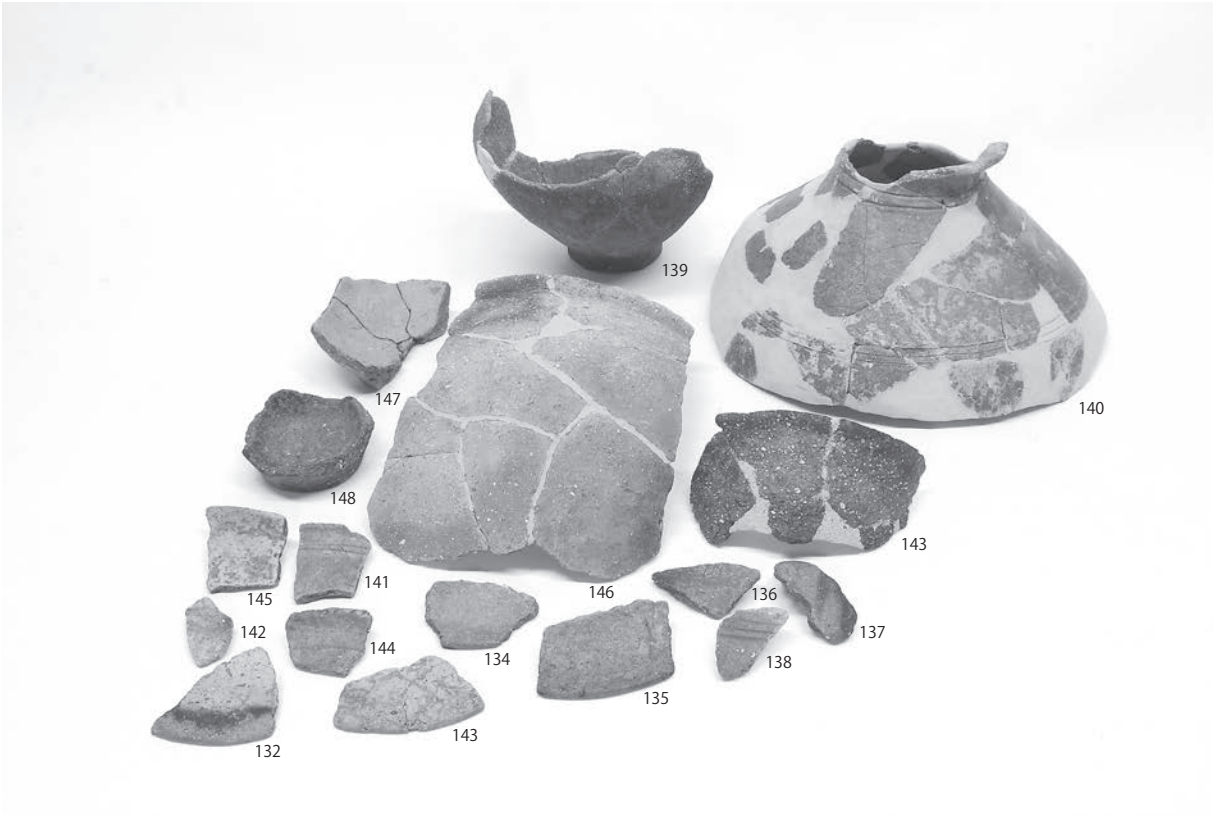
写 真 図 版 38



1．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝18・甕）

2．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝18・底部）

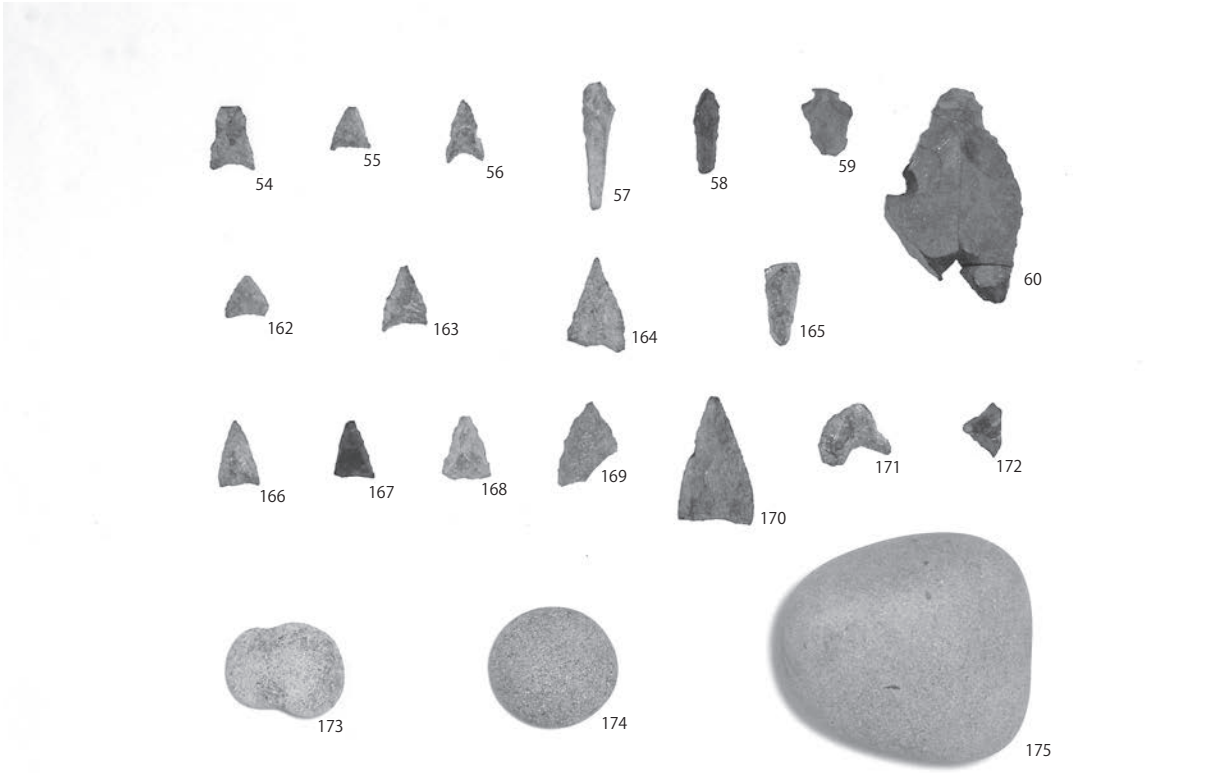
写 真 図 版 39



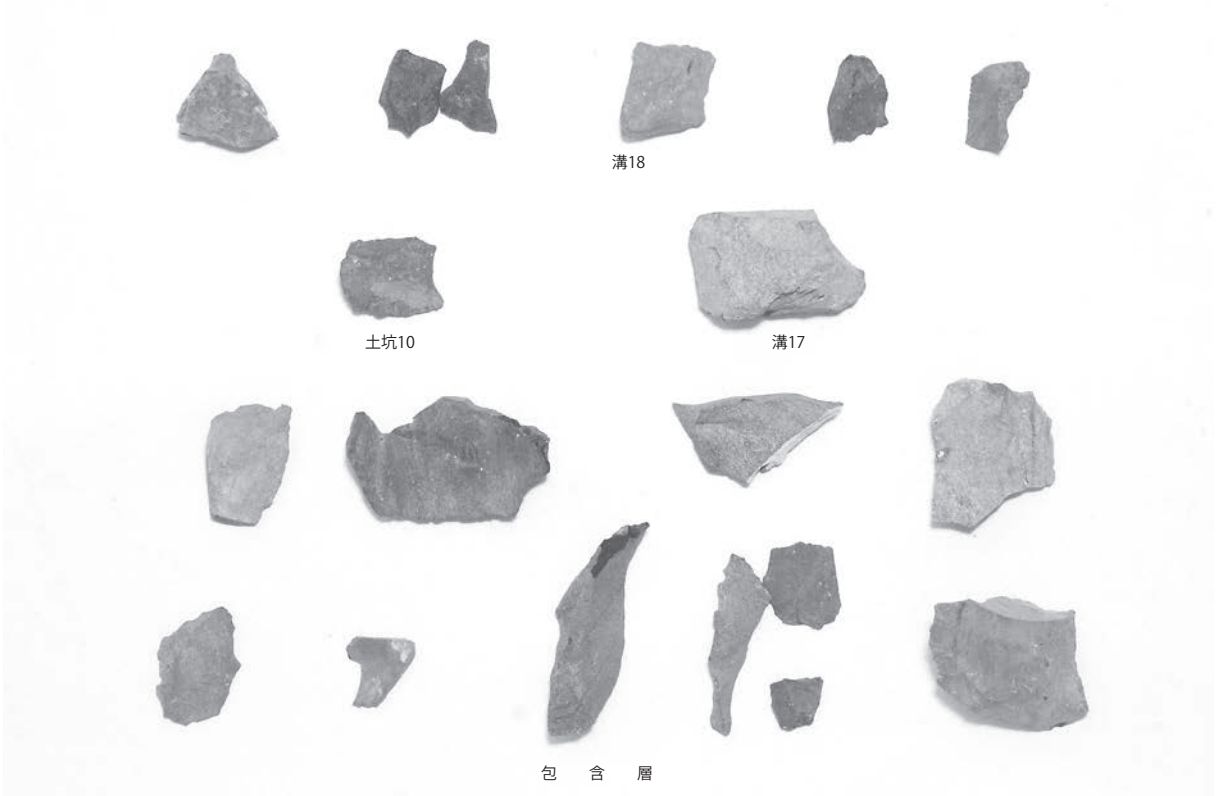
1．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝19）

2．ＫＹ2001－２　出土遺物（溝20）

写 真 図 版 40

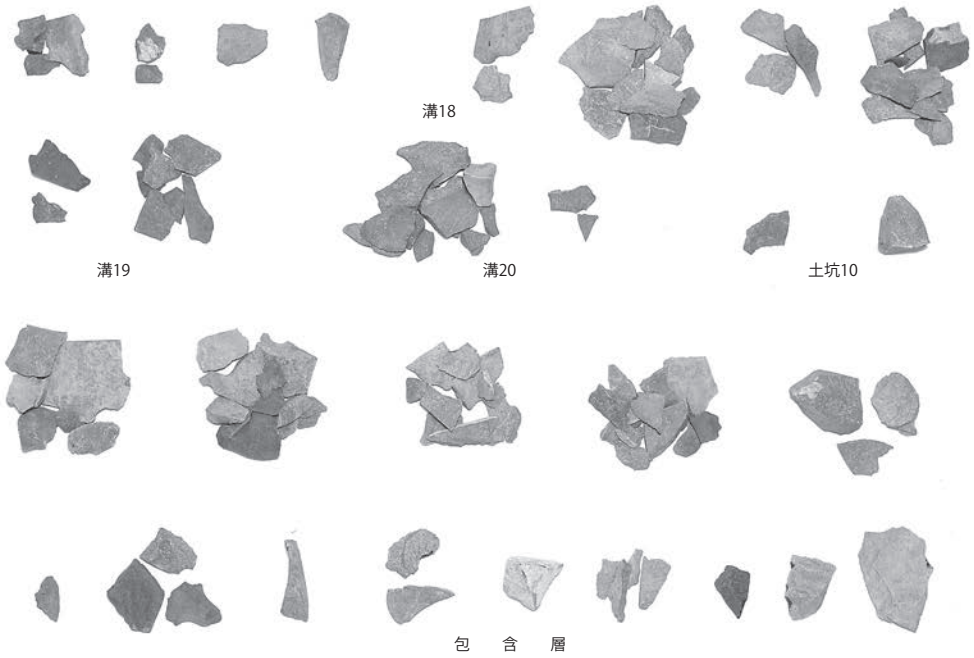


1．ＫＹ2001－２　出土石器

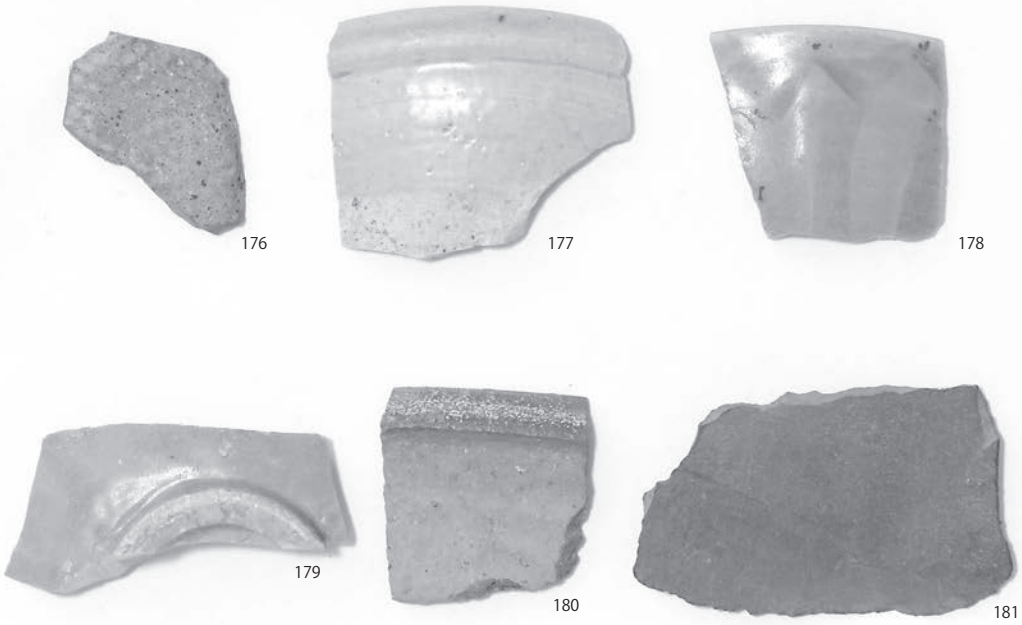


2．ＫＹ2001－２　出土サヌカイト剥片・石核（二上山産）

写 真 図 版 41



1．ＫＹ2001－２　出土サヌカイト剥片・石核（金山産系）



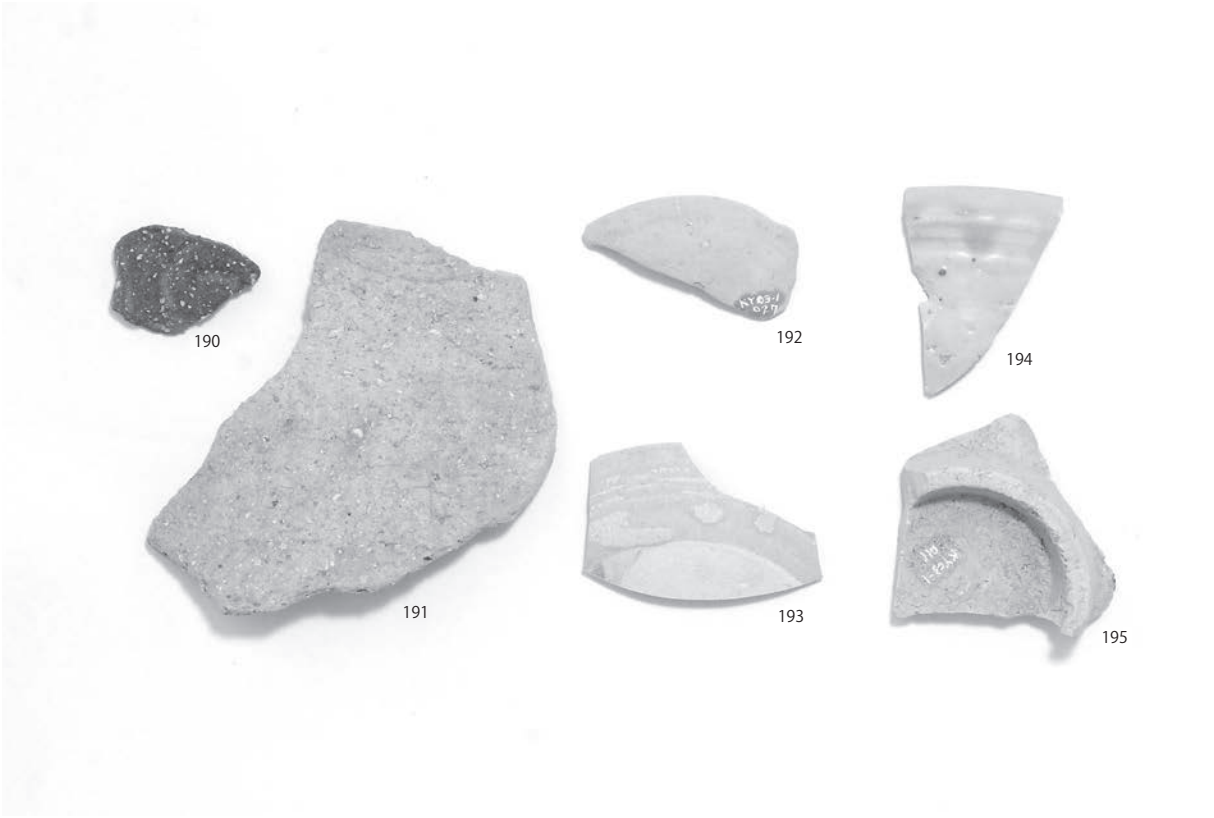
2．ＫＹ2002－１　出土遺物（包含層）

写 真 図 版 42

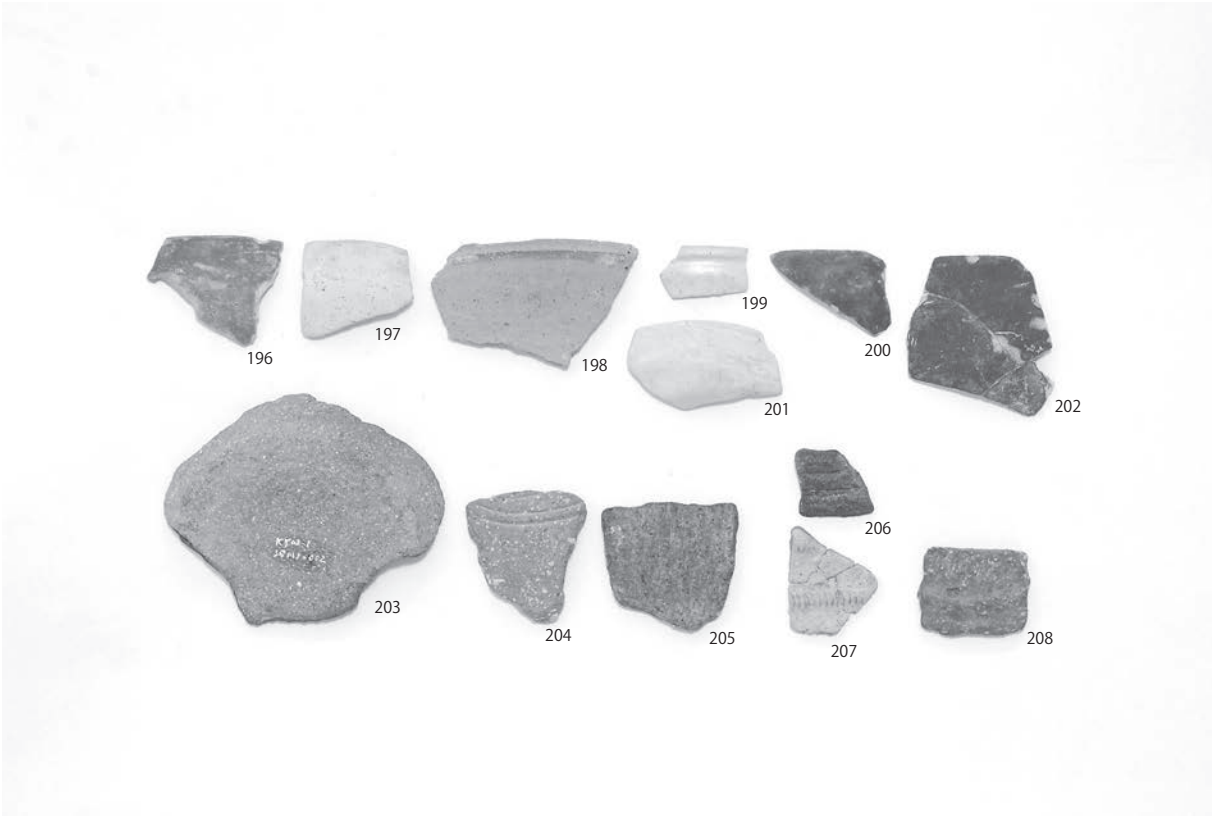
1．ＫＹ2002－1　出土遺物（遺構）

2．ＫＹ2002－1　出土馬歯（包含層）

写 真 図 版 43

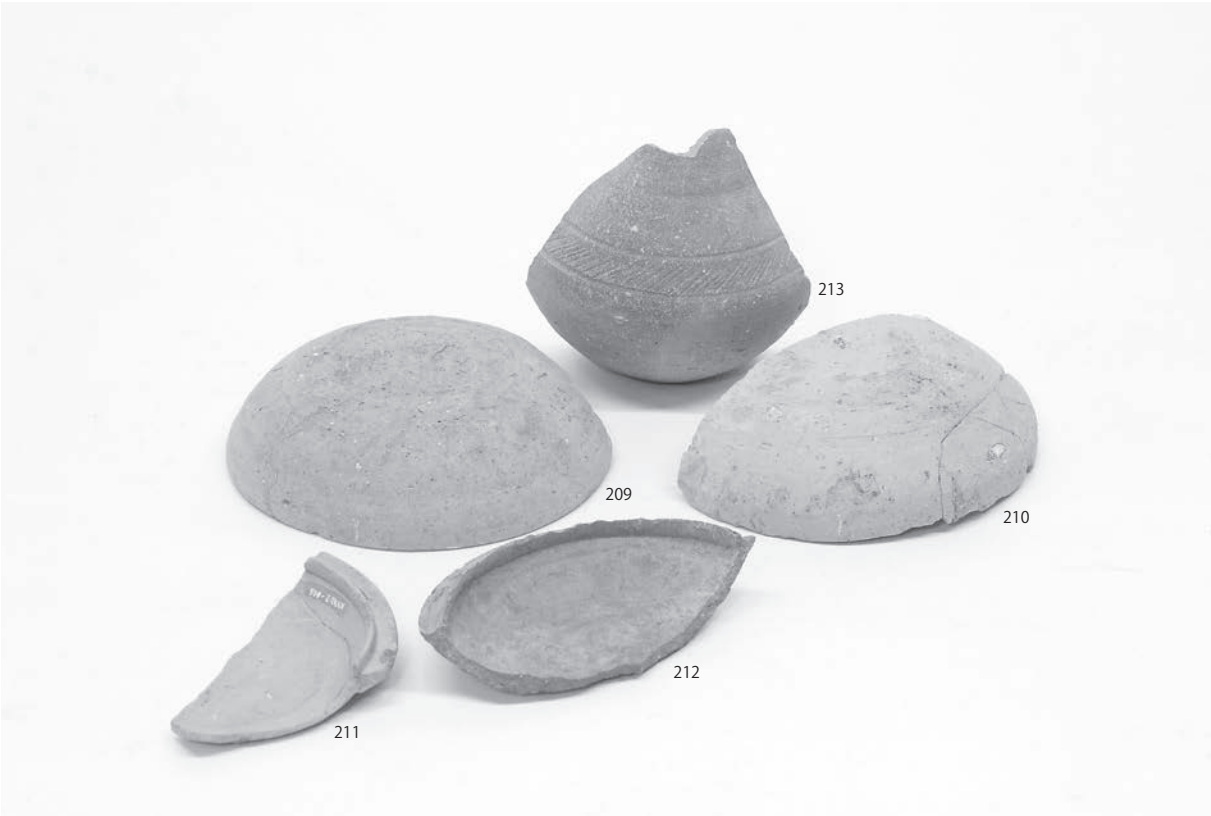


1．ＫＹ2003－１　出土遺物（包含層）



2．ＫＹ2003－１　出土遺物（遺構）

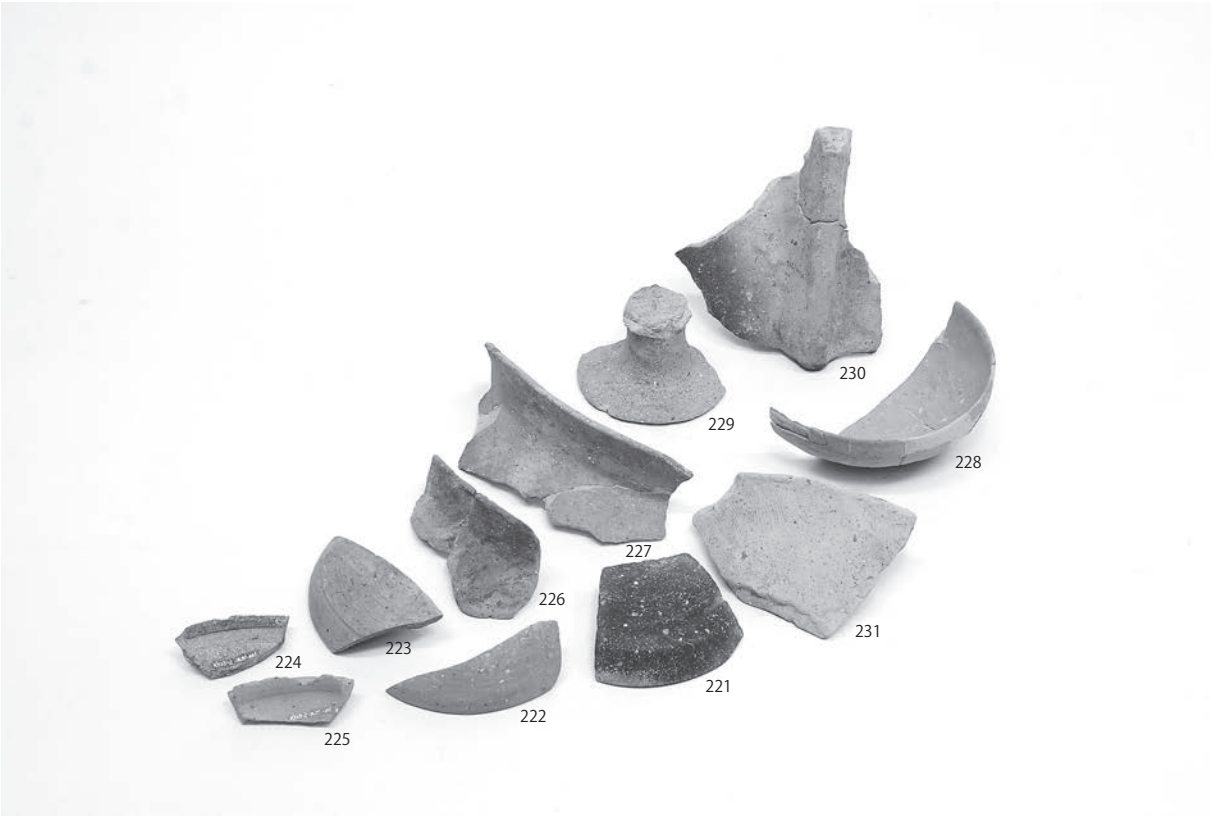
写 真 図 版 44



1．ＫＹ2003－２　出土遺物（包含層）

2．ＫＹ2003－２　出土遺物（第１遺構面遺構）

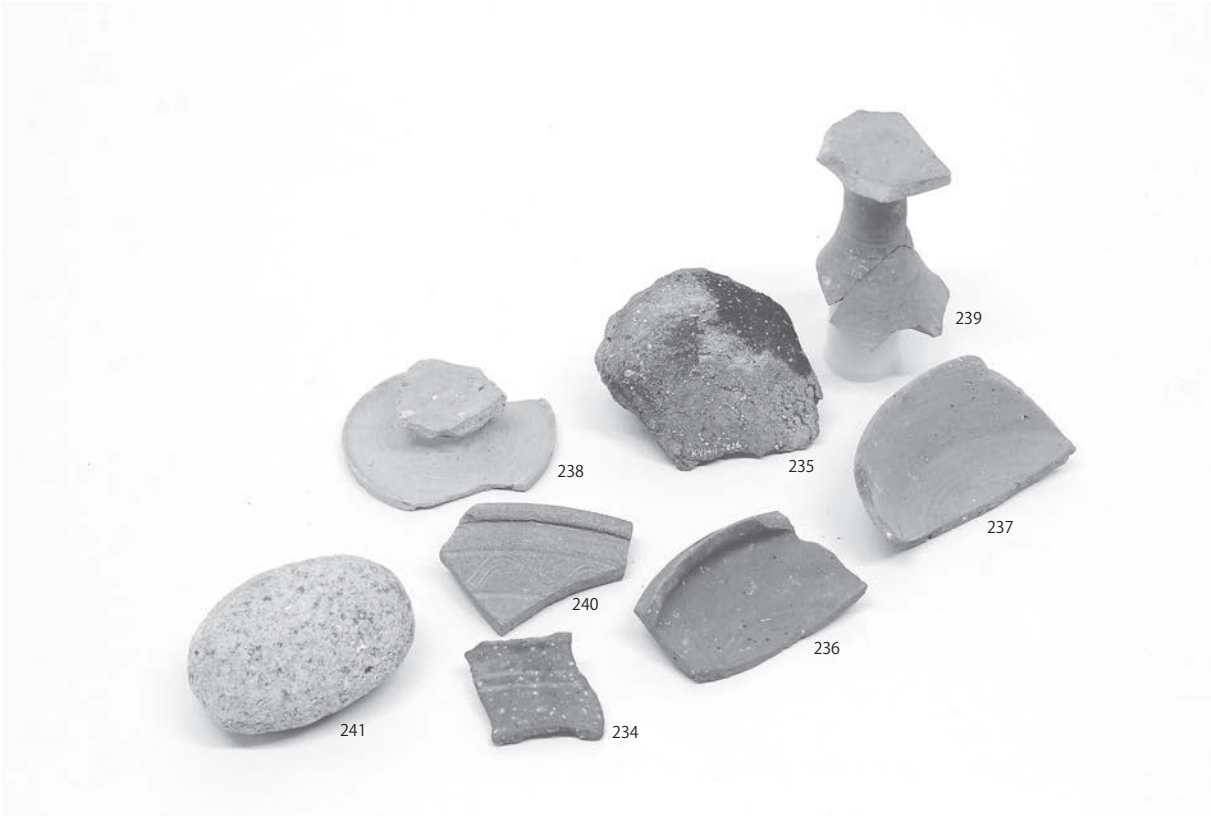
写 真 図 版 45



1．ＫＹ2003－２　出土遺物（土器溜まり）

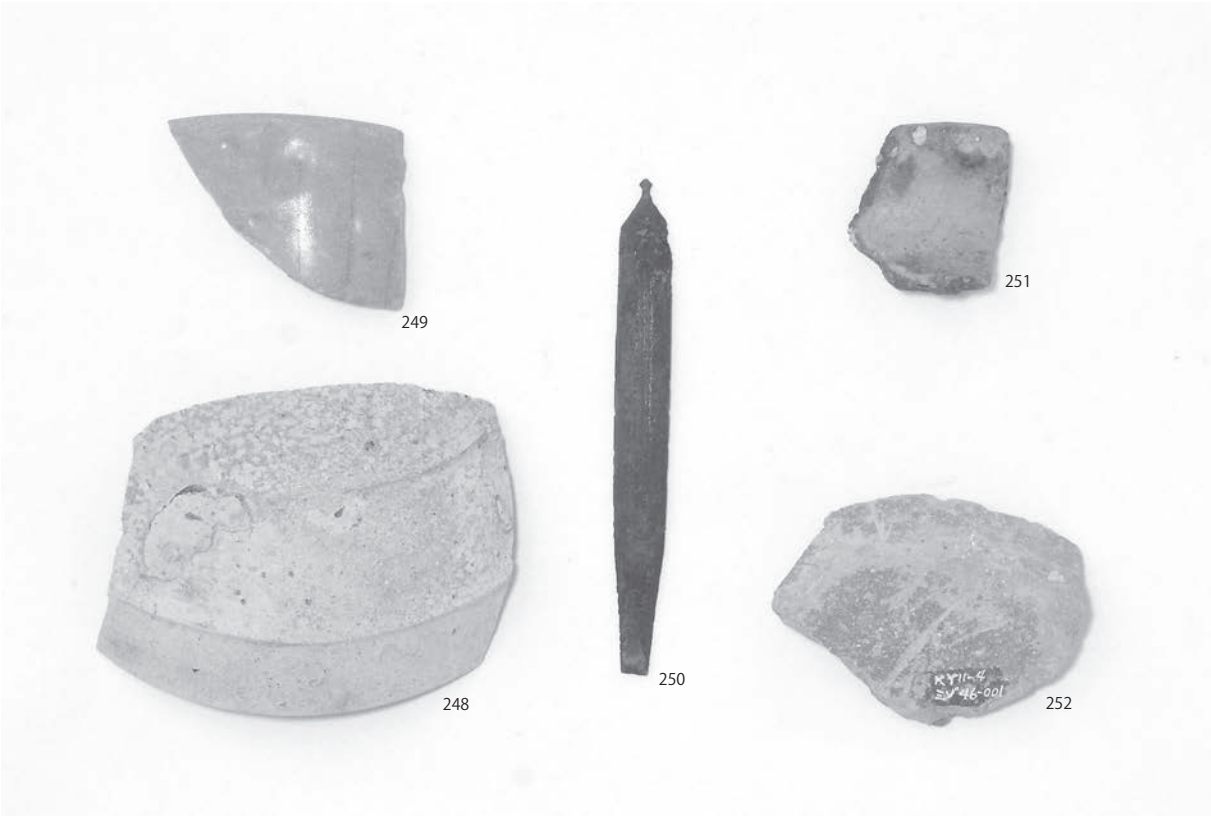
2．ＫＹ2003－２　出土遺物（第２遺構面）

写 真 図 版 46

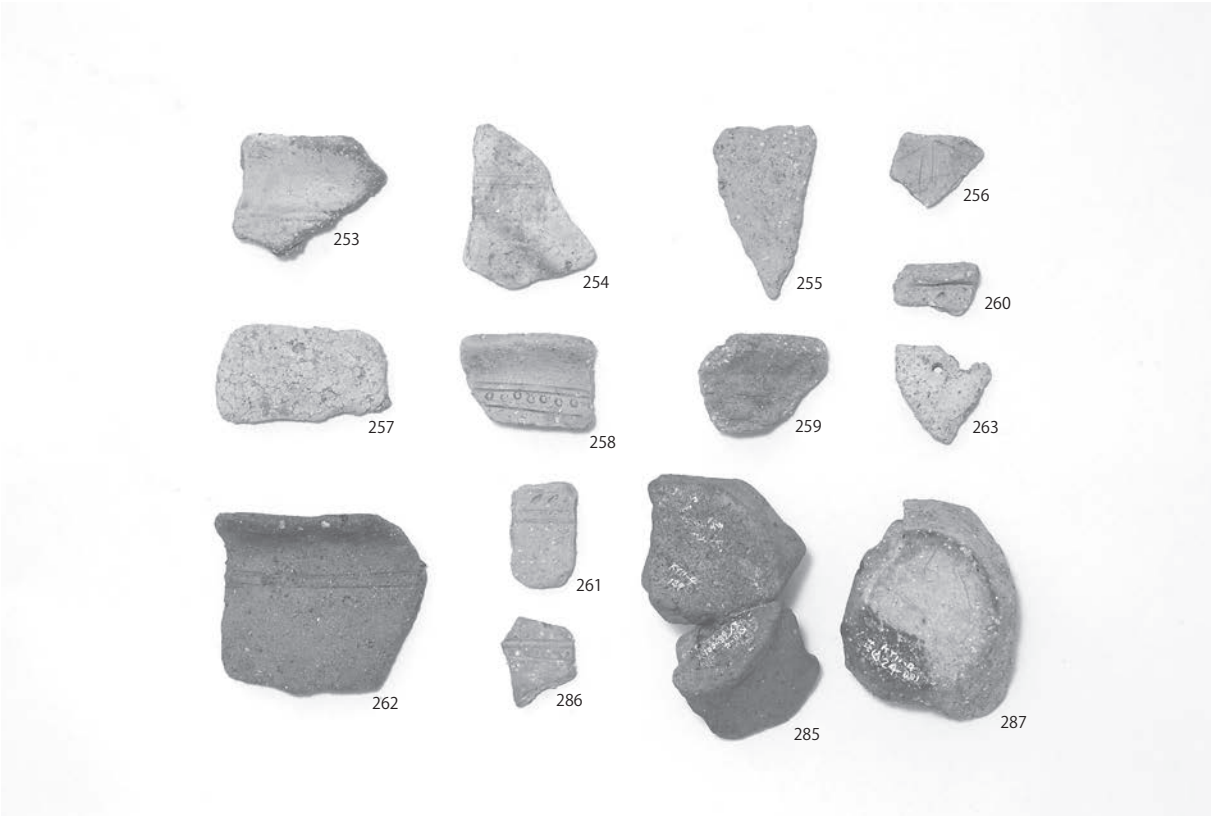


1．ＫＹ2004－１　出土遺物（包含層）

2．ＫＹ2004－１　出土遺物（井戸１）

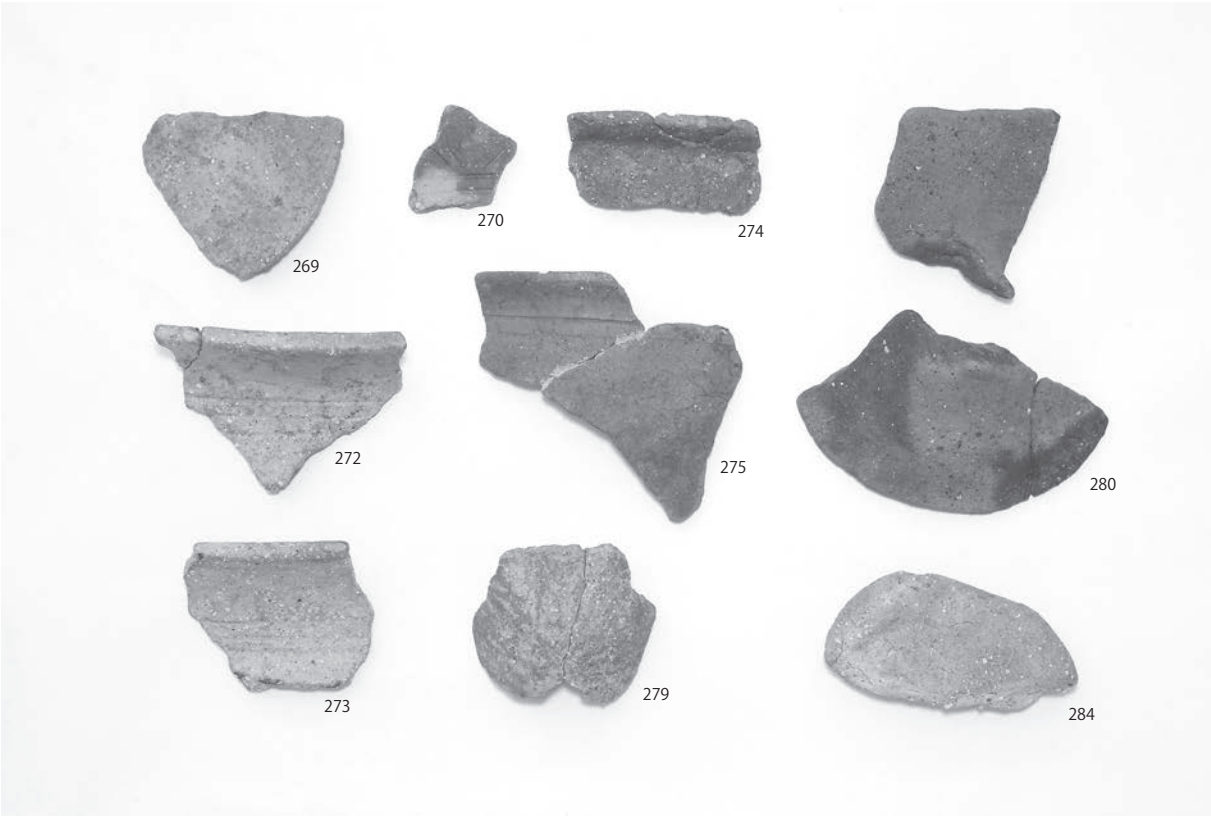


1．ＫＹ2011－４　出土遺物（第１遺構面）



2．ＫＹ2011－４　出土遺物（第２遺構面包含層・遺構）

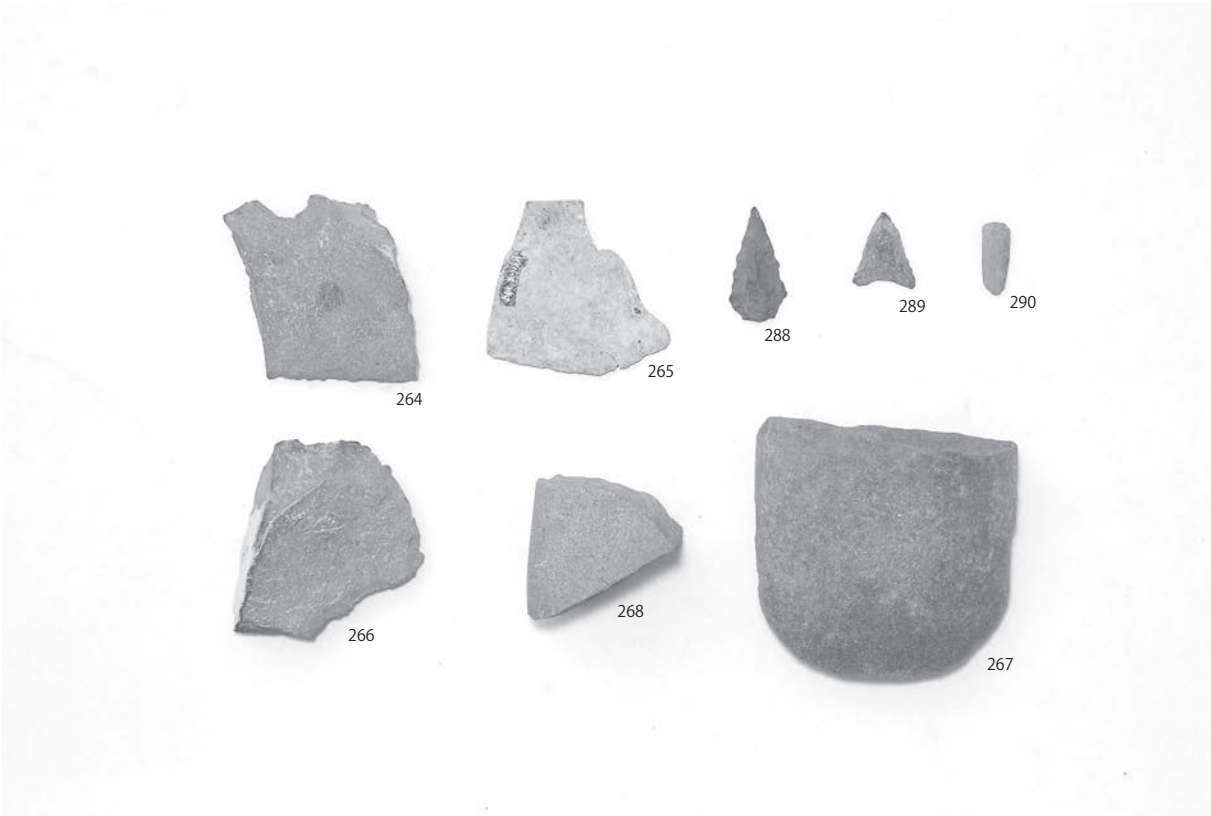
写 真 図 版 48



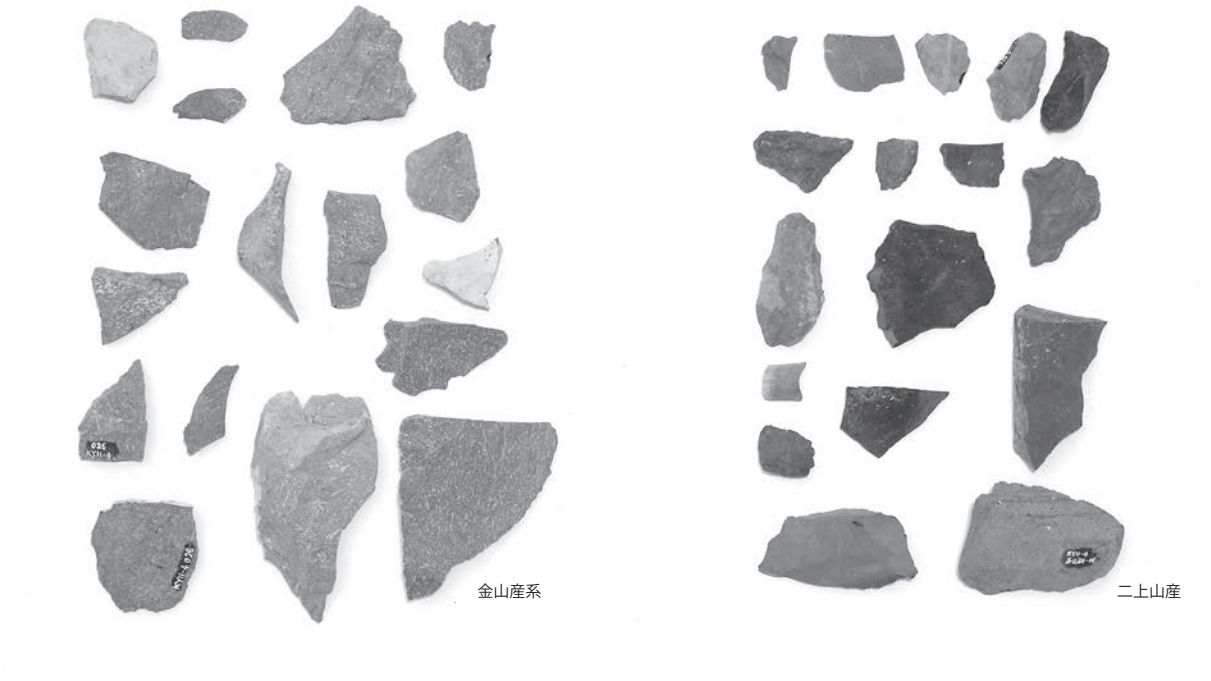
1．ＫＹ2011－４　出土遺物（土器群Ａ）

2．ＫＹ2011－４　出土遺物（土器群Ａ大型品）

写 真 図 版 49



1．ＫＹ2011－４　出土石器



2．ＫＹ2011－４　出土サヌカイト剥片・石核

写 真 図 版 50

1．ＫＹ2011－５　出土遺物

2．ＫＹ2012－１　出土遺物（包含層）

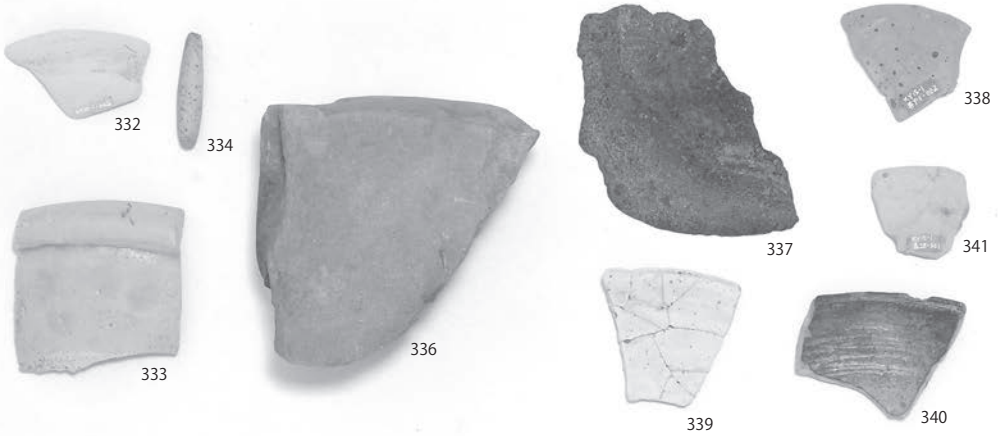
写 真 図 版 51

1．ＫＹ2012－１　出土遺物（Pit・溝）

2．ＫＹ2012－１　出土遺物（土坑・井戸）

写 真 図 版 52

1．ＫＹ2015－1　出土弥生時代遺物



2．ＫＹ2015－1　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ　り　が　な	かりやいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	雁屋遺跡発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第56集
編　著　者　名	村上　始・實盛良彦
編　集　機　関	四條畷市教育委員会
所　　在　　地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号
発　　行　　日	2019(平成31)年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2001-1)	しじょうなわてし かりやきたまち 四條畷市雁屋北町	272299	34° 44′ 03″	135° 37′ 55″	平成13年６月 18日～平成13 年７月19日	458 ㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2001-2)	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 38′ 07″	平成13年７月 23日～平成13 年９月21日	1219 ㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2002-1)	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 38′ 10″	平成14年８月 21日～平成14 年10月28日	400 ㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2003-1)	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 38′ 12″	平成15年６月 ３日～平成 15 年７月９日	300 ㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2003-2)	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 37′ 55″	平成16年３月 ３日～平成 16 年４月７日	450 ㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2004-1)	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 38′ 02″	平成16年11月 １日～平成 16 年12月15日	308 ㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2010-2)	しじょうなわてし なんこう１ちょうめ 四條畷市楠公１丁目	272299	34° 44′ 03″	135° 38′ 14″	平成23年１月 31日～平成23 年３月２日	112 ㎡	道路拡幅 歩道設置
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2011-1)	しじょうなわてし かりやきたまち 四條畷市雁屋北町	272299	34° 44′ 03″	135° 38′ 03″	平成23年５月 10日～平成23 年５月18日	21 ㎡	グループ ホーム建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2011-3)	しじょうなわてし なんこう１ちょうめ 四條畷市楠公１丁目	272299	34° 44′ 03″	135° 38′ 14″	平成23年６月 29日～平成23 年７月11日	167 ㎡	事務所建設
かりやいせき 雁屋遺跡 (ＫＹ2011-4)	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 38′ 04″	平成23年７月 28日～平成23 年10月21日	440 ㎡	道路建設

かりやいせき 雁屋遺跡 （ＫＹ2011-5）	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 03″	135° 37′ 57″	平成23年11月 14日～平成23 年12月20日	125㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 （ＫＹ2012-1）	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 01″	135° 38′ 13″	平成24年7月 18日～平成24 年9月6日	256㎡	道路建設
かりやいせき 雁屋遺跡 （ＫＹ2013-1）	しじょうなわてし かりやきたまち 四條畷市雁屋北町	272299	34° 44′ 03″	135° 38′ 13″	平成25年7月 10日～平成25 年7月30日	359㎡	店舗建設
かりやいせき 雁屋遺跡 （ＫＹ2015-1）	しじょうなわてし かりやみなみまち 四條畷市雁屋南町	272299	34° 44′ 02″	135° 37′ 59″	平成28年1月 18日～平成28 年3月11日	175㎡	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雁屋遺跡 （ＫＹ2001-1）	集落跡	飛鳥時代、奈良時代	掘立柱建物、溝、土坑、Pit	須恵器、土師器、土製品、石製品	飛鳥時代を中心とした集落
雁屋遺跡 （ＫＹ2001-2）	集落跡	弥生時代、古墳時代	溝、土坑	弥生土器、須恵器、土師器、土製品、石器	弥生時代前期の集落と縁辺部の溝
雁屋遺跡 （ＫＹ2002-1）	集落跡	古墳時代	溝、土坑、水田、旧河川	須恵器、土師器、縄文土器、石器	古墳時代後期の水田
雁屋遺跡 （ＫＹ2003-1）	集落跡	縄文時代、古墳時代、中世	溝、土坑、河川	須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、縄文土器	縄文時代中期の河川
雁屋遺跡 （ＫＹ2003-2）	集落跡	古墳時代	井戸、溝、水田	須恵器、土師器、埴輪、石製品	古墳時代後期の石組井戸 古墳時代中期の水田
雁屋遺跡 （ＫＹ2004-1）	集落跡	飛鳥時代、中世	井戸、溝	須恵器、土師器	飛鳥時代の木枠井戸
雁屋遺跡 （ＫＹ2010-2）	集落跡	中世	掘立柱建物、井戸、溝、土坑	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、弥生土器、焼壁土	鎌倉時代の掘立柱建物、井戸を伴う集落
雁屋遺跡 （ＫＹ2011-1）	集落跡	弥生時代、古墳時代	溝、土坑、畦畔	弥生土器、須恵器	弥生時代前期の耕作地
雁屋遺跡 （ＫＹ2011-3）	集落跡	中世	掘立柱建物、溝	土師器、瓦器	鎌倉時代の掘立柱建物
雁屋遺跡 （ＫＹ2011-4）	集落跡	弥生時代、中世	溝、土坑、落込	弥生土器、土師器、須恵器、石器	弥生時代前期の集落と縁辺部の溝
雁屋遺跡 （ＫＹ2011-5）	集落跡	古墳時代、飛鳥時代	溝、土坑	須恵器、土師器、	古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落
雁屋遺跡 （ＫＹ2012-1）	集落跡	中世	井戸、溝、土坑、Pit	土師器、瓦器	鎌倉時代の井戸を伴う集落
雁屋遺跡 （ＫＹ2013-1）	集落跡	弥生時代、中世	溝、落込	弥生土器、土師器、瓦器	弥生時代後期の方形周溝墓の可能性がある溝
雁屋遺跡 （ＫＹ2015-1）	集落跡	中世	土坑、溝、井戸、水田	弥生土器、土師器、瓦器、石器	鎌倉時代の集落

四條畷市文化財調査報告　第 56 集

雁　屋　遺　跡

発掘調査報告書

平成 31 年（2019）３月 31 日発行

編　集　四條畷市教育委員会

発　行　四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町１番１号

印　刷　株式会社　共英印刷所